
ARMORED CORE ~ Angel Requiem ~

大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE } Angel Requiem }

【Nコード】

N3458A

【作者名】

大和

【あらすじ】

人類が核戦争という過ちを犯してから200年。ARMORED COREを駆るレイヴンと呼ばれる賞金稼ぎが活躍する世界。レイヴンの1人、レイナ・アイナスは謎多き少年と出会う。彼は前大戦、そしてこれから起きようとする戦争の鍵を握る人物だった。ゲーム、ARMORED COREを元にしたオリジナルストーリーです。ゲームを知らない方でも楽しめるよう工夫しています。

プロローグ（前書き）

ARMORED COREの世界観そのままに、オリジナルテキストを加えた自信作です。

感想や評価などいただけたら嬉しいです。

ブローグ

それは、地獄だった。

世界各地で戦争の炎が上がり、兵士や民間人を含め大勢の人間が死んだ。

西暦2115年、ある一人の科学者が生み出した兵器を巡り、平穩を保っていた世界が一気に崩壊した。

結んだはずの条約は意味を成さず、世界は次々と新たな兵器の開発、戦場への投入を行った。

中でも、各国が競うように開発した兵器があった。

人型歩行戦車、通称ARMORED CORE（以後AC）。

人間と同じ四肢を持ち、あらゆる地形に対応できる。

また、戦況に応じて武器を変更できるなど、画期的な能力を持つこの兵器は、各国の主力兵器として多く使用された。

戦争は長引き、5年に渡って続いた。

戦う力の少ない小国は長期戦に耐えられず、ある国は敗れ、またある国は大国に白旗をあげ、ほぼ植民地扱いを受けることになった。そして遂にしびれを切らした人類は、今まで決して使用する事なかった禁断の兵器の発射ボタンを押してしまった。

西暦2120年・12月24日・午前0時01分

ある大国が敵国に向けて三発の核ミサイルを発射した。

核ミサイルは敵国の領地内に命中し、大損害を与えた。

しかし、命中したのは三発のうち二発。

命中しなかった核ミサイルは、敵国の首都に向けて発射されたもの

だった。

敵国は核ミサイルの接近をギリギリで察知し、首都に向かってくるミサイルだけをなんとか迎撃した。

敵国はすかさず報復の核ミサイル五発を発射。

しかしそれも首都以外に向けた三発しか命中せず、遂には両国の核ミサイルの撃ち合いになった。

この事に誘発され、核を持つ国同士が次々と核ミサイルを敵国に向けて打ち始めた。

文字通り地獄の扉が開かれた瞬間だった。

軌道をそれ、関係のない国に命中するものもあった。

ようやく核ミサイルの残弾が尽き、各国が撃ち合いを止めたのが同日23時55分。

人類は自分達の犯した過ちに気づくまで約1日の時を要した。

そこに残ったのは、焼け爛れ、放射能に汚染された大地、ほぼ原型を留めない町、泣き叫ぶ人々の悲鳴、累々と広がる屍だけだった。

人口は約3分の1までに減少し大陸の形さえも変わっていた。

人々はこの日を

「鮮血のクリスマス・イブ」と呼んだ。

国で別れることを止め、生き残った全人類が集まり、二度とこのような過ちを繰り返さないことを誓った。そしてこの悲劇を忘れぬため、西暦をBCE（Blood Christmas Eveの頭文字を取ったもの）と改めた。

それから約200年の月日が流れた。人々の努力で地上の放射能はほぼ浄化され、人口も少しずつだが増えてきている。少数だが小さな村や町、大都市もできている。

人類はようやく平和を取り戻しつつあった。しかし、人々の意に反して悪事を行うものも現れた。

各地で村などを襲い、強奪や破壊を行う盗賊。

彼らの使用する兵器が、前大戦で使用されたACだった。当時のACをそのまま使用する者もいたが、新たに開発されたACのパーツを組み合わせ使用する者がほとんどだった。そのパーツを開発しているのが、戦後に成立した3つの大企業である。

Red Wing（以後RW）

Mebius Ring（以後MR）

Samurai Braid（以後SB）

さらにこの3つの企業同士が勢力争いをしている。

一つの大きな政府が存在しないため、このような事が起きても不思議ではない。

企業同士での妨害や技術の取り合いなど、時には大規模な戦闘に発展しそうなこともある。

しかしおおっぴらにそのような事は出来ない。

そんな時活躍するのが、ACを駆る戦闘のプロ、レイヴン達だ。

彼らは依頼を受け、ACでの戦闘などを行う傭兵、つまり賞金稼ぎである。企業だけでなく、村や町、時には盗賊からも貰う物を貰えば手を貸す。

最近ではこのレイヴン達のサポート企業なども出てきている。

BCE・205

レイヴン達の中で不気味な噂が流れていた。

正体不明の2体のACにレイヴン達が襲われているという。

1体は銀色、もう1体は漆黒のACで、銀色に襲われるとACは大破するが命は助かる。しかし漆黒のACに襲われるとACはほぼ無傷でコックピットだけが潰され、命を落とすという。

この2体のACが、前大戦の引き金となった兵器の鍵を握っていることは誰も知らない。

再び世界が戦いの炎に包まれようとしていた。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？
楽しんでいただけたら幸いです。

第1話 影

俺の名はロイ、ロイ・クレンツ。仲間の間じゃあ

「疾風のロイ」

つつつて、ちったあ名の知れた存在だ。俺の手にかかりやあ依頼の一つや二つどーってことない。今回の依頼だってそんな中の一つに過ぎない。そのはずだった。

「コンボイ1から各コンボイへ。状況を知らせよ」

「こちらコンボイ2、異常なし」

「同じくコンボイ3、異常なし」

「同じくコンボイ4、異常なし」

「こちらコンボイ1。了解、引き続き輸送を継続。以上」

RWからの依頼で、新型ACパーツを本社に輸送するコンボイの護衛が今回のミッションだ。もう3時間たらずで本社があるデザート・タウンに到着する。久々の大都市だ、仲間になんか土産でも買ってやるか。

「こちらコンボイ1。レイヴン、そちらは異常ないか？」

「こちらレイヴン、異常なし。びくびくしなさんなって。俺がいるからには必ず本社に連れてってやつからよ」

「そうか、頼もしいな。よろしくたのむ」

どーも輸送隊っつーのは肝っ玉がちいせえ奴らばかりできにくわね

え。こいつらもさつきから状況確認の通信ばかりやがって。

「レイヴン」

「お？なんだ？」

「この任務が終わったら一緒に一杯どうだ？いい酒がある」

「おっ！マジか？喜んで一緒にさせていただくぜ！」

ほお？たまにはまともな奴もいんじゃないか。

「そうか、なら……」

ザザザッ……ブツン

「おい？どうした！何かあったのか！？」

「こちらコンボイ2！！正体不明の敵の襲撃を受けた！！コンボイ1は壊滅……うわああああ！！？」

「クソっ！なんだってんだ！！」

俺は相棒のウインディを駆り、コンボイ2に急いだ。しかし遅すぎた。コンボイは何者かに襲撃され、全滅したあとだった。

「こちらコンボイ4！！こちらにも敵……」

「コンボイ4！！応答し……なんだあれは？」

「コンボイ3！！どうした！なにを見たんだ！！」

「……………影？」

「影がなんだ！？待ってる！今そっちに…」

「だめだ…影がこっちに……………」

「コンボイ3！？コンボイ3！応答しろ！！……………っクソ！ふざけやがって！」

俺がたどり着いた時にはやはりこちらも壊滅していた。一撃で運転席を潰され、動かなくなった車両が転がっていた。

「ひでえ……………」

ありえねえ。俺が前に向かっていているうちに後ろのコンボイに移動するなんて…。俺の機体の倍以上のスピードがなけりやでねえ芸当だ。仲間がいるにちげえねえ！叩き潰してやる！！

「出てきやがれ！！この卑怯ヤローども！！徒党くまなきやなんも出来ねーのか！」

俺は外部スピーカーをONにして叫んだ。

だが姿を表す気配はなかった。

とそのとき、レーダーが突然反応した。

反応は俺の機体から5メートル離れてない後ろだった。

俺は慌てて機体を向けた。

しかしそこには何もいない。

またレーダーが反応した。

さっきと同じ後ろからだ。

俺はできる限りのスピードで前方に飛び退け、機体を振り向かせた。だがやはり何もいない。クソっ！相手はジャミングでも使ってるのか！？それともよほど性能のいいステルスシステムか！？

そのとき、リーダーが新たな反応を示した。しかも5つ。やっぱり複数だったか！と思ったが違った。

敵は1体だけだった。

敵は振り向いた俺の機体の目の前にいた。

漆黒のボディ、赤いカメラアイ、赤いレーザーブレード。なるほど、誰がどう見ても影だな。

次の瞬間には、ロイのACのコックピットにレーザーブレードが突き刺さっていた。

「影」

はロイのACからレーザーブレードを引き抜くと、ゆっくりと夜の闇に消えていった。

あとにはコンボイの残骸と、傷一つなくきれいにコックピットだけを貫かれたACだけが残されていた。

第2話 出会い

ここはユーラシア大陸の中央に位置する砂漠。

かつては緑豊かな土地だったが、前大戦の影響で今は見る影もない。その砂漠を疾走する1体のACがあつた。

それは少し変わったタイプのACで、下半身が二足歩行ではなく、タンクタイプになっている。

しいて言うなら、戦車の上にロボットの上半身が生えている感じだ。その上半身もかなりの重武装だ。

両腕はマニピレーターではなく、そのままマシンガンに変更されている。

更に背部には巨大なエネルギーキャノンが装備され、ボディや頭部は重装甲型の物を使っていた。

「まったく！しつっこいのよ！あんたたちは！」

コックピットにいたのは16〜17の少女だった。

髪は金髪のセミロングで、かなりの美少女だ。

彼女のACの後を、3体のACがさつきからずっと追尾してきていた。

悪態をつくのも仕方がない。

「だったらそろそろ観念してレガシーパーツを返しな！」

彼女のACの通信モニターに、いかにも柄が悪い男が映った。

「い・や・よ！！このレガシーパーツはあたしの物！！ずうえつつたい渡さないんだから！！」

それだけ言つと彼女は通信機を切ってしまった。

「絶対逃げきるんだから！！」

彼女は慣れた手つきでコックピットのコンソールのキーボードを打ち始めた。

「あんのガキー！！」

「どうします？ボス？」

「とっ捕まえるに決まってるだろーが！！奴の足じゃ俺らから逃げきれはるがねえ！それにこのジャングル・スネークスに睨まれて逃げ切れる奴あいねーんだ！わかったか！！」

「へ、へい！」

確かに、今の彼女には彼らから逃げ切ることは難しかった。

彼女のACは重武装・重装甲型。それに対し、彼らジャングル・スネークスのACは高機動・軽装甲型。

戦闘ならば勝てる可能性もあるが、追いかけて彼らのACに彼女のACが勝てる見込みはなかった。

ジャングル・スネークスも少し変わったタイプのACを使用している。

彼らのACの脚部はノーマルタイプとは逆向きに関節が接続されている。

このタイプの脚部は装甲が薄く、積載量の少ないが、高機動戦闘に主眼をおいたもので、戦闘時の安定性も高い。

武器はどのACも軽武装・接近戦用と、徒党を組んで戦うには少々バランスが悪い。

カラーリングも、緑を中心とした迷彩色で、砂漠ではかなり目立つ。だが彼女を捕まえるには十分な装備だった。

「ボス！奴のACが妙な動きを！！」

「ああん？」

彼女のACが、下半身はそのまま上半身だけがこちらを向いていた。

「あつたれえー！！！」

彼女は両腕のマシニングの発射トリガーを目一杯ひきしぼった。

上半身と下半身が独立して稼働できるタンクタイプの特徴を利用したうまい戦い方だ。

しかし足場の安定しない砂漠では命中率は激減し、牽制程度にしかない。

カキン、カキン

「た、弾切れ！？」

コンソールの自機の状態をあらわすパネルには、両腕武器の弾切れを示す警告マークが出ていた。

ロクに整備もできぬまま逃げ出してきたため、弾丸を補給することができなかったためだった。

「まだまだあー！！」

彼女は武器を背部装備のエネルギーキャノンに変更した。シートの裏から標準機が出てくる。

「当たつてよー！！」

彼女はトリガーをひきしぼった。

「うわっ！？アブねえ！！」

「大丈夫ですよボス、こんな安定しない場所じゃ当たりっこねーです！」

「そ、そーか。驚かせやがって！」

エネルギー弾が全く別の場所に当たり、虚しく砂埃をあげる。

「全機、回避行動をとりつつ追跡を続行！もう頭にきた！発砲を許可する！」

「了解！」

「了解！」

「この小娘え！目にももの見せてやる！！」

「ちい！こつちも弾切れか」

エネルギー残量がレッドゾーンに入っていた。

これ以上使ったら逃げるためのエネルギーも無くなってしまう。

「八方塞がりってわけね」

彼女のACにはもう武装は残されていなかった。
あるのはミサイル迎撃用のレーザーが2門。

だが攻撃に使用するにはあまりにも出力が足りない。

その時、敵の発砲を知らせるアラートがコックピットに響き渡った。

「っ！？撃ってきた！？」

彼女は油断していた。奴らはパーツを無傷で手に入れるため発砲はしてこないとたかをくくっていた。

「きゃああ！？」

ジャングル・スネークスの撃ってきたミサイルが彼女のACの背部に命中した。
損害を知らせるアラートが鳴り響く。

「安定維持システムがやられたの！？」

コンソールのパネルに安定維持システムが破損したことを知らせる警告マークが出ていた。

ACの挙動がみるうちに怪しくなってきた。

いよいよだめかも知れない。そう彼女が思い始めた時だった。

前方に巨大な砂岩があらわれた。オーストラリアのエアーズロックに匹敵するほどの大きさだ。

「あれは……」

彼女は砂岩に洞窟があるのを見つけた。迷わずACそちらに向け、全速力で疾走した。

「ボス！？前方に巨大な岩が……」

「何をする気だ？あの小娘」

すると、前を走るACが岩に開いた洞窟に入ってしまった。

「しめた！袋のネズミだ！野郎ども！追え…」

彼が言い終わらないうちに洞窟の入口が崩れ始めた。

「しまった！！あの小娘やりやがった！！」

彼女は洞窟に飛び込むと同時に残ったエネルギーを背部装備のエネルギーキャノンに送り込み、入口の天井に向けて発射したのだ。当然入口は崩れ、彼らの侵入を阻んだ。

「ど、どうしましょうボス！？」

「ええい！！崩せ崩せ！！弾丸は山ほど持ってきてある！撃て撃て！撃ちまくれ！！」

「へ、へい！」

「小娘えっつ！！絶対に逃がさんぞっ！！！」

第3話

「ふいー、とりあえずこれでしばらくは安心……か」

崩れた入口を見て、彼女は胸をなで下ろした。

「ったくう、なんでこのレイナちゃんがあんなムサイ男達と追いかけっこしなきゃなんないワケ？」

彼女の名はレイナ・アイナス、17歳。数少ない女性レイヴンの1人だ。

アジア系の血が入っているらしく、髪は金髪ながらも目は茶色、日系の顔つきをしている。そのため、年齢より幼く見られる傾向があるが、彼女は逆にそれを利用している。

その時、崩した入口から轟音が響き始めた。

ジャングル・スネークスが入口を開こうとしているらしい。

「ここも長く持ちそうにないか……出口、他にあるかなあ」

レイナは洞窟の奥に向かってACを進めた。

さつきは夢中で、他の出口があるかなんて考える余裕はなかった。

「まあ、なんとかなるって！」

楽天的な考え方だが、今はそう自分に言い聞かせるしかなかった。

洞窟の奥に進むうち、妙に開けた場所に出た。

洞窟がこんなふうにならに開けたとは思えない。

おそらく人為的なものだ。

「……？なにあれ……」

開けた空間の先に、巨大なゲートがあらわれた。

これでここが人為的に作られたものだと言うことがはっきりした。

ゲートの横に端末を見つけたレイナは、ACを降りて端末に近づいた。

暗証番号を入力するタイプのようなのだ。

「ふふん レイナちゃんにかかればこれ位」

レイナは腰のポーチから小型の端末を取り出すと、ゲートの端末のつないだ。

すると、17歳とは思えない手つきとスピードで暗証番号の解読を始めた。番号が解読されるのに10分とかからなかった。

「よしよし！えーっと、2120っと。ん、なんかお宝のヨ・カ・ン」

ゲートが開くと、レイナはなかに入っていった。

まだ電力があるらしく、ところどころ点滅するランプなどが目にはいった。

「なるほど。遺跡かあ」

この時代、前大戦の研究施設や軍事施設が残っていることも珍しくない事だった。人々はそれを遺跡と呼んだ。

更に、前大戦のACやパーツが見つかることもある。それらはレガシーパーツと呼ばれ、部品だけでもかなりの価値があり、高額で取引されている。レイナが追われているのも、もともとそのレガシーパーツが原因だ。

奥に進んでいくと、ブレイカーらしきものを見つけた。

当然のごとくレイナはブレイカーをあげた。

すると、今まで死んでいたコンピュータやパネルなどに電力が行き渡り、水を得た魚のように稼働し始めた。

「すごい…こんな大規模な遺跡初めて……」

レイナは今まで見たこともない大規模な研究施設に目を奪われた。その中でも、特にレイナの興味を引く物があった。

それは大きなカプセルのようなもので、沢山のパイプが常に緑色の液体を供給していた。

レイナがブレイカーをあげる前からすでに稼働状態で、おそらくこの研究施設の中核を成すものだろうと予想できた。

レイナはカプセルを調べ始めた。

すると、カプセルを覆っている鉄の外壁に、何かのプレートが埋め込まれているのを見つけた。

そこにはこう刻まれていた。

「K A I A M A N O 2 1 2 0 1 2 2 4 0 0 1 2 A F T
E R 2 0 5」

「なんだろう…これ」

レイナがプレートに触れようとしたその時だった。突然、カプセルに液体を供給していたパイプが次々と弾け飛び、水蒸気を上げ始めた。

『冷凍睡眠 解除 覚醒シーケンス 開始』

アナウンスが流れ、誰も操作してないはずのコンピュータが勝手に

に稼働していた。

「何！？なんなのよこれえ！？私何も…」

すると、今までめまぐるしく動いていた機械が急に静かになった。そのかわりに、カプセルが静かに開き始めた。レイナは慌てて近くにあった何かのタンクの後ろに隠れた。

（どうしよう、前の戦争に使われた生体兵器とだったら…）

パシャン　ドサツ

その音に、レイナの心臓は早鐘のように鼓動をうつた。

（出てきた…っ！？）

おそろおそろタンクから覗いてみた。

しかしそこには生体兵器とおぼしきものは見あたらず、人が倒れていた。

（……人…？だよね）

レイナはゆっくり近づいていった。

「男の子…？」

近くにつれ、その者の正体をはっきりし始めた。それは、レイナと同じ位の歳の青年だった。

髪は黒く、少し長め。

肌は透き通るように白く、精悍な顔つきをしていた。
生体兵器にしては少し物足りない。

レイナはその青年にすっかり見入ってしまった。

「……キレイ……」

おもわず手を伸ばし、その青年の頬に触れようとしたその時だった。
青年は突然目を覚まし、レイナに飛びかかってきた。

「きゃああああ！？」

レイナは衝撃に耐えきれず、しりもちをつく。

青年の手がレイナの胸ぐらを掴んだ。

（殺されるっ！？）

レイナはそう思い、体をかたくした。

「今は何年だ！！」

「……え？」

青年の突然の問いに、レイナは答えることができなかった。

「答えろ！！今は何年だ！？」

彼の剣幕に、レイナは恐怖を感じながらも問いに答えた。

「い……今はBCE205……」

「違う！！2120年12月24日、第3次世界大戦で、核を使った日から何年経ったか聞いている！！」

レイナには彼の言っている意味よくわからなかった。

しかし、核というキーワードからなんとか青年の聞きたい事を推測することができた。

「核って… Blood Christmas Eveの事？」

「何でもいい！！その日が核の撃ち合いになった日なんだな！？その日から何年たった！！」

「そ、その日から年号が変わって…えっと今は…205年と5カ月……」

それを聞くと、彼は驚愕した表情になった。

レイナの胸ぐらから手を離すと、その場に座り込んでしまった。

「けほっ、けほっ……」

「そんな……じゃあ俺は200年近く眠って……」

レイナには彼の言葉の意味を理解できなかった。ただわかるのは、とりあえずこちらの命を狙う様子はないことだけだった。青年は突然立ち上がり、近くのコンピューターに向かうと、キーボードを猛烈な勢いで操作し始めた。

「あの……ちょっといいかな？」

レイナはおそろおそろ彼に近づいた。

「なんだ？」

彼は振り向きもせずに答えた。

「あの……さあ」

「要件があるなら早く言え」

「とりあえず……服……着ない？」

「なっ……」

そう、彼は裸だった。

第4話

「ねえ…さっきからなにやってんの？」

青年がコンピューターを操作し始めてから10分が過ぎようとしていた。

相変わらず彼はキーボードを操作中だ。

今はレイナの渡した替えのズボンをはいている。

それ1枚だけだが、これで目のやりどころに困ることはない。

「ねえってば！」

「ここを自爆させる」

レイナは耳を疑った。

「……………はい？」

「ここを自爆させると言った。研究内容を外部にもらすわけにはいかない」

「なつ、なに言ってるの！冗談じゃないわよお！？アンタ正気！？」

「あれはおまえのACだろ？」

彼が指差す先には、主人の帰りをけなげに待つレイナのACがあった。

「自爆までに1分の余裕がある。それまでにおまえのACを使って

「ここを脱出する」

「そ、それなら……けどなんか忘れてるような……」

レイナは何か引つかかるものがあつた。無論、外でレイナを待ち構えるジャンゲル・スネークスのことだ。

しかしそれは現在、レイナの海馬の奥底に追いやられていた。

新しい情報が次から次に流れ込んでくるこの状況では仕方がない。彼はコンピューターになにやらパスワードのようなものを打ち込むとエンターキーを押した。

『プログラム認証 システムオールグリーン 自爆シークエンス開始』

コンピューターからアナウンスが流れ、自爆システムが起動したことを告げる。

「ぐずぐずするな！いくぞ！！」

「あつ！ちよつと待つてよ！」

レイナは慌てて彼のあとを追つた。

タラップにしがみつくように掴まり、ケーブルが完全に巻きとられる前にコックピットに滑り込む。

レイナはベルトを絞めると、急いでACを起動させる。

『システム起動 おはようございます ACの起動を開始します』

「わかったから早く！！」

けなげに待っていてくれたはずの愛機に罵声を浴びせる。
いくら機械とはいえ少し気の毒だ。

コンピュータの音声に続き、モーターの駆動音がコックピットに響き始める。

「早くしろ！！時間がないぞ！！」

「わかってるわよ！！」

シートの後ろから彼が急かす。

レイナはACを方向転換させ、来る道を猛スピードで引き返した。
すると、中間あたりまでさしかかった所で、轟音と共に地響きが起こった。

遺跡が自爆したのだ。

もう一刻の猶予もない。

「もっとスピードはでないのか！？このままじゃ爆発に巻き込まれるぞ！！」

「わかってるけどこれが精一杯なの！」

重武装のレイナのACでは、今が限界のスピードだった。

その時、後方警戒のアラートがコックピットに響いた。

後方警戒スクリーンに爆発の炎が映し出される。すでに目と鼻の先だ。

「マズいぞ…このままじゃ……」

「ちいっ！！ホントは使いたくなかったんだけど……」

レイナはコンソールにある封印が施されたガラスを拳で叩き割り、

中にあるレバーをおもつきり引つ張った。

『オーバーブースト セットアップ レディ』

コンソールの計器の針やエネルギーメーターが一気に振り切れ、モーターの駆動音が高鳴り始めた。

「しっかり掴まっててよお!!」

レイナは目一杯倒されたスピードレバーの横についている赤いボタンを押した。

モーターの回転数が最高に達し、駆動音が今までにないほど高鳴る。設定以上の燃料が一気に推進力ブースターに流れ込み、炎の色が赤から青に変わると同時に、スピードが今までの倍以上に跳ね上がった。

みるみるうちに爆発の炎を引き離していく。
パイロットにかかるGも、もちろん倍以上。

「くっくっ…」

強く鳴り続けるGに、レイナはたまらず苦痛の声を漏らす。

レイナは横目で青年を見た。

しかし彼は顔色一つ変えない。

（このGがなんともないなんて…コイツ何者？）

例のカプセルに、不可解な行動。

さらにはこのGの中で顔色一つ変えない。

彼の謎は深まるばかり。だが今は一刻も早く洞窟を抜け出すことが先決。謎を解明している暇ではなかった。

「見えた！あれね！」

前方に崩れた岩石が見えた。

レイナはすぐさまコンピュータを操作し、背部エネルギーキャノンの標準を前方に合わせる。

標準器を覗き、誤差を修正すると、トリガーを引いた。

エネルギーキャノンが火を噴き、エネルギー弾が岩石に向かって放たれた。

「いつけえー！！」

「ボス……何ですかね、この音……」

「知るか！いいからさっさと岩を吹っ飛ばすんだよー！」

ジャングルスネークスは、依然岩石を吹き飛ばすのに躍起になっていた。崩しても崩しても新たに崩れてくるところを見れば、弾の無駄だと気づいてもいいころだ。

いや、気づいていないのは1人だけか…。

「け、けどボス、だんだん大きくなってるような気が……」

「ボス、俺も何か聞こえます。なんかこう……地響きみたいなのが……」

「あぁん？…たく、なんだってんだ」

ジャングルスネークスのボス、ランガ・ドーザは、岩石への攻撃を止めて耳を済ませてみた。

すると、確かに地鳴りのような音がしていた。

「なんだ？この音は」

どうやら洞窟の中から聞こえてくるらしい。

ランガは機体を岩石に寄せる。

その音はだんだんと大きくなり、近づいてきた。

その時、彼のACのレーダーに洞窟の中をこちらに向かってくるACと、とてつもないエネルギーの塊がうつった。

「！？マズい！逃げ！」

彼の言葉が終わらぬうちに、轟音と共に岩石が粉々に砕け散った。衝撃で3体のACは吹き飛ばされた。

同時に、レイナのACが飛び出してきた。

レイナの後を追うように爆発が洞窟から吐き出される。

「ヤッホー！どんなもんよ！って、きゃああああ！？」

洞窟から飛び出したところまではよかったのだが、レイナのACはバランスを崩し、地面に落下した。

2〜3回地面を転がった後、ようやくACは停止した。

関節部分や排気口、胴体からはオーバーヒートの白煙が立ち上る。

エネルギーメーターは完全にレッドゾーンを指していた。

ブーストが焦げ臭い。

「いたたた……だから使いたくなかったのよ」

「今のはオーバーブーストか？」

後ろから青年が訪ねてきた。

どうやら無事らしい。

「そうよ。このレイナちゃんのAC、ラブリーハートスペシャルちゃんのために出力を調整した特製オーバーブースト!どう?」

「……オーバーブーストはともかく、そのネーミングセンスはどうかと思うぞ」

「なっ!どーゆー意味よそれ!」

彼女のネーミングセンスはさておき、オーバーブーストとは、一時的にエネルギー出力を強制的に上げ、普段の数倍のスピードを引き出せるシステムのことである。

しかし、オーバーブースト中は機体の安定性、操作性が著しく低下する。さらに、エネルギー消費率もスピードに対比して増加するため、本当に緊急の時しか使えない。いわば諸刃の剣である。

「それはそうと、キミの名前聞いてなかったよね?なんて……あ、名前を聞くなら自分が先に名乗るべきだね」

軽く咳払い。

「私はレイナ・アイナス。レイナって読んでね!ちなみにこう見えて数少ない凄腕最年少美少女レイヴン!」

かなり誇張されている。だがあながち間違いでもない。

「で?キミは?」

「俺は………カイ。カイ・アマノ」

「へえ、珍しい名前だね。ジャパニーズの末裔？」

カイの顔が一瞬曇る。

レイナは自分が気に障ることを言ったのかと思った。
だが彼はまた冷静な表情に戻る。

「日本は……日本はどうなったんだ？」

「ジャパンなら、Blood Christmas Eveの時に核の集中砲火を浴びて跡形もないわよ。そんな当たり前よ？知らないの？」

「……………そうか」

青年は少し悲しそうな顔をした。

「あの……私なんか悪いこと言った？」

「いや……………なんでもない」

そのようには見えなかった。

女の勘と言っやつか、カイには何か過去があるとレイナに囁く。

「ホントにいい？……………まあいいわ。出会いはどうであれ、私とキミは共に死線をくぐり抜けたいわば戦友！よろしくね！」

「……………ああ」

カイが今後のレイナの人生を大きく変えることは、レイナの勘さえ

まだ知る由もなかった。

その時、吹き飛ばされていたジャングルスネークスのACが起き上がり始めた。

「この小娘ええ！！もう許さんぞお！！」

第5話

「げっ！？……やっぱー…忘れてた」

「……なんだ奴らは？なぜこつちを狙っている？」

ようやくレイナの海馬がジャングル・スネークスのことを引っぱり出す。

「たはは……まあその…いろいろと事情が…」

レイナは追われている理由を隠した。

この場合、理由を隠す『理由』は1つ。

それはレイナに否があつたからだ。

実は、レイナは簡単にレガシーパーツが入ると偽り、ジャングル・スネークスにRWの輸送部隊を襲わせたのだ。勿論、相手は護衛なしだと偽った。

しかし輸送隊にはかなり腕のたつレイヴンが護衛について、ジャングル・スネークスは苦戦をしいられた。

護衛と彼が戦っている隙に、レイナはまんまとRWの輸送していたレガシーパーツを奪い、逃走したのだった。

「出会つたばかりで悪いんだけど……もしかすると生きて帰れないかも」

「はあ！？いきなりなに……うわっ！？」

「きゃあああっ！？」

ジャングル・スネークスがエネルギー切れで動けないレイナ達に向

かつて攻撃を開始した。

弾丸が雨のように降り注ぐ。

「うはははは！！死ねえ！！」

「ボス！これじゃあレガシーパーツまで……」

「かまうものか！！レガシーパーツなんぞどうでもいいわ！！」

「へ、へい！わかりやした！」

もはやランガの眼中にレガシーパーツは無い。

ただ自分を囷に使ったふざけた娘を痛めつけるのが、彼の第一目標になっていた。

「くうっ……」

「いやあ！まだ彼氏もないのにこんなところで死ぬなんてヤダあ！！」

動けないレイナのACはただの的に過ぎなかった。弾丸が次々に命中し、ACを傷つけていく。

「おい！操縦をかわれ！！」

カイが叫ぶ。

「っ！？どうするの！？エネルギーはもうないよ！？」

「いいからかわれ!!」

「……………わかった」

レイナはカイを信じ、操縦席を明け渡す。

見ず知らずの青年、しかもさつき出会ったばかり。

そんなカイをなぜ信じる気になったのか、自分でもわからない。ただ、彼に任せればなんとかなる、そんな気がした。

シートに座ると、カイは猛烈な勢いでコンソールのコンピューターをいじり始めた。

「…背部装備エネルギー供給カット…エクステンションエネルギー供給カット…なんだこれは？姿勢制御装置がイカれてるのか？」

「……………ここに来る途中にアイツ等に攻撃受けて損傷したのよ。これがないと……………」

「ちょうどいい、こいつへのエネルギー供給もカットする」

「!?!?姿勢制御をマニュアルするの!?!?そんなの無理……………」

「問題ない。こっちの方が操作しやすい」

「なっ!?!?不可能よそんなの!?!」

レイナの言う通りだった。

本来ACは姿勢制御装置があるおかげで機体の安定を保つことができる。

それを切るということは、氷の上をスリッパで歩くようなものだった

た。

しかしカイは、ためらいなくその装置へのエネルギー供給を切った。そしてACを再起動させると、動けないはずのレイナのACが再び起動した。エネルギーもわずかながら回復している。

「そんな……こんなとこつて……」

「無駄な場所へのエネルギー供給をカットして全てACの稼動にまわした。これでしばらくは動ける」

「すごいじゃん！これで逃げれる！さっ、早く逃げ……」

「いや…ヤツ等を撃破する」

「そうそう！さっさと撃破…ってええええ！？」

カイの言葉にレイナは耳を疑った。

弾丸が底を尽き、動くのが精一杯のACで3体もの敵を撃破すると言っただ。

「やっぱりキミ正気じゃないよお！！」

「いいから口を閉じとけ！舌噛むぞ！」

「つきやああ！？」

カイはACを跳躍させた。そして空中でブーストを点火させると、先頭のACに体当たりをくらわせた。

衝撃でランガのACは後方に吹き飛んだ。

続けて左舷のACに向かった。

すると目標ACからマイクロミサイルが発射された。
しかしカイは回避行動をとるどころかACを加速させた。

「きゃあああ！？ちよつとミサイルミサイル！！」

「間合いがあまい！避けれる！」

カイはミサイルが命中する寸前、最小限の動きでかわしていく。
ミサイルはACスレスレを通過し、後方で次々と爆発していった。

「きゃー！きゃー！」

「あーうるさい！少しは黙ってらんないのか！！」

カイは敵ACの頭部に肘鉄を叩き込んだ。

その時、敵の攻撃を知らせるアラートが鳴り響いた。

もう1体のACがマシンガンを乱射しながら接近してくる。

カイはたった今攻撃をくらわせた敵ACの後方に回ると、それを盾にして弾丸を防いだ。

そして盾にしたACを打撃で吹き飛ばし、敵ACに衝突させた。

カイはすかさずACを加速し、もつれて落下してくる2体のACに下半身のタンクの低部でキック？をくらわせた。

2体のACは絡み合ったまま地面に落下し、白煙をあげた。

「やった……の？」

「ああ、多分な」

一瞬の出来事だった。

弾丸もエネルギーもないACで、カイは見事に3体のACを撃破し

ていた。

その間56秒、約1分足らずの出来事だった。
レイナはまだ信じられない。

「キミ……一体何者なの？」

「……………俺は……………っ!？」

その時だった。

レイナ達のACに、後方からグレネードランチャーが撃ち込まれた。
背部エネルギーキャノンは破壊され、機体は衝撃で吹き飛ばされた。

「……………クソっ!」

「そんな……………まだ動けるなんて……………」

レイナ達に攻撃したのはランガだった。

彼のACは柔らかい砂のクッションに助けられ、ダメージが少なかったのだ。

「がははは！俺様を甘く見たなあ？最後に笑うのはこのランガ様だ
あ！ー！おい！おまえら！」

残りの2体のACも、少々ふらつきながらも立ち上がった。
こちらランガ同様、傷が浅かったらしい。

「どうすんのよカイ！ーあいつらまだ動けるじゃん！ー!」

「くそっ……………残ったエネルギーで逃げれるか!？」

カイはACを立ち上がらせ、方向を変えようとした。
その時2発目のグレネードがカイ達を襲った。
それはACの下半身、タンクのキャタピラに命中した。

「逃げれると思ったか！！小娘え！」

「へへっ…もう逃がさねえぜ」

「これまでのお礼をたっぷりしてやる！」

3体のACはじりじりとカイ達に迫った。

「ヤバいつて！早く逃げ…」

「だめだ、今の攻撃でキャタピラを破損した……。ブーストホバーやオーバーブーストを使うだけのエネルギーももうない……」

「ええ〜！？……もう…だめ…助かりっこない」

「くそっ！……俺は…俺はこんな所で……」

ランガのACが目の前で停止した。
そしてゆっくりとグレネードランチャーをカイ達に突きつける。

「これで終わりだ小娘。せいぜい成仏するんだな」

ランガはトリガーを引き絞った。

「いやあああっ！？」

「くっ！……………」

2人が死を覚悟したその時、銀色の閃光が2人の乗るのACの前に飛び出してきた。

次の瞬間にはジャングル・スネークスのACはものの見事に吹き飛ばされ、50mほど離れた地面に落下していた。

「……………えっ？」

レイナは一瞬の出来事に、頭がついていなかった。

「…た…助かったの？」

2人の前にいたのはジャングル・スネークスのACではなく、眩い銀色に塗装されたACだった。

そのACを見た瞬間、レイナの脳裏に最近仲間内で恐れられている噂が甦った。

「！？っ、ヤバい！助かってない！殺「や」られ…」

「アマテラス？……………アマテラスなのか？」

「えっ…？」

「大丈夫！コイツは味方だ！」

そう言うとカイはハッチを開けてACから降り、銀色のACに向かって行った。

「ちょ、ちょっとヤバいつて！」

レイナもカイを止めようとACを降りた。カイは銀色のACの前で立ち止まって呼びかけた。

「アマテラス！！アマテラスなんだな！！俺だ、カイだ！！」

「ちょっとカイ！なんだか知らないけどコイツはヤバいつて！早く戻っ……」

レイナがようやくカイに追いつき、手を引っ張って自分のACに戻ろうとした時だった。

銀色のACがゆっくりとしやがみ、トラップを下ろしてきた。

「な、なにコイツ？乗れつて……」

「なにしてる！早く掴まれ！」

いつの間にかレイナの手を離れたカイが、トラップに掴まりながら叫んだ。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

レイナも慌てて走り寄り、トラップに掴まった。ハッチが開き、コックピットに滑りこむと、カビ臭い匂いがレイナの鼻をついた。次の瞬間、レイナの目に信じられない光景が飛び込んできた。そのACには誰も搭乗しておらず、無人だった。

「！？っ、誰も…乗ってない……」

幽霊など信じていないレイナだったが、今度ばかりは話が違つ。現

に目の前で誰も乗ってないACが、さも自分の意思があるかのように動いていた。

考えを変えるには十分な状況。

しかしカイはさも当たり前のようにシートに座り、ベルトを締める
とACの再起動を開始した。

「降りた時のままだ。いける」

「降りた時のままって……じゃあ噂は君が……」

『おはようございます、カイさん。』

コンピューターの音声がレイナの言葉を遮った。コンソールのモニターに、アニメーションの少女が現れた。

耳にバイザーをつけ、ハウズドレスのような服を着ている。

髪は黒で長く、とても愛らしい。

「ああ、アリス。久しぶり……と言うべきか。」

「あー、コンピューターに話しかけてる。怪し……」

『そこらへんのナビゲーションシステムと一緒にしないでください』

「しゃ、喋ったあ！？コンピューターが……」

『私は自立型戦闘補助AI、アリスです』

「ど、どうも。じゃなくて……AIなんて聞いたこともないわよ！
？なんで……」

「おしゃべりは後にしろ。まだ終わってない」

メインスクリーンには、立ち上がるジャングル・スネークスのACが映し出されていた。

第6話

ランガは何が起きたか理解できなかった。

突然目の前が銀色に覆われたかと思うと、衝撃で吹き飛ばされ体を強く打ったことしか覚えていない。

「いてて…ちきしょう！なんだってんだ！」

ランガは機体のダメージを表すモニターに目をやった。

幸いにも、装甲に多少の破損が見られるものの、戦闘に支障をきたすほどでもなかった。

ランガはACを立ち上げらせ、敵の方を向く。そこには、見慣れない銀色の機体が立ちはだかっていた。

「おのれアイツか？仲間なんぞ呼びよつて！」

2人の手下もなんとか立ち上がった。

「ボ、ボス。大丈夫ですかい？」

「フン、この程度で…」

その時、目の前のACから通信が入った。

モニターに映ったのは167の少年だった。

『引け！こちらに交戦意思はない。これ以上やると言つのならこちらも手加減はできない！』

「ああ？誰だてめえは？」

今の言葉は勘にさわった。

ランガは少年の余裕、まるで力の差を見せつけるような言葉が気に食わなかった。

「フン、小娘1人助けた程度でいい気になるなよ!？」

『誰が小娘ですってえ!？』

モニターの向こう、少年が座っているシートの後ろから、憎き少女が顔をだした。

「あっ!てめえいつの間に!」

『もう一度問う。こちらに交戦意思はない。おとなしく引くと言うのならこちらも深追いはしない。だがもし、邪魔をすると言うのなら…貴様等の排除もやむを得なくなる』

「ケツ、調子に乗るなよ小僧。その小娘が乗っている以上、次のターゲットはてめえだ。それにだ、こっちは見逃してもらおうなんて気はさらさらねえ」

『そうか……なにがあっても恨むなよ』

「それはこっちのセリフだ小僧お!!」

ランガはグレネードランチャーを、手下の2人はマイクロミサイルを一斉に発射し、カイ達に攻撃を開始した。

「交渉決裂だ！アリス、至急戦闘モードに切替！」

『了解しました』

カイはミサイルとグレネードを避けながら叫んだ。

アリスが返事を終わると同時に、一斉にコックピット内のディスプレイや計器類、モニターに灯が入っていく。

その間にもジャングル・スネークスの発射したグレネードやミサイルがカイ達を襲った。しかしカイは見事な操縦でかわしていく。そのうちの1発が、カイ達の至近距離で炸裂した。

「きゃあああっ！！」

「くっ！！」

衝撃が2人を襲う。

「アリス！機体の状況は！？」

『先ほどの攻撃での損傷はありません。ですが、整備不良によるトラブルが各関節部、稼働部に多数見られます。また、エネルギー残量も残り40%を切っています』

「十分だ！メイン兵装は！？」

『エネルギー残量、30%です。5発が限度かと…』

「それだけあれば十分だ！フルパワーに設定しておけ！レーザーブレードは出力を半分に設定！」

『了解しました』

「インフィニティ・システムとグラヴィティ・シフトは!？」

『インフィニティ・システムは現状では5分が限界です。グラヴィティ・シフトはフルパワーで6回が限界かと…』

「上出来!10秒後にインフィニティ・システムを起動!それと同時にグラヴィティ・シフトを最大出力でいつでも使えるようにしておけ!」

『わかりました』

「ねえ、なにその…イン…なんたらとかグラ…グラタン?って」

レイナの頭の中には多数の?マークが浮かんでいた。

「インフィニティ・システムとグラヴィティ・シフトだ!説明は後だ、今はとにかくしっかり捕まってる!」

「え?...う、うん!」

レイナはシートを握る手に力をこめた。

と同時に、カイは機体を急停止、急旋回させ、ジャングル・スネークスに向き直った。

「さて…と、久しぶりに全開でいくか!」

ランガと手下は機体を急停止させた。

今まで逃げ回っていた目標が停止し、無防備でこちらを向いていたからだ。

「ふ…ふはははは！あきらめたか小僧！死ねえ！！」

ちよこまかと逃げられ、いい加減頭にきていたランガは、その怒りをぶつけるかのごとくグレネードランチャーのトリガーをひいた。手下も同時にマシンガンを発射した。

弾丸が次々に命中し、弾着の煙がカイ達のACを包む。

「インフィニティ・システム起動！！」

『了解。神経接続開始します』

ACの駆動音が高鳴り、カイの座っているシートに赤い光のラインが流れ始めた。その光はシートからカイへと流れ込んでいく。

「うぐっ…ぐああっ！！」

「ちよ、ちよつと大丈夫なの！？かなり苦しそうだけど…」

『心配ありません。神経を接続する時に生じる痛みですが、すぐにおさまります』

シートで苦しそうに悶えるカイをレイナは心配そうに見つめた。だがアリスは当たり前のように続ける。

『神経接続完了。システム、オールグリーン。解放準備完了』

その時、コックピットにアラートが鳴り響き、敵の攻撃を知らせた。

メインスクリーンには、ミサイルやグレネードをこちらに向けて発射したジャングル・スネークスのACが映し出されていた。

「きゃあああ！？ちよつと！ヤバいつて！避けなきゃ…」

「その必要はない」

「え…？」

そこには苦痛から解放され、冷静さを取り戻したカイがいた。彼の眼は赤く染まり、どこか殺気を帯びている。

『システム、解放します』

アリスの言葉と同時に、コックピット全体が赤く染まった。

カイは左腕に装備された実シールドをかかげ、命中弾だけを防いだ。しかし砂埃や着弾の煙で周りは何も見えない。

「なんも見えないよ！？これじゃあ…」

ましてやコックピットは赤く染まり、スクリーンも赤く染まっている。

レイナには何も見えるハズがなかった。

しかしカイには全く別の光景が見えていた。

カイの視界はACのカメラアイとシンクロし、あたかもカイ自身が直接見ているような状態だ。

カイは機体を跳躍させ、砂埃や煙から逃れると、最初に視界に入った2体のACに向かった。

2体の間に機体を着地させると、弾丸やミサイルを受け止めてボロ

ボロになった実シールドを排除し、中に装備されたレーザーブレードを展開させる。

ランガの手下があわててマシンガンをこちらに向けようとしたが時すでに遅し、青白い光の刃がたちまち2体のACの右腕と左腕を肘の辺りから切り落とす。

「グラヴィティ・シフト展開!!」

『了解』

カイの指示にアリスがグラヴィティ・シフトを展開させると、アマテラスを中心に反重力波が形成され、2体のACを吹き飛ばす。

「アリス!後方6時の方角にグラヴィティ・カタパルト!」

『了解しました。重力圧縮、開始します』

「レイナ…だったな!」

「え!?あ…う、うん!」

レイナはカイの戦闘技術に圧倒されていた。

攻撃、移動、判断…どれをとっても超一級だった。

「次は少しハードだ!口開けるなよ!舌噛みきりたくなければな!」

「え!ちょ…ちょっと待ってなに…!!」

言葉を言い終えないうちに、まるでハンマーで殴られたかのような衝撃がレイナを襲った。

「な…なにい!？」

ランガは目の前で起きたことがまだ信じられずにいた。ありつたけの弾丸を叩き込み、勝利を確信した次の瞬間、煙の尾をひいて飛びだしてきた敵が、一瞬にして手下を蹴散らした。

「こなくそお!!」

ランガはグレネードランチャーを敵に向けて発射した。

グレネードはまっすぐに敵に向かい、ランガはこんどこそ勝利を確信した。

が、一瞬敵の姿がぶれたかと思うと、さっきまでそこにいたはずのACが消えた。

「!??つ、どこだ!？」

ランガは敵の姿を探す。その時、コンソールのレーダーに反応があった。しかも真後ろから。

「う、後ろか!？」

ランガはそちらにグレネードランチャーの銃口を向ける。

しかしランガが銃口を向ける前に、エネルギーの塊がグレネードランチャーを貫いた。

「ぐおおお!？」

ランガはあわてて手にしていた武器をパージ（手放）した。

鉄の塊と化したランガの得物は一瞬中に留まり、炎に包まれた。

その炎は武器をパージした右腕を吹き飛ばした。

「す…す…」

としか言いようがなかった。

敵の陣型は崩れ、いずれも機体の一部を欠損している。

しかし、関心している暇はなかった。

敵はなお戦意を失わず、攻撃を仕掛けてくる。

「まだまだ！来るぞ！」

カイが叫ぶと同時に、陣型を立て直したジャングル・スネークスが攻撃を再開した。

無数のマイクロミサイルがカイ達を襲う。カイは機体を操作し、不規則に飛来するミサイルを紙一重でかわし、再び接近し始めた。現在ジャングル・スネークスは、三角形の陣型を取っている。

常に手下の2人がこちらに向き、マイクロミサイルを撃つ。ランガは後方から背部装備の小型レールガンを乱射してきている。

「少ない人数で戦うにはなかなかうまい戦法だ。……だが！」

カイは機体を三角形の中心に滑り込ませる。

「懐に入られると前衛の2体の反応が遅れる！！」

青白い光の刃がきらめくと、右衛のACの頭部、ミサイルポッド、左足を薙ぎ、コアユニットから切り離す。

右衛のACは完全に戦闘能力を失い、地面に倒れ込んだ。

振り向きざまに、カイは主兵装のエネルギーランチャー3発を左衛のACに叩き込む。

敵ACがこちらに銃口を向ける間もなくエネルギー弾が頭部、左肩、右足に命中し、命中部を大きくえぐる。

左衛のACも戦う力を失い、火花を散らしながら地面に伏した。

「さて……残ったのはおまえ1人だ。…どうする！」

カイは機体を翻し、ランガのACに向かう。

ランガはあらずさりながらもレールガンは発射してくる。

しかしその弾丸は当たることなく、カイ達の後方へすぎてゆく。

すれ違いざまにカイがレーザーブレードを一閃させると、銃口から綺麗に真つ二つにされたレールガンが宙を舞った。

「ぐああっ!？」

機体のダメージを知らせるアラートがコックピットに鳴り響く。

コンソールのパネルには破壊された各部が表示されている。

残された武器はレーザーブレードのみ。

「いったいなんなんだコイツは!？」

ランガの思考は恐怖と恐れに支配されていた。

わずか2分足らずで手下は2人ともたおされ、自分も大きなダメージを負っている。

殺らなければ殺られる。頭の中の声がランガに剣を抜かせた。

「このバケモノがああああ!!」

敵ACはなおもレーザーブレードを展開させ、カイ達に攻撃してきた。

「まだ戦うというのか……」

振り下ろされたブレードを、こちらにもブレードで受け止めながらカイが呟いた。

敵はがむしゃらにブレードを振り下ろす。

カイは攻撃の隙をつき、敵に蹴りを食らわす。

体制が崩れた瞬間、ブレードが閃光を描き、敵のブレードを腕ごと切り落とした。

「アリス!!」

「わかっています」

アリスは予想していたかのようにグラヴィティ・シフトを展開した。重力波が敵を吹き飛ばす。

カイは機体を跳躍させ、落下して地面を数10m滑ったランガの機体の上に着地した。

そしてコックピットにエネルギーランチャーを突きつけた。

「…チェックメイトだ。観念しろ」

『……殺せ』

通信パネルに頭部から血を流したランガの姿が映し出された。

『おまえの勝ちだ小僧。さっさと殺せ』

「意外といさぎいいんだな」

『ガキに負けたとあっちゃあ末代までの恥さらしだ』

「そうか……ならば望みどおり消してやる」

カイはエネルギーランチャーの発射トリガーの引き金に指をかけた。

「だめええー!!」

突然、カイのトリガーに指をかけた方の手に、レイナがしがみついた。

「だめだよ！殺しちゃだめえー！」

「なっ…おまえ…」

カイの手が思わずトリガーから離れた。

レイナはなおもカイの左腕にしがみつき、離れようとしなない。

『カイさん。インフィニティ・システム、使用可能エネルギー0%です』

アリスが話終えると同時に、アマテラスの電力がいったん落ち、再び起動した。

インフィニティ・システムは停止し、コックピットは元に戻っていた。

カイの眼も今は普通の色に戻っている。

「……………」

「……………殺しちゃ……………だめ……………殺しちゃ……………」

「わかった。殺さない」

「えっ……」

レイナ顔を上げた。

そこには優しい笑顔で見つめかけているカイがいた。

「だからこの手を離してくれ」

「あっ……」

レイナは力の限りしがみついていたカイの手を離した。

カイは再び操縦桿を握ると、ランガに通信回路を開いた。

「命拾いしたな。どこへでも行け」

『なに？情けは……』

「情けではない。貴様を殺すためのエネルギーが惜しいだけだ」

そう言うときカイは通信を切り、レイナのACに向かって歩き始めた。
レイナのACを抱きかかえ、機体を跳躍させた。

—————

ランガはコックピットから這い出すと、遠ざかって行く銀色の機体を見つめながら呟いた。

「……奴は悪魔なのか？それとも……」

辺りはすっかり夜の闇に包まれていた。

BCE 205 5月7日

第7話 過去

大陸の西側に位置する半島、かつてヨーロッパ、イベリア半島と呼ばれた土地。

現在は荒れ果て、広大な荒野が延々と続いている。

その荒野を銀色のACが疾走していた。

腕には大きく損傷したACを抱えている。

「本当にこつちでいいのか？何も見当たらないぞ？」

「だーいじょうぶだって！レイナちゃんを信じなさい」

カイはレイナの指定した方角に向かっていった。

どうやらそこに、レイナの‘基地’があるらしい。半信半疑ながらも、カイはレイナに従ってACを走らせていた。

「それにしてもこのAC、見かけによらず結構力持ちなんだね。重武装のラプリーハートスペシャルちゃんをこんなに軽々運ぶなんて」

「グラヴィティ・シフトで反重力を作り出している。最低出力だが、おまえのACを持ち上げる位なら造作もない」

『反重力によってレイナさんのACの重量は通常の3分の1まで軽減されています。これならパワーの低いこの機体でも運ぶことが可能です』

「ふ…ふーん。よくわかんないけどすごいんだ」

レイナの頭にまたも？マークが浮かぶ。

「グラヴィティ…なんたらは…まあ、なんとなくわかったんだけど
お。あれは？インフィニティ…」

「インフィニティ・システムか？」

レイナはドキリとした。カイの操縦技術は通常状態でも目を見張る
ものがあつたが、システムが起動している間、カイはまるで別人だ
つた。

機体を手足のように操り、まるで戦いを楽しんでいるかのようにだつ
た。

そしてなにより、あの殺気。

近くにいるだけで生きた心地がしない雰囲気、押しつぶされそうな
プレッシャー
重圧。

それはたとえるなら戦うためだけに生まれてきた阿修羅のように思
えた。レイナだけではなく、誰もがあの場では恐怖を感じただろう。

「その…あれは一体なんなの？あんなシステム聞いたことも見たこ
ともないし…」

レイナの心臓が早鐘のように鼓動をうつ。

聞いてしまえば二度と後戻りはできない。

そんな気がしてならなかった。

「アリス、説明してやれ」

『はい』

アリスが画面内で機体のパネルを表示し、説明を始めた。

『インフィニティ・システム、正式名称 combat・data・install・human・synchrono・system。戦闘で収集したデータを元に、予想されうる攻撃をパターン化し、直接操縦者の脳内に送り込むことによって、相手が次の行動に移る前に攻撃を加えることを可能とした戦闘補佐システムです』

画面に表示されたパネル内で、アリスの説明に合わせて機体やデータを表す矢印が動き、説明をわかりやすいものになっている。

『また、操縦者の神経を機体の情報伝達回路に同時接続するため、戦闘状況をより早く、より正確理解することが可能です』

「????え〜っと、つまり…」

呆れてため息をつくカイ。

AIであるアリスが限界ギリギリまでわかりやすく説明しているにも関わらず、彼女はまだ難しいようだ。

これ以上わかりやすくするとしたら紙芝居で説明するぐらいしか、カイには思いつかなかった。

「つまり、だ。インフィニティ・システムが起動している間、機体自身が敵の動きを俺に全て教えてくれる。敵がどう動くか、どの武器を使えばいいか、次はどうすればいいか…とかだな。それと、システムの起動中、俺はこの機体と1つになっていることになる。この機体が見ている景色、感じている大気の流れ、受けたダメージ、それがそっくりそのまま俺に伝わってくる。自分が自分自身で戦っている感じだ」

「そんなシステム……一体キミはこれをどこで？」

「知りたいか？」

「……………うん」

カイはクスツとイタズラっぽく笑う。

今思えば彼の笑顔を見るのはこれが2回目だ。

「信じられんかもしれんが……………元々俺はこの時代に存在するべき人間じゃない」

「……………はい？……………そ、それどーゆーこと？この時代って……………」

カイはパネルを操作し、機体を自動操縦に切り替えた。

「話せば長くなる。…基地とやらはまだ先なんだな？」

レイナが頷くのを確認すると、カイは少し間をおいてゆっくりと口を開いた。

—————

時は約200年さかのぼる。

西暦2119年

世界が保っていた平和のバランスが崩れ、各国が他国の領地やその国が持つ技術を巡って戦闘を繰り広げていた。

カイの故郷——今は存在しない日本もその1つだった。

持ち前の技術力の高さをフルに発揮し、たちまちアジアで5本の指に入る強国へとのし上がった。そう言う意味では他国から一目置かれる立場だったのかもしれない。そんな日本を、他の強国がほっておく訳もなく、何かと理由をつけては自分の物にしようとこぞって

戦闘を仕掛けてきた。しかし日本はその国々を打ち破り、逆に自分の領地にするほど力をつけていた。

だが、所詮アジアの外れにある小さな島国。

たちまち日本は人手不足に悩まされることになる。

そこで日本は軍役を課す年齢を大きく下げ、16歳以上の男子は必ず軍に所属するとした。

もはや非戦争主義のかけらもない。

カイも例外ではなく、16歳になるやいなや軍の養成学校に入学する羽目になった。しかし、入学と同時にカイはその頭格を現し、他の生徒を差し置いてわずか2ヶ月で卒業し、日本でトップの戦歴を誇る部隊への入隊を課せられた。

実戦でもその実力を発揮し、着実に戦果を伸ばしていく。

しかし、それに対するカイへの風当たりは、決して良いものではなかった。

いままで誰も成し得なかった最年少最速出世だけでなく、配属先の部隊でも先輩や上官を差し置いて戦果を伸ばしている。

周囲からは妬みや畏怖の意味も込めて『悪魔の子』だとか、『幼き化け物』などと呼ばれることもしょっちゅうだった。

しかしカイはそんな罵りや軽蔑も意味を成さず、いつしかその功績をかわれ、軍でもごく少数の実力者だけが選ばれる『第66独立騎甲師団』、通称『イザナギ隊』の隊長を命ぜられた。

この部隊は主に侵略した土地に前線基地を築く開発部隊の援護、また建設した前線基地からの他国侵略の先発隊としての任務を持つ特殊部隊である。

ここまでくると、もはや軽蔑や畏怖の言葉はなく、むしろ尊敬や敬意の言葉しか聞こえなくなっていた。

運命の日も、領地とした国の隣国が送り込んできた戦闘部隊を一掃し、建設したての前線基地に帰還したいつもと変わらぬ日常だった。

――西暦2120年12月24日午前0時16分――

突然の夜襲部隊の攻撃により安眠を妨げられたカイは、不機嫌なまま自室に向かう途中だった。

今戦闘による損失はACを5機、その内部下を2人失った。

カイが隊長に就任してから初めての戦死者を出してしまった。

部下を失ったことよりも、最強を誇る自分の部隊に損失がでてしまったことの方がカイには痛手だった。

――戦歴に傷がついてしまった――カイの苛立ちはそこから来ていた。

「カイ兄い！！」

背後から呼ぶ声に、その苛立ちも一瞬でどこかへ吹き飛んでしまった。

聞き慣れた声、ここに存在するはずのない声。

「タケル！？なぜここに！？」

それは紛れもなく、カイと血を分けた弟――タケルの声だった。

「へっへー、驚いたでしょ？」

カイに追いついたタケルは、息を切らしながらもいたずらっぽい笑みを浮かべる。カイより1つ下のタケルは、ほとんどカイに瓜二つだ。

黒い少し長めの髪、整った顔立ち。

だが、カイとタケルには決定的に違う物があつた。

それは『性格』。

カイの17歳とは思えぬ大人びた立ち振る舞いと雰囲気に対して、タケルは明るく無邪気で、若干幼さが目立つ。

「つと、上官の前でこんな態度はダメかな？」

「じ、上官！？まさか……」

カイはその言葉でタケルがここにいる理由を悟った。

「申し遅れました！天野タケル、この度第66独立騎甲師団への所属を命ぜられました！以後、よろしくお願いします！」

急に姿勢を正し、敬礼をするタケル。

驚きを隠せず、あとざするカイ。

「し…しかしおまえは技術部だったはず…」

「途中から学科を変更してもらったんだ」

「それにしたって早すぎる！まだ卒業から半年も……」

「俺の一存だよ」

タケルの背後から姿を現した声の主。

彼はカイとタケルの父親、天野宗一。そついち白髪混じりの黒髪に無精髭。

白衣がしっくりくる長身。

白衣を着ている理由だが、彼は軍直属の極秘研究機関の最高責任者なのだ。

カイの出世の20%は彼のおかげでもある。

「心配するな。タケルもおまえの部隊に所属できるだけの实力はある」

ニツと笑い、タケルの頭をくしゃくしゃと撫でる。

だが今のカイにとっての問題はタケルのこととは別のものに変わっていた。

「…なんでおやじがここにいる!」

「ん? おいおい、見知らぬ土地の調査は当たり前だろう? 俺はそれを指揮しに來ただけだ。タケルも俺が何もしなくてもいずれはおまえの部隊に配属になる予定だった。それをちよつと早めただけだ。」

言葉を失うカイ。

だが明らかに戸惑いと苛立ちの色が見える。

「……母さんが知つたらなんて言つだらうな」

カイは精一杯の皮肉を込めて言つた。

カイ達の母親、天野命は3年前、病によりこの世を去つていた。戦争を嫌い、最期はカイとタケルに平和を説いて死んで行つた。

「あー…母さんも言つんじやないか? 兄弟一緒になれて良かったな
ーって」

「そんなわけあるか。……で? おやじがここに來た本当の意味はなんだ」

宗一は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐにいたずらが見つかった子供のよふな笑みを浮かべ、頭を搔く。

「いやゝ、やつぱり全部お見通しか。母さんに似たんだな、きつと」

「能書きはいい。さつさと話せ」

脅しともとれる息子の言葉に、宗一は渋々ながらも口を開いた。

「研究だよ、ある装置のな。日本でやれば必ず軍や政府のお偉方にちよつかいだされると思ってさ。土地の開発を口実にここでその装置の開発をしてるっていうワケ」

宗一は笑いながら話す。だがカイにはわかっていた。彼の目が笑ってないことを。

「……で、その研究内容は？」

「おっと、すまんがそれは実の息子にも言えん。……世紀の大発明とでも言っておこうか」

こんな曖昧な返答に満足するカイではない。だがあえて彼は余計な検索はしなかった。

こんな父親のことだ、いくら問い詰めても口を割ることはないとわかっていたのだ。

その時、宗一の腕時計からブザーがなった。

「おっと……すまん、ラボから呼び出した。また後できちんと説明するから。じゃあな」

彼はそう言つと背中越しに手を振りながら去って行った。いつもながら自分勝手な父親だ――カイは遠ざかって行く背中を見送りながら思った。

カイがこの部隊に所属する事になった時もそうだ。

突然宿舎に現れて一言、『おまえ、今度イザナギ隊に転属だから、よろしく』とだけ言うたとさつさと帰ってしまった。彼の差し金であることは疑いようがない。

「カイ兄い！明日から僕も部隊についていい？」

新しい部下、タケルが上官ーカイに、‘タメ口’で話しかける。本来なら懲罰ものなのだが、彼らは例外。規則の限りではない。

「あ、ああ……わかった。明日の偵察には一緒に来てもらう」

「いやったあ！ご期待にそえるよう努力します！」

本音ではあまり気が進まないカイだったが、部隊の規則上それは仕方のないことだった。

「…明日は早い。さつさと寝て出撃にそなえる。これは上官命令だ」
たとえそれが実の弟であっても特別扱いはできない。

「はっ！了解しました、隊長！それでは失礼します！」

タケルは敬礼すると、非常灯が点々と並ぶ廊下に歩いて行く。カイも向きを変え、自室に向かおうとした時だった。

「カイ兄い！」

タケルの声に足を止めて振り返る。

「さつき届いた最新鋭のＡＣ、あれカイ兄いが乗るんでしょあ！」

「ああ、そうだが……」

「それじゃあ、アマテラス僕にちよーだい！」

タケルの無邪気な問いに、カイは思わず笑みをもらす。

「考えといてやるよ」

「絶対だよお！んじゃ、お休みい！」

タケルは元気に廊下を駆けていった。

のんきなものだーカイは思った。

ここは戦場、一歩間違えれば即、死につながる。

自室についたカイはパイロットスーツを脱ぎ捨て、ベッドに横になった。母親が死ぬ間際にカイに言ったセリフを思い出す。

『なにかあったらあなだがタケルを守ってあげて』ー自分に出来るだろうか。

部下の死よりも、戦果や名誉を重視する今の自分に。

ベッドの上で幾度となく自問自答を繰り返した。

いつしかカイは深い眠りについていた。

その時既に、数千キロ離れた国同士が、核の引き金を引いているとはまだ知るよしもない。

――――

同日午前５時２７分

轟音と地響きでカイは目を覚ました。まだ眠りについてからまだそ

う時間は経っていない。
まだ眠気が抜け切らぬまま、カイはベッドの横にある内線に手を伸ばした。

「どうした、何事だ？」

『隣国からの奇襲です！それも、ほとんど全戦力に近いほどの……』

「わかった。すぐに指令室に向かう」

そう言うとカイは受話器を置く。

いつも沈着冷静なオペレーターがかなり慌てていた。

「……ただ事じゃないな、これは」

カイはベッドから飛び起きると、脱ぎ捨てたパイロットスーツを乱暴にひっ掴んで指令室に向かった。

指令室に着くと、そこはまさに修羅場だった。

オペレーターは指示の伝達や情報処理に追われ、上官達は中央のパネルの前で何やら討論しあっている。

カイは警報の鳴り響く指令室の中央を突破し、慌てふためいている上官達を一喝する。

「何事ですか！！隣国の奇襲とはどういうことです！！」

「おお、これは隊長！一大事です！隣国が残存する全戦力を投入して我が前線基地に奇襲を仕掛けて来たのです！」

「全戦力だと？数は！？」

中央パネルに戦況が表示された。

状況は圧倒的不利。

ほとんどが敵であることを示す赤い点で埋め尽くされている。

友軍の青い点は次々と消えていく。

配置や隊列もバラバラだった。

「……これでは攻撃してくれと言っているようなものだ！オメガ小隊を左の渓谷に！残りの2小隊は右の川に沿って配置してください！」

オペレーターが指示を伝えると、青い点が次々に移動を開始した。

「しかしこれでは中央の本隊を防ぐことが……」

士官の1人がカイに反論する。

しかしカイはニヤリと笑うと一言。

「ご心配なく。我々が出ます。オペレーター！第66独立騎甲師団に出撃命令を出せ！」

「は、はいっ！！」

オペレーターが慌てて騎甲師団の部屋に指令を伝えた。

それを横目に、カイはヘルメットをかぶりながら中央指令室を後にした。果然と立ち尽くす士官達を取り残して。

格納庫では既にイザナギ隊の出撃準備が整っていた。

「隊長！前師団員、集合及び出撃準備完了しました！」

スタンバイの遅い隊員を怒鳴っていた副隊長が、カイの姿を確認すると慌てて状況を報告しに来た。

副といってもカイより10歳も年上なのだが。

「補充兵は？」

「準備させております。置いて行きますか？」

格納庫の端には、アイドリング状態の純白の機体――タケルの愛機が待機している。

おそらく既に搭乗済みだろう。

カイは迷った。

急な実戦ゆえ、新米は足手まといとして置いていてもおそらく問題はない。

だが、遅かれ早かれ実戦を経験する時は来る。それならば早い方がいいだろうとカイは考えた。

しかし、それが間違いだと気づくことになるとはまだ知るよしもない。

「……いや、連れていこう。人手不足だから、戦力少しでも多い方がいい。新米には護衛をつける」

「はっ！了解しました！」

副隊長が走り去ると、カイは自分の愛機――アマテラスに搭乗した。

『おはようございます、カイさん』

「ああ、おはよう。……たいして寝てないがな」

アリスの気遣いに皮肉を漏らしながらもパネルを操作し、機体を起動させる。

小気味良いアイドリング音がコックピットに響く。

メインスクリーンが起動すると、格納庫を出て発進口に向かうAC達映し出された。

オペレーターのガイダンスに従い、自分も機体を発進口に運ぶ。

前のACがカタパルトにはじき出されると、カイ後に続き機体の脚部をカタパルトに固定する。

シグナルが赤から緑に変わり、全ての準備が整った。

「天野カイ…アマテラス、出るぞ！」

カイの体に心地よいGがかかり、機体はまだ薄暗い空へと飛び出した。

地面に着地する瞬間、ブースターをふかし、ホバリングで滑るように地面を疾走する。

すると、先に出た者、後から出た者達が一斉にカイの下に集まり、隊列をなす。

「全機、任務は把握済みだな。今回は新米が2人いる。しっかり援護してやれ」

『了解！』

スピーカーから一斉に返答が返ってくる。

「全機、グラヴィティ・シフトをアクティブに設定、各個の判断で使用する許可する。2機で1組をつくり、目的地についたら各個に攻撃を開始」

『了解！』

いつもと変わらぬ指示を出すカイだったが、その内には疑問が張り付いて離れようとしない。

なぜこんなタイミングで敵は奇襲を仕掛けて来たのか。警備が手薄になる深夜を選ばなかったのか。

先に出してきた夜襲部隊にはなんの目的があつたのか。

そしてその数、ほぼ全戦力と言つても過言ではない。

考えがあまりにもいい加減すぎる。

なぜか妙な胸騒ぎがした。

しかし、部下の前で動揺を見せる訳にはいかない。

平静を保ちつつも、カイは心の中でその疑問と戦っていた。

そうこうしてるうち、リーダーに反応が現れた。突撃隊だけでもおよそ数百の数が確認できる。

「おいでなすったか」

こちらの戦力は50、数的には圧倒的不利。だが、その程度でひるむ彼らではない。

1機もスピードを緩めずカイに追従してくる。

「敵機発見！数およそ700！武器のセーフティを解除、ギリギリまで引きつける！」

『了解！』

距離が500まで縮まった時、敵機が攻撃を開始した。弾丸やエネルギー弾が機体をかすめる。

「アリス！インフィニティ・システム起動！」

『了解しました』

アリスがシステムを起動すると、コックピットが赤く染まり、赤い光のラインがシートや操縦桿を伝わり、カイに流れ込んでくる。そして恒例の激痛がカイを襲う。

「くっ… ああああっ！！」

痛みに思わず苦痛の声が漏れる。

だが痛みが過ぎ去った時、カイの頭、視界はクリアになり、絶対の自信を彼に与えた。

相変わらず悪趣味なシステムだーカイは父、宗一を思い出しながら思った。

実はこのシステム、天野宗一が作り出したものだった。

扱える者が見つからず、唯一使いこなせたカイの機体に試験的に搭載されたこのシステム、今ではなんの苦もなく扱える。

宗一が作り出したものはそれだけではない。

アマテラスのオペレートAI、アリスもその1つ。

世界初の完璧なAIとして注目を浴びた。

更にはこの部隊の全員が標準装備のグラヴィティ・シフト、これも宗一が指揮の下、名だたるの研究者達が総力を注いで作り上げたものだった。その時、完璧な命中コースで向かってくる敵機の弾丸がカイの視界に入った。

敵機の距離はおよそ150。

そろそろだなーカイは機体を跳躍させ、その弾丸を回避すると、空中でそのまま部隊に指示を出した。

「全機、攻撃開始！！1機も逃すな！必ず仕留めろ！」

『了解！』

カイの号令を待っていたかのように、隊列を保っていた部隊が散開し、敵機に攻撃を開始した。

カイは空中でブースターをふかし、左腕装備の盾で機体を防御しながら先頭の敵機に突っ込む。

カイの接近に気づいたのか、目標がカイにマシンガンを連射する。

2〜3発盾に命中したが全く気にせず、目標の敵機に体当たりを喰らわせる。

衝撃で吹き飛ばされた敵機は、追従していた2機を巻き添えにして崩れ落ちた。

カイは着地と同時に猛スピードで近くにいた敵機2機をすれ違いざまにブレードで切り裂く。

上半身と下半身を切り離された2機はカイの後方で爆散した。

カイは機体をホバリングで疾走させ、戦場を駆け抜ける。

彼が通り過ぎた跡には、切り裂かれたACとエネルギー弾でコックピットをえぐられたACが次々と爆発、炎上する。

カイはさながら、戦場を駆け抜ける銀色の死神となった。

すると、カイの視界に炎上する1機のACが入った。

それはさっきまでカイの補佐を務めていた副隊長の機体だった。

この戦力差だ、犠牲がでるのも仕方ない。

一瞬よぎる悲しみを振り払い、さらに視界に入るACをなぎ倒していった。

戦い始めて30分はたっただろうか。

敵の数は約5分の1に減り、生き残っているそのほとんども戦う力をそがれていた。

『カイさん、機体ダメージが50%を超えました。エネルギーも残

り少ないです。一度基地に帰還してはどうでしょう』

夢中になって敵を倒していたカイは、アリスの言葉で我に返った。見ると、エネルギーメーターがレッドゾーンを指していた。味方のACも数を減らし、30機程度になっていた。

「そうだな、一度基地に戻ろう。全機、一度基地に帰還し、補給を受ける！後退しろ！」

カイは機体をひるがえし、基地に進路をとった。部下達もそれに続く。

カイはその中に、片腕を失いながらも追従するタケルを見つけた。慌てて通信回路を開き、安否を確認する。

「タケル！大丈夫か！？」

『なんとか大丈夫です隊長。この程度なら基地まで保ちます』

多少疲れを見せるものの、その健康に以上はないようだ。カイはほっと胸をなでおろした。

『カイ兄い、僕のこと心配してくれてるんだ』

「バカを言え、当たり前だ。……無理はするな」

『うん！わかった。じゃあ基地で』

通信を終えると、自分の矛盾さに思わず吹き出しそうなる。部下の死に無関心だった自分が、今はこんなに弟を気遣っている。おかしい話だ――カイはそう思った。

その時、レーダーに反応があった。

見ると、そこには両脚を失いながらもなお這いずりながら前進する敵機がいた。

それはまるで、前進と言うより後退、何かから逃げるようだった。その姿をみて、カイの中の疑問が音をたててはじけた。

「そうか……………そういうことだったのか……………」

『あの敵機がどうかされましたか？戦闘力は残ってなさそうですが……………』

アリスが怪訝そうにカイに尋ねる。
だがカイはそれを無視して通信機に叫んだ。

「全機、フルスロットルでこのエリアから離れろ！今すぐだ！」

『っ！？、りょ…了解！』

スピードを上げたカイに部下の機体が続く。

敵は自分達を攻撃するために来たのではなく、逃げて来たのだ。

その危機をいち早く察知して。

それならばあの戦力の多さにも説明がつく。

彼らは国を捨て、残存する全ての戦力を引き連れて安全な場所を求めていたのだ。

もしこの推理があたっているのだとすれば……………。

『カイさん！！オメガ小隊とガンマ、ベータ小隊に向かう熱源多数！！』

「ちいっ！さっそく来たか！」

カイは機体を急旋回させ、来た道を引き返し始めた。

『隊長！どちらへ！？』

「俺にかまうな！いいから進め！」

『わ、わかりました』

カイを残し、部隊は基地へと後退していく。

しかし、カイの命令を無視して引き返して来る機体があった。

『カイ兄い！！』

「タケル！？なぜ戻ってきた！」

『カイ兄いを置いては行けないよ！いったいどうしたの！？』

「俺の言うことを聞け！ここは危険……」

カイの叫びを轟音がかき消した。

見ると、そこには巨大な火柱がその姿を現していた。

火柱は徐々に形を変え、キノコ雲へと変化していった。

その方角は、先ほどまでカイ達が戦闘を行っていた空域である。敵味方含め数百の人命がそこに存在していたはずだった。

「くそっ！遅かったか！」

『カイ兄い……あれは……』

そう、それは人類が作り出した最凶の破壊兵器――核ミサイルだった。カイは拳を叩きつける。敵にしろ味方にしろ、自分の判断が遅れたがゆえに、数百の命が失われた。

カイにとってこんなに腹立たしいことはない。

何年ぶりだろうか、これほど感情をあらわにしたのは。

その時、カイの脳裏に恐ろしい考えがよぎる。

発射された核は1つではなかった。

多数の核が一度に発射されたというこは、どこの国が撃ったのかは知らないが、敵国の全滅を目的としたものだろう。

しかしそれは目標をそれ、関係のないこの空域に命中した。

つまりこれは流れ弾、他にも多数の核が撃たれているとしたら……

…。

カイの考えは、次の瞬間現実となり牙をむいた。

『カイさん！新たな熱源多数接近中！これは……基地に向かっていきます！』

「何！？くそつ、やらせるか！」

アリスの報告を聞き、カイはACを基地に向かわせようとする。

『カイ兄い！僕も行くよ！』

「駄目だ！おまえはここにいろ！これは命令だ！」

ついて来ようとするタケルを制止させると、カイはブースターをふかし機体を疾走させる。

「アリス！グラヴィティ・カタパルトを連続使用する！セットアッ

プー!!」

『了解!』

カイの指示に、アリスができる限りの速度でグラヴィティ・システムを起動し、カタパルトモードに変更する。モーターが高鳴り、準備が完了した事を告げた。

カイは発動ペダルを踏み込み、圧縮重力の反発を利用して機体を弾き出す。

お世辞にも心地よいとは言えない強力なGがカイの体にかかり、思わず顔をしかめる。

だが、彼はかまわずペダルを踏み続けた。

限界距離に達したらまたペダルを踏む。

この行動を何回続けたらだろうか。

カイの視界に基地が見え始めた。

帰還する仲間の機体もある。

――間に合った――。ホッと胸をなでおろした次の瞬間だった。

カイの頭上を3発の核ミサイルが通り過ぎて行った。

「っ!?!くそっ!?!」

カイはブースターを限界までふかし、フルスピードで核ミサイルを追った。

手にしたエネルギーランチャーを、照準定まらぬままやみくもにトリガーを弾く。

「当たれ!当たってくれ!」

銃口から撃ち出されるエネルギー弾は目標に命中することなく、無情にも核ミサイルは基地へと吸い込まれていく。

閃光が走ったかと思うと、基地から巨大な炎の塊が吐き出された。核の炎は一瞬にして基地を消滅させ、地面をえぐりながら次はカイへと向かって来た。

「……つくそおおおお！！」

仲間を救えなかった悔しさがカイを慟哭させた。

だが今はこちらに向かって来る炎から逃げるのが先決だった。

カイは機体を反転させ、ブースターを点火させようとペダルを踏んだ。

しかし機体はカイの意に反してその場に崩れ落ちた。

「何！？どうした！」

『ダメです！エネルギー残量0です！』

警告アラートが鳴り響き、エネルギーメーターがレッドゾーンを振り切っていた。

グラヴィティ・システムを使いすぎた。

アマテラスはもう一步も動くことはできなかった。

「……………ここまで……………か……………」

案外あっさりとカイは自分の最期を悟った。

母親の忠告を聞かず、戦火に身を投じた罰なのだとカイは思った。

せめてタケルが生き延びてくれることを心から願い、死を覚悟したその時だった。

『カイ兄い！！』

純白の機体が炎に呑み込まれる寸前のアマテラスを残った左腕で抱きかかえ、フルスピードで炎から逃げ始めた。

「タケル！？ダメだ！俺を置いて早く逃げろ！このままじゃ2人も…」

タケルの機体は重二脚、重武装型。

その最大出力はアマテラスをも凌ぐ。

だが片手を失い、エネルギーも底を尽きかけた状態では、とてもアマテラスを抱えて核の炎から逃げられる見込みはない。

『ダメだよカイ兄い！諦めちゃダメだ！母さんも言ってただろ！』

「タケル…しかし…！」

炎はすでに目と鼻の先まで迫っていた。

その放射熱がじわじわとタケルとカイの機体を溶かし始めた。コックピットに警告アラートが鳴り響く。

「もういい！！十分だ！！俺を置いて…」

『嫌だ！！絶対離さないからね！！絶…ガッ…ザザッ…ブツン』

通信にノイズが流れ、ついには途絶した。

「タケル！？タケル…！！」

『カイさん！！逃げ切れません！！』

アリスの悲痛な叫びもカイには届かない。

応えることのない操縦桿をただやみくもに動かす。

「くそっ！くそっ！動け！動けえ！！……つくそおおおお！！！」

2機のACは失速し、自由落下を始める。

次の瞬間には灼熱の炎が2人を呑み込んでいた。

第8話

同日午前9時39分

2台の大型クレーントレーラーと1台の装甲車が放射能に汚染された土地を走っていた。

核ミサイル着弾あとのクレーターに注意を払いながら何かを捜している。

あの後この地域に約4発の核ミサイルが命中した。
もはや生存者は絶望的と思われた。

「…ん？あれは…オイ、止めてくれ」

装甲車の中で、放射能を遮断する特殊な防護服に身を包んだ男が同じく防護服を着た運転手に指示をだす。装甲車とトレーラーは1つのクレーターの傍らに停車した。

3台全てから防護服の男達がぞろぞろと降りてくる。

その内の1人が他の男達の制止を振り切り、クレーターに近づいた。

「博士！危険です！」

「いや、あれだ！見つけたぞ！」

博士と呼ばれたその男は部下の制止全く無視でクレーターを降り始めた。

彼の向かう先には、体の半分が砂に埋もれた2機のACが確認できた。

1体は上半身のみが地面から露出し、もう1体は頭部とバックパツ

クをわずかに地面から見せて横たわっていた。

防護服の男は足をとられながらもなんとか手前の銀色の機体に辿り着くと、コックピットハッチの横についている外部非常ハッチ開閉装置のカバーを半ば無理やり開く。

中の赤いレバーを引くと、プシュツという軽い音と共にハッチの口ツクが解除される。

彼は素手でハッチを開き、コックピットを覗き込んだ。

そこには意識を失い、ぐったりとしたカイの姿があった。

「カイ！カイ、大丈夫か！？」

彼はコックピットに滑り込み、ベルトで固定されたカイの体を揺さぶる。

「しっかりしろ！目を開けてくれ！」

「……………」

カイの口から力無いうめき声が漏れる。

意識はないが、目立った外傷はなく、健康状態に以上はないらしい。だがここは放射能汚染地域のだ真ん中である。

いくら放射能防御機能搭載型の機体とはいえ、浴びた放射能の量は計り知れない。

防護服の男はカイからシートベルトを外し、腰のポーチから取り出した半透明の放射能遮断シートでカイの体をくるんで抱える。

「アリス、動けるか？」

彼の声に反応し、コックピットのパネルやモニターが起動し始めた。しかし損傷が酷く、どの画面にもノイズがはしっている。

操縦桿の間に設置されたモニターにアリスが姿を表した。

『…………天野博士？』

「ああ。すまない、救助が遅れた」

そう、この防護服を男は宗一だった。

生存者は絶望的と打ち切られた救助を、本部の命令を押し切ってカイ達を搜索していたのだ。

「必死に探したがおまえ達以外に生存者は見つけれなかった」

『しかし基地は消滅したはずでは？何故ご無事で…』

「それは後で話す。とにかく今は我々に任せろ」

そう言う宗一はカイを抱えてコックピットを出ようとした。

『博士！…………よくぞご無事で…………』

宗一の後ろ姿にアリス声をなげかける。

宗一は振り返らずに、背中越しに手を振るとコックピットを後にした。

クレーンから下ろされたストレッチャーにカイを乗せ、自分もケールに掴まり上で待機している部下に合図を送る。

部下はクレーンの操作盤を操り、ケールを巻き取った。

クレーターの傍らに降ろされた宗一はカイをストレッチャーから抱き上げ、駆け寄ってきた部下に息子を預けた。

「彼を研究施設に。私はもう1人の方へ向かう。機体も回収してく

れ」

「はっ！わかりました！」

指示を受けた部下はすぐさまカイを装甲車へと運んでいった。

「カイ……すぐに行くからな」

砂埃をあげて走り去る装甲車を見送ると、彼はすぐさまもう1つの機体――タケルの元へと向かった。

――

同日午後3時57分

カイは夢を見ていた。

病室のベットに横たわる母――命の傍らに自分とタケル、宗一の姿もある。

「カイ……タケル……よく聞いて……」

命は弱々しい声でカイとタケルに語りかけた。
肌も青白く、生気がない。

「私が……いなくなっても……兄弟2人で……手を取り合って……強く生きて……。そして……お父さんを助けて……あげてね……」

「わかったよ！わかったからそんなこと言わないで！」

命の手を握りしめ、タケルが涙声で訴える。

命は優しく微笑み、体に残る最後の力でタケルの手を握り返す。

「タケル……優しい子。……お兄ちゃんと仲良くね」

途切れ途切れだが、その言葉には優しさと慈愛がにじみ出ていた。

「カイ」

「なんだい母さん」

カイもタケルと共に命の手を握る。

心配をかけまいと、悲しみを必死に堪えている。

だが、母の手を握るカイの手は小刻みに震え、悲しみを隠しきれない。

知ってか知らずか、命はカイの手を強く握り、優しく微笑む。

「あなたは強い子だから……何かあったら……タケルのことをよろしくね」

「わかったよ母さん」

命は再び微笑むと、後ろに立つ宗一に視線を移す。

「アナタ……2人をよろしく願います」

「ああ、わかった。後のことは心配するな」

命は再びカイ達に視線を移し、自分の右手を握る2人の手を強く握り返す。

「……こんな頼りないお母さんを許して……何も残してやれなくて……」

「なに言ってるの！母さんは僕達にとって最高の母親だよ！」

タケルの言葉に、命の頬を一筋の涙が伝う。
命の生命の灯は、今にも消えんとしていた。

「ありがとう……タケル…カイ……ごめんね……ごめ……ん……」

命の手が力を失い、2人の手から滑り落ちた。
生命の灯が燃え尽きた瞬間だった。

「母さん！？いやだ！死んじやいやだ！母さん！！」

「母さん！！」

「命……よく…頑張ったな」

「うわあああ！！母さああん！！」

もう動かない母にすがって泣き叫ぶタケル。

愛する妻の髪を優しく撫で、その努力を無言で讃える宗一。

内から込み上げる悲しみを必死に押さえ込むカイ。

病室にはタケルの慟哭だけがいつまでも響き渡っていた。

――――

カイは自分の体を包み込む優しい感触に身を委ねていた。
それはまるで、幼いころに抱かれた母の胸の中のようなだった。

「…………母…………さん…………?」

カイは手を伸ばし、その感触を求める。

しかしその心地よい感触はすんでのところで消え、彼を現実の世界へと引き戻した。

「……生きてる?……」

カイは重い瞼を開き、周囲を状況を確認せんと体を起こそうとする。だが、半ば朦朧とした意識ではそれは叶わず、唯一自由のきく首を動かす。

彼はカプセルのような物の中に横たえられ、体の半分を緑色の液体に浸されていた。

カイの感じていた温かい感触はこの液体だったのだ。

確認できたのはそれだけではない。

カプセルの傍らで操作盤に何やら打ち込んでいる人物、宗一の姿があった。

「……おや……………じ…………?」

「おお、カイ。気がついたか」

カイの声に気付き、宗一は手を止める。

「救助が遅れてすまなかった」

「……………ここは……………一体……………」

「ここは基地とは別に極秘で開発した地下研究所だ。あの時俺を含む何人かの研究員はここにいたから核の被害から逃れられた」

宗一は再び手を動かしカプセルを操作し始める。何かの起動音と共に、カイの体の中が熱くなり始めた。次第に意識が薄れてくる。

「おや……じ……タケルは……タケルは…無事……なのか」

今にも飛びそうな意識を必死にたぐり寄せ、自分を見つめる宗一に問いかける。

宗一は無言で微笑むと、カプセルのハッチを閉めた。

カイの意識はそこで途切れ、深い眠りについた。
200年という永い眠りに。

第9話 現在（前書き）

あまり前書きとかかくのは苦手です…いままで書きませんでした。申し送れました、大和ですm（――）m

ご愛読の皆様、本当にありがとうございます。

さて今回はカイの回想編から現在へとバック・トゥ・ザ・フューチャーします！

とはいっても、少し過去の事が混ざってます（戻ってねーじゃん！）。

そこところは読者の愛でなんとか…え？愛なんてない？まあまあそう言わず。

とにかく、第9話 現在編をお楽しみください。

第9話 現在

「……じゃあ君は、200年前の人間だってこと？」

「ああ、そういう事になるな」

カイはコンソールをあちこちいじりながらレイナの問いに答えた。

「信じらんないな……」

まさにその一言につきる。

最初は彼が自分のことをからかっているのだと思っていた。

しかし話を聞いているうちに疑いは半信半疑へ、最終的には完全に真実として聞いていた。

彼の態度や話し方からは一切の偽りは感じ取れない。

「俺の父親やタケルの安否は分からない……。生きていないって言うことは確かだな」

カイは苦笑する。

例えばその時生きていたとしても、200年間も生きられるはずがない。

つまり彼は天涯孤独の身なのである。

レイナの胸をチクリと痛みが走った。

「おそらく200年という長い歳月の中で、風や雨によつた地形が変わり、地下に建設されていたはずの研究施設が地上に露出したんだろう。あの研究施設で俺が入れられていたカプセル、あれは“CSS”（Cold・Sleep・Systemの略称）と言っらし

い」

忘れるはずがない。

レイナとカイの会おうきっかけとなったあのカプセルのことだ。

「人間の成長を一時的に停止させ、睡眠状態にする。俺はその記念すべき実験台一号ってわけさ。コイツのおかげで俺は200年という長い年月を超えることができた。まあ、俺にしてみれば眠ってから大した時間は経ってないように感じるんだか……。ついでに言っと、どうやら俺の父親はCSSに睡眠学習装置を組み込んだらしい。目が覚めた時には大量の情報が頭に入っていた」

「例えば？」

「んー…様々な電子機器や機械類、銃火器類なんかの扱い方とかだな。自分でも驚いてる。なにせ扱った事もないようなコンピュータが簡単に操作できたからな。まあ、それがこの時代で役に立つかどうかは怪しいがな」

「ー十分じゃないのー」

この時代でそれがどれほど役に立つか、彼は理解していない。それもそのはず、彼にとってみればつい先ほど眠ったばかりなのだ。

「……じゃあ、この機体は今までどこに隠してたの？あの時だって突然現れたし……」

『その事については私がお話します』

中央モニターにアリスが姿を現す。

最初に見たときと変わらず、その姿は実に愛らしい。

『私は回収後、研究施設の格納庫で修理を受けました。ですが格納庫は簡易的な物で、完全な修理はできず、左の補助ブースターを失いました。その後天野博士が、カイさんが目覚めるまでどこか人や戦火の届かない場所に身を隠せと命令されました。私は命令に従い、研究施設から1000kmほど離れた山脈で偶然見つけた洞窟に機体を隠し、機能を停止させて200年間待ち続けました』

「そうだったんだ……200年もよく保ったねえ、アリスちゃんと……この機体」

『雨風にさらされなかったからでしょう。洞窟の適度な温度と湿度のおかげだと思います。それに……』

「それに……？」

アリスはなぜか口ごもり、もじもじと下をうつむいてしまった。

『カイさんの……ためですから……』

彼女の顔は真っ赤になり、今にも湯気が出そうだ。

（ははゝん、な・る・ほ・ど）

ほのかに香るラブ臭（作者の創作語につき、意味はそのまま）を、敏感な嗅覚で感じ取った。

レイナはニヤニヤとカイを肘で小突いた。

「憎いね旦那 AIにまで好かれるなんてえ そのクールさでどれだけの女性を泣かしてきたのかしら？」

「……？なんの話だ？」

カイはキヨトンとしている。

その言葉からは一片の偽りも感じ取れない。

「あのさアリスちゃん……彼、もしかして……」

『……はい。超がつくほど鈍いんです』

呆然とするレイナ。

その横では頭の上に？マークが多数浮かび、困惑するカイの姿があった。

――――

30分ほどACを走らせた所で、カイは機体を停止させた。

「ついたぞ」

「はいはい、ご苦労様」

レイナの指定したポイントに到着したのだった。レイナの話ではここに自分の“基地”があるという。
だがそこには延々と続く荒野があるだけで、“基地”は見あたらな
い。

「……何も無いじゃないか」

「んふふ」 まあ見てなさいって」

そう言うところレイナは腰のポーチから小型端末を取り出し、何やら操作し始めた。

「これでよしっ…と！さあ、おつどろくわよ」

「一体何を………！？っ」

突然地響きがカイ達の機体を襲う。

と同時に、機体が生きている地面がゆつくりと上昇を始めた。

カイは慌てて機体を跳躍させ、その場から逃れる。

その間にも地面は上昇を続け、その下に隠した“基地”をあらわにした。

「……なるほど。これはいい基地だ」

「でしょ？レイナちゃんが手間暇かけて作り上げたとおきの隠れ家よん」

そう、レイナの基地は地中に隠されていたのだった。

さっきまでカイ達が生きていた場所はちょうど基地の真上、屋根にあたる部分だった。

それは例えるなら学校の体育館ほどの大きさがあり、ACの格納庫としては十分な大きさだ。

（戦争でもするのか？これは）

カイがそう思うのも仕方がない。

入り口は強固な装甲シャッターで閉ざされ、その右下にはキーでロックされた人間用の扉があった。

外壁もほとんどが装甲に覆われ、窓も入り口と同じ装甲シャッターで守られていた。

これに武装をつけたら小規模の要塞となんら変わりもない。

「じゃ、ちよつと待っててね」

「お…おい！」

レイナはアマテラスから降りると、人間用の扉に向かい、首から下げたキーを扉の横にある端末の鍵穴に差し込んだ。

ピピッ

電子音と共にロックが解除され、レイナは建物の中に入っていった。レイナはすぐに内側からAC用の入り口のロックを解除し、シャッターを開く。

モーターの駆動音が鳴り響き、10メートル以上あるシャッターを持ち上げた。

カイはレイナの誘導に従い、自機と腕に抱えたレイナの機体の中へと運ぶ。

隠れ家の中は外見以上に広々としており、右側にACの整備ドッグ、左側に居住スペースが設けられていた。

カイはレイナのACを整備ドッグに降ろすと自らもアマテラスのコックピットから降りた。

「どう？驚いたでしょ？」

レイナが満面の笑みでカイに歩み寄った。

「これを1人で作ったのか？」

「まあね。完成までざっと1年ってとこかな。あ、そのソファ―にでも座っててよ。今飲み物とってくるから」

レイナはそう言うのと2階への階段を駆け上がったいった。

カイは彼女の言うソファ―に近づいた。

「これが……ソファ―？」

彼の視線の先には色褪せた穴だらけの少し長い椅子があるだけで、カイのイメージするソファ―とは程遠い。

カイは恐る恐る腰を下ろす。

ギシッ

背筋が寒くなる擬音。

慌てて立ち上がる。

（本当に……大丈夫か？このソファ―……）

もう一度、今度は更に慎重に座る。

多少の軋みはあるものの、なんとかソファ―はカイの体重を支えきった。

ホッとするのもつかの間。

「カイ！」

頭上からの声に彼が上を見上げると、ビンが2本、Tシャツが1枚落下してくる最中だった。

カイは素早く手を伸ばし、ビンとTシャツの無差別爆撃をどうにか

キャッチする。

ソファァーが軋む。

そんなことはお構いなしにレイナは階段を駆け下りると、その勢いを利用してテーブルを飛び越える。

そのままカイの隣にダイブ。

ソファァーの悲鳴が響き渡った。

「お、おい!」

「ごめんね、邪魔でパソコン持てなくて」

「いや、そういうことじゃ…」

「とりあえずそれ着て。半裸よりいいでしょ?」

カイのツツコミも気にせずソファァーに座り直すと、手にしたノートパソコンを開く。

ディスプレイには何かのネットワークに接続した事をする表示がでていた。

「さてと、とりあえず今回のお仕事の報告しなくちゃね」

「仕事…?」

「そ!私は“レイヴン”をやって生計をたててるの」

「レイヴン?」

カイはTシャツを着ながら先程の単語を反復する。

この時代ではごく普通の単語だが、カイにとっては聞き慣れない単

語だった。

「レイヴンっていうのはねえ、雇われて仕事をするAC乗りの事を言うの。要するにプロの傭兵ってワケ」

パソコンのネットワーク接続が完了し、画面に“Blue Diamond”なるブラウザが起動した。

「んでもって、これが私達にお仕事を紹介したりその他いろいろと面倒みてくれるレイヴンのサポート企業、Blue Diamond（以後BD）よん」

通信画面が開かれ、ヘッドバイザーをした女性が映し出された。

『こんにちは、BDオペレーターのローズ・マスラナです。この度はどういったご用件でしょうか？』

「登録番号52358のレイナ・アイナスです。紹介されたMRのお仕事の報告です」

『かしこまりました。少々お待ちください』

通信画面がきれ、waitの表示が現れる。

「この時代にはね、Red WingとMebius Ring、Samurai Braidっていう3つの大企業が存在しててね、それぞれが勢力争いしてるの。それに関係する依頼がほとんど。まあ、その3つの企業依頼が全部ってワケでもないんだけどね」

レイナが話終えると同時に、ディスプレイに再びオペレーターが現

れた。

『確認できました。データの収集ですね。それではそのデータをこちらに転送してください』

「はいはい」

レイナはベストの胸ポケットからCD-ROMを取り出すと、パソコンにインストールする。

5秒程で読み込みは完了した。

なかなかの高性能らしい。

『確かに預かりました。報酬は口座に振り込まれます。手数料その他を含めてこちらで1割引き落とさせていただきます。ご利用ありがとうございました』

オペレーターがディスプレイから消える。

最初のBlue Diamondの表示が現れると、レイナはパソコンを閉じた。

「いっちょあがり」

彼女はカイからビンを受け取り、栓を開けると中のライトブルーを液体を一気に喉に流し込んだ。

「ぶはあ！このために生きてるってカンジ」 あれ？飲まないの？」

「あ…ああ」

カイも栓を開け、それを口に含んだ。

嘔いた。

「うわっ！きつたないな。それにもつたいなあゝい」

「ゲホッ！…これ…アルコールか…？」

レイナの渡した飲み物、それは紛れもない酒だった。
だが彼女はキョトンとしている。

「そっだよ？あれ…もしかしてお酒だめだった？」

「いや…だめという訳ではないんだが…」

「なら問題なし さあ飲みねえ飲みねえ！」

レイナはビンの残りも一気に飲み干す。

どうやらこの時代ではアルコールに対する規定というものはないらしい。

カイは恐る恐るそれを口にする。

（……飲めないこともないか……）

アルコールを口にしたのは養成学校の卒業式の日以来だった。

カイは免疫だけはあるらしく、仲間が次々とノックダウンしていく中、何杯飲んでも酔わなかった事を覚えている。

「それにしても……変わった機体だよねえ。なんていったっけ、名前」

レイナは整備ドッグにたたずむカイの機体を眺めながら言った。

「アマテラスだ。一応最新型の機体だったんだがな」

彼の機体は武装や細かい部分を除いてほとんどがまばゆいシルバーに塗装されていた。

左腕には小型レーザーブレード。

右腕には大型のエネルギーキャノン。

背部装備の翼を模した補助ブースター、だがそれは片方のみで、もう片方には小型ミサイルポッドが装備されている。

軽装甲、高機動型のその機体はまるで西洋の甲冑を思わせる。

「ねえ…あれつてもしかして…」

レイナの視線は右腕のエネルギーキャノンに注がれていた。

「ああ、あれか？あれはカラサ…」

「やつぱり…！」

突然レイナは立ち上がり、アマテラスへと疾風のごとく駆けて行った。

「VN - W - 08EK “KARASAWA”！！すごい！本物見たの初めて…！」

興奮してはしゃぎまくるレイナ。
カイも歩み寄る。

「知って…いるのか？」

「知ってるもなにも！この時代じゃ一番有名なレガシーパーツだよ！」

聞き慣れない単語がまた1つ、カイの耳に入った。

「レガシー…？」

「レガシーパーツ、戦前に使われていたACのパーツや武装のこと！見つかったもほとんどが使い物にならないけど…中には無傷で発見される物もあって、それらはレイヴンだけじゃなくマニアや盗賊まで大金出して手に入れようとするほど性能が高く評価されてるの！つまり…君のACはレガシーパーツの塊ってワケ！」

ほう、とカイはアマテラスを見上げる。

確かに最新型の機体としてそこその価値はあったのだが、まさかこの時代でそれほどの価値があるとは思ってもよらなかった。

「すごいなあ！まさか本物をこんな間近で見ることができるなんて！現在確認されてるカラサワはたったの3丁だけなのに…超ラッキ―！」

カイは苦笑し、目の前で無邪気にはしゃぐレイナを見つめた。

その表情はどこかタケルの横顔に似ていて、思わず手を伸ばして触れたいという衝動にかられる。

カイはハツとし、伸ばしかけた腕を下ろす。

―タケルは…もう死んだんだ―

そんな考えが脳裏をよぎり、意せずとも表情が曇る。

「どうしたの？さっきからこわい顔して…」

自分の顔を覗き込むレイナの顔が目と鼻の先にあった。
思わず仰け反った。

「な、何でもない……。そ、それよりカラサワもつと近くで見た
くないか？」

「ええっ！いいのぉ！」

レイナの怪訝な表情が、一瞬にしてまばゆい笑顔に包まれる。
あまりのまぶしさに目をつぶりたくなるほどだ。

「あ…ああ、もちろん。アリス！」

その喜びを飛びかからんとする勢いで表すレイナを後目に、カイは
アリスの名を呼ぶ。

どうやら聞いていたらしく、アリスは無人のアマテラスを操作し、
ゆっくりとカラサワを床に置いた。

「すつつつご~~~~い！！固い！冷たい！重た~~~~い！」

レイナは自分より遥かに巨大な武器に抱きつく。

まるで新しいおもちゃを与えられた子供のような反応に、思わず吹
き出しそうになった。

「ねえねえ！これはなに！？」

トリガー横についた小型のハッチを指さしながら笑いをこらえるカ
イに呼びかける。

ああ、それは…と、言いかけたその時、外からの轟音がカイの言葉

をかき消した。

レイナの表情が曇る。

「んにやろゝ、また来た」

状況が把握できずに困惑するカイをよそに、レイナは外へと続くドアに向かって歩きだした。

第9話 現在（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

これからもちよくちよく前書き後書きに顔を出したいと思います。

出さなくていい…なんて突っ込まないでくださいね？

暇な時にでも評価をいただければ嬉しいです。

第10話（前書き）

ふいー（、、）＝

ようやく更新できましたあ。

どうもカイ君が思うように動いてくれません。

反抗期？（；。。）

まあなんとかお年頃のカイ君をなだめつつ書き上げた第10話、お茶でもすすりながら読んでやってくださいm（――）m

第10話

外に出ると、轟音の正体は一瞬で理解することができた。

それは空から飛来したヘリのローター音だった。

灰色で先端が細く、胴体がずんぐりしたその機体は、日本で有名な某未確認生物を連想させた。

その胴体には、赤い文字でRed Wingという刻印が見て取れる。

「あれは…さっきお前が話していた……」

「そう、3つの大企業の1つ…RW」

レイナは苦虫を噛み潰したような表情を見せる。どうやらあまり良くない縁があるらしい。

着陸したヘリから、黒いサングラスに黒いスーツ、黒いネクタイ…と、全身黒尽くめの男2人が降りてきた。

カイが某映画のエージェントを連想したのは言うまでもない。持っている銃がデザートイーグルなら言うことなしなのだが…。

その男2人に続いて、紺色のスーツに身を包んだ1人の男性が降りてきた。

白髪混じりのオールバック、皺1つない清潔感溢れるスーツ。

いかにも几帳面な人物像をかもし出している。

整った顔立ちだが、頬から顎にかけて伸びる大きな傷跡が目立つ。

エージェント？2人に付き添われ、その男性は入り口に立つレイナの前へと歩み寄った。

睨み合う2人、重苦しい空気が辺りを覆う。

「……私がここに来た理由はわかっているだろう?」

最初に口を開いたのは彼だった。

低く、威嚇するかのように言葉を発する。

「さあ?何の用かしら?」

わざとらしい笑顔を浮かべ、肩をすくめるレイナ。

「フン、減らず口は相変わらずらしいな」

「おかげさまで」

レイナの言葉に男性の表情が一瞬曇った。

まさに一触即発。

まるで灼熱の溶岩と絶対零度の氷を鉄板1枚で隔てているかのようなこの状況。

普通の人間なら逃げ出したくなる。

「…先日、我々RWの輸送部隊が4機のACに襲撃された。護衛のACは大破、輸送物資もその大半が奪われた。その襲撃に使用されたACに見覚えがあったのでな」

エージェントの1人が背広の内ポケットから3枚の写真を取り出してレイナに押し付ける。

「お前のACだな?」

その写真には、ぶれてはいるものの紛れもなくレイナのACが写っ

ていた。エンブレムまでもがはつきりと。

「奪った物を返してもらおうか」

2、3回写真を見直したレイナはニヤリと笑うと、男性に写真を返す。

「残念ながら、これは私じゃないわね」

「…何？」

男性の表情がわずかに怒りの表情へと変化する。

「これだけ証拠があってもまだしらをきるつもりか？」

「おあいにくさま、私の機体は先日多大な損害をこうむりまして、見るも無惨な状況なのよ。この写真じゃ襲ったのが私の機体かどうかはわからないわ」

男性の怒りがふつふつと湧き上がるのが手に取るようにわかる。その証拠に、彼のこめかみには青筋が浮き上がり始めていた。そこへレイナの駄目押しの一言。

「証拠としては不十分ね。お引き取り願います」

勿論、すべてハツタリである。

しかしここまで来るともはや見事としか言いようがない。

あれほどの重圧を与えられながらも、怯む事なく堂々と偽りを口にできるのは世界中探しても彼女ぐらいであろうか。

しかし、この程度のハツタリでこの男性が素直に退くはずがないこ

とを、レイナは知っていた。

「…この私を愚弄するか」

彼の言葉には明らかな怒りと軽蔑の念が込められている。
後ろでエージェント2人が目配せをする。

「まあいい、口で言ってもわからないようなら…実力行使といこう
ではないか。……一緒に来てもらうぞ、レイナ・アイナス」

エージェントが背広に隠したガンホルダーから銃を抜き、レイナに
歩み寄る。

「ちっ！…かわい女の子に銃を突きつけるのが大人のする事！？」

「何とでも言うがいい」

後ずさるレイナ。

迫るエージェント。

その腕がレイナを掴もうとしたその時だった。

「もうよしたらどうだ？」

声の先には入り口にもたれかかり、腕組みをしているカイの姿があった。

「貴様…何者だ？」

男性が疑惑の視線を向ける。

カイは腕組みを解き、ゆつくりとレイナ達に向かって歩き始めた。

「名乗る必要はない」

レイナの傍らで立ち止まると、彼女の腕を掴むエージェントの手首を握り締めた。

「……離せ」

強引にエージェントの腕を捻りあげる。

痛みあまり、エージェントの手がレイナから離れる。

「ぐああ!？」

「きつ、貴様!」

もう1人のエージェントが銃のグリップを振り上げる。

カイは屈伏させたエージェントの腕を離し、振り下ろされた腕を片腕のみで受け止めた。

カイはその腕を掴み、素早く懷に体を滑り込ませると、一本背負いの要領でエージェントの体を軽々と投げ飛ばす。

一本背負いを喰らったエージェントは、ぽーんと数m離れた地面に落下し、砂埃が舞う。

「くっ! 貴様っ!」

腕の自由を取り戻したエージェントが、カイに銃口を向ける。

だが、カイの手には投げ飛ばしたエージェントから奪った銃が握られていた。

引き金を引いたのはほぼ同時、乾いた銃声が2発その場にこだます

る。

カイはエージェントの放った弾丸を首一ひねりで避け、カイの放った弾丸はエージェントの手にする銃を弾き飛ばしていた。

「まだやるか…？」

それは唐突に放たれた威嚇の言葉。

だがそれは、本物の殺気を含んだ警告の言葉でもあった。

「ひっ！？」

銃口を向けられたエージェントは悟った。

彼には自分のような人間が束になってもかなわないーと。

（駄目だ……格が違う！）

蛇に睨まれた蛙のように、彼はその場から動けなくなった。

投げ飛ばされたエージェントも同様、カイの放つ殺気に圧倒され、起き上がることすら忘れてうずくまったままだ。

だがそんな中、動いた人物が1人。

「フ……フハハハハ！ハーツハツハツハ！！」

そう、それは事の成り行きを傍観していた男性だった。

「フフフ…いや失敬。余りにも愉快なものでな」

カイの殺気にももろともせず、彼はカイに歩み寄る。

「物騒な物は下ろしたまえ。……君は気に入った。もう一度問う、

名は？」

カイはゆつくりと銃を下ろす。
勿論、警戒の念はそのままだ。

「……カイ。カイ・アマノ」

「カイ… か、覚えておこう」

彼はきびすを返し、ヘリに向かって歩き始めた。
2人のエージェントも、いそいそとそれに続く。
すると男性が突然歩みを止めた。
そして振り向かずに、

「今日の所は退こう。…だが必ず尻尾を捕まえてやるぞ、レイナ」
吐き捨てるように言うと、ローターが回転し始めたヘリに乗り込んだ。
だ。

ヘリはゆつくりと機体を宙に浮かせると、高度を上げてあつという
間に地平線の彼方へと消えていった。
ヘリの巻き起こす暴風が消え、カイはようやく砂埃から顔を守って
いた左腕を下ろす。

（RW……何か臭うな）

カン… というものだろうか。

カイはあの男性から何かを感じとっていた。

その何かの正体はわからない。

安全なものなのか、それとも…。

なんにしろ、とりあえずは厄介ごとを回避できたことにホッとした

カイであった。

その時、彼の体を妙な感覚が襲った。

舐められるような、生暖かい視線をカイは感じとった。
背筋がゾクゾクする。

恐る恐る、カイは感じる視線の先を振り返った。

そこには地面に座り込むレイナがいた。

だが、様子が少しおかしい。

頬を朱に染め、ぼーっとした目つきでカイを見つめていた。
気持ち悪い視線を真っ正面に感じながらもレイナに近づき、目の前で手を振ってみた。

――反応なし。

「お…おい、大丈夫か？」

肩をポンポンと叩いてみる。

すると、ようやくいずこかへと旅をしていたレイナの意識があるべき体に戻った。

「え！？あ？は、はいはい！大丈夫、大丈夫ですよ！」

「…本当に大丈夫か？」

怪訝そうにレイナの顔を覗き込む。

「だっ、だだだ大丈夫だって！ さ、さあ帰ってお茶にしましょ！
たしか戸棚に紅茶が…」

ぴょん、とはじかれたように立ち上がると、ぎくしゃくと整備不良のACのごとく怪しい挙動で隠れ家に戻っていく。

「お、おい！そっちは…」

慌ててレイナの後を追うカイ。

その数秒後、扉とは全く別の壁にレイナは頭から突っ込んだ。

――――

ヘリの中では気まずい沈黙が機内を取り巻いていた。

なにしろ、自分達の雇い主である人物の命令を遂行できなかったうえ、たかだか16、7の少年に敗走したのだ。

良くて減給、悪くすればクビである。

向かう時の自信はどこへやら、びくびくしながら雇い主の顔色をうかがうしかなかった。

「おい」

突然雇い主が口を開いた。

一瞬体が宙に浮きそうになる。

「は、はい！」

「あの少年の素性を探れ。いくら役立たずの貴様らでもそれくらいは出来るだろう？」

役立たずー反論の1つでもしたい所だが、それも今はかなわない。

「は…はい、わかりました」

すぐすごと引き下がる彼らを見て、つくづく使えない奴らだと、男

性は思った。

そんな事よりも、彼の興味は別の物へと変わっていた。
そう、あの少年である。

（カイ…アmano。アmano…どこかで…）

窓に頬杖をつき、外を眺める。

その視線の先には、本社がある街が見え始めていた。

第10話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

つれづれなるままに書きなぐったので少々強引な所もチラホラ……。どうか！そこは読者様の愛でっ…え？しつこい？

第11話

「さっきはありがとね」

レイナの口から、先ほどの出来事に対する感謝の言葉が出る。

「気にするな。奴らの行動が気に食わなかったただけだ」

カイはレイナにボールを渡しながら応えた。

2人はラブリー…（以下略）の背部ハッチを開こうとしていた。レイナ曰く、さっきの男達がここに来た理由を教えてくださいという。だが、ジャングル・スネークスとの戦闘で、グレネードをもろにくらって歪んだハッチはなかなか開かない。

「とりゃあ！開けこのおっ！」

ボールを隙間に差し込み、無理やりこじ開けようとする。パッカーン、という気持ちいい音と共にハッチが開いた。パーツが一緒に2、3個飛んだが、この際無視。

「よっしゃ！開いた！」

さっそくハッチ内部に上半身をつっ込むレイナ。

「んっ…よいしょっと！これこれ」

彼女は開いたハッチの中から、布にくるまれた細長い箱状の物体を引っ張り出した。

「アイツ等はこれを取り返しにきたの」

油に汚れた布を開くと、中から金属の箱が現れる。

「これは…AC用のエネルギー増幅装置？」

「そ。RWの輸送部隊が運んでいた物資の1つ」

それはACのエネルギーを一時的に圧縮、増幅して一気にブーストに送り込む事によって、さらに1段階上のオーバーブーストを可能にした装置だった。

「だがこれは……」

カイには見覚えがあった。

これと同じものが200年前、カイの基地にもあった。

「あ、気づいた？さっすが！そう、これはレガシーパーツよ」

誇らしげにレイナはレガシーパーツをカイに渡した。

彼らはこれを取り返しに来たというが、ここで1つの疑問が浮かぶ。

「だが、たしかお前の仕事はデータの収集だろう？なぜこれが…」

先ほどレイナがBDにデータを転送していたのをカイは見ていた。

その中に、レガシーパーツの強奪という仕事はおるか、単語すら出てきていない。

「これは単なるフェイク、RWの目をごまかすためのね。レガシーパーツが強奪されたとなると、アイツ等そっちに夢中になってデー

タの侵入痕跡なんか見落とすからね」

つまり、レイナはRWのデータベースへの侵入を、レガシーパーツ強奪という囮でごまかしたのだ。ジャングル・スネークスと手を組んだのも、事を大きくするためだった。

囮に使われたジャングル・スネークスに同情したくなる。

だが、それが計算外の事態へとつながった。

彼らの怒りをかうという大きな誤算に。

「それに……アイツ等がここに来た理由はそれだけじゃないわ」

「…何？」

急にレイナの表情がこわばる。

「アイツ等がここに来た本当の理由は……私よ」

「……どういうことだ？」

「アイツ等はレガシーパーツ強奪っていう口実で私を連行する気だったの」

カイは何かがつながった気がした。

それが理由なら、多少強引な彼らの行動も説明がつく。

しかし、パズルが完成するには1番大切なピースが1つ足りなかった。

「だが理由がない。パーツを強奪したのが理由なら、他のレイヴンとかいう連中もとくに捕まっけてもいいはずだ。…なぜお前だけ？」

レイナの表情が曇る。

何か気にさわるような事を言ったのかと、一瞬質問を取り消そうかと思った。

だがレイナはカイの予想に反して口を開く。

「……あのオールバックの名前はゴードン・アイナス。……私の父親よ」

パズルのピースが、揃った。

「……なるほど。さしずめ、家出少女を連れ戻しに来たってところか。やり方は強引だな」

カイは手にしたレガシーパーツを近くの工具棚におく。

レイナはうつむいたまま、何も話そうとしない。

だがなんとか言葉を紡ごうと、口を開きかけた。

その時、カイの手がレイナの肩にぽん、と置かれた。

はっとして顔を上げるレイナ。

「無理に話さなくていい。理由はいろいろあるだろうからな」

「あ……」

カイの言葉がレイナの中で反復される。

それが今のレイナにとってどれほどありがたいことか。

不器用ながらも、これがカイの気遣い形だった。

彼はレイナの背中をぽんぽん、と軽く叩くと、アマテラスに向かって歩き始めた。

（なるほど、強いワケだ）

彼のような人間が、本当の意味での強い人間なのだ、と、レイナはカイの後ろ姿を見ながら思った。

カイはアマテラスのタラップに掴まり、コックピットのハッチを開くと、何やらカチャカチャと電気系統をいじりいじり始めた。

「ねえ、何やってんの？」

レイナも機体に近寄り、下からカイに呼びかける。

「機体のチェックだ。そろそろ行こうと思ってな。いろいろ世話になった」

「……………へ？」

レイナがすつとんきような声をあげた。

「え？え！？ええ！？ちよちよと待って！行くってどこに！？」

「あてはない」

その通り、なにしろカイは…（以下略）の人間である。
あてなどあるはずがない。

スタツと、カイはコックピットから飛び降り、今度は脚部の整備用ハッチを開けて中の電気系統をいじる。
どうやら本気らしい。

「あてはないって…」

「これ以上あかの他人であるお前に迷惑はかけられないからな。アリス！機体を起動させる！」

カイの言葉に応え、アリスがアマテラスを起動させる。

静かに、だが力強い駆動音が響き始める。

下ろされたタラップに掴まり、カイはコックピットへと登っていく。

「じゃあな、縁があつたまた会おう」

そう言うとは彼はコックピットへと乗り込んだ。

起動したメインスクリーンの左下には、呆然と立ち尽くすレイナの姿があつた。

出口に向かうアマテラスに、何か言いたそうに2、3歩追いかけるものの、すぐに歩みを止めてうつむく。

カイに一瞬、後ろめたさがはしった。

これだけ世話になって、何もせずに立ち去るのはどうか、と。追い討ちをかけるように、アリスが言葉をかける。

『……いいんですか？』

重い一言。

思わずアリスに視線を向ける。

ディスプレイの向こうで複雑な表情を投げかけるアリス。

カイはこの手の表情に弱かった。

「……いや、いいんだ。その方が彼女のためになる」

――そうだ……これでいいんだ。俺といれば、必ず不幸な目に遭う。俺の目的のせいで……――

カイは自嘲的な笑みを浮かべると、再びメインスクリーンに向き直る。

ディスプレイの向こうで、アリスが悲しげな表情をしたのに、彼は気づくことはなかった。

シャッターの左側についてAC用の開閉レバーを下げる。

シャッターは轟音と共にその巨体を持ち上げ、外の空気を中へと引き込む。

勿論、インフィニティ・システムを起動していないカイには感じることはできないのだが。

外は真つ赤な夕日で真紅に彩られていた。

ほう、と声が漏れる。

美術や芸術にもっぱら興味のないカイでも、この景色は心底美しいと思った。

カイは機体を外に運ぶと、その美しい夕日に向かって機体を跳躍させるために、スロットルを上げ始めたその時だった。

「あ……！」

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

機体が揺さぶられるほどの大声。

さらに続いてもう一声。

「コラー……！ちよつと待って……！」

ビリビリと響く声に、カイは何事かと辺りを見回す。

すると、レイナが機体の真つ正面に仁王立ちで立ちふさがっていた。どうやら夕日に見とれて気づかなかつたらしい。

その手にはどこから持ち出したのか、拡声器が握られていた。

その拡声器を口の前へと運ぶと、レイナは次の一声のために肺に空気を充填する。

「私のACそのままにして逃げるつもりかーーーー！！」

キーンと、拡声しきれなかった空気の振動と共に、レイナの思いがけない言葉が飛び出す。

（何言ってるんだ、アイツは？）

これ以上その音波兵器を使われたら機体が壊れるかもしれないと思ったカイは、とりあえずコックピットから出る事にした。タラップに掴まり、地面に降りたカイにレイナが駆け寄る。

「君い！私の機体…」

「うわっ！ちょっと待って！その拡声器下ろせ！」

あ、そうかと、レイナは拡声器を口から離す。

「君は私の機体をあんな姿にしておいてどこに逃げるつもりかしら？責任とつてよね」

「はあ！？それはあの状況じゃ…」

「仕方ない…なんて言わせないよ？私は君がどうしてもって言うから譲っただけ。私だけなら逃げれたもん」

「なっ……」

ふふん、と鼻をならし、腰に手をあてて威張るレイナ。

カイは開いた口がふさがらなかった。

彼女のハツタリもここまでくると独特の強みが現れ始めている。

「さつき助けてやったじゃないか！」

「気にするなって言ったのはどこの誰でしたっけ？それに……」

まだ何かあるのかと身構える。

「それ、私の服よねえ？どうしても行くってゆーならまずその服返して。結構気に入ってるんだから」

鈍器で頭を殴られたような気がした。

何も言い返せず、まるで全身の力を吸い取られたようだ。

「……何が望みだ」

勝ったとばかりにレイナはニヤリと笑う。

もはやカイには反論する気力も残っていない。

「まず壊してくれたＡＣの全額弁償、それと服代ね。住みこみで私の仕事手伝ってもらおうかしら」

パクパクと酸欠の金魚のごとく口を開け閉めするカイ。

助けを求めるかのようにアマテラスを仰ぎ見る。

勿論、それは事の成り行きを見守っていたであろうアリスに対してだ。

だが、その頼みの綱のアリスが放った言葉がトドメとなる。

『いいじゃないですか、カイさん。おとなしく従いましょう』

スピーカーからのアリスの言葉に瞬殺。

ガンと擬音が聞こえてきそうなほどうなだれるカイ。

「……………わかった」

小さく、耳をすまさなければ聞き取れないような声で、カイはその要求を承諾した。

「よし決まり！じゃあ君は今日から私の相棒ね　そうと決まったらさっそく同居人の歓迎会しなきゃ！」

「…相棒ならもう少しまともな扱いでも良くないか？」

「つべこべ言わない！それとも下僕の方がいいかしら？」

ぶんぶんぶん、と頭を振る。

「よし　んじゃあ早く戻ろ！ご馳走作るの手伝って！アリスちゃんも行くよ！」

「お、おい！」

レイナはカイの手を引っ張り、隠れ家へと先導して行つた。

こうして、カイとレイナの奇妙な契約関係、共同生活が始まりを告げたのであつた。

第12話 陰謀（前書き）

この度は読者の皆様に謝りたいことがあります。

第2話においてRW本社のある都市を、『デザート・タウン』と表記しましたが、都合により『デザート・シティ』と改めてさせていただきます。

本当に申し訳ございませんでしたm（　　）m

第12話 陰謀

薄暗いコンクリート剥き出しの部屋に、打撃音がこだまする。

「ぐはあっ!!」

「ボ、ボスう!!」

縛られた椅子ごとコンクリートの地面にのめり込むようにして倒れる屈強な男。

彼の後ろには、同じようにして椅子に縛られた彼の手下が2人。拳によって屈伏させられた自分達の頭を心配する言葉を発する。

「っ…知らねえつつってんだろっが!!」

「とぼけるな!!」

暗闇から姿を現した黒尽くめの男2人が問い詰める。

「確かにあの小娘と一緒にお前等の輸送部隊を襲ったのは認める!だが『疾風のロイ』とソイツの護衛してたのを襲ったのは俺達じゃねえ!!」

「いつまでも減らず口を…」

「もういい」

黒尽くめの男達の後ろから、呆れたように姿を現すスーツ姿の男。特徴的なオールバックに顔の大きな傷。

そう、彼はゴードン・アイナスだった。

まるで醜い虫でも見るかのように、地面に這いつくばる男――ランガ・ドーザを見下した。

「しゃ、社長。しかし……」

「こいつ等は何も知らん。もっとも、知っていたとしても『あれ』の価値などわかるはずがない」

『あれ』？ 一体こいつ等は何を言ってるんだ？

目の前の男を見上げ、ランガは思考を巡らせた。だが答えなど出るはずもなかった。

ランガは手下の2人と、大破した自分達のACのパーツを揃えに、この『デザート・シティ』に来ていた。（勿論、カイに破壊されたためである）

RWの本社があることは知っていたが、自分達の顔がわれているな
ど思いもしなかった。

あらかたのパーツの注文を終え、パーツ屋を後にしたその時だった。
黒のワゴン車がけたたましいスキル音を立ててランガ達の前に止
まったかと思うと、中から現れた多数の完全武装の男達に無理やり
ワゴン車に押し込められた。

手下2人はすぐに縛られ、自由を奪われた。

しかし、力自慢（それしか長所はない）のランガはワゴン車の中で
暴れまくった。

押さえつけようとする男達を投げ飛ばし、殴り、窓に押し付け力の
限り抵抗を続けた。

だが後頭部に受けた衝撃で、ランガの意識は急速に揺らいだ。

どうやら銃のグリップで殴られたらしい。

それでもまだ腕を振り回そうとするランガに、今度はライフル銃のストックが襲いかかった。

2発、3発と振り下ろされるストックに、さすがのランガも4発目には意識を失っていた。

次に目を覚ました時には、この薄暗い牢屋のような場所にいた。

体はロープで拘束され、後ろには手下2人が同じように拘束されていた。

そして現れた黒尽くめの男達に身に覚えのないことで殴る蹴るの暴行を加えられ続けて約2日。

24時間薄暗いこの部屋では時間の感覚が麻痺し、今が夜か昼かもわからなかったが、恐らくそれぐらい経っただろう。

飲まず食わずの腹の虫が、どれほどの時間が経ったのか教えてくれた。

「おい」

その声に、飛びかけていたランガの意識が体に戻る。

今度はなんだとばかりに目の前に立つゴードンを睨む。

「貴様等が何も知らないことは認めてやろう」

「！！っ、本当か！？」

「ー助かったー」

ランガに希望の光が差す。

だがその思いはゴードンの言葉によって脆くも打ち碎かれる事になった。

「だが、我々の目的に多少なりとも触れたからにはここから出すわけにいかない」

「なっ!?!」

「心配するな、殺しはしない」

そう言うとゴードンはきびすを返し、部屋を後にする。

「っ貴様ああ!!」

「もういやだあ!!殺してくれえ!!」

「た、助けて……」

背中に聞こえる怒り、恐怖、助けをこう声を聞きながらも、ゴードンと黒尽くめの男達は重い鉄の扉を閉めた。
黒尽くめの男の1人がすぐに施錠をする。

「今日から食い物を与えてやれ。死ぬか死なない程度の量でいい」

「わかりました」

ゴードンは同じく薄暗い通路を歩き始めた。
黒尽くめの男達も後に続く。

天井には無数のパイプが所狭しと走っていた。
所々水滴が滴る。

その水滴が落ちて床に当たるたび、ポチャン、という音が通路に響き渡る。

他に音といえば、3人の足音ぐらいだ。

「社長、あの少年の件ですが……」

ゴードンの左側に従う男が口を開いた。

「何かわかったのか？」

「いえ、それが……何も分からないのです」

「……どういうことだ？」

ゴードンは歩みを止めず、真っ直ぐ前を見たまま報告をした男に問う。

「はい、あの少年はこの都市にも戸籍がありませんでした。小規模な町や村、または企業の間人か、レイヴンかとも思いましたが、どの情報筋にもそのような少年は知らないと……」

「全くの謎という訳か……」

通路の突き当たりを右に曲がると、そこにはエレベーターがあつた。黒尽くめの男がエレベーターのボタンを押すと、まるで主人の帰りを待っていたかのようにすぐに扉が開く。

3人はエレベーターに乗り込み、『F30』のボタンを押す。

静かに扉が閉まり、軽い浮遊感を残しながら上昇を始めた。

「引き続きあの少年を調べろ。尾行や張り込みだろとかまわん」

「は、わかりました」

ゴードンは嫌な胸騒ぎを感じていた。

あの少年の目、底知れぬ闇のような漆黒の瞳。

まるで全てを見透かし、全てを呑み込んでしまっただようだった。
――何かを知っている――そう思えてならなかった。
カンというものだろうか。

非科学的なものは信じない彼にとって、その考えは今まで信じてきたものを否定してしまうような気がした。

そしてその名前だ。

カイ・アマノ、ゴードンはどこかでその名前を耳にしていた。

だからこそ、彼の正体を突き止めなければゴードンの気は済まない。

（あの少年……奴と一緒にとなるとやっかいだぞ）

ゴードンの脳裏に、過去の映像がフラッシュバックする。

幼く、無邪気で、何よりも愛しかった存在。

そして現在、一番警戒すべき、やっかいな存在。

たった1人の、血が繋がった唯一の存在。

（レイナ……お前はどこまで私に逆らうつもりなのだ……？）

チン、という音と共にエレベーターが停止し、扉が開く。

ゴードンはたった今フラッシュバックした映像を記憶の奥底に追いやり、彼の執務室へと繋がる廊下へと足を踏み出した。

第12話 陰謀（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？
今回はほとんど番外編でしたね f ^
| ^
;

第13話 トライヴァー・シティ（前書き）

むう…戦闘シーンが少ない（・o・）
しかももつしばらく続きそうだし…。

読者の皆様！どうかもつしばらくこののろけにつきあってください
！m（ー）m

第13話 トライヴァー・シティ

レイナとカイは、アフリカ大陸の北に位置する『トライヴァー・シティ』に来ていた。

旅人が集まり、いつしかできた都市、という意味を持つらしい。カイ達は都市の検問の真っ最中だ。

都市の周囲はフェンスで仕切られていて、その所々に検問がしかれている。

その検問をクリアしない限り、都市へはいれない。

カイ達の他にも検問を受ける人々は結構いたが、中には追い返される人物も…。

その中でも、ACに乗っていた2人はひときわ目立っていた。

「何か身分を表す物は？」

ライフル銃で武装した無愛想な警備員（かなり肥えてる）が、機体から降りてきたレイナとカイにずっと手を差し出す。

「はいはい身分証ね……これでいい？」

レイナはベストの胸ポケットからカードを取り出す。

警備員はそれを受け取ると、チラリと見ただけでレイナに押し返す。本当にみたのかよ！などつつこみたくなるがここは抑える。

「……アレは？」

警備員はレイナの後ろ、カイを顎で差した。

顎で差されたことは気に食わないが、とりあえずレイナの隣へ。

「えーっと彼ね。彼は……私の弟！どうしても私の仕事について来たいって言うから困っちゃってえ」

「……ちよつと待ってろ」

そう言うのと警備員はゲートの横にある待機所へとふんぞり返って歩いていった。

のっしのっしと擬音を引き連れて。

「……弟はないだろ？」

「しょーがないでしょ！キミ身分証ないんだから！」

小声で言い争うカイ達の下へ、さっきの警備員がなにやらファイルを持ってやってきた。

これまたのっしのっしと。

慌てて平静を装う2人。

「……これにサインを」

グイツと押しつけられたとファイルを開くと、中には何の変哲もないただの紙。

何か難しい書類を覚悟していたカイだが、思わず拍子抜けして警備員に問う。

「ただの紙だが…名前を書くだけでいいのか？」

「つべこべ言わずにさっさと書け。あとがつかえる」

シーシーと口にくわえた爪楊枝？を動かしながら適当な返事をする警備員。

顔面にパンチをおみまいして、その爪楊枝をへし折ってやりたい衝動に駆られるが、そこは我慢。

その白紙に名前を書き終えたカイは、警備員にファイルを渡す。

「んじゃ…これ。通行証明書。都市内ではACの使用は禁止。もよりのパーキングに預かってくださいよ」と。……ほらさつさで行け」

グイツと証明書をカイに渡すと、ゲートの外で順番を待つトラックにさつさと歩いて行ってしまった。

カイはレイナが乗り込むのを確認すると、都市へと機体を走らせた。

「なんだあの警備員は？態度は悪い、職務は適当…よくあんなので仕事が終わるな」

「まあまあ、どこだって同じようなもんよ」

「俺なら職務怠慢で即クビにするとこなんだが…」

「おおコワ さすがは軍人、仕事にはキビシイ」

レイナはわざとらしく怖がって見せた。

そうしている間にも、都市の入り口はどんどん近づいてきた。

「あ！あつた！あれあれ！」

レイナの指差す先には、小規模のパーキングガレージがずらりと立

ち並んでいた。

かなり流行っているものから今にも潰れそうなものまで様々だった。レイナが指定したのは、連なったパーキングガレージ街の一番端、今にも潰れそうな部類に入るパーキングガレージだった。

カイはそのパーキングガレージの前で機体を止めた。

外壁はそこら中赤錆だらけで、看板には『安心パーキング・スミスの店』と書いてある。

カイはシャッターを開くためのAC用開閉レバーにマニピレーター（つまり手）をかけた。

その振動で、シャッターの上の看板の文字が1文字カクン、と傾いた。

安心できない。

「やっぱりあっちの新しい方が……」

「つべこべ言わない！ほらさっさと入った入った！」

カイは渋々スティックを操作し、レバーを下に引く。

シャッターは耳をつんざく悲鳴を上げて上へと持ち上がる。

中に入ると、そこは外見同様にかなりさびれていた。

カイ達以外に客は1人、砂漠用迷彩色のカラーリングの重二脚型が1機のみ。

曇った窓ガラスに錆びた機械類、極めつけは隅で揺れ椅子に座って寝ている老人が1人ときたものだ。

カイはさつき感じた『不安』の頭に『かなり』を付け足した。

少しでもぶついたら崩れるのではないかという錯覚にとらわれながら、カイは一番近い拘束器に機体を鎮座させる。

レイナは機体から降りると、拘束器のカードロックに先程のカード

を通す。

拘束器のアームはギシギシと軋みながらも、アマテラスをがっちり固定した。

「これでよしと さ、行くよ！」

レイナは店の隅ですやすやと夢の世界に旅立っている老人へと向かった。

ていうか、さっきのシャッターや拘束器の音で起きなかったのかよ！などつつこみたくなったカイだが、ここも我慢。

「スミスさん！スミスさん！」

「……………ぐう」

「もーっ！……スミスさんったらー！」

レイナの大声に老人は飛び起きた。
危うく椅子ごと後ろに倒れそうになった。

「はひっ！お…おお、レイナちゃんか、久しぶりじゃのお」

どうやら老人とレイナは知り合いらしい。

老人…もといスミスは親しみのこもった声で応えた。

「もー、しっかりしてよスミスさん！そんなんだからここ流行らないんだよ？」

「ははは、この暇加減がいいんじゃないよ。ホレ、名簿にサインを」

眠そうな目をこすりながら、傍らのテーブルから紙とペンをレイナに渡した。

レイナは慣れた手つきでサインを書き終わるとスミスに返した。テーブルに置いてあった老眼鏡をかけてそれを確認する。

「はい、確かに。…おや？そちらの殿方は……」

スミスはレイナの後ろのカイに視線を移す。

ずっといたのに気づかない。

さすがはあの轟音にも気づかず寝ていた老人、余程図太い神経（悪く言えばトロい）の持ち主なのだろう。

「ああ、彼？彼は私の相棒、カイ君っていうの」

「どつりで…音が違うと思ったよ」

「音？」

レイナが聞き返す。

「30年もこの仕事をやってれば常連さんのACの音くらい聞き分けられるんじゃないよ」

ははっと軽く笑い、カイに右手を差し伸べ、握手を求める。

起きてたのか？という疑問がカイの中で鎌首をもたげるも無視してカイも手を差し出し、握手を交わす。

「カイ・アマノです」

「スミス・ガーレイじゃ、よろしくのカイさん」

その時カイは、彼の左手の人差し指第一関節と第二関節の間に妙な違和感を感じた。

「んじゃあ機体よろしくね！行くよカイ君！」

「あ、ああ。それでは失礼します」

「はいはい、気をつけてな」

カイはスミスに軽く挨拶をするとその場を後にした。

建物の外に出ると、そこはまさに大都市と呼べるにふさわしかった。建ち並ぶ店の数々、高層ビル群、行き交う人々、道路を走る車両。200年前の大都市と何ら変わらないそれを見て、思わずホツとしてしまう。

レイナは近くのカーレンタルショップから真紅のオープンカーを借り、街の中心部へと向かった。運転はカイ。

レイナ曰わく、『女の子に車運転させる奴は男じゃない』らしい。ワケの分からぬ理屈に苦しみながらもハンドルを握るカイであった。

しばらく移動した所で、レイナに言われて車を道路脇に停止させる。そこには一軒の喫茶店があった。

なかなか洒落た外装で、結構流行っているようだ。

「喫茶店？腹でもへってるのか？」

「違っっ！いいからついてくる！！」

レイナは乱暴に車のドアを閉め、喫茶店へと歩いて行ってしまった。慌て後を追うカイ。

実際の所、カイはこの都市に来た理由をまだ知らされていない。

『いいからいいから 私を信じなさい!』と、ずっと適当に流されてきた。

一刻も早くアマテラスを整備したい、というのがカイの本心である。200年間無修理無整備なのだ、どんなトラブルがあってもおかしくない。この都市に来る途中も、何度か挙動が怪しくなった。

だが、契約関係にある上、主導権は完全にレイナが握っている。

下手な口ごたえすればカイの弱みにつけ込んで何をされるかわかったものじゃない。

喫茶店の扉を開けると、カランカランという澄んだベルの音と共に、

「いらつしやいませー」

という声が出迎えてくれた。

店内は外装同様かなり洒落ている。

オープンな厨房、茶色を基調とした椅子やテーブル、壁にかけられた様々な装飾品が、ヨーロッパな雰囲気、創作喫茶店といったところか。

レイナとカイは店のカウンターテーブルに腰掛けた。

「御注文は何にしますかー?」

ウェイトレスが注文を取りにやってきた。

黒髪をポニーテールに結び、くりくりとした大きな目がチャームポイントのとても可愛らしい少女だ。

歳はカイ達と大して変わらないように見えた。

ハウストレスを見事に着こなしている。

カイは一瞬、アリスといい勝負だと思った。

「んじゃあ〜とりあえずアイスコーヒー。カイ君は？」

「同じでいい」

「じゃあ2つお願い」

かしこまりましたー、と厨房へ向かおうとする彼女をレイナが引き止める。

「あ！それと！」

「はい？」

くるつと振り向くと、ポニーテールがふわりと弧を描く。
仕草までも鮮麗されている。

「オーナーいる？レイナ・アイナスって言えばわかると思うんだけど」

わかりました、と微笑むと、彼女は厨房の奥の『staff room』と書かれたドアへと入って行った。

5分もしないうちに『staff room』のドアが開き、中から先程のウェイトレスと共に1人の男性が出てきた。

「やつほー こっちこっち」

「おお！レイナ！久しぶりだなあ！」

ニカツと笑ってその男性はカウンター越しにレイナ達に近づいてきた。

顔にはたつぷりと髭を蓄え、かなり肥えている。笑う度に髭がもじやもじやと動いた。

「最近見ないから大怪我でもしたのかと思ったぞ」

「ちょっと大きな仕事が入ってねえ」

レイナはにひひ、と笑った。

「それはそうと、今日はどうした？」

「ん、実はねえ…^み看てもらいたいACがあるんだ」

「なんだ、またやったのかあ？」

男性はやれやれという風に溜め息をついた。

「ち、違うよ！違うくないけど…。今見て欲しいのは彼のAC！」

レイナはカイを示した。男性もカイへと視線を移す。

「おや？見ない顔だなあ。…ひょっとしてレイナのコレか？」

男性はニヤリと笑い小指を立てる。

いくら鈍いカイでもその小指が何を表すか位は知っていた。

「ち、ちが…」

「ち、ちちち違っわよ！？彼はただの仕事仲間！！」

カイの全力否定を更に上回って否定したのはレイナだった。

とはいえ、その慌てぶりは逆に怪しまれる。

男性は信じていない様子だが、わかったわかった、と手をヒラヒラさせる。

「んで？君、名前は？」

「カイ・アマノだ」

「カイか、いい名だ。俺はグレン・ダリアロスだ。グレンと呼んでくれ。で、カイのACを看るとのことだが…どうしたんだ？全壊か？」

カウンターから乗り出し、神妙な面もちでグレンは問う。
顔が妙に近いことはこの際無視した。

「い、いや、全壊という訳ではないんだが…」

「なあんだ、オーバーホールじゃないのか」

グレンはがつくりと肩を落とす。

他人のACが全壊して喜ぶなど、一体どういう神経の持ち主か疑い
たくなった。

「んふふ」 でもねグレン、彼のACは特別なのよ！」

その言葉を聞いた瞬間、いじけかけていたグレンの顔に期待が満ち溢れる。

「なんだ！？特別って!？」

「実はねえ……」

レイナはカウンターから身を乗り出したグレンに何か耳打ちした。

「……ぬあんだってえええ!!!？全身レガシーパーツ製だとおおおー!!!」

「しーーーーっ!!!声が大きいよ!!!」

グレンの声は建物をビリビリと振動させた。

先程のウェイトレスは飛び上がるほど驚き、持ってきたアイスコーヒーをカイにかけてしまった。カイの頭から滴るコーヒー。

『コーヒーも滴るいい男』……レイナ作。

「ぐぐぐぐめんなさい!？今すぐ拭きますので!！」

ウェイトレスは慌てて厨房へと駆け込んで行った。

「そりゃホントか？だとしたら半端じゃない代物だ…」

「でしょ？だから持ってきたのよ」

小声で話す2人、カイは全く無視だ。
するとさっきのウェイトレスが大量のタオルを抱えて飛び出して来た。

スライディングするようにカイの前で止まると、すみません、ごめんなさいを連発しながらカイを拭き始めた。

手渡されたタオルで頭を拭くカイ。

ウェイトレスは濡れたカイの服を必死に拭いた。

「すみません！」

「いや、いいんだ。気にするな」

「で、でも…ああっ！？こんな所まで！」

「お、おい…ムグッ！？」

ウェイトレスはカイの膝を跨ぎ、背中を拭き始めた。

慌てすぎて自分がいま何をしているのかわかってない様子。

グリグリとカイの顔に押し付けられるその華奢を体にそぐわぬ豊満な球体。

カイは呼吸困難に陥り、意識が遠のいていく…。

カイの異変に気づき、ウェイトレスは自分とカイの状況を始めて理解した。

「……………？……………っあ！？すすすみません！？私ったらはしたない…
！！」

慌ててカイから体を離す。

新鮮な空気がようやくカイの肺に補充された。

「…ゴホッ、い…いや、大丈夫だ…」

「でも…でも…ああっ！？こんなところまでぐっしり…！」

「うわっ！？ちょ、ちよつと待…」

わざとなのか、それとも純粹に天然なのか（おそらく後者）、彼女はカイの股の間にしゃがみ込み、禁じられたゾーンを拭き始めた。はたから見れば、それは白昼堂々喫茶店で愛し合っているウェイトレスと男にしか見えなかった。

グレンがゴホン、とわざとらしい咳払いをした。

ハッと、ウェイトレスは再び自分とカイの状況に気づく。みるみるうちにウェイトレスの顔が朱に染まっていった。

「はわわぁ！？す、すみません！？私…ごめんなさい！！」

慌ててカイの股の間から飛び退く。

その拍子に散乱していたタオルをふんずけて…コけた。

「きゃん！？」

「お、おい！大丈夫か！？」

カイは慌てて床に尻餅をついた彼女を助けようと近づき、ギョツとした。

「…っ！？」

「うえ……ぐすっ……」

彼女の瞳から大粒の涙が落ちる。
思考が停止し、硬直するカイ。

「ふええ……またやつちやつたよお……ぐすつ……」

「お、おい……何も泣かなくなつて……俺なら大丈夫だから」

ようやく硬直した体と思考が再起動し、泣きじゃくる彼女をなんとか泣き止ませようと声をかけた。

しかしその言葉はカイの意に反し、火に油を注ぐこととなる。

彼女は顔を上げると、涙で潤んだ瞳でカイを睨む。

睨まれた訳がわからず、カイが困惑していると、彼女は再び泣き始めた。しかも今度は大声で。

「ふえええん！お客様の嘘つきー！ホントは怒ってるんだあ！このトロ女使えねーとか思ってるんでしょお！？いいんですよどーせ！どーせ私はトロ女ですよお！うえゝゝん！」

トロ女ってなんだ！？というか敬語と普通の言葉が混ざってるぞ！？つつこみどころは他にも多々あるが、なりふり構わず泣きじゃくる彼女をなだめる方が先だ。

先程から背中に刺さる視線が痛い。

もはや一刻の猶予も残されてはいなかった。

「……おい」

「……？ひつく」

カイの声に、彼女は顔を上げる。

そこには優しい微笑みを浮かべるカイがいた。

「俺なら大丈夫だ。怒ってなんかいないし、君のことをトロいだなんて思っていない。」

「…………ホントに？」

「ああ、本当だ」

カイは優しく彼女の頭を撫でる。

「君はがんばり屋なだけだ。それがちょっと空回りしただけ、気にすることはない」

「…………でも…こんなことしちゃったら…………もうクビに…………」

「グレン」

呆然と事の成り行きを見守っていたグレンが、カイのキラーパスに慌てて応えた。

「えっ？…………お、おお、なんだ？」

「今回の事はなかったことにしてくれ。俺もなんともない。…………このとおりだ」

「ああ、カイがいったんなら咎めはしねえ。それに、今は人手がたりんからなあ。辞めたいつつても辞めさせんつもりだ」

カイはありがとう、とグレンに言うと言った彼女に向き直る。

「な？大丈夫だろう？だからもう泣かないでくれ。さ、立って」

「……………」

カイは彼女に手を差し伸べる。

彼女は無言でその手に掴まり、立ち上がった。

カイは彼女より少し背が高く、ちょうど上目づかいの形になった。手を取り合い、見つめ合う2人。

絵になる。

題名は『愛』だろうか。

「あ…あの！」

彼女が何かを言いかける。

ん？と、カイは笑顔で対応する。

これぞ、カイの必殺技『レディ・ハンティング・スマイル』。

意識してやっているわけではないのだが……いや、そちらの方がタチ悪い。

彼女は一瞬迷ったような素振りを見せ、そして……

「し、失礼しますっ！！」

タタタタ…バタン！

逃げた。

呆然と立ち尽くすカイ。先程より刺さる視線が心なしかさっきより痛い。それどころか囁く声さえ聞こえる。

「なんだあいつ、俺達のアイドルを……」

「よくも僕の……僕の……」

「あの野郎、昼間っから堂々ナニを……」

……なるほど……看板娘というわけか……この店が流行るわけだ……。

誤解を解くどころか、状況は最悪の方向へと向かいつつあった。

――――

お母さんへ

今日、運命の人と出会いました。

その人は、まるで白馬に乗った王子様のようでした。

どうやら、私と同じ仕事をしているようです。

もうこんな出会いはないかもしれません。

絶対、このチャンスは無駄にしません！

ファイト！私！

それでは、お身体に気をつけて。

P S

コーヒーが滴る姿も最高でした！

第14話

「……つまりグレンは喫茶店『バレル・バチカ』のオーナー兼、ガレージ『バレル・バレン』の社長という訳か」

「そーゆーことだ」

グレンはカイとレイナの前にコーヒーを差し出した。

今は場所を変え、喫茶店『バレル・バチカ』の2階、グレンの自宅兼事務所の応接室にいた。

あのままではいつ暴動が起きても不思議じゃない状況だったので、とりあえず避難することにしたのだった。

カイも内心ホツとしている。

何しろ、四方八方から鋭く殺気立った視線が突き刺さって来ていたのでは、安心して話どころかコーヒーすら飲めそうもない。

グレンはローテーブルを挟んだ1人掛け用のソファーに座り、自分のために持って来たコーヒーを一口すすると、急に改まって話を始めた。

「……で、さっきの話は本当なのか？その…全身レガシーパーツってのは」

「ええ、本当よ。それだけじゃないわ。私達の知らない過去のテクノロジーがいっぱい詰まってるんだから」

レイナはコーヒーを口に運ぶと、更に話を続ける。

「依頼内容はその機体の点検、整備、修理、欠損パーツの補充……ってどこかしら。どう？できそう？」

グレンは頭を掻きながらうーん、とうなった。

「……無理なの？」

いつもなら笑顔でOKしてくれるグレンが、これほど悩んでいる。いい返事を期待していたレイナだが、今回ばかりは話が違っらしい。

「……なにしろ全身レガシーパーツだからなあ、下手にいじったらスペックダウンにつながるかもしれん。……いっそその機体売っぱらって新しくしたらどうだ？全身レガシーパーツとなりやあ、一生遊んで暮らせる金額で売れると思うが……」

「それは駄目だ」

グレンの提案を真っ向から拒否したのはカイだった。

「あの機体でなければ駄目なんだ。あいつは俺の体の一部みたいな物だからな。できないと言うなら仕方ない、自分でなんとかするさ。……時間はかかるがな」

真剣な眼差しで語るカイ。

その瞳には頑なな意志が宿っている。

カイの言葉を黙って聞いていたグレンだったが、カイが話終わると同時に彼の表情に変化が現れた。

「……その言葉を聞いて安心したぜ。……すまんかったな、お前さんを試させてもらった」

グレンはニヤリと笑った。

カイの横で、人知れずホツと胸をなで下ろすレイナの姿があった。

「この程度で引き下がるようじゃあわざわざ大金かけてなおすほどの物じゃねえってことだ。……だが、お前さんは機体を心底大切にしている。それならこつちもやりがいが出るってもんだ。……この仕事、責任持ってやり遂げさせてもらっぜ」

グレンは満面の笑みで親指を前に突き出す。

カイは思った。

彼なら安心してアマテラスを預けられるーと。

「よかったあー！もう、グレンったら人が悪いんだから！」

「すまない……恩に着る」

「いって事よ！俺もそのお宝をおがんでみてえしな。……ところで、支払いはレイナ持ちでいいのか？」

「そ！私持ちでいいの！……その分はきちんとカイ君に働いてもらうから」

レイナは小悪魔的な笑みを浮かべてカイを見た。カイの背筋に冷たいものが走ったのは言うまでもない。

「それで、何日くらいかかりそう？なるべく早い方がいいんだけど……」

グレンは蓄えられた顎髭をいじりながら少し考える。

「……点検をハイピッチで1日、パーツを頼んで届くまで3日、そいつを装備、微調整して2日……今日も含めて1週間ってとこだな」

レイナは立ち上がり、驚愕の表情を浮かべる。

「ええーっ！？そんなにかかるのぉ！？私のは3日でなおるのにい！？」

勢いよく立ち上がったせいでテーブルが揺れ、コーヒーのグラスがバランスを崩す。

カイは慌ててグラスを支える。

「一髪、コーヒーはこぼれることなくカイの手の中に収まった。」

レイナの言葉に、グレンも負けじと反論する。

「しょうがねーだろ！？俺だって初めての経験なんだ、時間がかかって当然だろうが！？それに、俺んとこ以外だったら3週間はかかるぞ？」

グレンの説得力のある攻撃に反論する言葉を失ったレイナは肩を落としてソファアに座る。

なぜ急ぐ必要があるのか、その理由はカイにはわかっている。

早く自分を働かせて稼ぎたいのだろう、と。

グレンはレイナの無言を洩々ながらの承諾と受け取った。

「まあそう気を落とすなって。カイも承諾してるしな。こっちななるべく急いでみる。……それと」

グレンはデスクの引き出しから何かを取り出し、カイに投げ渡す。

「これは……？」

それは鍵だった。

その意味がわからずカイが困惑していると、グレンがニヤニヤしながら歩み寄って来た。

「1週間もそこらのホテルに泊まるのは大変だろう？この上に従業員用の寮があつてな、そいつは今使われてない部屋の鍵だ。3食メシ付き、風呂は共同だがかなり広い……どうだ？嫌ならいいんだが」

さつきまで無言で肩を落としていたレイナが、突然笑顔になりグレンの丰满な腹部に抱きつく。

「嫌なわけないじゃん！ん！！ありがたく使わせていただきますっグレンだーい好き！」

「まったく、虫のいいやつだ」

そう言いながらもなぜか嬉しそうだ。

「……その代わり！仕事を手伝ってもらっぞ」

「えっ」

抱きついたままレイナが硬直する。
恐る恐るグレンを見上げるレイナ。
そこには不敵な笑顔のグレンがいた。

「人件費が家賃代わり…安いもんだろ？さっそく明日から働いてもらうぜ？」

へなへなとその場に座り込むレイナ。

ブツブツと独り言が聞こえる。

「……働くって………とか………まさか………」

そんなレイナを後目に、グレンはカイに歩み寄る。

「心配すんな、こき使ったりしねーよ。……お前さんはわかってくれるよなあ？言ったる？人手が足りん…てな」

カイの記憶がフラッシュバックする。

確かに言っていた、自分があのウェイトレスにコーヒーをかけられた時だ。

再びカイの背中を冷たいものが走った。

「明日は早えからな、早く寝といた方がいいぞ」

そう言うグレンはんじゃ、と手を背中越しにひらひらさせながら部屋を出て行ってしまった。

部屋に残された2人、レイナは相変わらずブツブツと独り言にいそしんでいる。

とりあえずこの状況を打開したいカイは、レイナの肩を恐る恐るポンポン、と軽く叩いた。

………反応無し。

「お…おい…？」

カイはもう一度肩に手を伸ばす……その時！

「うおっしゃあああ！！」

雄叫びと共にレイナが立ち上がった。

触れかけていた手を慌てて引っ込める。

「やあってやろっじゃないの！？修理の手伝いだろっがウェイトレスだろっがどーんと来なさい！このレイナ様を舐めんじやないわよ！」

闘志の炎がメラメラと燃え盛っているように見えるのは気のせいだろうか。

勝手に脳内完結している。

「な、何を……」

「決まってるでしょ！？手伝いよ、て・っ・だ・い！！それ位で生活費が浮くんだったら安いもんよ！」

「……もしかして、その事を気にしてたのか？」

「そうよ！悪い！？」

完全に目がすわっている。

こうなると、もはや某有名アニメ映画の巨大芋虫のごとく止めることはできない。

その姿を見て、なぜか笑いがこみ上げてきた。

「……ぷっ……くくっ……」

「何が可笑しいのよ！？人が真剣に決意したってゆうのに！」

「……いや…すまん、なんでもない」

そう言いながらもクスクスと笑い続けるカイ。

「……まあいいわ、とりあえず部屋に行こ？グレンの事だからさっそく明日から手伝いさせられるし」

何か納得のいかないレイナだったが、今は明日から始まる生活備える方が先決だった。

レイナは扉へと向かった。

（やれやれ…前途多難だな）

レイナの後ろ姿を見ながらカイは思った。

200年前ならもつと簡単に済んでいただろう。

だがカイには不思議と今のこの状況が心地よかった。

時代が時代だけに、200年前はこんなに心がやすまる事などなかった。

今は1つ1つの出来事すべてがカイをわくわくさせた。

——こんな感情がわいたのは久しぶりだ——

カイはそう思った。

扉を開きかけたレイナが立ったまま動かないカイを呼ぶ。

カイは鍵を指でくるくると回しながらレイナの後について部屋を後にした。

スミスはすっかり辺りが暗くなっていることに驚いた。
どうやら寝過ごしたらしい。

「やれやれ……よる年波には勝てんのう」

よつこらせ、と椅子から立ち上がり、壁に立てかけられている杖を手にとる。

街側の出入り口から外に出ると、遠くに見える街の中心部には色とりどりのネオンがきらめき、トライヴアー・シティの夜を明るく照らし出していた。

スミスは扉にかけてある『OPEN』のプレートを裏返す。

「さてと、今日の夕食は何にしようかの」

スミスは冷蔵庫の中身を思い出しながら扉に手をかけた。

「よお、じいさん」

その声が自分に向けられているものだと気づき、後ろを振り返るとそこには不敵な笑みを浮かべた男達が4人、いつの間にかスミスの周りを取り囲んでいた。

その中1人が、口の中でくちやくちやくとガムを噛みながらスミスに歩み寄って来た。

「ここに珍しいACがあると聞いて来たんだが……ちよつくら入れてもらえねえか？」

時折ガムを膨らましては再び噛みなおす。

人と話す時に物を食べながらとは失礼極まりない。

よっぽど指摘してくれようかと考えたが、ここは穏便に――だが微かな軽蔑をこめてスミスは言い放った。

「すまんが……それは無理ですな、お引き取りを」

ガムを噛む男の表情がわずかに曇る。

その後ろでは他の男達が口笛を鳴らしたりケケケと下品な笑い声をたてて冷やかしていた。

「……なあじいさん、俺らも力づくってのは気持ちが悪いんだ。今なら話だけで済ませれるんだが……」

俺達が少しずつ距離を狭めてくる。

懷に手を入れ、何やら物騒な物をちらつかせながら。

（やれやれ……最近の若い者達ときたら……）

街灯が少ないこの通りでは闇に隠され、スミスと男達は隔離される。夜の闇はこれから起こる事をすっかり覆い隠してしまった。

第15話（前書き）

スミスのじいさん……実はかなりの強者だったんです。

第15話

カチャン、という軽い音が、鍵が解除された事を告げる。

喫茶店『バレル・バチカ』の3階、従業員用の寮の一番奥の部屋でその音は鳴った。

『アドリア』と書かれたプレートのついた扉をレイナはゆっくりと開いた。

電気は当然のことについておらず、今まで明るい廊下にいた2人の目は鳥の目のごとくなにも見ることは出来ない。

レイナは手探りで近くにあったスイッチを押す。蛍光灯の明るい白色の光が部屋を照らし出した。その時初めて2人は部屋の中を確認する事が出来た。

寮と言う割にはなかなか広く、扉を入ってすぐ左にはクローゼット、窓際にはソファアールとローテーブルが置かれている。

ベージュみのかかった壁に、淡いブルーのカーテンと、清潔感溢れるとてもいい部屋だ。

ただ一点を除けば…。

「……ぬぁんでベットが1つしかないのよぉ!？」

これが鍵を渡した時のグレンのにやけの意味だった。

「グレンに言って来る!」

床が抜けるかと思う程強く足を踏みつけながら部屋を出て行こうとするレイナ。

「…?、何か問題でもあるのか?」

さらつと爆弾発言をするカイ。
扉を半分開けた状態で立ち止まるレイナ。
振り向いたレイナは驚愕の表情でカイを見る。

「問題つて……これ以上の問題が他に存在するワケ！？1つ屋根の下、個室で、ベットは1つなのよぉ！？」

「お前の隠れ家だってそうじゃないか」

レイナ活動停止。

カイの言っていることは間違いではない。

レイナの隠れ家も1つ屋根の下、ほぼ個室（部屋と呼べる代物ではないが）、ベットは1つ。

ほとんど当てはまっている。

しかもすでに2日間そこで2人で生活している。

「それは……カイ君ソファで寝てるし……」

「なら問題ないだろう。俺がソファで寝る。それともお前がソファで寝るか？」

言葉を失うレイナ。

カイにとってこの状況はなんともないらしい。

急に1人でパニックっていた自分が恥ずかしくなった。

「……カイ君がそれでいいなら……」

少し顔を赤らめながら承諾する。

とりあえずベットに座るレイナ。

カイはソファに座り、外の景色を眺めている。

「……変な事しないでよ?」

「何を?」

前言撤回。

カイは平気なのではなくて鈍いだけだった。
ある意味安心するレイナ。

だがそういった対象とすら見られないという事は、
それもある意味悔しい。

複雑な心境である。

「……スミス、と言ったな、あの主人」

不意にカイが口を開いた。

もんもんと1人の世界に入りかけていたレイナは、
カイが突然話かけてきたことに慌てた。

「え?あ、ああ、スミスさん?それがどうかした?」

自分でもわかるほど不自然な対応。

幸いカイはなんとも思っていないらしい。

「そのことだが…」

「何?まだ心配してるの?だゝいじょうぶだって!彼の所なら絶対
無事よ!」

窓の外を眺めながらクスツと笑うカイ。

「だろうな……なんて言っただけで彼は……」

――――

彼は何が起こったのか理解できなかった。

目の前にいる強情な老人を少しからかってやろうと、懐にしまっていた銃を取り出しただけだった。

しかしそれを懐から出した瞬間、手に鈍い衝撃が走り、確かに握っていたはずの銃が弾き飛ばされていた。

パンツ、という軽い音と共に。

銃は数m離れた地面に落下し、やがてその回転を止めた。

「な……なんだ……？」

自分達の他にはニコニコと微笑む無力な老人が1人。

――この老人に何か出来るはずがない――

心の中ではそうわかっていても、口は勝手に言葉を発した。

「てめえ……何しやがった！」

「おや、見えなかったか？お前さんが物騒な物を出すから悪いんじゃないよ」

相変わらず笑顔を絶やさない老人。

彼は底知れない恐怖が精神と体を支配するのを感じた。

「おいジジイ！しらばっくれると……」

後ろにいた仲間の1人が銃を抜き、老人に突きつける。

「さつきは見えんかったようじゃからの、今度は見えるようにやってやる」

そう言うとき老人は背中にまわしていた手をゆっくり腰の辺りまで持ってくる。

「！？っ、てめっ！動くんじゃ……」

パンツ！　パンツ！　パンツ！

それは銃声だった。

次の瞬間には仲間が手にしていた銃もそこにはなく、数秒して離れた地面に鉄属の落下する音が響いた。

呆然と老人を見つめる仲間。

彼も老人を見る。

老人の手には、黄金に輝く一丁のリボルバーが握られていた。

その銃口からは白い一筋の煙が空中を漂っている。

「今度は見えたかのう？それとも、もっと遅くしてほしいかい？」

ニヤリと笑う老人。

先程までの微笑みはどこへ行ったのか、その顔には凶悪な笑みが貼り付いている。

まるで冷水をかぶったかのように背中に悪寒が走る。

「ワシが撃ったのは銃だけじゃない。…ほれ、そのあんた、帽子を触ってみい」

指摘された男は、恐る恐るかぶった帽子を脱いで目の前に持つてくる。

そこには穴が2つ開いた無惨な帽子があった。

老人の放った弾丸は、彼の帽子の空洞になっていた部分を貫通していたのだ。

もし深くかぶっていたら今頃脳漿を地面にぶちまけて絶命していただろう。

カクカクと小刻みに震える男達を楽しそうに見つめる老人。

「ひつ、ひいつ!？」

男の1人が耐えきれずに逃げ出した。

それを引き金に、蜘蛛の子が散らばるように逃げ出す男達。

皆、一目散に老人の射程距離から逃げ出そうとする。

老人はニヤリと笑うと、左手に持った銃を一度腰のベルトは挟む。

そして一呼吸おくと目にも止まらぬ速さで銃を抜き、そのままのスピードでかざした右手の小指の付け根の部分にハンマーが当たるように持つてくる。

ハンマーは右手で抑えられ、その場にとどまるが、本体はそのままターゲットに狙いを定める。

そして右手を離すとハンマーが薬夾を叩き、火薬が炸裂し、弾丸が発射される。

俗に『ゲット・オフ・ショット』（抜き撃ち）とよばれる早撃ちのテクニクである。

この間わずか0・42秒、瞬きをすれば見逃してしまうであろう速度で老人は銃を撃った。

まさに神速。

弾丸はターゲットの足下に当たり、逃げる男を慌てさせた。

つんのめって転びそうになる男を楽しそうな表情で見送る老人。

素早く銃をベルトに戻すと、2度、3度と同じことを繰り返す。

暗闇の向こうから悲鳴が聞こえてくる。

わざと外してはいるが、その弾丸は男達のすぐそばをかすめている

だろう。

逃げる足音が遠ざかり、辺りは静けさを取り戻す。

スミスはクルクルと銃を指で回し、再び背中に戻す。

「さて…と、何をしようとしてたんだっただかの。…おお、そうじゃ！夕飯の支度をせにやらなかった！」

スミスは壁に立てかけておいた杖を取り、我が家へと戻って行った。夜は何事も無かったかのように辺りを包んでいた。

—————

「知ってたの？」

「ああ、握手をした時から気づいていた。彼の手には銃をよく扱う人間にしかできない特有のマメがあった。おそらく右手の小指の付け根にも同じ物があるだろうな」

カイはスミスと握手をしたたった数秒の間にスミスが早撃ちの達人だということを見抜いていた。

その動察力は並大抵ではなかった。さすがは戦争のプロだとレイナは思った。（あまり関係ない気もするが）

「彼ならアマテラスを守り抜いてくれるだろう」

カイは手にしたグラスを口に運ぶ。

勿論アルコールではない。

ふう、とため息をつき、グラスをテーブルに置くと、カイは沈黙し

てしまった。

頬杖をつき、無言で外を眺めるその横顔は憂いに満ちていて、手を伸ばせば届く距離にも関わらず、何故かとても遠くに感じる。

レイナはその近くも遠いその横顔に見入ってしまった。

どれくらいその横顔を見つけていただろうか。

ふと、レイナは思い出したようにカイに話しかけた。

「ねえ、最近私達レイヴンの間で噂になってる事があるんだけど…」

「ん？」

カイは頬杖を解き、レイナを見た。

レイナは一瞬ドキッとしたが、かまわず話を続ける。

「あ…あのさ、最近レイヴンのことを襲う銀色のＡＣと黒のＡＣが現れるらしいんだけど…それってもしかして…」

「レイヴンを…襲う？」

「う…うん、カイ君のアマテラスも銀色でしょ？疑ってる訳じゃないんだけど…一応聞いてみようと思って」

カイは顎に手をあてて考える素振りをする。

そして唐突に口を開いた。

「お前たしか小型の端末を持っていなかったか？」

「…？、持つてるけど…」

「通信機能はついてるか？」

「まあ、一応……けど、それが何か関係あるの？」

レイナは腰のポーチから端末を取り出してカイに渡した。

「大ありだ。今からその事を聞き出す」

カイは端末を受け取り、愛機――アマテラスに通信回路を開いた。だが、勿論アマテラスには誰も乗っていない。パイロットはここにいるのだ。

むしろ誰かが乗っている方が怖い。

レイナは困惑しながらもカイの肩越しに端末を覗きこんだ。

『はい、なんでしょう？』

そこには見慣れた少女――アリスがいた。

第16話（前書き）

先日、スミスのリボルバーについて御質問をいただきました。

私の説明不足で誤解を招いてしまい、申し訳ありませんでしたm（

――）m

この場をかりてお詫びの言葉を言わせてください。

私にもう少し文章力があれば読者様に誤解を招かなくてもすむのに

……と、つくづく実感しました。

これからは読者様に誤解を招かぬよう精進していきますので、どうかこれからもよろしくお願いします。

第16話

「アリス、お前俺のいない間に他の機体にも交戦したか？」

『え』

ギクッーという擬音が聞こえてきそうなほど、あからさまにアリスの顔色が変わる。
バレバレだ。

『えっと…それは…その…』

「やったのか」

『……はい』

カイのトドメの一撃に、あっさりと白状した。
刑事ドラマでももう少し粘ってもばちはあたらないうつ。
ふう、と呆れたようにため息をつくカイ。

「…まったく、あれほど1人の時は戦うなと言っただろう？」

『……はい、申し訳ありません』

叱られた子犬のようにしゅんとするアリス。

「なぜ戦ったんだ？お前なら戦闘を回避することも出来ただろう？」

『それは……カイさんと合流した時のために動作確認というか……』

言葉を続けるたびにどんどん声が小さくなっていく。
最後の方はほとんど聞き取れなかった。

「…だそうだ。噂は本当だったらしいな」

「まあいいじゃない、アリスちゃんだってカイ君と会った時の事を
思っっちゃったワケだし、許してあげなよ」

「別に怒ってはいない。ただ、パイロットのいない時に勝手に戦っ
なと言っている」

カイは視線をアリスに向ける。

アリスは相変わらずしゅんとしたままだ。

「……殺してはいないんだろうな？」

「……はい」

「…そうか、ならいい。もういいぞ」

「……はい、申し訳ありませんでした。失礼します」

ディスプレイからアリスが消える。カイは端末をレイナに返すと、
そのままソファーに横になってしまった。

「…銀色の機体の正体はわかったけど、もう1つの黒い機体の方は
何者なんだろうね？レイヴンが負けるくらいだから、ある程度の腕
はあるみたいだけど…」

「……………」

「…寝たの？」

応答なし。

向かうもない、今日は一気にいろいろな事があった。
ましてやカイは200年の眠りから覚めてまだ3日と経っていない。
疲れて当然だ。

レイナはカイを起こさぬよう、そーっと電気を消す。

「…おやすみ」

ベッドに横になるとすぐに眠気がし始め、いつしかぐっすりと眠りについていた。

カイは寝てはいなかった。

寝た振りをしていたと言っべきか、カイはずっと考え事をしていた。

（黒い機体……まさかな）

黒い機体ーアマテラスと同時期に現れ、同じくレイヴンを“狩つて”いる。

カイには心当たりがあった。

吸い込まれんばかり漆黒の、カイの知る限りで最強最悪の機体。

だがその機体は200年前、カイの目の前で基地もと核の炎に灼かれ、その姿を消していた。

（……馬鹿だな、そんなわけあるはずがない）

カイは頭にまとわりつく思考を振り払い、眠りにつこうと寝返りを

うつ。だが、眠ろうとすればするほど睡魔は遠ざかり、余計な事ばかり考えてしまう。

「……………すう……………」

ふと、暗闇に慣れた目に、ベッドで寝息をたてるレイナが映った。微笑みを浮かべて眠るその寝顔に、カイは何故か安心感がわくのを感じた。

理由はわからない。

——こいつには周囲を和ませる特別な力があるのかもしれない——素晴らしい力だ。

血塗られた自分の力など足下にも及ばない程…。

知らぬ間にカイは眠りについていた。

明日から始まる波乱の日常に備えた一時の休息だった。

—————

仲間の機体が次々に倒れていく。

大した損傷は無く、一瞬でコックピットを貫かれてその場に崩れ落ちる。パイロットの生存は絶望的だ。

また1機、コックピットから火花を散らしながら倒れ込む仲間の機体——歩行戦車『ケリファナ』。

MR製の汎用歩行戦車——と言えば聞こえはいいが、ようするにACの出来損ないである。

逆関節の脚部に上広がりドラム缶をくっつけたような簡単な作りで、腕や頭はない。

代わりに、そのドラム缶の上から突き出るアンテナ、不格好なセンサーカメラ、脚部の間にレーザーガンが装備されている。

最初は10機いたケリファナも、今はたったの3機。

敵の姿は見えない。

見えるとすれば、ケリファナがやられる一瞬の間に姿を現す“影”くらいである。

リーダーは無数の敵反応を示し、ほとんど使い物にならない。

『うわあああああ！！』

また仲間が1人やられた。

これで残るはあと2機。死は目前に迫っていた。

『ちくしょおお！？いつたいたんだってんだ！！』

たった1人残った仲間が悪態をつく。

それもそのはず、会社の守備隊であるはずの自分達が、突然上司の命令で辺境の土地に送り込まれ、突然現れた姿の見えない敵に襲撃をうけ、今や隊は壊滅状態。

恨み言の1つや2つ出るのは当たり前だ。

いや、出ない方がおかしい。

『くそがあああああ！！』

仲間は半狂乱になりながら周囲にレーザーガンを乱射する。

――馬鹿だな！こんな事したってしょうがないのに――

確実に死は自分をとらえているというのに、思考は何故か冷静に状況を判断する。

だが、体は勝手に生の可能性にしがみつく。

「う、おおおおお！！」

スティックのトリガーを引き、敵が存在する可能性のある方向に向

かつてレーザーガンを撃つ。

しかしレーザーは地面をえぐるばかりで敵に命中した気配は全くない。

それでもなおトリガーを引こうとする指を無理やり止める。いつしか仲間も攻撃を止めていた。

『……逃げたのか？』

ふとレーザーに目をやると、無数にあった敵反応が忽然と消えていた。

「……どうやらそうみたいだな」

安堵感がこみ上げて来ると同時に疲労感が体を支配した。

シートから離していた背中をゆっくりと戻す。

思わずため息がもれる。

「とりあえずここから離れよう。その後本社に連絡して回収部隊を……」

異変に気づいたのはその直後だった。

さっきまでディスプレイに映っていた仲間の姿はなく、通信が切れていた。

しかしメインスクリーンにはさっきと変わらずケリファナが立っていた。

「？、どうした、応答しろ」

反応はない。

不審に思い、機体を仲間のケリファナに近づける。

「……お、おい、どうし……！？っ」

仲間のケリファナの上から下にかけて、一筋の光の線がはいる。次の瞬間、ズルリと胴体が縦に分かれ、爆発を起こす。

「ひっ！？」

思わず機体を後退させる。

炎を上げて燃え盛る仲間の機体の向こうに、赤く光り輝く目を持った“影”が立っていた。

その目は次の標的を捉え、不気味に輝いていた。まるで獲物を狙う、獰猛な獣のように…。

――次は自分が殺される――
体に戦慄がはしった。

「う、うわあああああ！！」

反射的にトリガーを引き、迫り来る“影”に向かってレーザーガンを発射した。

だが、レーザーが命中しようとするその刹那、“影”の立っている周りの空間がぐにやりと歪む。次の瞬間には“影”の姿はそこにはなく、レーザーがむなしく何もない空間を通り過ぎて行った。

「っ！？、どこだ！？」

慌てて周囲を見渡すもその姿を確認することはできず、レーザーにも何一つ反応はない。

――た、助かったのか……？いや、そんなはずはない！奴はどこに……

突然、コックピットに敵の発見を知らせるアラートが鳴り響いた。ビクツと体を震わせ、反射的にレーザーに目をやる。

そこには敵の反応があった。

だが位置がおかしい。

一瞬レーザーの故障かと思った。

その反応は、自機を示す中央の光点と重なっていた。

――…………上？――

機体のセンサーカメラを上に向け、メインスクリーンを真上に捉える。

“影”はそこにいた。

落下のスピードと、ブースターの推進力を利用し、猛スピードで自分に向かっていく最中だった。

満月を背負い、片方だけの赤い光の翼を羽ばたかせながら。

彼にはそれが、死を運ぶ黒衣の天使に見えた。

「ひっ！？うわあああ！！」

ケリファナは真上に対する攻撃方法を持っていない。

“影”のブレードが振り下ろされるのを、彼は抵抗もできずただ待つしかないのだ。

赤い閃光がきらめく。

――…………すまない、マリア…………帰れそうにない――

愛しい女性の微笑みがフラッシュバックするのと、ブレードが機体を切り裂くのは同時だった。

機体は縦に両断され、一瞬間をおいて爆発した。

燃え盛る炎の中に立つ1体のA.C。

炎を反射し、ボディは赤く光る。

だが、燃え盛る炎よりも、それを反射するボディよりも赤く光り輝く目があった。

『……コイツも違う』

ブースターから赤い光の炎を吐き出し、その機体は去って行った。ブースターから途切れた炎は一瞬その場にとどまり、そして消える。まるで天使がはためかせた翼から抜け落ちた羽のように。

――――

暗いオフィスで椅子にもたれかかるように座る1人の女性がいた。メガネのレンズを満月が照らし、妖しく光る。

その時、デスクの電話が鳴り響いた。

彼女はゆっくりと受話器をとる。

「……はい」

受話器の向こうから男性の声が聞こえる。

何か叫んでいるようだ。だが所詮は電話越し、その声は彼女にしか聞こえない。

「……そう、また駄目だったの」

そう言うと彼女は受話器を置く。

耳から離してもまだ何か叫んでいるようだったがお構いなしだ。

彼女は椅子から立ち上がり、壁一面の窓の前に立つ。

眼下には都市の光が広がっている。

その1つ1つが人の生きている証、生命の光である。

「……また人を殺してしまったというのに、この街の人々は私を良く思ってくれている。……皮肉ね」

彼女は自嘲的な笑みを浮かべ、窓から離れる。

壁にかけられたコートを手にとると、オフィスを後にした。

（……そうよ、私は全てを偽って生きていく。周囲も、自分も、感情も、全て……）

ハイヒール独特の足音が、オフィスとは対称的な明るい廊下に響き渡っていた。

第17話（前書き）

更新滞っててすみません（――）m
ようやく18話です。

相変わらず戦闘はありません（泣）

もう少し！もう少しなんですどうか飽きずにおつきあいください！

第17話

「ち、ちよつと待て！そんなに急ぐ必要もないだろう！？」

「何言つてんの！せつかくの休みなんだから有効に使わなきゃ！」

両手いっぱい荷物を抱え、フラフラとレイナの後を追うカイ。

前が満足に見る事ができず、荷物の隙間からチラリと見える景色を頼りに歩くしかない。

そんなカイを知ってか知らずかレイナは急かす。

「そんなんじゃない日が暮れちゃうよ？ほら急いで！」

……無理だ。

思っても口には出来ない。

口にしたら何を言われるかわかったものじゃない。

カイは荷物を落とさぬよう、“できるだけ”歩みを速めた。
だが、それが裏目にでた。

目の前にあつた消火栓に気づかず、モロに躓いた。

「うおっ！？」

宙を舞う荷物、流れる時間は何故かスロー。

ドサッドサッドサツ！

ズサーッ！

……だから急がない方がいいと言ったんだ。

――――
ようやく荷物を車に積む事がでたカイは、ホッと一息ついて車のドアに腰掛ける。

これが毎日でなくて良かったと心底思う。
突然カイに袋と缶ジュースが投げられた。
慌ててキャッチする。

「ご苦労様！それは私のオゴリよ」

レイナが缶ジュースを開けながら歩いて来る。
その手にはまた荷物を持っている。

その荷物を車の後部座席に投げ込むと、カイの隣に同じように腰掛けた。

「開けてみてよ、その袋」

ニコニコしながら言うレイナ。

爆発でもするのか？などと思ってしまうのは考えすぎだろうか？
恐る恐る袋を開けると、中から出てきたのは爆弾ではなく2対の服だった。

ダメージ加工が施されたジーンズ、黒のYシャツ。

もう1つは黒と灰色と白の迷彩色のスボンに、黒のTシャツ。

そしてレイナと色違い白のベスト。

「これは？」

「カイ君にプレゼント。私の服じゃ小さいと思うから。サイズは大丈夫だと思うけど……どう？」

上目遣いにカイを覗き込むレイナ。

「…ああ、最高だ。ありがとう」

レディ・ハンティング・スマイル炸裂。

しかもお礼の言葉付きだ。

普通の女性ならイチコロだろう。

レイナも例外ではない。

ボツ、と顔が朱に染まり、のけぞるようにしてカイから離れる。

「そ、そそそう！？それは良かったですわ！？あは、あはははは…
…」

言葉使いが多少変なのは気にしないように。

レイナは缶ジュースを慌てて口に運び、そしてむせる。

「お、おい！大丈夫か？」

「だ、大丈夫…ゲホッ！」

カイは慌ててレイナの背中をさする。

「おいおい、いきなり急いで飲んだりするから」

「あ…ありがと、もう大丈夫だから」

はたから見れば仲むつまじいカップルに見えるだろうか。

カイ達がこの街に来て5日がたった。

初日は朝から最悪のスタートとなった。

いや、レイナにとっては少しラッキーだったかもしれない。先日風呂に入ることなく眠ってしまったカイは、風呂に入ろうとグレンに場所を聞き、共同浴場を目指した。

共同浴場は寮の1つ上の階にあった。

石造りのかなり豪華な浴場だ。

日本の温泉を思い出させるその浴場は、カイにとってとても安らげる空間でもあった。

身も心もスッキリとした所で、いざ上がろうと扉に手をかけようとしたその瞬間、カイが開けるよりも早く扉が開く。

扉を開けたのはレイナだった。

そう、この浴場は時間によって男性と女性を入れ替える仕組みになっていたのだ。

それを知らない2人は、バッチリ出くわしてしまった。

グレンも、この時間に風呂に入るのはカイだけだとたかをくくっていた。お互いバスタオル1枚という状況。

5秒ほど固まったあと、浴場に悲鳴が響き渡ったのであった。

その日はグレンの大型トレーラーを使い、アマテラスをガレージに運ぶところから始まった。

パーキングガレージでは、相変わらずスミスは揺れ椅子でスヤスヤと眠りこけていた。

スミスを起こしてアマテラスを回収し、いざ店を出ようとすると、スミスがカイにしか聞こえないほど小さな声で『気をつけなされ』と言った。

その時は言葉の意味を理解出来なかった。

その意味を理解するのは、もう少し後になってからである。

ガレージに着くと、グレンが目をらんと輝かせながら、早速アマテラスの点検に取りかかった。

各部位を点検することに、グレンの感嘆の悲鳴が聞こえてきた。

グラヴィティ・シフト、インフィニティ・システム、そしてアリスの事について質問責めにあったのは言うまでもない。

ようやく点検が終了し、必要なパーツのリストが出揃った時には、すでに日が傾き始めていた。

グレンがパーツショップに注文を終え、ようやくその日1日が終了した。その日だけでも疲労はピークに達し、2人は部屋に戻ると死んだように眠った。

2日目と3日目はパーツが届くまでする事が無いため、喫茶店の方で手伝う事になった。

カイはウエイター、レイナはウエイトレスとして。

カイにコーヒーをかけたあのウエイトレスだが、どうやらこの寮に住み込みで働いているらしい。

名前はクレア・マティス。

年齢17歳、カイ達と同年である。

カイとレイナは風呂と食事以外ほとんど部屋から出ないため、その存在を知ることにはなかった。

グレンに改めて紹介された時、レイナとは普通に挨拶をしたのだが、カイの時はペコリとお辞儀をすると逃げるようにその場から離れてしまった。カイは嫌われたと勘違いしているが、全くの逆である。

カイとレイナは、クレアに教えてもらい、与えられた仕事をこなして行った。

オーダーの取り方からレジ打ちまで、ほとんどの仕事は始めて2時間程でマスターしていた。

これほどのみ込みのいい人手はめったにいない、と店の奥で細く笑むグレン。

グレン曰わく、『レイヴンにしておくにはもったいない』そうだ。

看板娘であるクレア目当ての男性が前半を占めていたが、午後になると急激に女性客が増え始める。

どこをどう噂が流れたのかはわからないが、どうやらカイが目当てらしい。

カイがオーダーを取りに行く。

『いらつしやいませ、ご注文はなににしましょうか？』

『そうね……あなたが欲しいわ』

……いったいどういう神経をしているのだろうか、この街の人間は他にも、女性のグループ客の近くを通るだけでクスクスと笑い声したり、わざと物を落としてカイに拾わせたり……しまいには15歳少女から手紙を渡される始末。無論、ラブレターである。身の危険を感じ始めたカイは、グレンに頼んで厨房の手伝いにまわるのだった。

勿論男性客の数もカイ目当ての女性客に負けてはいない。しかもレイナという強力な助っ人がいる。

いつにもまして男性客が増えた。

クレアとレイナをお茶に誘う輩も中にはいたが、そのたびに2人はやんわりと断りの言葉の口にするのだった。

しかしレイナはカイと違い、厨房に逃げようとはしない。

この状況を、レイナは結構楽しんでるらしい。ぱつと見ただけでわかるほど、レイナは意気高揚して仕事をこなしている。

彼女には人に接する仕事に向いているのだらうと、カイは厨房で皿洗いをしながら思った。

そして今日、トライヴァー・シティに来てから5日目。

グレンに休みをもらった2人は、その休みを有効に使おうと、トライヴァー・シティの中心部へと来ていた。

隠れ家に帰った時のために、必要な物を買出しに来ていたのだった。

カイとしては、休日の有効な使い方は寝るのが一番なのだが。

日用雑貨、衣服、A Cの整備器具、電子機器、その他e t c……。それらの物を買ひ揃えようやく2人は帰路につこうとしていた。

「んじゃ、そろそろ帰ろつか？」

呼吸が落ち着いたレイナが言う。

「ああ、そうしよう」

本音は、早く帰って寝たいだけである。

車に乗り込み、カイはキーを回す。

軽い起動音の後にエンジンがかかる。

ようやくこれで今日が終わるーと、カイはアクセルに足をかけた。

ドスン

「……………え？」

鈍い衝撃に車が揺れる。

カイとレイナは2人とも困惑した表情で一瞬顔を見合わせた。

その衝撃は車に誰かが乗り込んだ事を示している。

2人は恐る恐る後部座席をのぞき込んだ。

「……………誰？」

声がハモる。

そこには息を切らし、シートに寝そべって周りから見えないように隠れる女性がいた。

縁が黒く、レンズが四角いオシャレな大人の眼鏡。

素が良いせいか、薄化粧がより一層彼女を引き立てる。

カールのかかった茶髪の髪は綺麗なアップにセットされ、更には白いブラウス、スリットの入ったミニスカート。

まさに『セクシーな大人の女性』といったところか。

彼女は人差し指を立てて口に当てる。

「しーっ……」

「あ、なるほど、静かにね？ 静かに… 静かに… …… じゃないでしょお！？」

見知らぬ女性の突然の要求を素直に従う程、レイナは純粹ではない。だが今のノリつつこみは絶妙だった。

「あんた誰！？ なんでこの車に乗ってんの！？ ついでにいうとしーってなによしーって！」

「あ、後で説明するから…」

レイナの怒濤の追い込みを、彼女はなんとしてかなだめようとしたその時だった。

「おい！ 見つけたぞ！ こっちだ！」

声の先にはスーツ姿の男性が、息を切らせながら叫んでいた。どうやら目当てはこの女性らしい。

「げっ、見つけた」

「見つかったって… 追われてるの？」

「そ、そうなのよ！だからお願い！車出して！」

このまま女性を引き渡してしまえば、厄介事に巻き込まれなくてすむ。

だがそれができる程、レイナだけでなくカイも純粋ではなかった。

「カイ！車出して！」

「ああ！」

かけたばかりでエンジンが温まりきっていない車に、カイは鞭を入れた。

辺りに耳をつんざくスکیل音が鳴り響き、3人を乗せた車はスーツ姿の男性の脇をすり抜けて走り去っていった。

「くそっ…逃げたか！」

取り残された男性が齒噛みする。

その時、男性の後ろの通りからシルバーの車が飛び出してきた。男性の横に止まると、運転席から同じくスーツ姿の男性が叫ぶ。

「なにしてる！早く乗れ！必ず連れ戻せとの副社長の命令だぞ！」

男性は慌てて助手席に乗り込んだ。

運転席側の男性は相棒がシートベルトをしたのを確認すると、愛車のアクセルを思いっきり踏み込む。

一瞬タイヤがバーンアウトした後、彼らの乗った車はカイ達を追いかけはじめた。

第18話（前書き）

更新滞っていてすみませんでしたm（――）m
ようやく20話までたどり着くことができました。

読者の皆様の怒りの声が聞こえてきそうで……。今回はお詫びもかねて長めにしておりますf^_^；しかも下ネタ有り！あるうことかガールズラブ！なんだか余計に怒らせそうな気がしてきました（T―T）

とにかく、第20話をお楽しみください。

第18話

白昼の街に、けたたましいスキル音をあげる2台の車があった。オープンで鮮やかなモンザレッドのスポーツカーと、シルバーのセダンタイプ。

「追って来たよ！」

「わかつてる！」

カイはバックミラーにチラリと目をやり、更にアクセルを深く踏む。AC程ではないが、強烈なGと共に車は加速する。後ろの車も負けじとスピードアップしてカイ達の10m程後ろにピタリとくつついて来る。

（後ろの連中…相当な使い手だな。一体何者だ？）

さつきもカイのフェイントに引つかからないでついて来ていた。

「だがまだまだだ！」

カイはハンドルを切る直前に一瞬強くブレーキを踏み、車の過重が後ろから前に移ると、ギアを5速から3速に下げる。

回転数の上がったタイヤは過重の抜けたテールとあいまってスリッブし、横滑り状態になる。

「きゃあゝゝっ!？」

隣でレイナが悲鳴を上げるが無視。

カイはハンドルを曲がる方向と反対に切り、スピンするのを防ぐ。
“カウンスターステア”というテクニクだ。
赤いスポーツカーは鮮やかな弧を描きながら交差点を曲がった。
いわゆる“ドリフト”という高等ドライビングテクニクである。
慌てて回避する対向車を後目に、カイはカーブを立ち上がると3速に入っていたシフトを4速に戻す。
パン！という音と共に車のマフラーが火を噴いた。

「これで良かったか…？」

「まだよー!!」

後部座席の女性が叫ぶ。

カイがバックミラーに目をやると、カイのドリフトしたラインを正確にトレースして交差点を抜けたシルバーの車があった。

「……………おもしろい」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべるカイ。
レイナの背筋を冷たいものが走った。

「ちょ、ちよつと待つ……………もしかしてまた……………」

「その通りだ」

カイは再び車をドリフトさせ、次のT字路を左折する。
こちらに曲がろうとした1台の車が、腹を見せながら派手に曲がって来るカイ達に驚いて急ハンドルをきる。
フロントノーズがその対向車のおよそ10cmの距離を通過した。

「きいやああああ!？」

レイナの悲鳴も派手だ。

後ろでは先ほどの対向車が電柱に突っ込んでいた。

それを絶妙なドリフトで回避しつつ追跡の手を緩めないシルバーの車。

向こうも必死だ。

「きゃっほー! いけいけー! ぶっちぎれー!」

後部座席の女性は必死ではないようだ。
それどころか楽しそうだ。

「次で勝負を決める」

「っ!？」

魂がどこか遠くの世界に飛びかけていたレイナが、カイの言葉で我に返る。

「ま…まだ何か…」

なんで車を出せなんて言ってしまったのだろうか? 後悔先たたずである。

カイは見えてきたカーブに、少し早めにハンドルをきりドリフト状態で進入する。

フロントノーズが電柱をこすったのは見なかった事にしよう。

「%〒~~~~っつつ!？」

もはやレイナの叫びは意味不明。

カイはそのままカウンターステアをきり続ける。当然車はさっきとは逆方向にドリフトをし始める。

カイはすぐさまカウンターステアをきり、ドリフトを維持する。

“慣性ドリフト”である。

そのまま次のカーブにさしかかったその時だった。

進行方向を遮るように1台の大型トレーラーが現れた。

これは計算外の出来事。ドリフト状態の車は体勢を変える事ができず、トレーラーに平行に突っ込んで行く。

「きいやああああああああ!!??」

今までで最大級のレイナの悲鳴。

まさに万事休す。

カイ達の車はトレーラーに激突するかのように思われた。

「この程度!!」

カイの足は絶妙なアクセルワークを見せた。

見事にドリフト速度を調節し、トレーラーが牽引するキャリアの下、前部タイヤと後部タイヤの間をすり抜けた。

そして何事もなかったかのように体勢を立て直し、再び走り始める。後ろでは……。

「うわあああああ!!」

反応が遅れた追跡者は、慌ててブレーキを踏む。ドリフト中にブレーキを踏むとどうなるか、彼らの車はコントロールを失い、スピン

しながら電柱に突っ込んだ。

勝負あり。

――――

「いててて……」

開いたエアバックをかき分け、歪んだドアを強引に蹴破り、運転席側から男性が降りてきた。

重大事故にも関わらず、かすり傷と打撲程度の怪我で済んだらしい。シートベルトとエアバックのおかげである。

助手席からも男性が降りてくる。

こちらも命に別状はないようだ。

「おう、生きてるか？」

「見りゃあわかんだろ」

先に脱出した男性が、内ポケットから煙草を出してすすめるが、とてもじゃないがそんな気分ではない。

「あゝあ、行っちゃったよ」

遠ざかる赤いスポーツカーを見つめながら言う。

「いつつも社長を追いかけてる俺達が振り切られるなんて…あのガキいったい何者だ？」

「知るか。レーサーかなんかじゃねーの？」

車にもたれかかり、打撲した箇所をさする。
助手席側の男性が、思い切ったように口を開いた。

「俺この仕事辞めよっかな」

「俺もそれ考えてた。命がいくつあっても足りやしねえ」

「だな。今回も命があるだけめっけもんだしな」

2人は顔を見合わせて笑った。

MRに入社して3年が経つ。

来る日も来る日も社長を護衛し、度々仕事をサボる社長を追い続けた。

だが、一度も連れ帰った事はない。

いつもすんでのところで逃げられてしまう。

職務を果たせない社員など会社には不要、とつくにクビになってもおかしくない。

しかし、そんな自分達を許し、励ましてくれる人物がいた。

自分達を雇ってくれた副社長である。

思い返せば、この車をぶつけたのは5度目だ。

副社長はそんな自分達を許すどころか、特別ボーナスと称して怪我の治療費まで出してくれた。

更に車をぶつけた1週間後には必ず元通りになって返って来るのだ。命がいくつあっても足りないーというのはお膳立てで、本当はこれ以上副社長に迷惑をかけたくないというのが本心である。

周りには野次馬が集まり始めていた。

副社長に迷惑をかける前に、こちらから関係を断つ。

覚悟は、できていた。

スーツの内ポケットから携帯電話を取り出し、副社長の番号にコー

ルをかけようとしたその時だった。

黒いクラシックカーが1台、2人の前に止まった。

まるで鏡のように磨き上げられた車体に2人の表情が反射している。その表情はからは何故か驚愕が読み取れた。

その理由はすぐにわかる。

クラシックカーのドアをゆっくりと開き降りてきた初老の男性、それは

「副社長……」

そう、この人物こそMRの副社長にして社長の執事、ドートラン・カスフィリアスである。

白髪混じりの口髭は綺麗に切りそろえられ、端がクルリとカールを巻いている。

黒いスーツに身を包み、落ち着いた風貌。

まさに英国紳士という肩書きが似合う。

ドートランは2人と大破した車、交互に視線を移す。

「逃げられましたか」

「……はい。申し訳ありません」

深々と頭を下げる2人。

ドートランはそんな2人をしばらく見つめ、そしてニコリと微笑む。

「まあいいでしょう。今回も社長は車を使ったようですし、逃げられるのも当然です。次からまた頑張ってください」

「は……」

驚いて顔を上げる。

今回ばかりはクビだろうとふんでいた。

しかしドートランはあっさり許し、また次も頑張れと言う。

これ以上迷惑は……！

ぐっと手を握りしめ、ドートランの後を追ひ、声を張り上げる。

「副社長！あの、俺達……」

「誰が」

ドートランの声が彼の言葉を遮る。

そしてドートランは振り向かず言葉が続けた。

「誰があのおてんば娘をすすんで追いかけるというのです？私ももう年です、身の回りの世話はできても、走り回って彼女を追いかける事はできません。どうか私の代わりに彼女を追いかけてください」

それだけ言うと彼は車に乗り込み、去って行った。

なるほど……全てお見通しか……

胸に熱いものがこみ上げてくる。

溢れ出す感情を必死に抑えつけ、彼は携帯電話を取った。

「もしもし……レッカー車1台お願いしたいんですけど……」

彼は悟った。

例えこの先社長を連れ帰る事ができないとしても、副社長の代わりに彼女を追いかける事はできる。

それが副社長へ、自分達にできる最大の恩返しだ。

それに……

電話を切って振り向くと、そこにはクシャクシャの笑顔で立っている相棒がいた。

…… 1人じゃないしな。

――――

「うん、……まだ気持ち悪い……」

「さっきさんざん吐いただろう」

やれやれ、といった感じでカイは肩をすくめる。

追跡の手を振り切った3人は、街の中心部から少し離れたオープンカフェにいた。

車から降りてしばらく経つというのに、レイナはテーブルに突っ伏したまま、未だ吐き気を訴えていた。

カイが自分の飲み物をレイナにすすめる。

レイナはそれを受け取り、ゆっくりと喉に流し込む。

気を上げ上がって来そうになる未消化物をなんとか胃に押し戻す。一応はこの小説のヒロインたるレイナには不適切な表現である。

「ありがと、少し楽になったかも。……それにしても、カイ君あんな運転どこで覚えたの？」

カイは少し考えた後、一言。

「イニDで鍛えた」

「……なにそれ？」

「やっぱり通じないか…」

わかりきっていた反応だが、やはり多少寂しい。2000年という時を感じずにはいられないカイだった。

「何よそれ！私には言ってもわからないって事！？」

そんな事で怒るなよ、などと思いつつ反撃。

「そついう事だ」

「ハッキリ言ってくれるじゃないの？」

腕組みをし、引きつった造り笑いをするレイナ。

余談だが、この時代はアルコールと同じく車の運転資格の基準も曖昧で、都市ごとにその基準は違う。例えばこのトライヴアー・シテイは16歳から車の運転が可能である。

カイの時代は勿論18歳以上からなわけで、実際カイが車を運転できるわけではない。

だが、今それを口に出すとレイナが今度こそ失神するかもしれないのでやめておいた。

2人のやりとりを眺めていた謎の女性だが、何かがツボにハマった

らしく、突然吹き出した。

「ぷっ…あははは！」

「何がおかしいのよ！」

「…ごめんなさい。ただ、あんまり仲がいいものだからつい。2人は恋人？」

女性の一言に、カイとレイナの顔が一瞬で朱に染まる。そしてアルトとソプラノがハモる。

「「違う!!」」

「本当かしら？」

クスクスと笑い続ける女性。

彼女には完全に2人は恋人同士と認識されてしまった。もはや何を言っても無駄である。

「それはいいとして…あなたは追われていたの？」

レイナが強引に話を別の話題へと持っていく。

聞きたい事は山ほどあったが、とりあえず簡潔に、一番手っ取り早い質問をする。

「…聞きたい？」

「それぐらいの権利はあると思うけど？」

逃走の手助けをしてやったのだ、それぐらいの権利はあつて当然である。

女性はクスツと笑い、手にしていたグラスをテーブルに置いた。

「そうね、礼儀として当然だわ」

「前置きはいい。…話してもらおうか？」

レイナはビクツとする。カイの言葉に、微量ながらも殺気を感じたからだ。

もしかしたら犯罪に手を貸していたのかもしれない。

カイは、場合によっては今すぐ自警団に引き渡す事もじさない考えだった。

女性もその殺気を感じ取ったらしく、多少驚いた表情を見せた、がすぐに笑顔を作り直す。

「……しいて言えば、仕事に嫌気がさして抜け出したら会社の連中に追っかけられた…ってところかしら」

「……………はあ？」

レイナがすつとんきょうな声をあげる。

理由が理由だけに無理もない。

「あら？おかしい？」

「当たり前でしょ！？そんな事であんなふうに追っかけたりする！？本当の理由は！？」

レイナがテーブルから身を乗り出すようにして問い詰める。

「本当よ」

彼女はいたって真面目だ。

カイにはその言葉が偽りではない事がわかった。
なにしろカイは200年前、何十人というスパイの相手をしていた時期があつたので、目や態度を見るだけその人間が嘘を言っているのが真実を言っているのかくらいわかってしまう。
彼女の言葉や目、態度からは偽りは読み取れない。

「やめろ、その人の言うことは本当だ」

更に問い詰めようとするレイナを制止する。

「じゃ…じゃあ私達はそんな事のためにあんな命の危険に……」

全身の力が抜けたようにイスに座り込むレイナ。

「俺は結構楽しかったがな」

「楽しくない!!」

カイは内心ホッとしていた。

女性を自警団に引き渡す必要が無くなったからだ。
できればそんな汚い真似はしたくなかった。
多少ながらも発していた殺気を引っ込める。

「仕事を抜け出ただけで同じ会社の人間に追われる……あんたは
いったいどういう立場だ？」

カイは確信に迫った質問をした。

カイでなくとも気になるところだ。

だが、質問をした途端、女性は驚いた表情をした。

「……もしかしてあなた達、私の事知らないで助けてくれたの？」

「？、知るわけ無いだろう？初めて会ったんだ」

その言葉を聞いた途端、女性は再び笑い出した。カイとレイナの頭の上に多数の？マークが浮かぶ。

女性はひとしきり笑った後、笑いすぎで流れた涙を指で拭う。

「……ふう……ごめんなさい、まさか知らずに一緒にいたと思わなかったから。てつきり知ってるかと……ねえ？レイナ・アイナスさん？」

「なっ……」

思考が完全にフリーズ。

それもそうだ、初対面の人間に名前を言われたら驚くのも当たり前である。

「なんで私の名前知ってるの！？」

「よく知ってるわよ。なにしろいろいろとお世話になってるからねえ。この間のデータ、とても役にたったわ」

その言葉が、レイナの記憶のパズルを完成させた。

何故気づかなかったのだろうか。レイナはこの女性を知っていた。だが“直接”会うのはこれが初めてである。

「あ……あ……ま、まさか……」

レイナが次の言葉を紡ごうとした時、黒いクラシックカーが1台、3人の近くに止まった。

「あっちゃ……見つかった」

それを見た女性は、まるで悪戯の見つかった子供のような仕草で、額に手をあてる。

車の後部座席から降りてきた初老の男性は、シワ1つ無い黒のスーツに身をつつんでいた。その落ち着いた風貌からは、イギリスの高貴な紳士を連想させた。

男性はゆつくりと3人に歩み寄り、そして女性に深々と礼をした。

「お迎えにありがとうございました、社長」

「ご苦勞様、ドートラン」

女性は片手をあげ、それに応える。

カイは事態が全く理解できなかった。唯一わかったのが、この女性は企業の最高責任者である事。それなら、仕事を抜け出したぐらいで会社の人間が血眼になってさがす理由もうなずける。

「や……やっぱり……」

レイナは横で驚愕の表情を浮かべたまま固まっている。

「……なあ、一体どういう事だ？事態が全く呑み込めないんだが……」

カイは勝手に自己完結しかけているレイナに、事態の真相を聞き出そうとする。そのレイナは、整備不良のＡＣよろしく、ぎこちない動きでこちらを見て、そして口を開く。

「こ…この人は新参入にして異例の早さで自分の会社、MRを世界3大企業の1つと呼ばれるまでにのし上げた若き天才女社長……シユエス・テークよ！」

ビシィっ！と、犯人を突き止めた探偵のように女性を指差すレイナ。人を指差すのは失礼ではないかと思ったが、この際無視。MRの女社長ーシユエスは、手で銃の形を作りレイナに向ける。そして一言

「1名答」

悪戯っぽい笑顔のシユエス。何故かからかわれたような気分になった。

「まさか気づいてなかったとはねえ…私もまだまだかしら？ま、楽しませてもらったからいいけど」

シユエスは指をパチンと鳴らす。すると、シユエスの後ろで待機していた男性ードートランが、スーツの内ポケットから何かの紙を取り出し、彼女に手渡す。シユエスはあるがとうと言い、その紙を受け取ると、同じくドートランから差し出されたペンで何かを書いてレイナ達に渡した。

「はいこれ、いろいろ楽しませてもらった私のお礼の気持ち。この飲み物代の足しにでもして。それじゃ、またどこかで会いましょ」

シユエスはドートランが差し出した上着を羽織ると、主人の帰りを

待つ黒のクラシックカーへと乗り込んだ。ドートランもそれに従い、運転席へと体を収めた。

「んじゃね」

窓からシュエスが2人に手を振り、陽気な声で別れを告げる。車はゆっくりと発車し、遠ざかって行った。

「……………」

「……………」

残された2人は呆けた表情で車を見つめていた。結局2人は彼女の暇つぶしにつきあわされたらしい。だからといって怒る気にもなれない。嵐のように現れ、塵気楼のように消えてしまったシュエスを、ただ呆然と見送るしかなかった。

「……………行っちゃったね」

「…ああ」

「結局何だったんだろうね？」

「……………わからん」

おかしいな会話だと、自分達でも気づいてはいたが、それ以外に言葉は見つからない。だが、2人の間ではなんとなく意味は通じていた。ふと、思い出したようにレイナはシュエスから渡された紙に視線を落とす。

「……小切手……？」

それはMRのマークがついた、この街でしか換金できない特別な小切手だった。レイナはなんとなく、そこに書かれた金額を数えた。

マルが1、2、3、4……………え？

驚きすぎて目がおかしくなったのか？もしくは何かの間違いだろう……そうだ、そうに違いない。レイナは目をこすり、左手で頭をコンコン、と軽く叩いた。そしてもう一度、小切手の金額を数えてみる。

マルが1、2、3、4、5……………増えてる。

小切手を持つ手が小刻みに震え始める。その震えは徐々に体全体に広がっていき、そして声までも……。

「カ、カカッ、カカカカイ君！？」

同じく呆然と車の去った先を眺めていたカイが、レイナの震えた声に反応し、こちらの世界へと帰って来た。

「……？、どうした？」

見ると、レイナは小切手を驚いた表情で見つめ、体は小刻みに震えていた。カイは怪訝そうに、その小切手を覗き込む。

……？……………！？っ

通貨の単位はレイナに教えられていた。そしてその小切手に書かれた金額は、コーヒー代の足し程度では収まりきらない。

「……何iiiiiiiiiii!？」

「……ええええええええええ!？」

カイとレイナの叫び声が、トライヴアー・シティの小さなオープンカフェに響き渡った。

レイナの車酔いはいつしか消え去っていた。

このトライヴアー・シティにMRの本社があると知ったのは、この5分後の事である。

—————

「……ご満足なされましたかな？」

「ええ、とても」

運転席越しのドートランの質問に、シュエスは笑顔で答える。

いつものように思いつきりショッピングはできなかったが、それに楽しませてもらった。シュエスにとっては満足のいく休日だった。

「そうですか」

バックミラーに、満足そうなドートランの表情が映る。仕事を抜け出して楽しんでいた社長を目の前にして、もっと他に言うことはないのか、とシュエスは思ったがあえて何も言わない。いつもの事だからだ。

シュエスはクスツと笑い、思う。ドートランにはかなわない…と。

いつも自分のわがままを笑顔で許してくれるドートランには世話になりっぱなしだ。今度彼に休暇を与えようとシュエスと思う。

と、そんな考えをめぐらせている自分に気づき、嘲る。自分は彼を騙しているのだ。彼だけではない、周りにいる全ての人々、そして自分ですらも。今日出会った二人、レイナとあの少年もおそらく騙す事になるだろう。この偽りがいつまで続くのかはわからない。わかつているのは、偽りが続かなくなった時、自分は全てを失うという事。だが決めたのだ、自分は何を失おうとも前に進む。その先に待っているものが破滅であろうとなかろうと。

シユエスは車の窓から、自分の作り上げたものを見る。高く、天をも目指す建造物。M R — 自分の象徴、権威、力……そして自分を隠すための鎧、偽りの塊。

シユエスは前を見る。どこまでも続く道を見つめ、自分を嘲笑しながら。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

「ふう」

ザバーっとお湯が浴槽から流れ出る。そのお湯と、自分の体の疲労が同時に抜けていくのを感じながら、レイナはより深く浴槽に浸かる。

シュエスと別れた後、レイナとカイは寄り道一切無しで帰って来たむしろ、寄り道する気力も無かった。疲れを癒やすはずの休日が、逆に疲れを溜める結果になってしまった。明日はキツイだろうな、などと考えながら、レイナは浴槽に寄りかかった。

目を閉じると、カイと出会った日から今日までの時間が、走馬灯のようにレイナの頭を駆け巡る。遺跡で出会い、いきなりの戦闘。カイは見事にそれをくぐり抜けてみせた。

父親との衝突。その時もカイに救われた。

他にも色々な出来事が、この短い日々の中で起こった。今までの自分のレイヴン生活の中では、考えられないような事ばかりである。そしてそれを楽しんでいる自分がいる。ふと、いつの間にか笑顔がこぼれていた。

「……ヘンなの」

そんな自分を自分で笑う。不思議な気持ちだった。

体が温まった所で、浴槽から上がるうとしたその時、ガラスと浴室の扉が開く。またカイとは合わせかと思い、慌ててタオルで体を隠した。

「「あ」」

その必要はなかった。そこにいたのはカイではなく、この喫茶店のウェイトレス、クレアだった。

一瞬の静寂の後、クレアが慌てて口を開く。

「ごっ…ごめんなさいっ！まさかいらっしやると思わなくて…すぐ出ますっ！」

踵を返し、浴室から出ようとするクレア。初めて会った時のように、ポニーテールがふわりと弧を描く。

「あゝいいいいの、気にしないで。入ってもいいよ」

「え…？」

レイナの言葉にクレアが振り向く。不安そうな、申し訳なさそうな複雑な表情。だが、それがまたなんとも言えない、いい表情だ。男

性なら思わず、守ってあげたい！と思うような、そんな魅力がある。女性のレイナですら、一瞬かわいいと思ってしまう程だ。

「で、でも……」

「いいからいいから 女同士恥ずかしがる事もないでしょ？」

「……じゃ……じゃあ、失礼します」

おずおずと浴室に入ってきたクレア。

後ろに手をまわし、背中越しに扉を閉める。

タオルで体を隠したまましゃがみ込み、洗面器で体にお湯をかける。するとお湯でタオルが濡れ、クレアの細い体に張りついてしまう。

それがまたなんとも色っぽい。ゆつくりと、浴槽のレイナが開けたスペースにクレアが入る。またもお湯が浴槽から流れ出てしまった。次に入る人はお湯を足さなければならない。

（ど……どうしよう……）

クレアは極度の緊張状態だった。隣にいる女の子はとても綺麗で……自分と同じ年とは思えない。今は濡れているが、それでも乾いている時と大差ない光沢のある茶色い髪、見つめると吸い込まれてしまいそうな濃い茶色の瞳。顔立ちも驚く程整っていて、まさに“美少女”といったところだ。

心臓の鼓動が高鳴るのが自分でもわかった。浴槽に満たされたお湯を伝って、レイナにわかれてしまうのではないかと思ってしまう程だ。実際は有り得ない事なのだが……。

ふと、レイナが視線に気づき、こちらを見る。

「ん？私の顔になんかついてる？」

「は、はひっ！？い、いえ、別にそういう訳じゃ……」

「？」

直視する事ができない。そのせいか、言葉までたどたどしいものになってしまう。

クレアは慌てて視線を外す。顔が真っ赤になり、お湯の温度もあいまって今にも火がでそうだ。

クレアは思う。こんな素晴らしい女性といつも一緒にいるのだから、彼はもう……と。彼とは勿論カイの事だ。

「あつ、あのっ！」

静まりかけていたお湯が、クレアの動きで乱れる。レイナは微笑を浮かべ、相変わらずこちらを見つめている。

その事を聞くための勇気が必要だった。しかしその勇気の使い方を、クレアは今までは知らなかった。だが今、初めてその勇気を使う時が来た。

クレアは自分を奮い立たせ、口を開く。

「レイナさんは……その、カイさんと………つつ、付き合ってるんですか！？」

その言葉を聞いた途端、レイナの目が点になった。クレアはすぐのような眼差しでレイナを見つめる。

クレアは内心、『しくじった！』と思っていた。『変な子』とは思われたかもしれない。今すぐ謝り、この場を逃げ出そうかと思考をめぐらせていたその時、

「……………つぶ、くくくく……………あははははは！」

突然レイナは大声で笑い始める。クレアはわけがわからず、笑い続けるレイナを困惑の表情で見つめるしかすべがなかった。

「っはは、は……………はあ。ごめんごめん、真顔でいきなり何言い出すのかと思ったら……………そんな事？」

クレアはムツとする。こちらは真面目に聞いている。しかもそれは、クレアにとって最大級の疑問なわけで…。それを笑い、『そんな事で済まそうとしているレイナに、多少怒りのこもった言葉で反撃する。

「……………おかしいですか？」

するとレイナは、いたずらっぽい笑顔で、

「あ、怒った？ごめんね？」

と言いながら、クレアとの距離を縮めてくる。クレアはおもわず座ったまま後ずさる。そんな事お構いなしにレイナは距離を縮めてきて、いたずらっぽい笑顔のまま、クレアの耳元に口を近づけて囁く。

「ねえ、クレアちゃんってもしかしてカイ君の事……………好き？」

「えっ！？いや、あの、その……………」

言葉につまるクレア。顔がさっきより赤くなり、今にも湯気が出てきそつだ。

そんなクレアに、レイナは安心させるような口調で言った。

「だ〜いじょうぶだよ！カイ君と私はそんな関係じゃないから」

「ホントですか！？」

さつきとは打って変わって明るい表情になるクレア。

レイナは思う。その笑顔を見せられたら、どんな男性もイチコロだろう。ただ、それがカイに通用するかと言ったら微妙なのだが…。クレアは表情豊かで、裏表がなく、純粹で…。そんな彼女がカイを好きになる事に、喜ばしいと思う反面、微かな痛みがレイナの胸に走った。その痛みがなんなのが、レイナにはまだわからない。心の隅にある、カイへの気持ちにも、自分自身の事ながらレイナはまだ気づいていない。

今は、クレアとカイの距離が縮まればいいと、純粹に思う。少なくとも、きちんとした理由も無く、自分でもよくわからない感情に突き動かされてカイと一緒にいる自分よりは、よっぽどお似合いだろうと、レイナは感じていた。

そう思う度に、胸の奥をチクリと刺す痛み理由はわからないまま…。

—————

ドライヤーで髪を乾かすクレアの横で、レイナは下着を身に着けていた。チラリと視線を動かし、クレアを見る。タオルで隠されてはいるが、その華奢な体にそぐわない豊満な胸。気づくと、レイナはそーっと手を伸ばし、その胸に…触れる。

ふによ

「んにゃあ!？」

そんな可愛らしい声をあげ、クレアはその場を飛び退く。

「なな、なにするんですかレイナさん!？」

レイナはハッと我にかえる。

「え?あ…ご、ごめん。あんまり大きいもんだからつい…」

そこまで言った所で、レイナの言葉が止まる。飛び退いた拍子にバスタオルがはだけ、胸が見えそうになっている。クレアはそれを両手でおさえながらしゃがみ込んでいて…。上目づかいに潤んだ瞳でレイナを睨んでいる。更にクレアは童顔だったりする。

レイナの中で、何かのスイッチが…入った。
レイナはゆっくりとクレアに近寄る。

「ねえ…ちょっとお願いがあるんだけど…」

「な、なんですか?」

不安げな表情。それがまた、レイナの入ったスイッチを刺激する。

「……………胸、揉ませてくれない?」

「……………え?え、ええ!？」

すつとんきょうな声をあげるクレア。言葉の意味が、いまいち理解できていない様子。レイナは更にたたみかける。

「ね？お願い？ちょっとだけでいいから……」

「で、でも……そんな……」

顔を赤らめ、もじもじと口ごもるクレア。

「さっきカイ君の事教えてあげたじゃん？その見返り……ね？いいでしょ？」

なんだか言葉に妖艶な響きが感じられるのはこの際無視。

それはトドメの一言だった。これを言われては、クレアは反抗する事ができない。そしてクレアは渋々口を開いた。

「……………ちょっとだけですよ？」

クレアは立ち上がり、レイナに背を向ける。レイナはというと、妙にトロンとした目つきをしていて……ぶっちゃけ怖い。レイナは背中から手を回し、バスタオルを外そうと……。

「あ、あの……バスタオル取っちゃうんですか？」

クレアが不安げな声で聞いてくる。それにレイナが下した答えは、

「勿論」

即答だった。

レイナはクレアの防御の手を外し、バスタオルは脱がす。露わになるクレアの豊満な胸。レイナはゆっくりとその胸に指を這わせる。

「ん……」

クレアから甘い吐息が漏れる。レイナは這わせた指を優しく、動かし始める。

ふによ

「んあ……」

むにゆ

「あう……」

むにや

「んい……」

指を動かす度にクレアの体は敏感に反応して、次第に熱を持ち始める。

「……あの……まだ、ですか？あ……」

むにゆむにゆ

「ま……だ」

レイナの手は少しずつ大胆に、かつ愛おしむように動きが激しくなっていく。

クレアは体の奥から突き上げてくる快感を必死に抑え込む。目をギョツとつむり、耐えるその姿がレイナのスイッチを逆撫でする。

「……こっ……これ以上やられたら……私っ」

色っぽい口調で訴えるクレア。だがレイナは攻撃の手を緩めない。クレアの吐息が甘く、切ないものになり、色っぽさを増す。

「あ……なんだか私……ヘンな気分……」

レイナの頬も朱に染まっている。

とつくにヘンだろうと突っ込みたくなるが、雰囲気的に今は無理だ。クレアにはすでに抗う力は残っていない。レイナの片手が胸を離れ、クレアの体のラインに沿って下へと動き始める。クレアは黙ってレイナに体を委ねることしかできず、体を這う指を虚ろな目で追う。

「あ……」

レイナの手が、下腹部へとさしかかったその時。

ガラッ

脱衣場のドアが突然開いた。

「……………」

そこにいたのは、カイだった。

レイナとクレアはその体勢のまま固まる。

カイは2人に交互に視線を移し、そして何かを考え始める。15秒の沈黙の後、カイが口を開いた。

「その…なんだ、仲良くなるのはいいが……一線を越えるのはどう

かと……いや、余計なお世話だったか。それはお前達の問題だしな。心配するな、この事は誰にも言わない。俺はまた後で入る。……すまん、邪魔したな」

申し訳なさそうに脱衣場から出てドアを閉めるカイ。

2人の思考はフリーズ状態のまま、沈黙の時間が過ぎる。

ようやく口を開いたレイナは、呆然とした表情で一言、

「……見つかつちゃった」

などと言う。

クレアはというと、瞳に涙を溜め、今にも泣き出さんばかりの表情。

「……い……い……」

爆発3秒前。

「いやあああああああああ！？」

クレアの悲痛な叫びは建物中に響き渡ったのだった。

この度1つわかった事がある。カイはこの手の話に普段は鈍いが、変な時だけカンが働くという事だ。

第18話（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

『いつからレース小説になったんだ！』とは口が裂けてもツツコまないように（^ー^；）

こんなに待たせておいて戦闘シーンが無いことにも目をつむってくださいね？（笑）

第19話 旅立ち (前書き)

前話の前書きで20話との表記がありましたが、実はまだ18話だった事が判明しました。読者の皆様の混乱を与えてしまった事に深くお詫び申し上げますm(´`´´´)m

第19話 旅立ち

カイ達がトライヴアー・シティに来てからちょうど一週間が経った。今2人はトライヴアー・シティの街の外れにいた。アマテラスの修理が終わり、次の目的地に向かおうとしている。

2人の前には大型トレーラー、そして横にはグレンとクレアが見送りに来ていた。

大型トレーラーのキャリー部に被せられたシートを外すとカイの愛機、アマテラスが姿を現す。シールドを排除した左腕には、ブレードの上からSB製のシールド、『K A T E N』が新たに装備されている。

背部左装備のミサイルポッドは、中身の弾頭だけが変更された。

これがなかなか大変で、ポッドに合う弾頭が見つかるまで約12タイプもの弾頭を試験し、13個目にしてようやく合うものを見つける事ができた。パーツのディーラーに文句を言われたのは言うまでもない。

そして200年という時間の中で、くすんだり傷ついたりしていたボディは、鮮やかな銀色に塗装し直され、まるでロールアウトしたての新品のようにまばゆい光を放っていた。

綺麗になったのは外見だけではない。劣化していた配線コード、回路、オイルや駆動系のパーツ、錆びついていた部分など全て新品に交換され、200年前と同じスペックを引き出す事ができる。その事にみんなが喜んだが、グレンだけは『全身レガシーパーツじゃなくなっちゃった！』と、1人嘆いていたという。

「本当に今日中に行くのか？もう1日ぐらい泊まっていつでも文句は言わんぞ？」

そのグレンが、コックピット内で最終調整しているカイ達を、ハッ

チから覗き込みながら言った。表情からは心配の色が見受けられる。現在の時間は深夜をまわっていた。本来ならもう1日泊まっていたてもいいようなものだが、レイナたつての希望で調整が済み次第、その日のうちに発つ事になったのだ。ろくにテストもなしに使用するため、グレンの心配もそれなりにある。そんなグレンの心情を知ってか知らずか、レイナが笑顔でかえす。

「ありがと、グレン。でも大丈夫！カイ君がいるからちょっとやそつとじゃなんともないって」

そう言っただけで再び手を調整に戻す。
カイは苦笑しながら、

「だそうだが、心配しないでくれ。グレンの仕事は完璧だ。これならばぶつつけ本番でも100%のスペックを引き出すことができる。本当に感謝している」

「し…しかしなあ」

と、グレンが言いかけたところでそれはクレアの呼ぶ声に遮られる。

「グレンさん、関節部の最終調整終わりましたー！いつでも行けますよー！」

片手でメガホンを作り、もう片方の手を大きく振りながら、クレアがアマテラスの足下から告げる。

「な？言っただろう？」

一緒にクレアの声を聞いていたカイが、いたずらっぽく笑みをうか

べながら言っ。

グレンはカイのこんな表情を見るのは初めてだった。確かに出会ってまだ1週間しか経っていないのだが、まるでずっと昔からカイの事を知っていたような、不思議な感覚にとらわれる。

カイには無事でいてほしい。勿論、レイナにも。

グレンは苦笑する。もう、止める理由もない。レイナの言う通り、カイだったら心配ないだろう。

「……たく、しょーがねーな。その代わり、せつかく直した機体、壊したら承知しねーらな？」

「ああ、きもに命じておくよ」

グレンはハッチを閉め、タラップに掴まって機体を降りる。そしてクレアと共に少し離れた場所から見守る事にした。

「……よしと！カイ君、こっちは大丈夫！いつでも行けるよ！」

「ああ、俺の方も終わった」

シートの後ろからひょっこりと顔を出しながら言うレイナに、カイは足下の整備用ハッチを閉めながら答える。

そしてスティックを握り、シートベルトを装着する。

「アリス、機体を起動させろ」

緊張の一瞬だった。

例えばグレンの仕事が完璧と言っても、大半がレガシーパーツの機体に現代のパーツを移植したのだ。何が起ってもおかしくない。だが、カイは恐れてはいなかった。グレンや、彼のガレージのメカニック

達、クレアにレイナ、アマテラスの修理にたずさわってくれた人々全てを信じていた。例え今、アマテラスに異常が出ても……いや、異常などあるはずが無い。

……そう信じた。

カイの声に反応し、機体は静かに、だが力強く起動し始めた。最初は駆動音がコックピットに響き始め、続いてメインスクリーンやコンソールの計器、コンピューターに灯が入る。そんな中、ステイックの間にある、いつもならそこにアリスが現れるはずのメインパネルだけは、いつまでたっても起動しない。

(…………駄目か……)

やはり無理があつたのだろうか。カイが起動しないメインパネルを見つめ、あきらめかけたその時。

ツブウン

軽い起動音と共に、メインパネルが点灯した。そしてアマテラスには欠かせない存在、アリスが姿を現し、ぺこりとお辞儀をする。

『おはようございます、カイさん』

カイは安堵する。やはりグレンの仕事は完璧だった。今、アマテラスは200年前と同じ……いや、それ以上の力を得て蘇つたのだ。

「アリス、今は夜中だぞ？」

『え？あ…はい、すみません』

アリスのいつもと変わらぬ反応を見てカイは苦笑する。
かたずを飲んで見守っていたレイナもホッと胸をなでおろした。

「よかったあゝ！一時はどうなるかと思ったよ！これでアマテラスは完璧ってワケだ！」

「ああ、彼に任せて正解だったな」

カイはメインスクリーンに目をやる。そこには少し離れた場所からかたずを飲んで見守るグレンとクレアの姿があった。彼等はまだ、アマテラスが無事に起動した事を知らない。

カイはそれを教えるべく、フットペダルとスティックを操作し、アマテラスを立ち上げさせる。

足が地面に着くと、砂埃が舞った。

「アリス、機体の状態はどうだ？」

『駆動部、ジェネレーター、その他全てに異常は見受けられません』

アリスがメインパネルに機体の状態を示すブラウザを開きながら言う。

「上出来だ。これならいつでも戦闘に耐えられる」

カイはスロットルを上げ、ブースターを点火させた。
心地よい振動が機体を揺らし、いつでも行けると言わんばかりに、その好調をパイロットに告げる。だが、カイはまだ機体を動かそうとしない。まだ、やり残した事がある。

カイは外部スピーカーをONにした。それは勿論、グレンとクレアに礼を言つたためだ。ここからでも2人の明るい表情を見る事ができる。

「グレン、クレア、この通り機体は完璧だ。礼を言つ」

その言葉は届いていた。グレンが笑顔でこちらに向かって拳を突き出し、親指を上に向けて立てる。

「ありがと、グレン！お金は後で振り込んでおくから！あ、それと今度私の機体も持ってくるから！その時はよろしくね！」

スクリーンの向こうでグレンが肩をすくめてみせた。

カイは苦笑する。レイナの機体を見たら、きっとグレンは飛び上がらんばかりに喜ぶだろう。

カイはグレン達に向け、彼がしたように、アマテラスのマニピレーターを操作して拳を作り、親指を立てた。

「さて、行くか」

「うん！次は一番重要な場所に向かうから、そのつもりでね」

カイは肩をすくめると、フットペダルを踏み込み、機体を跳躍させた。軽いGが2人の体にかかる。

グレンとクレアの姿は瞬く間に遠ざかり、次の瞬間には荒野の彼方に見えなくなってしまった。

—————

「行っちまったなあ」

「ええ、そうですね」

グレンはアマテラスの去った方向を見つめながら呟く。クレアも同じ方向を見ながらグレンの言葉に答えた。

忙しい一週間だった。レイナが来ると、いつも忙しくなる。だが、それが苦とは思わなかった。レイナが運んでくるのは“忙しさ”だけではないからだ。いつも周りに明るい雰囲気を選んで来てくれる。それは“楽しさ”と呼ぶのがふさわしい。

レイナがいなくなった事で、またいつもの日常が戻ってくる。ホツとしたような、寂しいような、複雑な気分だ。

だが、おそらくまたすぐにレイナはこの街に帰って来るだろう。新しい“楽しさ”を連れて…。

「さて、俺達もぼちぼち帰るとするか。明日もはええしな」

「はい、帰りましょう」

2人はアマテラスを運んで来たトレーラーに乗り込む。キーを回すと、軽くなったせいか、アマテラスを載せていた時よりもエンジンのかかりがいい。

グレンがギアを1速に入れ、アクセルを踏み込もうとしたその時。

「グレンさん、あれ……」

「ん？」

クレアが窓の外を指差す。その指の先には、沢山あるパーキングガレージの1つから飛び出してくる3機のACがあった。

「あれは……」

別に珍しい事ではない。

依頼を受けたレイヴンが、仲間と共に現地に向かう……ごく当たり前の光景。しかし、時間が時間だけに、今この街を出て行くのは不自然だ。よほど慌てているのだろうかとも考えたが、そう考えるにはあまりにも不確定要素が多い。まるで、カイ達がこの街を出て行くのを待っていたかのようなタイミング。向かった方向もカイ達の去った方向と同じ。
イヤな予感がした。

「グレンさん」

クレアが真剣な表情でグレンを見つめる。どうやら、彼女の考えている事は自分の予想と同じようだ。

「クレア……1つ、頼まれ事してくれるか？」

「……はい、もとよりそのつもりです」

グレンは頷くと、トレーラーを発車させた。向かう先には、一軒のパーキングガレージがあった。

第20話 奇襲（前書き）

戦闘だ戦闘（ ）ゞ

いやゝやっぱ戦闘はいいっすね！ようやくご無沙汰だった戦闘シーンにテンション上がりばなしです！

神様、もうしばらくこのテンションを維持させてください！（懇願）

第20話 奇襲

検問を無事超える事ができたカイ達は、次の目的地へと進路をとっていた。

「さあて、無事に出発する事もできたし、私は一眠りしよっかな」

そう言つとレイナは、シートの後ろのわずかなスペースに敷いた寝袋にもぞもぞと潜り込む。

「……俺は？」

「カイ君は黙つて操縦する！しばらくしたら変わつてあげるから。んじゃ！オヤスミい」

言つが早く、レイナは寝息をたて始める。カイは呆れて、

「……しばらくつてどれくらいだよ」

と、ため息をはく。

「なんか言つた？」

レイナが薄目を開けて睨んでいた。

「な、何も……」

カイは慌てて前を向いた。

眠ってなかったのか！とつつこみたくなるが、つつこんだ後の自己満足がその後に待ち受ける事とわりに合わないと悟り、ぐっと我慢する。

そんな、たわいもないやりとりをしながらも、2人は順調に次の目的地へと向かう。このまま何も起こらなければ、2日後には到着できるはずだ。

そう、何も起こらなければ……。

突然、コックピットにアラートが鳴り響く。それは敵の接近、攻撃を告げる警報だった。

どうやら、何も起こらずにというのは無理のようだ。

カイはすぐさまフットペダルを踏み込み、機体を右へと跳躍させる。整備したての機体は、カイの命令に敏感に反応する。ブースターの炎が勢いを強め、機体は砂塵をまといながらその場を飛び退いた。刹那、アマテラスさつきまでいた場所に、巨大なエネルギーの塊が轟音と共に命中し、地面をえぐった。

「ちつ… いったい……」

「ちょっとおゝ、頭ぶつけちゃったじゃない！もう少し丁寧に操縦してよねえ」

レイナが寝袋にくるまったままシートの後ろから顔を出す。まるでみの虫だ。

「攻撃を受けた。おそらく敵だ」

「えーウソ！？攻撃！？」

レイナは慌てて寝息を脱ぎ始める。いまいち緊張感に欠けるが、カイはお構いなしに続ける。

「アリス、敵は？」

『機体の後方、約250m地点に熱反応有り。数は3機。これは……ACです！』

それはレーダーにも映っていた。荒野をこちらに接近して来る3つの影がレーダーに反応している。

カイは近づいて来る3機のACに向かって機体を方向転換させる。その時、攻撃の第2波を告げるアラートが鳴り響く。

カイは機体をホバリングさせ、光の矢の如く迫り来るエネルギー弾を回避する。機体が右へ左へと回避する度に、エネルギー弾がすぐ側をかすめる。エネルギー弾は地面を吹き飛ばし、えぐる。命中したらさすがのアマテラスと言えどひとたまりもない。

しかし、カイには冷静に状況を判断し、攻撃の目的を見抜いていた。

（こちらを破壊するつもりではない……？）

そう、エネルギー弾はこちらの破壊を目的として放たれているのではなかった。こちらが攻撃を察知し、回避する事を前提として加えられている、いわば足止め程度にしかすぎない。

もし万が一命中したとしても、脚部にダメージを与え、動けなくするくらいにしか考えていない。本当に破壊する気なら、もっと接近してから攻撃してくるはずだ。

しかし、一体何のために？何の目的があって自分達を足止めしようとしているのだろうか？

カイは次々と迫り来るエネルギー弾を避けながら思考をめぐらせた。だが答えが見つかるはずもない。当然だ。向こうは姿すらまだ現し

ていない。

やはり、直接聞くしか方法は無さそうだ。

『カイさん！』

「カイ君！」

アリスとレイナが同時に叫ぶ。

カイはとつさに機体を真上に跳躍させる。唸りをあげる2発のエネルギー弾が、ほぼ同時にアマテラスがいた地面を吹き飛ばした。

今のは危なかった。命中していたら、行動不能どころか脚部を根こそぎ持っていかれるところだった。

戦闘では常に冷静なカイには珍しく、冷や汗が首筋を伝った。

地面に着地すると、衝撃で砂埃が足下を舞った。着弾時の硝煙のせいで視界がよく効かない。今は敵の攻撃は止んでいる。

「何戦闘中にボーっとしてるの！？私とアリスちゃんが言わなけりや今頃スクラップにされてたところだったよ！？」

レイナがまくし立てる。当然だ。戦闘中に上の空で別の事を考えるなど言語道断、一歩間違えれば即、死につながるのだ。命を預ける人間がこれでは、叫びたくもなる。

「すまない。考え事をしていた」

「か、考え事って……」

レイナとしては、戦闘中に考え事をするどころか、考え事をしながら攻撃を避けていたカイの方がよっぽど危なっかしいと思った。その時、新たな攻撃を知らせるアラートが鳴り響く。

「ちいつ…！」

カイは機体をホバリングさせ、猛スピードで前進。硝煙をまといながら煙を突っ切る。

煙を抜けると、上空に飛来する無数のマイクロミサイルがメインスクリーンに映し出された。

「！？っ、まずい……」

避ける暇は、もう無かった。

カイはシールドを掲げ、コックピットを守った。それとほぼ同時に、マイクロミサイルがアマテラスの周囲に次々と着弾する。

爆発、爆煙、爆風。

「きゃああっっ！？」

「くっっ…！」

衝撃が機体を揺らす。

ふと、カイの脳裏に戦場がフラッシュバックした。

至る所で爆発が起こり、人が死んでいく戦場。今の状況がそれに酷似していて、おぞ気のはしる。だが、本物の戦場はこんなものではない。そこには、敵を捕縛しようなど馬鹿な考えを持つ者は1人もいない。ただ、敵と認識したものを抹殺する、それが戦場だ。それに比べたら、わざと弾を外すような連中はカイにとって『敵である』という認識すら持てない。

今はそのわざと外されているミサイルの雨が止むのを待った。そして、ミサイルが止んだ。

硝煙と砂埃が宙を漂い、視界が10m先すらままならない。

「……ようやくおでましか」

カイはそう一言だけ口にする。

彼には見えていた。硝煙と砂埃の向こうから姿を現した3体のACが。

『ほお、あれだけの攻撃を受けて無傷とは。大したものだ』

3機を中心にいた軽二脚タイプのAC、おそらくリーダー格である男が、通信越しに言う。褒めているらしいが、全く嬉しくは思えない。

『ハッハア！さっきのでやられてりゃあよかったつてのによ！』

リーダー格の男の隣にいた、軽四脚タイプのACから軽率な物言いの男が甲高く笑いながら言う。

『計算の範囲内です。これくらいでやられては話にならない』

更にその隣、タンクタイプのACから打算的な声が発せられた。

「……何が目的だ？」

簡潔に、一番の疑問をリーダー格の男の問いかける。まともな答えは期待していないが…。

『……すまないが依頼でな。貴様の機体を奪う』

こちらも簡潔に答える。回りくどく無いとはいえ、その答えは物騒

なものだった。

その言葉には地を這うような独特のすごみがあり、対する者を威圧する。だが、その程度の威圧で、はいそうですかと機体を渡す程力イは純粹ではない。

「悪いがそれはできない。帰ってクライアントにそう言っんだな」

『おおっ！？言うねえ言うねえ！ハハッ！』

軽四脚の男が、下品な笑い方をしながら言う。

『ふう、どうやらおとなしく渡してくれる気は無いようですね』

タンクタイプのACが、全兵装をアクティブにセットするのが手に取るようにわかる。

『……いたしかたあるまい』

リーダー格の男が、呆れたという風にため息をつく。それが、戦いのゴングだった。

『力づくで奪う』

第21話

『我が名はディラン・ブリックス』

リーダー格の男が、名乗ると同時に多数のマイクロミサイルをカイ達に向けて放つ。

『そしてこれが我が愛機、シュバルツナーゲルだ。冥土の土産に覚えておくがいい』

ディランの機体は軽二脚、防御力を犠牲にした機動力重視の機体設定、右手と左手にはそれぞれバズーカ、小型ショットガン。そして背部には両方で1セットのデュアルミサイルポッドが装備されている。軽装甲、機動力重視型だからといって、その火力を甘く見る事はできない。カラーは黒と紫に統一され、対峙する相手にいかつい印象を持たせる機体だ。

カイは機体を後方に跳躍させ、ミサイルの雨から逃れる。今度の攻撃はわざと外されてなどなく、完璧な命中コースで放たれていた。カイはすぐさま反撃に出る。主兵装のエネルギーランチャー、カラサワをシュバルツナーゲルへと向ける。その時、後方警戒のアラートが鳴り響いた。

『ヒヤッハア!!』

後方から接近していた軽四脚型が左手のブレードを振りかぶる。

「くっ!?!」

カイは真一文字に振られたブレードを、機体を沈み込ませることで回避した。光の刃がアマテラスの頭上ギリギリを通過する。

『俺様の名前はカルロス・レパート！こいつは相棒の サーベル・サーベラ だ！てめえも相棒の撃墜マークの1つになりなあ！』

カルロスの機体、サーベル・サーベラは、主に近距離戦を主眼にしていた機体だ。

軽四脚型の脚部に、同じくの機動力重視のコア。

右手には接近戦で威力を発揮するハンド・パルスガン、左手には高出力ブレード、背部には中型ロケットランチャーと小型ガトリングガンが装備されている。接近戦が得意だからといって間合いをとれば安全かと言うとそうではない。距離を取った瞬間、背部のロケットランチャーとガトリングガンが目標を狙い撃ちにする。近距離、中距離では無類の強さを誇る機体だ。ボディは黄色と緑が基調とされた鮮やかなカラーリングが施されていた。

カイはカルロスの振るったブレードを、こちらもブレードを展開し、受け止める。2度、3度と交わされる刃。カルロスが袈裟切りに振り下ろしたブレードを弾き返し、後方へと距離をとる。

『させるかあ！！』

カルロスは待つてましたと言わんばかりに背部ガトリングガンをアマテラスへ向ける。だが、その時すでにカラサワの銃口がこちらに向けられている事に気づく。

『ちいっ！？』

カルロスは機体を後方に跳躍させ、放たれたエネルギー弾を回避す

る。

その行動はカイの計算内だった。アマテラスのコックピットでは、ロックサイトがシュバルツナーゲルとサーベル・サーベラを捉えていた。カイが背部左装備のミサイルポッドのトリガーに添えられた指に力を込める。

『させませんよ』

コックピットに攻撃警戒アラートが鳴り響く。カイはすぐさま右へと回避する。アマテラスのいた地点に命中するミサイル、弾丸、プラズマ弾、グレネード。命中していたら消し炭にされていたところだ。

『私の名前はスタン・ハルベリー。この機体は G ブレイズ といいます』

彼の機体は攻撃を第一に考えた重武装 A C。機動力よりも積載量と防御力を重視したタンクタイプの脚部、同じく重装甲型のコアに腕パーツ。

武器はまさに重武装と呼ぶにふさわしい。右手には大型のガトリングガン、左手にはプラズマライフル。そして背部には5連装ミサイルポッドとグレネードランチャーが銃口をこちらに向け、今もなおミサイルとグレネードをはきだしている。

その火力は排他的な破壊力を誇り、まるで『動く火薬庫』とでも呼ぶのがふさわしい。

カイは雨のように降り注ぐ攻撃を必死に回避する。ミサイルが足下をえぐり、弾丸がかすめ、グレネードの爆発が機体をゆらし、プラズマ弾がボディを焦がす。回避はするものの、その度に命が削られる思いだ。

スタンは攻撃の手を緩めながら、他の2機へと近づく。

『まったく、あなた達はあれを破壊するつもりですか？依頼内容は捕獲のほうでしょう？』

『ああん？てめえこそあいつを消し炭にしようとしてたじゃねえか』

『なんにせよ、付け焼き刃のチームワークにしてはなかなかのものだ。これならさほど手間取らずに任務を遂行できるだろう』

3機のACは再びアマテラスへと向き直る。

カイは冷静に状況を判断し、突破口を探す。

(……まずいな。1機ならともかく、腕利きのレイヴンが3人なると分が悪い。……やむえないか……)

カイは警戒しつつ、間合いをはかる。

この最悪の状況を打破するに残された手は1つ。

「アリス、インフィニティ・システムとグラヴィティ・シフトをセツトアップ」

『了解しました』

その言葉にレイナは戦慄を覚える。また、あのシステムを使うのだろうか。インフィニティ・システム……敵と認識した目標を圧倒的な力でねじ伏せる。それができる程の力をパイロットに与え、人格さえも変えてしまう。

レイナはこのシステムが嫌いだった。カイが変わってしまうのが嫌だった。

インフィニティ・システムが、カイをどこか遠い場所に連れて行く
うとしている……そんな気がしてならない。

「あ……あのさ、カイく……」

「黙っている。舌を噛むぞ」

レイナが勇気を出して発した言葉を、振り返りもせずに一瞥する力
イ。

その姿を見て、レイナは自分自身にいい聞かせる、仕方ないのだと。
今インフィニティ・システムを使わなければ自分達は負け、アマテ
ラスは奪われてしまう。それを回避するには、使っしかないのだ。

『……そろそろフィナーレです』

スタンのGブレイズから発射されたミサイルがアマテラスに迫る。

「ちっ……！」

カイは軽く舌打ちをしながらインフィニティ・システムの起動を中
断し、機体を後方へと跳躍させる。

『くらいなあ！』

跳躍した所に、サーベル・サーベラがブレードを展開し、躍りかか
る。

カイは空中でブーストをふかしてさらに後方へと回避し、なんとか
斬撃をかわす。カルロスも同じくブーストをふかし、地面に着地し
ようとするアマテラスを追う。

カイが姿勢制御スラスターで機体を安定させながら着地しようとし

たその時。

『甘い』

2機の攻撃に気を取られていた隙に接近していたディランが、主兵装のバズーカをアマテラスの着地地点に撃ち込む。

「!?!、しまっ…」

爆発によってえぐられ、形を大きく変えた地面に足をとられた。――圧されている――

カイは屈辱にも似た感情を覚えた。

『もらったああ!!』

その一瞬の隙をつき、カルロスのサーベル・サーベラがブレードを振りかぶる。回避は間に合わない。とつさにカイは叫ぶ。

「アリス!インフィニティ……!!?」

その時、目の前まで迫っていたサーベル・サーベラが、真横に命中したグレネードによって吹き飛ばされる。

『うおおっ!?!』

命中部分から炎と煙を吐きながら、数10m離れた地面に落下するサーベル・サーベラ。

「な、何!?!どーなってんの!?!」

レイナは困惑した表情でカイを仰ぎ見る。そのカイも何が起こったかわからないという表情でメインスクリーンに見入っていた。

（仲間割れ…？いや違う。そんな素振りを見せた奴はいなかった。なら、いったい誰が……）

その答えは、スピーカーから発せられた声によってあっさり解決する。

『大丈夫ですか！？カイさん、レイナさん！！』

アマテラスの傍らに降り立つ深蒼の機体。

カイ達の危機を救った、通信の主。それは2人がトライヴアー・シテイに来てからの1週間を共に過ごし、また世話になった同年代の少女。

それは紛れもなく、

「クレア……ちゃん？」

レイナは驚きを隠しきれない様子で、彼女の名を口にする。

なぜ、ここに？

なぜ、ACに？

助けてくれた相手がわかったというのに、また新たな疑問が生まれた。

『黙っててすいません。実は私、レイヴンなんです。普段はグレンさんのお店でウェイトレスやってるんですけど、依頼が来たら一応レイヴンとして仕事してるんです』

疑問が1つ解決した。だが、まだ足りない。

『お2人を見送った後、3機のACが後を追って行くのが見えたんです。それで追いかけてみたら…案の定』

疑問は、解決した。

何はともあれ、心強い見方が現れてくれた。レイナはホッと胸をなで下ろす。

だが、納得してない人物が1人。

「…………ふむ」

「…？、カイ君？どうしたの？」

カイは顎に手をあて、なにやら考え込んでいた。疑問は解決し、味方も増えた。悩む必要などどこにもない。しかし、彼は悩む。そして何か解決したように、右手で拳をつくり左手の平をポンと叩いた。

「俺としたことが、もう少しでお前達の仲を裂いてしまうところだった…………本当にすまない」

カイが言っているのはつまり…………風呂場でのクレアとレイナの所行の事で…………完璧な勘違いなわけで…………。それを真剣な表情で謝るから、たちが悪い。

沈黙すること5秒間。

『うわあああん！？やっぱり勘違いされてる〜〜！！』

クレアの悲痛な叫びがスピーカーの向こうから響き渡った。

「ちよっ！？カイ君！？だからあれは勘違いだって言ったでしょ！
？クレアちゃんも泣かないで……」

「大丈夫だ。禁断の恋でも愛し合っていれば必ず実るものだ。心配
はいらん、俺は口がかたいからな」

『いやああああっ！？』

「ああもっお前はしゃべんなー！」

レイナの言葉が多少下品なのはこの際無視。

3人の会話には、緊張感の“き”の字も見当たらない。それがいい
事なのか悪い事なのか、判断しかねるところだ。

その時、鳴り響いたアラートが彼らを現実へと引き戻す。

「っ！、来るぞ！」

『はい！』

カイは左、クレアは右へと機体を跳躍させ、こちらへと放たれたグ
レネードを回避する。グレネードは目標を失い、地面に命中、爆発。

『我々の存在を忘れてもらっては困る』

攻撃に続いて、ディランのシュバルツナーゲルからの通信がはいる。

『ちきしょう……俺の機体に傷つけやがって……』

続いてサーベル・サーベラからカルロスの憎悪のこもった声が響く。
彼の機体は胸部の装甲がへこみ、焼け焦げていた。だが致命傷には

至らず、戦闘は可能らしい。

『1機敵が増えたところで私達の優勢に何ら変わりはありません。そろそろ終わりにしましょう』

Gブレイズ、スタンが全兵装をこちらへと向けながら、言う。

『どうやら本格的に戦わなければならないみたいですね』

クレアが、先程とは打って変わって冷静にカイ達へ告げる。

『レイヴンは逃がしてくれと言って素直に逃がしてくれるようなお人好しじゃありませんから。今度はこちらが攻勢に出ましょう』

その言葉に、カイははっとなる。先程までの戦闘で、自分は防御を優先し、逃げる事ばかりを考えていた。一度でも自分から仕掛けたか？ 答えは否。

「……………くくくつ……………ハハハハハ！」

突然、大声で笑い出す。

「……………カ、カイ君……………？」

レイナが怪訝な表情でカイを見る。

ひとしきり笑い終えて顔を上げたカイの瞳には、先程までは無かった光が宿っていた。

それは、インフィニティ・システムを起動させた時の、恐怖をあらわすようなものではない。自信に満ちた、頼りになる瞳。

「そうか、なるほど。攻勢に……か」

逃げてばかりでは、解決しない事もある。

戦わなければならない事もある。

カイは不敵な笑みを浮かべると、スティックを強く握りしめた。

「さて、と……向こうがその気なら、こちら本気で行かないとな。
だろう？ レイナ、クレア」

「あ……」

『……！……はい！』

幸い、味方はこれ以上に無いほど、心強い。

「……久しぶりに、全開でいかせてもらう」

ブーストを吹かし、カイは交戦モードの3機へと斬り込んだ。

第22話（前書き）

更新滞り気味でスミマセン（汗）

なんとか月2〜3回くらいのパースで更新しますので、気長に待っていただければ幸いですf^_^ ;

第22話

カイは3機の中で一番距離の近かった機体、シュバルツナーゲルに目標を定める。

ブレードを展開し、真横一閃。だが、ディランは機体を真後ろに跳躍させ、光刃から逃れる。カイはブーストを吹かし、追撃をかけようとする。

「させねえ!!」

それを遮ろうと、アマテラスの真横からブレードを展開し、接近するサーベル・サーベラ。しかしカイは回避しようとしないう。光刃が、アマテラスへと振り下ろされる。

『こつちだつて、そうはさせません』

通信と共に、攻撃警戒アラートが、サーベル・サーベラのコックピットに響く。

「うおっ!?!と」

慌てて攻撃を中断し、カルロスは機体を後方へと回避。目と鼻の先をグレネードが通り過ぎ、数10m離れた地面に命中、爆発。

カルロスは背筋に冷たいものがはしるのを感じた。あれが命中していたら……嫌な想像が頭をよぎる。

『あなたの相手は私です。彼の邪魔はさせません』

カルロスに冷や汗を流させた張本人、深蒼の機体から通信がはいる。

声を聞く限りでは、乗っているのはおそらく女性、しかも若い。その声を聞いた瞬間、恐怖や畏怖の念が消え、変わりに怒りと屈辱が湧き上がってきた。

「ハッ！小娘、一発当てたからつていい気になるなよ？そんな機体で俺様に勝とうなんざ1億年はええんだよ！」

すると、スピーカーの向こうからムツとした口調で、

『小娘じゃありません。クレア・マティスです。この機体はハンターS、大切な人から譲り受けた私の相棒です。馬鹿にしたら許しませんよ？それに1億年はさすがに長すぎです』

クレアの愛機、ハンターSは、軽装甲型のコアに中型の腕パーツ、脚部は中型二脚と、バランスの良い機体設定となっている。武装は全領域戦闘を主眼に置いたもので、右手には中距離で威力を発揮するアサルトリニアライフル、左手にはエネルギー消費量を抑え、なおかつ高出力のレーザーブレード、そして背部装備は右に長距離用グレネードランチャー、左には状況をいち早く判断するための高性能レーダーが装備されていた。

全領域戦闘において瞬時に対応する事が可能なこの機体は、ゾーン・オールマイティー（領域万能）と言えよう。カラーは主にミッドナイトブルーを基調とし、さながら深海の非情なる狩人、サメを連想させる。どうやら制作者の意図はそこにあるらしく、頭部からはサメの背びれを想わせるセンサーが突起している。

ちなみに、ハンターSの“S”とはSharkの頭文字である。

「ハッ！言っじゃねえか！ならお嬢ちゃんとも呼ばせて貰おうか？」

クレアの言葉を、カルロスは嘲笑う。

『……ご勝手に』

クレアの声にはあからさまな不快の色が見てとれる。だがカルロスはお構いなしの態度で、ちやかすように言う。

「おおコワ。怒らせちゃったかなあ？お嬢ちゃん。だがなあ、これから起こる事にいちいちめくじらたててちゃあ身がもたねえ……ぜつ……！」

言い終えるやいなや、奇襲的なブレードの一閃。しかしクレアは機体を後方へと回避、ブレードを避ける。と同時に、リニアアサルトライフルを放つ。リニアレールで加速した弾丸が、サーベル・サーベラを襲う。だが、カルロスはそれを右へと跳躍し、回避。

「ハッハア！そうこなくっちゃ面白くねえ！少しは楽しませてくれそうじゃねえか小娘……！」

『また小娘って言いましたね！後悔しますよ！』

双方のACが相手に向かい、同時に加速。派手に火花を散らし、光刃が交わされた。

クレアの戦いを、カイは横目でちらりと確認する。

カイは彼女が相当な腕のレイヴンである事を見抜いていた。

先ほど、サーベル・サーベラがカイ達に攻撃を仕掛けた時、彼女は距離を感じさせない正確な射撃で、自分達を窮地から救ってくれた。しかも、相手は移動中で、アマテラスの目の前まで接近していた。それをカイ達に被害を及ぼす事無く、見事に命中させて見せた。た

ったそれだけの情報だったが、カイにとって彼女の腕を証明するには十分だった。カイが先ほどのカルロスの攻撃を避けなかったのも、彼女を信じての行動。現にクレアはカルロスと互角、いやそれ以上の戦闘を見せている。カイは口の端に笑みを浮かべた。

その時、シュバルツナーゲルからミサイルが放たれるが、カイは前方への急加速により回避。同時にブレードを展開し、逆袈裟の斬り上げから袈裟がけに斬り下げ、そして真横一文字に斬り払う。流れるような連続攻撃。しかしディランは機体を小さくバックステップさせ、二撃を回避。そして最後の真横の斬り払いで機体を後方へ跳躍。地面に着地と同時にショットガンを発射した。散弾は広範囲に散布し、アマテラスの逃げ道を塞ぐ。

「アリス！」

『了解』

たった、それだけの会話。だが長年共に戦ったアリスとカイには、それだけで十分通じるのだ。

一瞬、アマテラスの姿がまるで失敗した写真のように、ぶれる。次の瞬間、アマテラスはシュバルツナーゲルの真上にいた。ブレードを煌めかせながら、真下のシュバルツナーゲルへ向けて機体を加速させた。

ディランは勝利を確信していた。散弾が命中すれば、敵の動きは止まる。そこにグレネードを脚部に撃ち込み、移動能力を奪う。今まさにその散弾が命中し、敵の動きが止まる……はずだった。

「！？、何…？」

ディランは驚きと困惑の入り混じった声の上げる。

弾丸は、敵が“いたはずの空間”を貫いた。

そこに敵の姿は無い。いや、消えたと言うべきか。敵の機体は一瞬の残像を残し、文字通り“消えた”。とっさにみたレーダーにも反応は無い。

かなりの近距離で放ったため、避ける事はまず不可能。どんなに早い反応で、どんなに早く行動したところで、腕部か足部の1本や2本はまのがれない。もし何らかの方法で機体を肉眼やレーダーで確認できない状態にしているとしても、本体はそこに“存在”している。ならば散弾は命中しているはずなのだ。

しかし散弾は命中する事が無かった。つまり、敵はそこに“存在”していないということになる。ディランは目の前で起こった事が信じられない。不可能だ、有り得ない、と。

戦闘はディランに考える暇など与えてはくれなかった。

攻撃警戒アラートがけたたましい悲鳴をあげる。だが、敵の姿は無い。

長年のレイヴンとしてのカンというものだろうか。ディランはとっさに機体を右へと回避行動をとる。刹那、光刃が煌めき、シュバルツナーゲルの左腕を肩から切断した。

「ぬうつ!？」

ダメージアラートがコックピットに鳴り響く。

切り離された左腕はくると宙を舞い、地面に落下する。

体勢を立て直し、そこで初めて敵の攻撃を知った。

敵は姿を消した直後、何らかの方法でシュバルツナーゲルの真上へと移動。そして落下スピードとブーストの加速をのせた最大級の斬撃をシュバルツナーゲルへと繰り出したのだ。着地した敵機の足下に舞う砂埃、振り切られて地面までも切り裂いたブレードが、そのスピードと攻撃の破壊力を物語っていた。

あれをもし、後方へと回避していたら、間違いなく避けきれずに致

命傷を受けていた。

ディランの額を、一筋の汗が滴る。それは紛れもない畏怖から来たものだった。

そこに、先ほどまで自分達に翻弄されていた逃げ腰の敵はもういない。圧倒的な力で先ほどとは逆に自分を翻弄する化け物じみた敵がいた。

ゆっくりと地面に突き刺さったブレードを引き抜き、こちらに向き直る銀の機体。その姿がディランの畏怖をさらに膨れ上がらせた。

スタンはイライラと、握りしめたスティックを人差し指で叩く。

先ほどから敵をロックし続けてはいるが、味方の機体に接近しているため、下手に攻撃を加えると巻き込む恐れがあった。射撃中心の機体の弱点を見事についたうまい戦い方。それがスタンのイライラを更につのらせる原因となっていた。

「これだから徒党を組むのは嫌いなんです……」

誰に聞かせるでもなく、スタンは呟いた。

ロックサイトには、相変わらず味方のシュバルツナーゲルに接近し、こちらが攻撃を加えられぬよう小細工をする銀の機体が映し出されている。

スタンは敵をロックサイトに捉え続ける。

宙を舞う、肘から先の右腕。それは切断面から電気的な火花を散らし、地面に落下した。

左腕を切断されたシュバルツナーゲルは、アマテラスに向けて残った右腕のバズーカによる攻撃を試みた。だが反動の大きいバズーカは、発射と同時に致命的な隙を作った。カイはそれを見逃さず、機体を沈み込ませてバズーカの避けると、グラヴィティ・シフトを使用し一気に距離を詰め、ブレードを一閃。シュバルツナーゲルの残

つた右腕を、肘の関節から切り落としたのだった。

『ぐっ……！？』

ブーストをふかし、距離をとろうとするディラン。

「逃がさない」

カイはグラヴィティ・シフトを展開。機体周囲の重力を圧縮、元に戻る反動を利用し、機体を加速させる。ミサイル発射態勢をとっていたシュバルツナーゲルは、それに反応する事ができない。カイは機体を急停止させる。足の裏が地面を滑り、砂埃をたてた。そして勢いそのままに機体を沈み込ませ、ブレードによる真横一文字の斬撃。

ズバン！！

小気味良い切断音と共に、シュバルツナーゲルの脚部が膝の半ばかり胴体と別れを告げた。

ズン、と地面へ仰向けに倒れ込む。それでもなお距離をとろうと、ブーストを噴かすディラン。カイは達磨状態のシュバルツナーゲルを踏みつけ、カラサワを突きつける。

「チェックメイト。無駄な抵抗はよせ」

『…私を人質にとったところで連中は攻撃を止めたりはせぬぞ』

通信機を向こうから、ディランの皮肉げな声が響く。

カイは口の端に不敵な笑みを浮かべ、言う。

「どうかな？」

カイは未だ戦闘を続けるカルロスとクレアへと視線を移す。

戦況は……クレアへと傾いていると、少なくともカイはそう思った。

クレアはガトリングガンの掃射を、ブーストホバーによる蛇行移動でかわす。だが、クレアの機体はアマテラスほど素早くないため、回避し損ねた弾丸が装甲を傷つけた。しかし、せいぜい折り返しの時に命中する2〜3発程度。単発の威力自体は低いため、さほど警戒する必要もない。問題は、接近した時にあった。

「てやああああー!!」

クレアはブレードを展開し、サーベル・サーベラに斬りかかる。

しかしカルロスは、右手装備のハンドパルスガンを迫り来るハンターSへ向けて発射。ドシュツという独特の発射音と共に、円盤状の銃口から放たれる青白い光の玉。命中すると、外部に損傷はないが内部の機構を破壊される。唯一の対抗策であるシールドを持たないハンターSにとって、この攻撃は避けるしかない。

幸いパルス弾は他の射撃武器に比べて弾速が遅く、回避する事は容易だった。

クレアは機体を右へと跳躍させ、パルス弾を避ける。すると待ってましたと言わんばかりにサーベル・サーベラがブレードでハンターSに斬りかかる。クレアはすぐさまこちらにもブレードを展開し、振り下ろされた光刃を弾き返す。そして後方へと距離をとる。

『なんどやつても同じだぜえ!!』

カルロスは叫び、背部のガトリングガンをクレアへと向ける。

カルロスはこのパターンを繰り返し、敵の集中力が切れたところで

一気にカタをつけるつもりだった。

この戦い方を続けると自分は疲れず、相手だけが疲れ、集中力が削り取られていく仕組みになっている。現に、カルロスの手・サーベラはほとんどその場から動いていないのに対して、クレアのハンターSばかりが振り回されている。カルロスは近づいてくる勝利の気配を感じ、酔いしれながらガトリングガンの手・トリガーを引いた。クレアの、計算通りだとも知らずに。

「ここだあつ!!」

ガトリングガンが回転を始めるや否や、クレアのハンターSはブレードを展開し、手・サーベル・手・サーベラへ突貫した。クレアはガトリングガン特有の、トリガーを引き銃身の回転から発射までのほんのわずかなタイムラグ、敵の機体が無防備になる瞬間、1秒に足るか足らぬかというその時を待っていた。後方へと跳躍する機体を無理矢理前方へと加速、手・サーベル・手・サーベラに肉迫。

「っ!?!、なにい!」

意表を突かれたカルロスは、ブレードを起動するー!とができな。接近されすぎている。

メインスクリーンいっぱい敵の頭部、その左右が繋がった細い緑のカメラアイが、ブン、と光る。

「ひっ!?!」

ズンツ、という鈍い衝撃が、手・サーベル・手・サーベラを襲った。メインスクリーンにノイズが混じり、いくつかの計器やモニターが光を失った。

クレアはサーベル・サーベラの腹部に突き立て、貫いたブレードを抜く。この時点でサーベル・サーベラのジェネレーターは破壊され、攻撃能力は失われていた。だが、愚弄された獰猛なサメは、獲物を許そうとはしなかった。

ブリストを噴かし、離れようとするその瞬間に、敵の四脚のうち前2本をブレードで切り落とす。バランスを崩し、前のめりに倒れる敵。クレアはそれにブレードの切っ先を突きつけ、一言。

「言っただでしょう？許さないって」

カルロスは、今更ながら敵を愚弄した事を後悔した。

第23話 決着

『お待たせしました。こちらは任務完了です』

クレアが動けないサーベル・サーベラの頭部を掴み、引きずりながらこちらに歩いて来た。それだけ見ると、まるでこちらが悪役のようだ。そんなクレアに、カイは少し困ったような口調で言う。

「手加減無しだな」

『私の大事な相棒をザコよばわりしたんです。まだ足りない位ですよ。それに、カイさんだって……』

クレアはカイの足下に視線を移す。そこには両手足を切断され、うつ伏せに倒れるシュバルツナーゲルの姿。通信機の向こうで、クレアが苦笑する。

『手加減してないじゃないですか』

「ん…そうかもな」

すでにこの2人は平均的なレイヴンのレベルを超越している。もはや手加減するしないの域である。

ふと、クレアが思い出したようにきりだした。

『そういえば、レイナさんは？さっきから声が聞こえないですけど

……』

その言葉に、カイはレイナのいる後ろを振り返る。

「……………うん……………」

そこには、半分寝袋にくるまったまま、目を回して倒れているレイナの姿。

「……………何してるんだ？」

カイは呆れたようにレイナに問うが、彼女はまたうつとうなって、転がる。

レイナが寝袋のチャックが引つかかって取れずにもがいているうちに戦闘が始まり、急加速に足を取られて転び、頭をぶつけて半失神状態になった所に、グラヴィティ・シフトの連続使用により狭いスペースをもみくちゃにされて目を回した……………という涙無くしては語れない事の顛末があつたらしいが、カイがそれを知るはずもない。

「おい……………起きろ！戦闘中だぞ！」

「……………ふえ？戦闘？……………んわぁ！そうだった！」

慌てて飛び起きるレイナ。まだ片足に寝袋が絡まっているが……………この際無視。

「……………で、あれ？もう終わってる……………？」

この後に及んでまだ寝ぼけた事を言う。

カイは溜め息をつきながら、後ろの眠り姫に戦況を報告する。

「いいや、まだだ。まだ1機残っている」

カイはメインスクリーンへと視線を移し、少し離れた場所で待機中の敵機――Gブレイズを睨んだ。

スタンが握っているスティックに、ピシッとヒビが入った。スティックを握る手が小刻みに震えている。

「…………ふ…………ふ…………ふ…………」

スタンはうつむいていて、その表情を詳しく読み取る事はできない。だが、うつむいたために顔を隠した長めの髪から覗く口元だけが、笑みの形を作っていた。最初は小さな声で、次第に肩を上下させながら、激しく、笑う。

「ふふふ…………は、はははは！！」

のけぞるように天を仰ぎ、笑い続ける。

「は…………はは、は……………これだから…………」

スタンの手がコンソールのコンピューターを操作し、全兵装がアクティブへと設定された。

ロックサイトは“4機”のACへと狙いを定めている。

「これだから……………徒党を組むのは……………嫌いだったってんだよおおお！！」

そこには常に冷静沈着なスタンの姿はなく、歪んだ敵意を剥き出しにした狂気だけが存在していた。

力任せに引かれたトリガーに、また一つ亀裂が入った。

攻撃警戒アラートがけたたましい音をたてて警告を発した。迫り来る弾丸とミサイルの雨、すでに肉眼でも確認済みだ。その数は2機のAC相手に放ったにしては多すぎる。

『カイさん!』

クレアが叫ぶ。

はじかれたようにスティックを握りしめ、ペダルを操作して回避行動に移ろうとする。が、足下に転がるシュバルツナーゲルを見て、カイはその手を止めた。

両手両足を切断され、動けないシュバルツナーゲル、ジェネレータを破壊され沈黙するサーベル・サーベラ。回避行動をとるということとは、同時に彼らを見捨てるという事である。2機のACを抱えて回避する事はまず不可能。クレアと分担しても避ける事はできない。

(どうする!)

その間にも、敵の攻撃は迫って来る。助かるには、この2人を見捨てるしかない。

(いや……)

カイは再びスティックを握りしめた。

(今なら……できる!!)

確固たる自信が、カイの胸を焦がした。

「カイ君!何してるの!早く回避……」

レイナの警告も聞かず、カイはメインパネルのアリスに叫ぶ。

「アリス！グラヴィティ・インパクトを機体周囲50mに展開！そのまま最高出力で固定！できるか！？」

「やってみます」

アマテラスの周囲に、グラヴィティ・シフトを応用した反重力衝撃波、グラヴィティ・インパクトが展開された。これは本来、周囲の敵を掃討する為に使われる対複数目標用グラヴィティ・シフトである。しかし、今は違った。

展開したグラヴィティ・インパクトはクレアやディラン達を吹き飛ばすことなく、直径50mの半球状に変化、そして固定される。

「全員動くな！少しでも動いたら半重力にふき飛ばされるぞ！」

カイが通信機に向かって叫んだ直後、4機を守る半重力のドームにミサイル、弾丸、プラズマ弾、グレネードが次々と命中した。

半重力は強固な壁となり、アマテラスを含む4機を守る。だが、その衝撃までは遮ることはできず、まるで箱の中に入れられて蹴り飛ばされたような衝撃が襲いかかった。

「きゃああああっ！！」

「ひいひい！？まだ死にたくねええ！？」

「ぐおおおっ！！」

スピーカーから3人の悲鳴がこだまする。

だが、半重力ドームの中心、実際にそれを展開しているアマテラス

やカイ達にかかる負担はその比ではない。

「うあ、……あ……！」

レイナは叫び声すらあげることができず、うずくまって身を守っている。

カイは衝撃に表情を歪ませながらも、アリスへ次の指示を与える。

「アリ……スっ！……インフィニティ……システムを……」

『！？っ、しかし、今インフィニティ・システムを起動しては、カイさんが……！』

アリスが驚愕の表情で叫ぶ。

インフィニティ・システムはパイロットと機体をシンクロさせ、驚異的な戦闘能力を引き出す、カイにしか使いこなせないシステムである。

しかし、機体とパイロットをシンクロさせるという事は、機体を受けるダメージもパイロットに反映されるという事だ。

今、アマテラスにかかっている負担は尋常なものではない。起動させた時にカイの体にかかるダメージも尋常ではないはずだ。さらに、インフィニティ・システム起動時の神経接続は苦痛を伴う。

カイがそれら全ての負担に耐えられるという保証はない。

アリスはカイが考えを変えてくれる事を願い、懇願するようにカイを見つめた。

カイは、衝撃に耐えながら、一言。

「アリス……俺を……信じろ……！」

カイの強く、それでいて安心させるような眼差し。

——そうだ、この表情をするときのカイさんは——

カイは微小していた。こんな状況でもなお、光を失わないその瞳がアリスに信じる為の“自信”を与えた。

『わかりました！インフィニティ・システム、起動します！』

コクピットに高鳴り始める起動音。

赤い光が、シートやスティックをつたい、カイの体に流れ込む。

「！？っ、うああああ！！」

苦痛が、襲いかかった。

ピーッ、という警告音が、機体のオーバーヒートを告げる。

我を失い、ただひたすらにトリガーを引いていたスタンも、その音によつやくトリガーから指を離れた。

武器の発射の際に発生する熱が、機体の安全温度をはるかに上回っていた。冷却の為に機能を失ったGブレイズのコクピットで、スタンは荒い息を鎮めていた。

「はあ…、はあ…、…………ふう、私としたことが…………やりすぎてしまいましたね」

誰に聞かせるという訳でもなく、彼はずれた眼鏡を中指で定位置にもどしながら呟いた。着弾地点には爆煙と砂埃がたちこめていて、目標を肉眼で確認する事はできない。更には爆発によって引き起こされた電波障害のため、レーダーやセンサー等も今は使い物にならなかった。

だが、あれだけの攻撃をまともに受けて、無事なはずがない。良くて半壊、悪くすれば跡形残らずふき飛ばされているかのどちらかだ。味方の2人を巻き添えにしたのは任務を優先したためで、レイヴンとして当然の選択である。彼らもレイヴンであるならそれなりの覚悟があつたはずだ。

スタンはため息をつき、粉塵が舞う着弾地点へと機体を進めた。依頼内容は敵の捕獲、しかも“なるべく無傷で”だ。こうなつてしまった以上、まともな報酬を依頼主が出すはずもない。

腕の一本くらい回収していけば、それを種に少しくらい報酬が受け取れるかもしれない。望みは薄いのだが……。

「少しくらいは残っていますかね……」

スタンは機体を粉塵の手前で停止させる。そして、なんとなく――確認の為に一応、カメラアイに連動している赤外線ゴーグルをシートの後ろから引き出し、覗き込んだ。

「！？っ」

スタンは機体を後方へと回避させた。刹那、粉塵の中から飛び出してきた敵、アマテラスのレーザーブレードが、Gブレイズのガトリングガンとプラズマライフルを切り裂いた。ガトリングガンはバラバラになり、プラズマライフルは爆発し、片手と共に消滅した。着地したGブレイズへ、アマテラスは更に追撃をかける。

「つくそがあ！舐めるなあ！」

スタンは武器を切り替え、背部グレネードランチャーとミサイルポッドをアクティブにした。ロックサイトが緑から赤に変わり、アマテラスをロックオンする。

スタンはニヤリと狂気的笑みを浮かべ、発射トリガーを――引いた。

銃口からは、何も出ない。

ピーツという警告音と共に、メインディスプレイには赤い“OVER HEAT”の文字。

「っ！？、しまっ……」

スタンが最後の文字を口にする前に、Gブレイズの頭部はアマテラスの光刃により、宙を舞っていた。

――――

『気をつけてくださいね？こういう輩が他にもいるかもしれませんから』

今、再び旅立とうとするカイとレイナに向け、クレアが念をおして注意を呼びかける。

『ありがと、クレアちゃん。……あいつ等はどうするの？』

あいつ等とは勿論、少し離れた場所に転がっている3機のACとそのパイロット達のことだ。

「彼等もレイヴンですから、自分達でなんとかするでしょう。心配いりませんよ」

『そうだね。それと、ごめんね？こんな夜中に助けてもらっちゃって』

「いえ、いいんです。これもアフターサービスの一つです。それに……」

クレアは通信機の向こう、レイナの隣にいらっしゃるであろう銀の機体のパイロットに想いをはせる。

何か言葉を紡ごうとするが、ふるふると頭を降って考えを改める。

「……いえ、なんでもありません。じゃあ、私はこれで。お二人も気をつけて」

そう言うと、クレアは機体をトライヴアー・シティへと向ける。

『うん！クレアちゃんも元気でね！』

『世話になった。そのうち機会があったらまた来る』

レイナの後に続いた声に、思わずクレアは振り返る。しかし、後部スクリーンにアマテラスの姿はなかった。

ブーストを噴かし、すでに荒野の彼方へと遠ざかって行く銀の機体。美しく、儚いその姿を見つめ、クレアは呟いた。

「……また、いつか……」

彼女はフットペダルを踏み込み、機体をホバリングさせて街へと向かう。少し、悲しげな青白い炎の筋を引きながら。

—————

大破した機体から、ディランはやつとの思いで這い出した。コクピットのハッチは歪み、力づくでこじ開けるしか方法がなかった。お

かげで手のひらがボロボロだ。

外は静寂に包まれていた。先程まで激しい戦闘があつた事など、まるで嘘のようだ。むしろ、戦闘などという行為をしていた自分達こそが、この静寂の世界の招かれざる客で、この静けさこそが本来あるべき姿なのだ、と思えてくる。

ふと、西の空を見上げると、光の尾を引いた銀の機体が遠ざかつて行くのが見えた。ブースターからこぼれ落ちた青白い炎が、一瞬の存在の後、消える。まるで、羽ばたいた天使の翼から抜け落ちた純白の羽のよう。

それが戦闘の道具である事を忘れてしまいそうになるほど、美しい光景だった。

自分達はいく先程まであれを破壊しようとしていた。それが無性に愚かな行為のように思えてならない。

ディラン首を振り、その考えを打ち消す。レイヴンたる者が、敵に友好感を持つなどあつてはならない。余計な感情なのだ。そう、余計な――では彼等は何んだ？あの時、彼等は自分達を見捨てて逃げようとせず、逆に必死で守ろうとした。あの、不可思議な力を使つて――。

自分達を守つたのは、彼等がもつ“余計な感情”のおかげだ。

ディランは今まで信じてきた自分の中の根本を揺るがされたような気がして、そんないつ終わるともしれない考えをはせていた。

「よお、生きてたか」

不意にかけられた背後からの声に、ディランは振り向く。そこには大破したディランの愛機に寄りかかり、煙草を吸うカルロスの姿があつた。

視線が合うと、彼ははふつ、と笑い、こちらに歩み寄つて煙草をすすめる。ディランはそれを、首を振るだけで断つた。

カルロスは肩をすくめ、ディランの傍らに立つと、彼と同じく遠ざ

かる銀の機体を見つめた。

「任務失敗だな」

「ああ」

どんどん遠ざかり、豆粒ほどの大きさになる銀。それでも、月明かりを反射して眩い程に輝く。

「こりゃ赤字だな」

カルロスは腕組みをして、苦笑しながら言う。その言葉からは、憎しみや嫌悪などは感じ取れない。

「けど……」

「？」

言いかけたところで、彼は言葉を切る。何か、口に出すのを躊躇っているような、そんな感じだ。

ディランは怪訝な表情で彼を見た。

「……わりい気は、しねえな」

「！……ああ」

月明かりは、選ぶことなく、全てを照らしていた。

時折火花を散らす、ひび割れたモニター。その、わずかに残ったディスプレイに映し出される、“DAMAGE FULL”の文字。

ーツを売買していたパーツ取引業者を摘発した。事件が発覚したのは2日前、我が新聞社に匿名の情報提供により、このパーツ取引業者の違法が発覚した。

この業者はレイヴンに報酬を支払い、パーツの強奪などを依頼した。更には、希少価値の高いレガシーパーツの裏取引なども請け負っており、自警組織『A R M S』は余罪についても追及している。

この事件解決の功労者が、たった1人の少女だということを、人々はこの小さい記事から知るよしもない。ましてや、その少女がレイヴンだという事も、明かされなかった。

第24話 クロヴィリアル・シティ（前書き）

お待たせしました！ようやく24話です！

これが終われば内容的にも一段落です。折り返し地点もあとわずかですね。

では、「クロヴィリアル・シティ編」、どうかお楽しみください（＾＾）／

第24話 クロヴィリアル・シティ

川沿いに続く針葉樹林。上流へと向かう途中に、その都市はあった。この時代には数少ない、戦前と変わらぬ自然に囲まれた都市、『クロヴィリアル・シティ』。

レイヴンのサポート企業、『Blue diamond』の拠点、そしてカイ達の次の目的地である。

針葉樹帯を抜けると、のどかな田園風景が広がっていた。豊かな自然を生かし、農業を行っているらしい。所々の畑に害虫駆除用農業ロボットが、せっせと仕事をこなしている。

その田園風景を超えると、見えてくるのが都市の周りを囲む城壁、そして頑丈なメインゲートだ。都市に入る手続きは、トライヴァー・シティに比べると随分立派なもので、レイナのBD登録カードが無かったら追い返されるところだった。

トライヴァー・シティとの違いはそれだけではない。都市内でのACの搭乗は許可されていて、車道の隣にAC専用道路があるくらいだ。勿論、都市内での戦闘は禁止されている。普段なら顔を合わせただけで戦闘になるようなレイヴン達が、何故かこの都市では大人しく規則に従っていた。その理由は、後で知ることになる。

カイ達は、都市の中心部にある一件の喫茶店に来ていた。どうやらこの喫茶店はレイヴン達の交流の場になっているらしく、店の横にはAC専用のパーキングが設置されていた。

中にはいると、いかにもレイヴンと思える男性達が、真っ昼間から酒を酌み交わし、情報交換をしあっていた。

2人はカウンターに腰掛け、この喫茶店のマスターにコーヒーを注文した。

「……………で？そろそろこの街に来た理由を教えてくれないか？」

出されたコーヒーには目もくれず、カイは隣でくつろぐレイナに問いかけた。

「慌てない慌てない そんなにせっかちじゃ女の子にモテないよ？」

話は完全にはぐらかされた。

レイナはコーヒーを一口飲むと、カイの前にあのカードを置いた。

「これは……」

「そ。レイヴンサポート企業BDの登録カード。カイ君もさっきみたでしょ？これがあれば、レイヴンとしてやっていく上で色々と便利なワケですよ」

このカードの便利さは、先程カイも目の当たりにしていた。レイナがこのカードを見せただけで、疑いの眼差しを向けていたゲートの警備員が、すんなりと都市に入れてくれた。他にも、依頼の仲介や銀行代わりにもなっているらしい。

確かに登録する価値はありそうだ。

と、そこまで考えたところで、カイはレイナの思惑を読み取った。

「なるほど、俺にもこのBDとやらの登録しろというわけか」

「……」

カンのいいカイに、レイナは説明の手間が省けて大助かりらしい。嬉しそうに、また一口コーヒーを口に運ぶ。

「けど、1つ問題があつてねえ……」

「問題？」

カイが聞き返すと、レイナはコクリと頷き、話を続け……

ガタンッ！！

「何だとしてめえ！この俺を舐めてんのか！」

「やろうつてのか！？上等だ、外に出ろ！」

……る前に、男の怒声に遮られた。

カイは驚いて、声のした方向を見る。どうやらレイヴン同士でいざこざがあったらしい。屈強な髭面の男2人が、睨み合いながら扉を破りそうな勢いで外へと飛び出していった。

他のレイヴン達はというと、やれやれとでもいった表情で、何事も無かったかのように雑談再開。レイナも全く気にとめていない。

カイはそんなに彼らの態度を不審に思い、レイナに聞く。

「……いいのか？」

「なにがあ？」

レイナは残ったコーヒ―を喉に流し込む。

「いや、だから……あのレイヴンを止めなくていいのか？」

「べつにいゝ。ほつといても大丈夫よ」

カイが、そうなのか？と納得しかけたその時、轟音と地響きがあった。

「!??」

「あゝあ、始めちゃった」

こんな異質な状況にもかかわらず、レイナはカウンターに頬杖をついて呑気にサンドイッチを頼んでいる。どうやら困惑しているのはカイだけのようだ。

その時、出口脇の窓からとんでもない光景がカイの眼に映った。

それは、ACの脚部。あのレイヴン2人はあるうことかACを持ち出し、市街地戦を始めたのだ。

ACの脚部が喫茶店の前を通り過ぎると同時に、銃声が鳴り響いた。

「お馬鹿ねえ。こんな事したらクロス・ナイツが黙って……って、カイ君!？」

カイはすでに店の外に飛び出した後だった。カランカラン、扉のベルが揺れている。

「ああもうつ!?!何考えてるのよ!?!マスター!お勘定ここに置いとくね!」

レイナはポケットから少し多めの勘定をカウンターに置き、カイを後を追って外に飛び出した。

弾丸が飛び交い、道路が爆発し、建物は破壊される。外は案の定、とんでもない事になっていた。

「馬鹿な……一般市民がいる町中でこんな……」

カイは驚愕しながら、街の惨状を見つめた。

おそらくあの2体が原因であろう爆発が、遠くの建物を破壊した。戦争中、カイは一度たりとも一般市民がいる中での市街地戦を行わなかった。それは人間として最低の規則だと、自分の心に決めていたからだ。部隊員達も、自分の意見には賛同してくれていた。

だが、彼らはルールを持たない傭兵、“レイヴン”だ。自分のように規則など持つはずがない。

――おそらく死傷者も沢山出ているだろう。

カイは腰のポーチから、トライヴァー・シティでレイナに渡された携帯通信機を取り出し、はじめたように叫んでいた。

「アリス！機体を起動させろ！戦闘だ！」

カイが叫んで5秒と経たないうちに、喫茶店の隣のパーキングから、銀の機体――アマテラスが飛び出してきた。

アマテラスはカイの前に着地し、ゆっくりとケーブルを下ろす。

カイがそれに掴まり、アリスに上げるよう指示しようとしたその時。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

レイナが慌てた様子でカイへと駆け寄って来た。

「はやく掴まれ！」

「ねえ！いったい何を…」

レイナの言葉はカイの右耳から入って左耳から出ていつている。…つまり何も聞こえていない。

2人が掴まると、ケーブルはゆっくりと上昇を始める。

カイはコクピットに滑り込むと、シートベルトを装着し、ステイツ

クを握った。すでに戦闘システムの起動は完了していて、まるで操縦してくれとでも言っているようだ。アリスの仕事の早さには、いつもながら感謝の念を抱かずにはいられない。
メインモニターが起動し、そのアリスが姿を現した。

『おはようございます、カイさん。こんな町中で戦闘ですか？』

すぐさま状況の確認をする彼女は、戦闘サポートAIとして十分過ぎる程律儀に仕事をこなしている。その律儀さゆえに、この癖は抜けないようだ。

「アリス、今は昼だ。それにさっき別れたばかりだろう？」

『えっ？あ…はい、すみません』

だからといって、彼女を責めるわけではない。それが彼女の長所だからだ。

カイはフットペダルを踏み込み、ブーストを点火。爆発と悲鳴に向かい、機体を躍らせた。

2体のACは、絡み合うようにして戦闘を続けていた。

片方は近距離格闘戦に特化した、軽逆間接型。もう片方は中距離射撃戦に重点をおいた、中四脚型である。

中四脚型が放った両肩のグレネードランチャーを、軽逆間接型が回避し、接近。右腕のブレードで切りつけるが、中四脚型の武器と一体化した両腕のマシガンにより阻まれ、左腕のレーザーライフルで牽制しながら後退、再び接近という繰り返しだ。

回避され、目標を失ったグレネードが射線上にあった建造物や車両を破壊、牽制で放たれたレーザーが命中したものに風穴を開ける。
街は文字通り、惨状と化していた。

一瞬の隙をついて、中四脚型が攻勢にでた。接近してきた軽逆間接型に、隠し玉だったイクシードオービットによる攻撃を加えたのだ。イクシードオービットとは、コアに搭載されている自律型攻撃兵器の名称である。これはコアによって異なり、レイナのラブリー…以下略のようなオーバーブースト型、弾切れの際の予備武器を搭載するハンガー型（ちなみにクレアのハンターSはこのタイプである）、そしてこのイクシードオービット型の3種類がある。このレイヴンのACは、コアから2つのイクシードオービットを射出し、エネルギー弾を撃ち出す一般的なタイプだった。

予想外の攻撃に、軽逆間接型は反応する事ができず、エネルギー弾をもろに受けてしまう。バランスを崩した機体をなんとか着地させ、体勢を立て直そうとした時には、中四脚型は至近距離にまで接近していた。両肩のグレネードランチャーが、軽逆間接型をロックする。

「これで終わりだ!!」

勝利を確信した中四脚型のレイヴンが、優越感にも似た感情を感じながら、スティックのトリガーを引き絞る。その時。

『止める!!』

通信機から、敵のものではない“誰か”からの声が響いた。

「!?!」

リーダーの反応に気づき、振り返ると同時に機体を衝撃が襲った。

「うおおっ!?!」

機体は30m程ふき飛ばされ、落下。更に道路上を転がり、ようやく停止した。

痛む後頭部をさすりながらメインスクリーンに目をやると、敵のACにシールドを使った体当たりを食らわせ、ふき飛ばす銀の機体。

「…なんだてめえは？」

『市街地での戦闘は止めると言っている』

「なんだと？」

まるで自分が超越者でもあるかのような口調。気に食わない。気に食わない奴は、敵。

過程が1から10あるとするならば、1と2ときていきなり10に飛んでしまう程単純な思想だ。

と、いう訳で、カイはいつの間にか敵にされてしまうのであった。

カイがふき飛ばした2機のACが、パラパラと機体から瓦礫を落としながら立ち上がる。一応警告はしてみたものの、相手は見るからに単細胞なレイヴン。警告を聞き入れる気はなさそうだ。

『ちよつと攻撃が当たったからっていい気になってんじゃねえぞ？ ああ？』

逆関節型ACからの通信。なんだか一昔前のヤンキーのような口調だが、そこは気にしないことにする。

『邪魔するってんならてめえから先に始末してやろうか？』

おまけに悪役キャラ丸出しのセリフを、彼はなんの抵抗もなく口に

出す。こういった輩は大抵逆恨みがひどいため、関わるとうろくな事がない。レイナがレイヴンとして生きてきた中で学んだ知恵である。できれば適当に誤魔化して逃げたい所だが、あいにくそうもいかない。

今、このACのスティックを握っているのはカイだ。彼の言動とそのスティック操作ひとつに命運がかかっている。だから、レイナは必死に、カイをなだめる。

「ほ、ほらカイ君？争い事は良くないよ？他人ごとに首を突っ込むとろくな事ないって私のおばあちゃんが言ってたし……。向こうもあ言ってる事だし、ここはひとつ大人しく退いた方が……」

「もう一度言う、戦闘を中止しろ。貴様等のしてる事は、感情的なただの破壊行為に過ぎない。さもなくば……俺が相手をしよう」

……………うそーん。

「……………おもしれえ。ソイツをぶっ殺すまえに、まずはてめえのそのキラキラうつとつしい機体を鉄くずにしてやる！」

『後悔すんじゃないぞ！首突っ込んできたおまえが悪いんだからなあー！』

……………ははは、もうどーにでもなれ。

あきらめにも似た感情がレイナに芽生えた。

中四脚型が、背部のグレネードランチャーをこちらに向け、構える。軽逆関節型がレーザーブレードを展開する。

——これ以上街を破壊させるわけにはいかない。勝負は一瞬で決める。まずは中四脚型からだ。

カイはスティックを強く握り、臨戦態勢をとる。ブーストを点火させようと、フットペダルにかけた足に力を込めたその時だった。小さく、しかしそれは確実に、こちらに近づいて来た。聞こえるのはヘリのローター音。

『ちいつ…来やがった』

軽逆関節型のレイヴンが、苦々しげに吐き捨てた。

彼等がそれを嫌がる理由を、カイは知らない。だがレイナはその理由をよく知っているようだ。

「……ヤバイ」

「？、何がだ？」

「あのヘリよ！あれはこの街では絶対的な力の象徴なんだから！」

それを搭載した大型の輸送ヘリが、カイ達の頭上に姿を現した。搭載されたものがACだとわかるまで、さほど時間はかからなかった。ガコン、という音と共に、3機のACが投下される。それらは空中でブーストを噴かし、分散。カイ達を取り囲むように着地した。

白い大きな布をマントのように羽織り、着地の衝撃で沈み込んだ機体を立ち上がらせると同時に、3機は一斉に布を翻させる。布の奥のボディは、吸い込まれるような純白のカラーリングが施されていた。

『我々はクロヴィリアル・シティ自警組織、『十字騎士団』（クロス・ナイツ）です。クロヴィリアル・シティ第18都市法、都市内でのACによる戦闘は禁ずる。よって貴方達を法律違反とみなし、身柄を拘束させていただきます』

カイから一番近くにいたACから通信が入る。透き通った、男性とは思えないような少し高めの声。柔らかな口調だが、なぜか言い知れぬ不安をかき立てる。言葉の内容のせいだろうか。

『理解できたなら、速やかにACから降りてください。もし命令に従わないのであれば、実力行使もやむを得くなります』

実力行使、おそらくそのままの意味だろう。

一同が沈黙する中、それを破ったのは軽逆関節型のレイヴン。

『ちっ、クロス・ナイツだろうと何だろうと、俺の邪魔をするやつはみんな敵だ！てめえ等全員まとめてぶっ潰してやらあ！』

軽逆関節型が、声の主の駆るACに向かい、レーザーライフルを放った。レーザーは一直線に、白亜の機体へ吸い込まれていく。

『……しょうがありませんね』

白亜の機体は布を翻し、自機を覆い隠した。

『そんな布がなんだ！』

避けようとしていない白亜の機体に、軽逆関節型のレイヴンが勝ち誇ったように叫ぶ。

レーザーはそのまま布を貫き、命中する……はずだった。

『！？っ』

貫いたのは、布だけだった。肝心の本体は、そこにいない。

『2人共、くれぐれも殺さないように。私はあの銀の機体をやります』

『了解』

カイの勘が、警告を発した。それに感應するかのように攻撃警戒アラートが、コクピットに鳴り響く。

『カイさん！上です！』

アリスの声に…いや、ほとんど反射的に機体を後方へと回避させる。すると、回避前の地点に真上から高出力のレーザーが突き刺さった。レーザーがはじけ、地面をえぐる。

『ほう、やるようですね』

通信機から響く、透き通った声。カイ達の目の前に、中二脚型の純白の機体が降り立った。

『一撃で決めるつもりだったのですが…まあ、いいでしょう。抵抗すると言っのなら、それなりの対処をするまでです』

その言葉に、カイは一つの考えが浮かぶ。

「……勘違いかれてる……」

「ちよつ、ちよつと待て！俺達は別に…」

『命乞いですか？それなら心配ありません。殺しはしませんから』

声の主は柔らかな口調で言うが、どうにも死刑宣告としかとれない。

『私のAC、ミカエルの剣を、とくと味わっていただきましょ
う』

白亜の機体は光の刃を閃かせ、アマテラスへ突貫した。

第25話（前書き）

カイ君達も戦闘続きで大変ですね。ついでに言うとも私もこの所毎日
が戦闘（忙しい……と言いたいらしい）です（T―T）

第25話

軽逆関節型に襲いかかったのは同じく白亜の軽二脚型、そして中四脚型には白亜の重二脚だった。軽二脚型は両手に装備したマシンガンを連射しながら、重二脚型は背部のデュアルミサイルランチャーからミサイルを放ちながら、それぞれの目標に向かって攻撃を仕掛ける。

その絡み合うように戦闘を始める4機を見ていたカイを、攻撃警戒アラートが叱咤する。他人に構うな、自分の心配をしろ、と。

カイがメインスクリーンに向き直ると、そこには白亜の機体がブレードを今まさに突き出さんとする姿が映し出されていた。

「ちいつ…！」

『はっ！』

目前の敵機から、短い呼吸音と共に光刃の刺突が繰り出される。カイはそれを機体を沈み込ませる事で回避。続けて繰り出される刺突も、紙一重で避ける。そして5発目の突きを回避したところで、こちらもブレードを展開し、真横一文の斬撃。勿論、コクピットは外して。ブレードは弧を描き、白亜の機体 ミカエル の胸部を切り裂く……はずだった。

「！？っ」

カイは敵機の動きに目を見張った。ブレードが触れる寸前、白亜の機体は上半身の後ろに反らし、半ば無理やりにそれを回避したのだ。それは思いつきでできるような代物ではない。カイはこの白亜の機体のパイロットが、かなりの実力者であると直感的に感じ取ってい

た。

上体を無理やり後ろへ反らしたため、白亜の機体――ミカエルは勢い余って仰向けに地面へと倒れ始める。さすがのACといえど、人間のように一度反らした上体を元に戻してバランスをとる、などという芸当はできないのだ。

まさに好機。カイはカラサワの照準をミカエルへと定め、トリガーに添えた指に力を込める。

その時、ミカエルの背部が青白く光り、機体はふわりと宙に舞った。まるで見えない手が支えているかのように。

「な……」

「あれは…オーバーブースト!？」

レイナが叫ぶ。

そう、ミカエルは倒れる直前にオーバーブーストを使用し、機体を宙へと押し上げたのだ。更にはその勢いを利用し、後方宙返りをするような形で機体の体勢を立て直した。そしてカイ達からある程度距離をとった地面に着地する。

敵ながら、素晴らしい状況判断、操縦技術である。

『ふう、危ないところでした。なかなかやりますね』

通信機の向こうから、いやみなほど落ち着いた声が響く。

口ではあんな事を言っているが、口調からしてそうは思っていないだろう。

嫌な相手を敵にまわしてしまった。実力からいけばおそらくカイと同等か、それ以上か。

ミカエルが主兵装のレーザーライフルをこちらに構える。銃口が発光し、発射準備が整う。

レイナにはそれが、死刑宣告のように思えた。

「っカイ君!!」

「わかつている」

とるべき行動はただ一つ、『回避』だ。カイは ミカエル のレーザーライフルから光が閃くと同時にフットペダルを踏み込み、アマテラス を後方へ跳躍させる。レーザーは アマテラス の真下を通過し、街を囲う城壁に直撃、破壊した。

なにか自警組織だ、街を破壊しているのは自分達じゃないかーと思いつながら、カイは機体を着地させる。ミカエル はというと、すでに第二射の準備を整えたらしい。銃口が再び光を帯びている。

カイは次の回避行動に移ろうと、ペダルに添えた右足に力を込めるーが、視界に入った信じられない光景に、思わずその力を緩めた。

「なっ!?!」

その光景とは、ミカエル と アマテラス とのちょうど中間、放置された車の影にうずくまる少女の姿だった。おそらく戦闘の混乱によって親とはぐれてしまった所に、自分達がなだれ込んでしまったのだらう。水色の可愛らしいワンピースは泥と粉塵に汚れ、その小さな腕にはクマのぬいぐるみをしっかりと抱きしめている。

少女は恐怖に怯えた表情で、目の前に立つ銀の機体を見上げていた。少女のいる位置は ミカエル からは死角になっていて、その姿を捉えることはできない。

(マズいっ!)

ミカエル の銃口が火を噴くのと、カイが アマテラス を前方

へ突貫させるのは同時だった。メインブーストだけではたりず、翼状の制御ブーストからも青白い光を吐き出しながら、アマテラスは銀の閃光になる。

レイナはカイの行動を血迷ったとしか思えなかった。高出力のレーザーに、自分から向かっていく……正気のさたではない。

「きゃああっ!？」

レイナの意思とは無関係に、口から悲鳴ととれる声が漏れる。レーザーは、目前へと迫っていた。

カイは制御ブーストを進行方向とは逆に噴かし、急制動をかける。けして心地いいとは言えないGが体にかかるが、今のカイにはそんなことお構いなしだ。慣性を殺しきれず、地面のアスファルトをめぐり上げながらもなんとか機体を停止させた。

足下にはあの少女がいる。目をぎゅつと瞑り、迫り来る恐怖に必死に耐えながら。

――守らなければ――

カイは カラサワ 持つ方の腕で少女を囲い、彼女を守る壁にする。そしてシールドをかがげ、機体への直撃を避ける。

刹那、高出力・高密度のレーザーが アマテラス に命中し、一瞬の収縮の後に爆発。爆風が周囲の車や設置物を吹き飛ばした。

「……意外とあっけなかったですね」

ミカエル から、相変わらず透き通った落ち着きのある声が発せられた。まだ銃口から一筋の硝煙がたち上るレーザーライフルをゆつくりと下ろす。

着弾地点には爆煙や粉塵が立ちこめているため、アマテラスの姿を確認する事はできない。だが、高出力レーザーの直撃を受けたのだ。無事ではいるはずがない。良くて半壊、悪くすれば上半身を根

こそぎ吹き飛ばされているかもしれない。

ミカエル のコクピットで、白いローブを身に纏ったパイロットはため息をつく。本来ならここまで徹底的に叩く必要は無いのだ。動けないようにするか、もしくは力の差を見せつけて降参させるだけでいい。しかし今回は違った。剣を交えた瞬間から、彼は直感していたのだ。勝てない、勝てる気がしない、と。得体の知れぬ恐怖が体中を突き抜けていた。まるで虎に睨まれた兎が、無駄な抵抗を試みるかのように反射的にトリガーをひいていた。その結果が、この有り様だ。

恐怖から不殺を貫くことができず、相手に致命傷を与えてしまった――彼は今、大きな後悔の中にいた。

ふと、一輪の風が立ちこめていた粉塵を宙へと連れ去る。

「っ!？」

彼は目を疑う。粉塵が晴れると同時に現れた、銀色の機体。それはまさしく先程まで死闘を繰り広げていた敵――アマテラス であつた。

「馬鹿な!？あれの直撃を受けて無事なはずが……」

そう、無事ではなかった。かかげたシールドは熱により変形し、その腕に張りついている。関節部からはスパークが飛び散り、塗装は剥げ落ちて見るも無惨な姿を晒していた。

だが、パイロットは生きている。それどころか、アマテラスはまだ戦闘能力を失っていない。

彼は慌ててレーザーライフルを構え直す。が、銀の機体は力無く崩れ落ち、粉塵をあげてその場に倒れてしまった。

機体はまだ戦える。とすれば、パイロットがダメージを受けているのだろうか。

なんにせよ、戦闘能力を失ってくれたのは彼にとってありがたかった。

『隊長殿、こちらは片付きました』

彼の部下、2体の白亜の機体が傍らに降り立った。軽二脚、重二脚ともに損傷はない。任務は無事完了した。――が、釈然としない感情が残る。

なぜこの銀の機体のパイロットはあの時こちらに突貫して来たのか。避けようと思えば避けられたはずだ。

――なのは何故？

思考を隅々に巡らせるが、答が見つかるはずもない。その答えを求めるかのように、突っ伏したままの銀の機体に視線を移した。

「……………！？…そういう事ですか……………」

彼の視線の先――アマテラスの腕の間。そこには1人の少女の姿があった。5、6歳くらいであるか。

『隊長殿、この者はいかがいたしますか？』

白亜の重二脚のパイロットが、指示を仰ぐ。

「……………捕獲してください。ただし、丁寧に……………」

『はっ！』

重二脚と軽二脚は彼の指示通り、突っ伏す銀の機体を抱え、本部へと帰還して行った。残りの2体のACも、処理班がどうにかするだろう。

後に残されたのは彼と、少女だけだ。自分を守る障壁を取り除かれた少女は、先ほどまで隠れていた車の影に再び身を隠す。

――この少女のためにあのパイロットは……………。

彼は機体を本部へ向かわせる。確かめなければならないことがあった。彼の機体は白い炎を吐き出し、戦場となった市街地を後にした。

第26話

誰かが自分を読んでいる。

「……………カ………君……………」

朦朧とする意識の中、その声に耳をすます。

「……………イ君……………カイ……………」

聞き覚えのある声。

浮遊する意識を手繰り寄せ、混迷した記憶を手元に集める。

「……カイ……………カ………君！」

「……………そうだ……………この声は……………」

その声に引き寄せられるように、カイの意識と記憶の糸がつながった。

「カイ君！カイ君ってば！」

「耳元で変な声出すな。ちゃんと聞こえる」

目は開けず横になったままだが、カイは声の主に返答した。こうで
もしなければ、彼女はずっと叫んでいるだろうから。

「……！つ。よかった、カイ君！死んじゃったのかと思ったよお！」

んなわけあるか、と心の中でつつこみながら、カイはゆっくり上半

身を起こした。辺りを見回すと、窓の無い壁だけが目に入った。粗末なベッドに強固な鉄の扉。どうやら拘置所か何からしい。固い床に寝ていたせいか、体中がキシキシと痛む。

傍らには床にぺたりと座り込み、目を赤く腫らしたレイナの姿があった。と、そのレイナが突然…

ガバツと。

「うおわっ!？」

勢いでさっきまで寝ていた床に再び倒れ込んだ。

「いつ、いきなり何を……」

そこまで口にした所で、カイは言葉に詰まる。

「……よかった……よかったよお……」

カイの胸に顔うずめ、嗚咽をもらすレイナ。背中にまわされた腕が、苦しい程にきつく感じた。この苦しさは自分が意識を失っている間、レイナが感じていた苦しさといコールなのだろうか。

「……心配かけて、すまなかった」

そっと、レイナの肩に手を添える。安心させるように、優しく彼女を離れさせる。

「俺なら大丈夫だ。だから泣くな」

「……………うん」

手でごしごしと涙を拭う。まるで子供のような仕草だが、何故かたまらなく愛しい。

カイは、自分でもわからない衝動にかられる。触れたい、目の前の少女の体温を感じたい、と。

肩に添えていた手を、無意識にレイナの頬へと伸ばしかけたその時、ピーという音と共に部屋のカードキーが解除された。2人は反射的に体を離す。

扉が開くと、白いローブを纏った2人の男性が姿を現した。1人は屈強な体つきをした背の高い黒人男性。もう1人は黒い長髪をオールバックに結った、若干背の低いアジア系の青年。いずれも美形な顔つきをしているが、その表情は険しい。

「出る」

アジア系の青年が、顎で出口を指しながら言う。

カイ達は状況が飲み込めずに困惑する。自分達はこの街の法律を犯した犯罪者のはずである。それを拘束もせず、外に出ろと言う。

自分達の無実が証明されたのだろうか。もしくは拘束などせずとも逃がさないという自信からか。

「出る」

同じ言葉を繰り返す。今度は言葉に若干の苛立ちを感じ取れた。

なんにせよ、ここは大人しく従った方が得策らしい。カイとレイナは青年の言葉に従い、部屋を出た。薄暗い所にいたせいか、照明の光がとても眩しく感じる。

扉の外は白い壁の長い廊下につながっていた。カイ達が拘置されていた部屋と同じ物が、壁の合間合間に見て取れた。警備員らしき人

の姿もちらほら。

やはりここはカイの予想通り、法律に違反した者を収監する拘置所らしい。

2人が辺りに視線を移していると、カードキーで部屋の鍵を閉めた黒人男性が一言。

「ついてこい」

とだけ言うつと、啞然とするカイ達を後目に、アジア系の青年と共に廊下を奥へと歩き始める。

これはいくらなんでもノーガード過ぎである。

「ちょ、ちょっと待ってよ！私達一応犯罪者なんでしょ！？手錠かけるとか、ロープで縛るとかなんかしらないわけ！？逃げるかもしれないのよ！？」

ありつただけの疑問を彼らにぶつけるレイナ。正論と言えば正論なのだが、わざわざ自分達が不利になる事を言わなくてもいいのではないかと、つつこみたくなるのを、カイはぐつとこらえた。レイナの声に、白いロープの2人は振り返る。

「別にそれでも構わん。だが、貴様らは必ず後悔する事になる」

それだけ言うつと、2人はきびすをかえし、再び歩き始めた。

ついて来なければ後悔するーといったどういう意味だろうか。この先に、何かカイ達にとって利益になる事があるのか。もしくは信用させるための罠か。

考えれば考える程、不確定要素は増えるばかり。ならば、考えても仕方がない。罠であろうと、真っ正面から受けて立とう。カイとレイナの思いは同じだった。

2人は視線を交わし、思いが同じであることを確認するかのように頷く。そして、彼らの後を追った。

白く、どこまでも続きそうな錯覚を覚える廊下。その終わりは唐突だった。

白いロープの2人がいきなり立ち止まる。よそ見をしていたらぶつかる場所だった。よく見ると、彼らの前にエレベーターがあった。その扉までも廊下と同色で、彼らが立ち止まるまでカイ達が気づかないのも無理はない。

黒人男性が先ほどのカードキーを、扉の横の壁に設置されている認証装置に差し込む。すると、扉の上のランプが点灯し、10秒と経たないうちに扉が開いた。

「入れ」

彼らは道を開け、カイ達を促す。カイ達が入ると彼らも乗り込み、「30」と表示されたボタンを押す。扉が閉まり、軽い浮遊感を残しながらエレベーターは上昇を始める。

エレベーターの行き着く先は天国か地獄か。今それを知っているのは目の前でこちらに背を向けて立つ2人と、エレベーターの到着した先にいる人物だけである。

カイは賭でもしているような気分だった。

浮遊感が消え、エレベーターが停止した事を告げる。扉はゆっくりと開き、カイ達を先へと誘っているようだ。

白いロープの2人は先にエレベーターから出て、さっさと先へ行ってしまった。慌てて後を追うカイ達など全く無視である。

飾り気の無い、質素な長い廊下の先には、今までとは違いクラシックな木製の扉が整然と鎮座していた。ロープの2人がその扉を開く。ロープの黒人男性が、入れと言わんばかりにカイ達を睨みつける。

気は進まない。進む訳がない。が、カイとレイナは意を決して部屋の中へと足を踏み入れた。中に入るとまず目を奪われたのが、壁一面の棚の本、本、本……。平均的なサイズのオフィスにもかかわらず、なぜか圧迫感を感じるのは気のせいだろうか。

「ようこそ、我がBlue Diamondへ」

本に気を取られていた2人は、その突然の呼びかけに意表をつかれた。

声の先へと視線を向ける。部屋の奥にぼつんと置かれたワークデスク。声の主は椅子の背をこちらへ向けていた。傍らには先程の2人と同じ白いローブに身を包んだ人物が立っていた。フードを頭まで被っているため、顔や性別などはわからない。

声の主がゆっくりと椅子を回し、こちらを向いた

「あ……」

レイナは思わず声をあげた。そこに座っていたのは初老の女性。しかしレイナが驚いた理由は彼女の年齢ではない。お世辞にも明るいとは言えないこの部屋で、場違いなサングラスをかけていた。

（この人、目が……）

不自由なのである。

彼女が椅子から立ち上がろうとすると、すかさずローブの人物が手を貸し、デスクに立てかけられていた杖を手渡した。

老女とローブの人物はレイナ達に歩み寄る。

「レイナ・アィナスさんね？私はBlue Diamond最高責任者、ルーズ・ステフィールです」

初老の女性、ルーズは笑顔を浮かべ、手を差し出す。当然、握手を求めているのだろう。

「あ…はい、どうも……」

レイナは慌てて握手に応えた。

ルーズは満足げに微笑むと、傍らに立つロープの人物に視線を向ける。勿論、彼女には何も見えていない。

「彼は我がBlue Diamondが誇る精鋭クロス・ナイツの隊長、そして私の右腕、フラン・マグダーナよ」

ルーズが言葉を終えると同時に、フランと呼ばれた人物はゆっくりと頭のロープを脱いだ。

美男子、というのは彼のような人の事を言うのだろう。身に着けたロープに勝るとも劣らない透き通った白い肌。サファイアのような蒼眼。流れるような金髪が、顔の半分を覆っていた。

普通の女性なら、目が合っただけで撃ち抜かれてしまうだろう。カイといい勝負になる。

「フラン・マグダーナです。初めまして……ではないですね」

フランは挨拶と共に軽く礼をすると、カイへと視線を移す。

「君があのかのACのパイロットですか。まさか、これほどまでに若いとは……」

少し、驚いたような口調で彼は言う。肌と同じく透き通った、若干高めの声。聞き覚えのある声。

「あの時はとんだ失礼を……」

フランがカイに握手を求め、手を差し出そうとした瞬間。

「っ！！、カイ君！駄目……」

遅かった。

フランが手を差し出すと同時に振り上げられたカイの拳が、彼を殴り飛ばした。

鈍い打撃音。倒れ込むフラン。

「っ貴様！！」

後方に待機していたローブの2人が、腰の銃へと手を伸ばす。が、

「待ちなさい」

交戦体制をとった2人を止めたのは、誰でもない殴られたフランだった。

「し、しかし……」

「いいから下がっててください」

「はっ……」

不満げながらも、彼らは忠実に腰へと伸びた手を引つ込めた。カイは倒れ込んだフランを、上から見下ろす形で睨みつける。その身体からは殺気がにじみ出ている。

「……お前、何をしたのか分かっているか」

言葉の一つ一つにまで込められた、明確なる敵意。隠す気など、カイにはさらさら無い。

「あそこには生存者がいた。それをお前達はよく確認もせずに……」
見ているこちらが気圧される程、カイの怒りは凄まじい。先程の2人も、今は声も出せずにただ成り行きを見守るしかないようだ。おそらく今助けを求められても彼らは何も出来ないだろう。

「街の人間の事を考えずに市街地戦などやらかして、なにがクロス・ナイツだ。だいたい……」

その時、カイが言葉を言い終える前にフランが立ち上がった。レイナは最悪の事態を覚悟する。この状況では言い逃れできない。おそらくはあの拘置所に逆戻りか。それ程の事を、カイはしでかしたのだ。

睨み合うカイとフラン。張りつめた空気に耐えられなくなったレイナが、思わず顔をそむけそうになったその時。

「……本物に、申し訳ありませんでした」

……………へ？

一瞬、フランの言葉を理解できなかった。

見ると、彼は深々とカイに頭を下げている。さすがのカイも予想外の事態に戸惑いを隠せないようで、半歩程後ずさった。

「暴走したレイヴンをあなた方は止めようとしてくれたにも関わらず、我々はよく確認もせずに攻撃を加えてしまいました。更には私のミスで危険にさらしてしまった都市の人間を、自分を身を犠牲にしてまで救ってくれました。謝罪と、感謝の意を、ここに示させていただきます」

フランは更に深く頭を下げた。すると、カイ達の後ろで事の成り行きを見守っていたローブの2人も、フランと同じように頭を下げる。

「私も、彼らと同意見です。部下の失態は私の失態。どうか私達の無礼を許してくださいな」

BDの最高責任者であるルーズまでもが頭を下げ、カイ達に謝罪の意を表した。

啞然とするカイ。驚きのあまり言葉を紡ぐ事すら忘れてしまったようだ。レイナはと言うと、

「……………」

カイとルーズ達を交互に見ては、酸欠の魚のように口をパクつかせるしかできなかった。

ある種、異様な沈黙が辺りを包む。

「……………謝るんだったら、俺じゃなくあの女の子と都市の人々に謝るんだな」

沈黙を破ったのは、冷静さを取り戻したカイだった。

言葉を紡ぐカイを見て、レイナは気づく。カイから敵意や殺気が消えている事を。
フランが頭を上げると、ルーズやローブの2人も同じく頭を上げた。

「……では、我々を許していただけるのですね？」

「許すもなにも、俺達に謝るのは見当違いだ」

相変わらずの口調でカイは言う。だがそれは、もう気にしていないという意思の表れでもあった。

カイらしいーと、レイナは思った。

カイはきびすを返しレイナの元へと歩み寄ると、

「帰るぞ」

一言だけ口にし、扉へと向かって歩き始めた。

「あ、待ってよ！」

カイは歩くのが速い。

歩数は少ないのだが、モデル体系のカイの長足は一步でレイナの二歩分にも達する。

時折駆け足を織り交ぜながら、レイナはカイの後ろについていく。しかし、何故かレイナの心には引つかかる事があった。これが「来なければ後悔する」ものなのだろうか。確かに無実が証明されたのは素直に喜ぶべき事である。だが、謝られたところでレイナ達が得るものなど一つも無い。ただの誇張に過ぎなかったのか、それとも……。

考え事としているせいか、なかなかカイに追いつく事ができない。

カイが一足先に扉へとたどり着き、ドアノブに手をかけたその時。

「お待ちなさい」

その声はルーズのものだった。カイとレイナはほぼ同時に振り返る。

フランとローブの2人に付き添われながら、ルーズはカイ達の元へと歩み寄ってきた。

「あなた方は何か用事があってこの街に来たのではなくて？例えば……彼をBDに登録するためとか」

「あ……」

声を上げたのはレイナ。街に来た途端戦闘に巻き込まれ、更には無実の罪で拘置所にぶち込まれるという異常な事態に、目的の事などすっかり脳から抜け落ちていた。

しかし何故彼女は本人すら忘れてしまった事を、こうもズバリ言い当てる事ができるのか。

「あの……なんでそれを……」

レイナが怪訝な表情でルーズに問うと、彼女はにっこりと微笑み、

「調べれば分かる事よ。あなた……レイナさんはBDに登録済みのレイヴン。そのあなたが無所属の凄腕レイヴンをこの街に連れてきた……理由は明確じゃなくて？」

見事な推理。まさにその通りである。目が不自由な分、そういった情報からの状況認識能力が優れているのだろうか。

なんにせよ向こうが全てを把握済みなら話は早い。

「じゃ、じゃあ……」

「ただ、B Dの規則から言うと彼を登録するには不確定要素が多いわ」

……確かに話は早いが、そううまくはいかないらしい。レイナが喫茶店でカイに話した「問題」とはこの事だったのだ。

B Dは本来、身元のはっきりしたレイヴンしか登録を許可していない。一度登録申請をすると身の回りの事を全て調べあげられる。肉親、住居、仲間etc……それらが全てはっきりとして初めて登録が許可され、B Dのサポートを受けられる。

となると、出身地不明・肉親関係不明・仲間関係不明のカイにはルイズの言う通り、不確定要素が多過ぎるのだ。つまり……。

「このままでは彼をB Dに登録することはできませんわ」

という事になる。

「はあ……やっぱり」

うなだれるレイナ。ある程度予想はできていたのだが、こうもはっきり面と向かって言われると落胆も大きい。

レイナだけ登録していればいように思えるがそうもいかない。

現在レイナのA Cは使える状態ではなく、直すにはそれなりの金銭が必要になってくる。

ならばやはりカイに頑張ってもらわなければならないのだが、レイナが受けた依頼をカイが遂行すると機体の違いや遂行者の違いによ

リクライアントとの間に少なからず摩擦が生まれる。B Dとの間にも混乱が招じかねない。ならばやはりカイ自身がB Dに登録し、そういった事態を未然に防ぐ事が一番手っ取り早い。

だが、たった今それができなくなった。今までのように簡単に依頼を受ける事ができなくなるのだ。レイナの落ち込みようは想像できる。

「……ただし、あなた方には街の人々を助けてもらった恩があります。我々が提示する試験をクリアできたら、彼を登録してもいいでしょう」

「ほ、本当ですか!？」

さつきとは一変してレイナの表情は明るくなる。まるで不合格を通達された受験生が、後から繰り上げ合格になったような喜びようである。

「よかったねえカイ君!」

「あ、ああ……」

カイの手をとってぴょんぴょん飛び跳ねるレイナ。

だが、彼女の喜びようとは反対に、カイはあまり関心がない様子。彼にとっては、いわゆるどうでもいい事らしい。

「……試験とはなんだ?」

なんとかレイナの手から逃れて自由を取り戻したカイは、その様子を笑顔で見守っていたルイーズに問う。

「試験は簡単ですわ。ACでこのクロス・ナイツ三人のACと戦って、15分間戦闘不能にならなかつたら試験クリア。あなたの登録を許可します」

その言葉を聞いた瞬間、飛び跳ねていたレイナが凍りついた。

「い……今、なんて……」

「あら、わかりにくかったかしら？つまり、彼がクロス・ナイツとACでバトルロイヤルをして、15分生き残れたらBDに登録してさしあげますわ。無論、無事は保証できませんけどね」

にこやかに、さらつと言つてのけるルイズ。だがレイナには彼女が無理難題を押しつけるシンデレラの継母にしか見えなかった。

「む……無理よそんなの……。クロス・ナイツ三人と戦って無事でいるなんて……」

クロス・ナイツは現在のレイヴンの頂点に立つ実力の持ち主なのである。だからこの街に来たレイヴン達は今までの事を起こしてクロス・ナイツが来ないよう大人しくしていたのである。

そのクロス・ナイツと3対1で戦うなど、レイナ達レイヴンにとってそれがどんなに無謀な事か。

「……諦めよう。クライアントやBDにはそのつど説明すれば済む話。ちよつと大変だけど、こんな事カイ君にさせるよりは……」。

「レイナ、お前は俺がここに登録した方が仕事しやすいのだろう？」

カイが突然レイナに尋ねてきた。意識していなかったため、レイナは慌てる。

「そ…そりゃあカイ君がBDに登録されれば何かと楽だけど……」

「なら、決まりだ」

まるでレイナの気持ちを確認するような口調。その態度に、レイナは背筋が凍りついた。

「ま…まさか……」

「いいだろう。その試験とやらを受けてやる」

不敵な笑みを浮かべ、挑戦的な態度でルイズに意思を伝える。

「いいでしょう。あなた達、早速フィールドの準備を」

ルイズの命を受けたクロス・ナイツの三人は、彼女に礼をすると部屋を後にした。

「無理よカイ君！あんなの三人も相手にして無事に済むわけないでしょー！」

彼の無謀とも思える挑戦に、レイナは感情のままに声を張り上げる。そんな彼女を、カイはなだめるように言う。

「要は15分間やらなければならないのだろう？それまで逃げ回ればいいだけの話だ」

「で…でもっ！」

「レイナ」

カイは微笑みを浮かべ、レイナを見つめる。この笑顔を見ると、レイナは何も言えなくなってしまう。

「心配するな。無理はしない」

カイの言葉に不思議な安心感がレイナに湧き上がってくる。彼なら大丈夫だと、そんな気持ちになる。

「……………わかった。でも、本当に…………無理はしないでね？」

「ああ、もちろんだ」

カイは落ち着きを取り戻したレイナに満足げな笑みを浮かべると、再びルイーズに向き直る。

「試験を受けるのはいいが、俺のACはどうした？お前達が保管しているのだろう？」

「それなら心配ご無用ですわ」

ルイーズがぱちんと指を鳴らすと壁の本棚が左右に開き、中に設置されていたスクリーンがその姿を現した。なかなか洒落た仕掛けである。

スクリーンに映し出されたのは作業アームや整備員によって元通りに修復された アマテラス だった。

「BDの地下格納庫でうちの技術班に修理させました。なるべく元の状態に近づけてあります。これならすぐにでも戦闘可能なはずで

すわ」

損傷は軽微だったとはいえあのグレンでも1週間も必要としたアマテラスを、1日もかけずに完璧な状態に修復していた。レイナや、さすがのカイも驚きを隠せない様子。

そんなカイ達を楽しげな笑みを浮かべ見つめるルーズ。

「さあ、準備も役者も揃ったようですし……行きましょう、試験会場へ」

第27話（前書き）

大変長らくお待たせしました！読者の皆様には申し訳ない気持ちで
いっぱいですm（――）m
しかあーし！大量の書き貯めに成功した今、（しばらくは）恐れる
ものは何也没有せん！またすぐに更新するのでご期待を！

第27話

エレベーターで下りた先はカイ達が先程収監されていた拘置所より更に下の地下5階。エレベーターに表示すらされていないため、極秘の施設なのだろう。

チン、という緊張感に欠ける音と共にエレベーターが止まり、扉が開く。そこには一面純白の長い廊下が続いていた。

「こちらですわ」

その廊下をルイズは何の気なしにカイ達を案内して行く。本当に目が不自由なのかと疑う程彼女はしつかりとした足取りで廊下を進む。

ルイズはある扉の前で立ち止まると首から下げたビニールのケースからカードを取り出す。それを扉の横のカードリーダーに差し込む。すると、まるで主人の帰りを待っていたかのように扉が勝手に開いた。

「お待ちしてました」

部屋の中ではクロス・ナイツの三人がカイ達を出迎えた。

ルイズは軽く会釈をすると部屋の奥へと歩みを進めた。カイ達もそれに続く。

「準備はできたのかしら？」

「はい。90%稼働しています」

「そう。さすがね、仕事が速いわ」

フ란の報告にまるで自分の子供の成功を誉めるような口調で返事を返すルーズ。レイナには彼女とフ란の間に何か特別な絆があるように思えた。

「ここが試験会場ですわ」

ルーズが傍らのパネルを操作すると、目の前の壁がまるで劇場の幕が上がるように上昇し始めた。

「……すごい……！」

その光景にレイナは思わず感嘆の声をあげた。

上がりきった壁の向こうには、『都市』が広がっていた。いや、正確には地上の都市を模した巨大なフィールドと言うべきか。天井はドーム状になっており、それ自体が1つのスクリーンの役目を果たしていて青空を映し出している。フィールド自体は何度か戦闘に使われた事があるらしく、建造物が所々破損・倒壊していた。

「ここは我々の訓練に使う特殊施設の1つです。我々は『アンダーグラウンド』と呼んでいます」

カイ達の横へ歩み寄ったフ란がこの『都市』を説明する。だがカイ達は目の前の光景に圧倒されて説明を聞くどころではなかった。こんな大掛かりな施設をクロス・ナイツは独占できるのだ。更にはここ以外にも訓練施設があるらしい。レイヴン達が恐れる実力も頷ける。

アンダーグラウンドを眺めていたカイが建造物の間から姿を現したACを見つける。

「あれは……」

銀色のボディ、翼のような補助ブースター。紛れもなくカイの愛機、アマテラスだ。

「面白い機体です。どうやら我々のＡＣとは根本的に違うようですね。まさか完全自立型のＡＩを搭載とは……」

アンダーグラウンド 内をまるで何かを探し求めるようにさまよう アマテラス を見つめながらフランが口を開く。
アマテラス ーアリスが探しているのはおそらくカイ達だろう。

ルイズはカイ達の前に歩み出るとせき払い一つ、改めて試験の内容を確認する。

「いいですね？これからあなたを機体の場所まで案内します。あなたが機体に搭乗して3分が経ったら試験を開始します。クロス・ナイツ三人相手に15分間生き残れたら試験は合格、逆なら不合格です」

「それではこちらへ」

ルイズが言葉を終えるとフランがカイを先程の扉へと導いた。カイが彼に従って入り口へと向かうと、レイナもそれに続く。と、突然カイがレイナを振り返り、一言。

「レイナ、お前はここに居ろ」

「……………え？」

レイナは一瞬カイが何を言っているのか理解できなかった。フリーズしていた思考が動きだしようやくその言葉の意味を認識した時には、レイナは反射的に叫んでいた。

「ちょっと待つてよ！ここに居ろつて……私に残れつて言つてんの！？やだからね、そんなの！私一人置いてけぼりなんて……」

「……レイナ」

「やだやだやだぁ！私も行くのぉ！」

まるでおもちゃを買ってもらえなかった子供だ。手足をバタバタと振り回すレイナを見てカイは困つたようなため息をつき、肩をすくめる。

「まったく……お前はいつからそんな子供みたいになつたんだ？」

「だ、だつてえ！」

言いたい事はわかつていた。

彼女は自分が心配だからついてくると。

気持ちは嬉しい。だが……

「今回の問題は大半は俺の事だ。だから、これは俺一人にやらせてくれ」

いつもとは違う、少し優しげな口調でカイは言う。しかしレイナはその言葉の奥にある、彼の決意を読み取っていた。それはこの時代に生きて行くための覚悟のようなもの。

そんな眼で見つめられ、そんな口調で言われるともう何も言えなくなってしまう。

「……………わかった。今回は……………カイ君に任せる事にする」

少し拗ねたようなレイナを見て、カイは苦笑いするしかなかった。

「その代わり！」

「わかってる。無理はするな、だろ？」

そう言っただけでカイはレイナに微笑むと、フランの待つ扉へと再び歩き始めた。

その背中を見つめるレイナからは、不思議と不安の二文字は消えていた。

—————

『ご無事でなによりです、カイさん』

「ああ、心配かけてすまなかった」

パネルに映ったアリスを見て、一種の安堵感を覚えた。どうやら修理は完璧らしい。改めてBDの技術力の高さを思い知る。

フランの ミカエル によって アマテラス の元まで連れてこられたカイ。フランはカイが アマテラス に搭乗したのを確認すると、部下の2人と共に アンダーグラウンド の中へと姿を消した。次に会う時は敵としてだろう。

カイはメインパネルへと視線を移す。 アマテラス に搭乗してから2分が経過していた。

「そろそろ……か。 アリス、機体を戦闘モードに移行させる」

『了解しました』

アリスが返事をし終わると同時にコクピット内の計器やパネルに次々と灯がともってゆく。 わずか5秒足らずですべての機器のモード移行が完了し、いつでもいけると言わんばかりに駆動音が高鳴り始めた。

これでいつ彼らが攻撃を仕掛けて来ても大丈夫だ。

試験開始まであと10秒。 カイは目を閉じ、時を数え始める。

9……7……4……2……1……

今、試験が開始された。

（さて、どうくるか……）

カイは無駄な戦闘は避け、制限時間いっぱい逃げ切ろうと考えた。 さすがのカイでもあれほどの実力者が3人も集まると苦戦は必須、下手をしたらせっかく直った アマテラス をまた壊しかねない。 しかし向こうは15分以内にこちらを撃破するのが目的である。 ならばまず彼らは自分を発見することに力を注ぐだろう。 まず調べるのはやはり最初に居た所、まさにここである。 この場所に長くともまるのは危険だ。

カイは目立たぬようゆっくりと機体を移動させる。 建造物の間を縫い、更には攪乱のためにわざと不規則に移動を続けた。

「あれは……」

ふと目に入ったのは大きくえぐられたビル。おそらく訓練の過程で破壊されたのだろう。今のカイにとってはこれほど絶好の隠れ蓑は無い。カイは機体をえぐられたビルの穴へと潜り込ませる。

「アリス、ジャミング起動」

『了解しました』

アマテラス は高機動接近戦闘を主眼に置いた機体である。しかし任務上隠密行動を必要とされる時もある。そのため アマテラス には簡易的な物だが相手に気づかれずにレーダーを攪乱できるよう改良が施されたジャミングシステムも搭載されていた。自機を敵のレーダーから除外し、更には敵のレーダーにジャミングの痕跡を見せない優れモノだ。ただ1つ欠点をあげるとしたら、ジャミングの起動中は アマテラス のレーダーすらもその効力によって正常に稼働しなくなる事くらいだ。

ジャミングの起動と同時にパネルのレーダーからすべての光点が消滅する。これでは自分の目だけが頼りだ。カイは神経を集中して周囲の景色に目を凝らした。

――――

いまだ変化のない アンダーグラウンド を見つめるレイナ。試験開始から3分が経過したが、戦闘どころか何かが動いている気配すらない。

カイは約束を守っている。無理な戦闘は行わず、機体を隠して15分間逃げ切るつもりなのだろう。思わず笑みがこぼれるレイナ。

そんなレイナを見ていたルーズが、なにを思ったか突然、

「彼はあなたの恋人かしら？」

「ち、ちちちちがいますっ！！」

力いっぱい否定。そんなレイナを見て、ルーズはクスクスと笑う。

「彼はいろんな意味で強いわね。彼ならあるいは私達のクロス・ナイツの攻撃をしのいで試験をクリア……」

「できますよ」

突然レイナの口調が強いものに変わった。ルーズは少し驚いた表情を見せたが、レイナはそんな事お構いなしに続ける。

「彼は……カイ君は私の自慢のパートナーですから」

先程とはうって変わって自信有り気な笑みを浮かべ、再び　　アンドーグラウンド　へと視線を戻す。

複写された無人の都市は、いまだ変わらず静寂を保っていた。

――――

機体を隠し、気配を消してから何分経っただろうか。1秒が1分に、1分が1時間にすら感じるほど時は重苦しく、ゆっくりと流れていく。

カイはメインパネルの時計へと目をやる。デジタルの文字盤が試験開始から5分が経過した事を教えてくれた。

常人には耐えられない程の圧迫感にもカイは顔色1つ変えずに、メインスクリーンに広がる映像を睨みつけていた。

やはり経験とは人間の精神に大きく関わっているのだろう。

今この状況など数の内に入らないほど苦しい任務を、カイは数多くこなしてきたのだ。時には部隊の仲間が精神をやられて発狂したり、時には胃の中にやつとの思いで詰め込んだ食料をプレッシャーのあまり全部戻してしまった事もある。それに比べたらこの状況など訓練に等しい。ただ、実際に戦闘になった時を除いて……。

彼らは戦力を分散させてこちらを搜索しているのか、もしくは3人一緒か。

カイの予想ではおそらく前者だろう。

一刻も早く自分を見つけなければならぬ彼らにとっては多少の戦力ダウンよりも搜索率を取るだろう。カイの狙いはそこにあった。

たとえ発見されたとしても敵が1機だけなら仲間に通信される前に潰す事ができる。それができるだけの技術が、自信がカイにはあった。さすがに3機いっぺんに来られると難しいが……。

ふと、カイは視線の先に神経を集中させる。

(……来たか)

ビルの間から姿を現す白亜のAC。見た感じではフランのミカエルではなさそうだ。

軽武装・高機動型、おそらくフランの部下の2人のどちらかだろう。高機動型のACは『ターゲット』を探して単眼カメラアイを左右に可動させていた。

(気づくなよ……。そのまま通り過ぎてくれ……)

高機動型のACはしばらくその場で探索を続けていたが、まるでカイの願いが通じたかのように探索を止め、再びビルの間へと姿を消

した。

思わず安堵のため息をつくカイ。戦闘を避けられるならそれに越した事はない。

カイが安心から肩の力を抜き、シートに寄りかかったその時だった。

視界の先、ビルの背後から飛来するミサイル群。真っ直ぐに アマテラス を目指して。

「ちいっ！」

カイは弾かれたように機体をビルの穴から飛び出させた。ミサイルは今しがた隠れていたビルを粉々にふき飛ばした。まさに間一髪。しかし安心したのもつかの間、ミサイルの射線上から飛び出してきた高機動型ACが、両腕のマシガンで乱射しながら アマテラス に迫る。

カイはシールドをかがげ、何を思ったか弾丸の雨の中へと機体を突貫させた。メインブースターと補助ブースターを目一杯噴かし、弾丸を避けようとせず。

弾丸は次々と命中し、シールドで覆えない箇所を傷つけていく。

「おおおおっ！」

それでもなお、カイは前進を止めようとはしなかった。白亜の機体と銀の機体が交錯する。

刹那、アマテラス のレーザーブレードが閃光を描き、高機動型ACの頭部にある小型アンテナを切り落とした。

そう、カイは機体を損傷をかえりみず、まずは相手の通信手段を奪ったのだ。と言えは聞こえはいいが、実際はそこしか狙えなかったと言った方がおそらく正しい。

地面に着地した機体は前進のベクトルをころしきれず、アスファル

トをめくり上げながらもようやく停止した。カイはすぐさま体勢を立て直し、高機動型ACへと向き直る。スクリーンの先ではカイと全く同じタイミングでこちらを向く白亜の機体が映し出しされていた。

「誤算、だったな」

相手の実力が自分の予想以上だった事を悟ったカイは、自分の甘さを皮肉気に笑った。

――――――――――

強敵、としか言いようがない。目の前ですでに次の行動へ移ろうとする銀色の機体を見据え、彼はそう思った。

あの一瞬のすれ違いさまに通信手段を奪われた。ほんの少しでも退いていたら今頃頭部がコアに別れを告げていただろう。

しかし彼は今まで戦ってきた相手の中で確実に最強のトップ3に入る機体を目の前にして、何故か不思議な高揚感を感じていた。自分の持てる力を全てぶつける事ができる相手が隊長以外にもいた――その事が、彼の自分の实力を知りたい、隊長にどれほど近づいたのか知りたい欲求を駆り立てていた。

彼はある種の喜びに武者震いが止まらない手を落ち着かせるため、大きくゆっくりと深呼吸した。『興奮状態では判断力が鈍る。常に戦闘中は沈着冷静であれ』――隊長、フランの言葉が頭をよぎった。

「……………大丈夫です隊長。僕は冷静です」

彼は再び深呼吸し、スティックを握り直した。

彼の瞳から不用意な光が消え、代わりにスナイパーがターゲットを

狙うような落ち着いた光が宿る。

「フェイ・アウロン…… ウリエル、いざ参る」

フェイはスロットルを全開にし、フットペダルを踏み込んだ。

第28話

ビルの陰から躍り出る銀の機体。その先には白亜の高機動型AC。白亜の機体は敵の姿を認めると同時に両腕のマシガンを発射する。銃口からはき出される弾丸は、真っ直ぐに銀の機体へと向かう。

「くっ！」

銀の機体――アマテラスのコクピット内で、カイは弾丸を避けるべくフットペダルとスティックを同時に操作する。

アマテラスの背部補助ブースターが稼動し、機体の右方向へと推進力を生み出す。機体は前進のベクトルをころす事なく、直角に真横へ移動した。これによりアマテラスは弾丸の射線上から離れ、ダメージを受ける事なく近くのビルの陰へと滑り込む事ができた。普通のACにはできない、アマテラスだからこそできる戦闘機動である。

カイがいるビルの反対側にはアマテラスを追った弾丸が次々と命中し、ビルを振動させていた。

（……どうする？ 奴には接近する事ができない）

カイは苦戦をしいられていた。

接近戦を試みると両腕のマシガンに阻まれ、かといって遠距離に離れると背部のミサイルポッドが火を噴く。白亜の機体はクレアのハンターSと同じゾーンオールマイティー（全領域戦闘）に主眼を置いたタイプのACなのだ。遠距離武器をカラサワとおまけ程度のミサイルポッドしか持たないアマテラスにとって、これほど厄介な相手はいない。カイはそつとビルの陰から頭部を出し白亜

の機体を確認しようとするが、そこにその姿は無かった。あるのは高々とそびえるビルだけ。

しかしジャミングを解除した アマテラス のレーダーにははつきりとその姿が映し出されていた。前方のビルの裏で息を潜める敵の姿が。

カイは思考を巡らせ、なんとか戦況を開く方法を考えた。先ほどと同じく多少のダメージを無視した戦法でいくか――だが同じ手に2度も引つかかる相手でない事は、さっきから嫌と言うほど感じていた。ではどうするか。

こうしてる間にもいつ敵がミサイルで自分をあぶり出しにかかるかわかったものではない。ビルからあぶり出された所を、今度こそ確実にマシンガンの餌食にされる。

残された方法は、1つだけ。カイが過去に1度使った事がある、突拍子もない戦法。

「あれを……やってみるか……」

こうなつてはだめもとで試してみるしかない。

カイが腹をくくり、その方法を実行に移すのと、ミサイルがビルを吹き飛ばしたのはほぼ同時だった。

――――

銀の機体がビルから姿を現す度に神経がすり減る思いだ。フェイには敵を寄せつかせないようにするのが精一杯だった。しかし敵の實力からすると接近されるのも時間の問題。

おそらく敵はレーダーでこちらの動きを察知しているだろう。ウリエルのレーダーはアンテナを破壊されたため使用不能。残された弾丸とミサイルも残りわずかだった。

（もう少し……もう少しなんだ）

向かい側のビルの陰で息を潜め、こちらを狙う銀の機体。まるで腹を空かせた獣に狙われた気分だ。

その時、ビルの陰からちらりと銀の機体が頭部を露出した。こちらの様子をうかがっている。という事は、向こうは既にこちらを仕留める準備が整っていると考えて間違いないだろう。――このままではやられる。まだ、本当の目的を達成していない。

「まだやられるわけにはいかない！！」

フェイはビルにロックサイトを合わせると、背部ミサイルポッドのトリガーをひいた。

強い衝撃と共に ウリエル の背部から多数のミサイルが放たれ、不規則な軌道を描きながら アマテラス のいるビルへと吸い込まれていく。

刹那、轟音と共にミサイルがビルに命中し、凄まじい衝撃と爆風、粉塵が辺りを覆った。

粉塵と爆煙が アマテラス いるビルの周囲を覆い隠した。レーダーは使い物にならなため、アマテラス の姿の捉える事はできない。ましてや粉塵と爆煙の中を視覚のみで アマテラス を探し出す事など不可能だった。

その時、粉塵と爆煙を貫き、エネルギーの塊が飛び出して来た。

（まだ無事だったか！！）

フェイは慌てて機体を操作し、エネルギー弾を回避しようとした。――が、その必要はなかった。エネルギー弾は全くと言っていいほど狙いが定まっておらず、ウリエル とは見当違いの方向へと直進し、地面へと命中した。

（しめた！！）

相手もこの粉塵と爆煙のせいでこちらを捉えられずにいるのだ。おそらくレーダーに頼り、大まかな方向に当てずっぽうに撃っているに違いない。更に2発、3発とエネルギー弾が粉塵と爆煙を切り裂きこちらへと向かって来るが、やはり命中までには至らない。

こちらは敵のレーダーに捕捉されているが、今のエネルギー弾によりフェイも敵の位置を大まかにだが捕捉できた。

（これなら……いける！！）

フェイは両腕のマシニングを敵がいると予想される方向に放ちながら、粉塵と爆煙の中へと飛び込んだ。

視界はほぼ0に近い。だが敵の位置は掴んでいる。

再びエネルギー弾が発射され、ウリエルをかすめた。

「そこか！！」

エネルギー弾の射線の先へとフェイはマシニングを乱射した。弾丸は粉塵と爆煙のせいですぐに見えなくなるが、手応えはあった。弾丸の射線の先で次々と起こる命中反応による閃光、轟く命中音。

（殺「と」った！）

ついにあの強敵を倒したという陶醉感がフェイを支配した。限られた状況下とはいえフランと互角に戦った相手を倒したのだ。

それが彼の思考力を低下させてしまった。

フェイは機体を敵が倒れているだろう方向へと進めた。粉塵と爆煙は薄れ始めている。今なら肉眼でも弾丸を全身に浴びて戦闘不能に

なった アマテラス を確認できるだろう。
そして彼はたどり着いた。 アマテラス が『倒れているべき』場
所へ。

「!??」

信じられなかった。

そこに アマテラス の姿は無く、弾丸をくらって蜂の巣になった
ビルのみが恨めしそうにたたずんでいた。

傍らには先ほどの ウリエル のミサイルにより倒壊したビルの残
骸。

「これは…… いったい……」

そこで彼は気づく。 そのビルの中心にぽっかりと空いた風穴。 それ
が何を示しているのか気づくまで5秒の時を要した。

「…… まさか!??」

フェイは慌てて機体をビルの裏側へと移動させる。 そこにあったの
はビルに突き刺さった カラサワ だった。

銃撃により脆くなったビルから カラサワ が抜け落ち、大きな音
をたてて地面に落下した。銃口からは微かに硝煙が立ち上っている。

(まさかこんな事が……。じゃあ奴は……)

フェイは辺りを見回すが、薄くなった粉塵と爆煙の中でも アマテ
ラス の姿はどこにも見当たらない。先ほどとは打って変わって焦
りと緊張がフェイを支配する。

(どこだ……どこに隠れている?)

この周囲のどこかに奴は息を潜めこちらを狙っている。

フェイは辺りを警戒しつつ、マシンガンを構え直す。奴がまだ無事な以上この粉塵と爆煙の中にいつまでもいるのは危険だ。とにかく視界が回復する所まで後退するのが今は最良の選択だろう。

その選択にしたがい、フェイは機体を移動させようとビルに残骸から視線を外したその時だった。

銀色の閃光が ウリエル の足下、倒壊したビルの中から飛び出した。はじけ飛ぶ残骸。

そう、 アマテラス である。

「!?!」

フェイが突貫してくる アマテラス にマシンガンに向けた時には既に遅かった。ウリエル の懷に飛び込んだ アマテラス のレーザーブレードが閃光を描く。

フェイには時がスローモーションのようにゆっくりと流れているように感じた。考えが甘かった、自分のかなう相手ではない。迫り来る光の刃を肌で感じながら、彼はそう思った。このまま敗れるのもいいかもしれない……だが、勝つ方法もある。

「うおおおおあああ!」

まるで獣のような雄叫びと共に、フェイは渾身の力を込めて機体を後方へと跳躍させた。

……間一髪、ウリエル は アマテラス のレーザーブレードを回避する。しかし代償としてマシンガンが両腕ごと胴体に別れを告げた。

普通の人間ならば今の奇襲に反応もできず戦闘不能にされていただろう。クロス・ナイツの名は伊達ではない。

粉塵と爆煙の中から尾を引きながら飛び出す　ウリエル。コンマ数秒遅れて　アマテラス　も続く。

「逃がさない！」

カイは更に追撃をかける。すると背を向けていた　ウリエル　がこちらに向き直り、　背部ミサイルポッドから大量のミサイルを吐き出した。

主兵装のマシンガンを失った今、　ウリエル　に残された武器はミサイルだけ。おそらくこれが残された最後のミサイルだろう。しかしそれも接近されたこの状況では意味を成さない。

カイは機体を加速させ、追尾モーションに入りきっていないミサイルの間をくぐり抜けた。

そして再び肉迫した　ウリエル　の頭部めがけてレーザーブレードを突き出した。

――――

「…………ふう」

カイは改めてクロス・ナイツの手強さを実感した。

あの時カイは　カラサワ　を自動発射モードに設定し、すぐ隣のビルへ突き刺した。そしてあえてミサイルの直撃を受けてビルの残骸の下じきになったのだ。作戦と呼ぶにはあまりにもリスクが大きい。敵のレーダーが使えないなど、様々な要素が偶然にもカイに味方してくれたからこそ成功した作戦といえるだろう。

『やりましたね、カイさん』

「ああ、おかげでミサイルポッドが使い物にならなくなったがな」

アリスの劳いの言葉にカイはため息混じりに答えた。文字通り肉を切らせて骨をたつ、とでもいったところだ。

ビルにもたれ掛かるように沈黙する ウリエル。なんとか殺さずに戦闘力を奪う事ができた。これが戦場だったら命を奪わずに倒すなどという余裕は無かっただろう。そんな考えが頭をよぎり、カイの表情を曇らせた。

『……あの、カイさん？』

「……ん？ああ、すまない。考え事をしていた」

アリスが心配そうにカイにかけた言葉も、今は耳に入らなかった。しかし、今はそんな事を考えている場合ではない。

パネルの時計に目をやると、試験開始から既に12分が経過していた。残り時間はあと3分。

派手に戦闘をしてしまったため、残りの2機にこの場所が気付かれたかもしれない。たとえ残り時間があとわずかといえども油断はできない。できる相手ではない事を、たった今嫌と言うほど知ったばかりだ。

カイがこの場を離れようと、フットペダルに足をかけて踏み込みかけた時だった。

フイー！フイー！

コクピットに鳴り響く警告音。

『カイさん！敵の攻撃です！』

「なにつ！」

レーダーに無数の点滅する光点が映し出される。

「ミサイルか！」

カイがミサイルの飛来する方向へ視線を移した時には、既に肉眼で確認できる距離までそれは迫っていた。

第29話

機能が完全に停止した機体の中で、フェイは不思議な達成感を感じていた。

勝てる相手ではなかった。考えが甘すぎた。結果として、自分は負けた。しかし、重要なはその点ではない。

最後の最後に、自分は役目を果たした。クロス・ナイツの仲間はこの位置を知らせる事ができた。自分は、自分の成すべき事を見失わなかったのだ。負けたという事実よりも、自分はやるべき事を成し遂げたという満足感の方が何十倍もフェイの心に強くどまつた。――そして、たった今起こった機体を震わせる爆発音と衝撃が、彼の作戦の成功を告げる鐘の響きであった。

――――――――――

カイは機体を急旋回させ、ミサイルとは逆へと アマテラス を駆った。だがこれは逃げるためではない。カイの目的はこの先にあるビルだった。

遠距離攻撃用のミサイルポッドを失った今、どうしてももう1つの得物が必要だったのだ。カイが向かうビル傍らに横たわる カラサワ が。

カイは機体を前進させたまま、まるでマラソンランナーの給水のように カラサワ を拾い上げる。と同時に再び飛来するミサイルへと向き直る。標準は既にアリスが合わせていた。スティックのトリガーに添えた指に力を込める。

最高出力で発射されたエネルギー弾は通常の倍の大きさを保ち、最前列のミサイル3発を飲み込み、爆発。更にはその爆風と衝撃が次

々と周りのミサイルへと伝わり、誘爆を引き起こした。球体状の爆炎が空を覆い尽くす。

しかしその1発のエネルギー弾で全てのミサイルを迎撃できるはずもなく、誘爆を逃れた数発のミサイルが アマテラス へと迫る。カイは先ほどのビルを盾にするように機体を移動させた。ミサイルはその全てがビルに命中し、なんとか無傷で迎撃に成功した。

『あの攻撃を無傷で切り抜けるとは……』

『やはり一筋縄ではいかないようですね』

カイがいるビルからほんの数100mほどしか離れていない建造物の上に、声の主はいた。

白亜の重武装AC、そしてフランが駆る ミカエル 。2機はまるで超越者のように、ビルの陰に身を潜める アマテラス を見下ろしていた。

（なぜこんなにも早くこの場所を……）

カイがフェイの ウリエル を沈黙させてから、まだ1分と経過していない。本来なら彼らがこの場所にたどり着く前に身を眩ます事ができたはずだ。明らかに早すぎる。

カイは2機の様子を伺おうとそちらを覗き込む。

（！っ……なるほど、そういう事か）

答えは意外にも、彼らの頭上にあった。2機の上空にゆらゆらと漂う赤い煙。——信号弾である。

ウリエル との戦闘中、最後にフェイが放ったミサイル中に信号弾が仕込まれていたと考えて間違いないだろう。他のミサイルは全

てがフェイク、気付かれないようにするが為の罠にすぎなかったのだ。そしてカイはまんまとそのフェイクに引っかかり、結果として彼らの到着を許してしまった。

（なかなかやるじゃないか）

アマテラス から少し離れた場所に沈黙する ウリエル を見つめ、感嘆とも皮肉ともとれる笑みをもらすカイ。
もはや戦闘は確実。カイの中で、問題は『逃げまわる』事よりもいかにして残り3分『生き残る』かに変化していた。

――――

敵が今までのレイヴンとは桁違いの化け物だという事は理解していた。現にクロス・ナイツであるフェイが敗北をきしている。そしてフランもあの敵に対しては今までとは明らかに何かが違う。彼のレイヴンとしての勘がそう告げていた。

「隊長殿、ここは私が先手をうちます。隊長殿は援護を」

しかし、だからこそ確かめなければならない。

隊長に援護をさせるなどおこがましいのは百も承知だった。

「わかりました、私は援護にまわりましょう」

フランは彼の気持ちを悟ってか、何も言わずに一步機体を後退させる。

彼は思う。自分はこの隊長だからこそついていける――と。

「では……。ログ・サルトマン、ゼルエル……参る！」

ログはフットペダルを踏み込み、重量級のゼルエルをいとも簡単に宙へと押し上げた。これだけでもゼルエルがかなりの出力を誇る事が予想できる。

ゼルエル が地面に着地すると、アマテラス や ウリエル とは比較にならないほどの衝撃が巻き起った。

「ぬん！」

気合一声、ログは背部デュアルミサイルランチャーを アマテラス が身を潜めるビルへと向け、トリガーを引いた。機体が後ろに下がるほどの衝撃と共に、大量のミサイルが一気に吐き出された。無論、このミサイルは アマテラス をあぶり出すためであり、ログはこの程度で仕留める気はさらさら無かった。

放たれたミサイルが命中する寸前、ターゲットの陰から銀色の閃光が飛び出した。ミサイルがビルに命中し、爆発。一瞬にしてビルを跡形もなくふき飛ばした。

（かかったな！）

ログは飛び出してきた閃光―― アマテラス に向け、左腕装備のバズーカを発射した。緩やかな弧を描き、目標を追尾するバズーカ弾。 アマテラス はバズーカ弾の接近に気づき、命中する寸前機体を真上へと跳躍させた。すんでのところで目標を見失ったバズーカ弾は アマテラス の背後にあった高層マンションを火の海に包んだ。

上空へと回避したカイは体勢の崩れた アマテラス をなんとか復旧させ、ゼルエル に向けて カラサワ を発射した。馬力はあるものの、あれ程の重武装の機体が弾速の早い カラサワ を回避

する事は不可能と判断。更に念には念を入れ、ゼルエルが上・左右どちらに回避しても命中するようにカラサワを3発放った。吐き出された高エネルギーの塊は真っ直ぐにゼルエルへと突き進む。

「！！っ」

「――つくづく彼らは予想を裏切ってくれるようだ。」

ゼルエルはその重い機体を半ば無理矢理に右へと回避、1発目のエネルギー弾を避ける。

「まだだ！」

例えば1発目を回避されたとしても追加で放ったエネルギー弾がすでにゼルエルの目と鼻の先に迫っていた。――命中は確実だった。

エネルギー弾はゼルエルに命中し、一瞬収縮した後に爆発。爆炎が白亜の機体を包んだ。

カラサワの直撃を受けた機体は少なくとも半壊、当たり所が悪ければコア以外の五体を全てふき飛ばされる。フルパワーではないにしろ、ゼルエルを戦闘不能にするだけの威力はある。

煙が晴れたらそこには沈黙した白亜の機体転がっているだろう。カイはそう確信し、次の標的であるミカエルへと機体に向けた。その刹那、

ビーツ　ビーツ

コクピットに鳴り響く、攻撃を知らせるアラート。

「なっ！？」

カイが機体をそちらに向けた時には既に遅かった。飛来するバズーカ弾、もはや回避は不可能な距離にまで接近していた。

何故？と考える前に、カイの体は反射的に動いていた。

右腕のシールドをっかけ、直撃を避ける。

バズーカ弾は突き出されたシールドに命中し、凄まじい爆発を起こした。衝撃でシールドは砕け散り、機体はコントロールを失って後方へと自由落下を始めた。カイは衝撃で一瞬気を失うが、シートに叩きつけられた激痛でなんとか意識を保つ。凄まじいGに苦しめられながらもフットペダルを操作、補助ブーストで落下寸前に機体を立て直し着地に成功した。

しかし機体のダメージの代わりにカイの体が受けたダメージは大きかった。背中を強く打ちつけ、呼吸困難状態に陥る。

「ゲホっ……はぁ、はぁ……」

『カイさん！大丈夫ですか！？』

ノイズがはしっているディスプレイから、アリスがカイの身を安ずる。正直な所、全然大丈夫ではない。

「……ああ、大丈夫……ゲホっ！……大丈夫だ」

空気を拒絶する肺をなだめ、少しずつ呼吸を整える。

（何故奴はエネルギー弾の直撃を食らって無傷なんだ…？）

ようやく思考力も働くようになり、カイは今の状況を分析した。先ほど確かにカラサワは命中した。避けた……という可能性

は皆無だろう。カイは命中の瞬間をこの目で見たのだ。カイの胴体視力を欺けるとすれば、グラヴィティ・シフトくらいしか無い。カイはそれを確かめるべく、ゆっくりとこちらに歩を進める。ゼルエルに再びカラサワを放った。これも回避不能になるよう、四方向に向けた。

エネルギー弾は吸い込まれるように　ゼルエル　へと向かう。そして命中。爆炎が巻き起こる。

「……なるほど」

――納得のいく結果が得られた。

煙が晴れるとそこには右腕と両肩から発生した光の壁にほぼ全身を覆われた　ゼルエル　の姿があった。

――エネルギーシールドである。

カラサワや他のレーザー・エネルギー系の弾と同種のエネルギーの圧縮、壁として使用する^{シールド}ことにより、高レベルでのエネルギー防御力を有することができる。勿論、実弾へと防御力も　アマテラス　の実シールドより数段上である。

更に　ゼルエル　はこれを右腕だけでなく両肩の「エクステンション」にも同じ物を使用していた。

「エクステンション」とは、ACの腕部に搭載される補助パーツの名称である。主にACの行動を補佐してくれるものが多い。特に特殊な挙動をさせる補助ブースターや、弾薬やエネルギー補給を行える予備弾倉とエネルギーパックは、エクステンションならではのもの。勿論攻撃に使える連動ミサイル、防御に役立つミサイル迎撃装置とミサイル攪乱装置、追加装甲など、機体の性能を底上げするにはもってこいである。多種多様なエクステンションはACの補助パーツとしては欠かせない存在なのだ。

ゼルエル の武器はエネルギー消費率の少ないものだけを装備している。機体を動かす以外にその有り余るエネルギーを役立てるには、エネルギーシールドが最適と言えよう。

今のカイにとってこれほど厄介な相手はいない。鉄壁の防御を誇るゼルエル を倒すにはあの G ブレイズ をも凌ぐ火力を有する機体でもないと、あのエネルギーシールドは破れない。あいにくアマテラス にそれほどの火力を有していない。このままでは3分どころか1分も持たないだろう。

「お手上げ……だな」

さすがのカイもこれには弱音を吐くしかない。

『カイさん！インフィニティ・システムを！』

そんなカイを見かねてか、アリスは アマテラス の切り札、インフィニティ・システムの使用を提案した。確かにインフィニティ・システムを使えば ゼルエル の鉄壁の防御に対する突破口も見つかるかもしれない。

今こそインフィニティ・システムを使うべき状況だった。しかし、カイの口から予想外の言葉がついて出た。

「インフィニティ・システムは……使わない」

第30話（前書き）

いやあ、書き溜めするとなんだか更新の時も安心ですねえ（何が？）。

遂に30話です。長い道のりでした（、、） 〃

今思えばいろいろあったなあ……なんて、ため息混じりに考える今日この頃です（笑）

第30話

はつきりと、明確にカイはインフィニティ・システムを使用しないと言った。アリスにはカイの無謀としか思えない発言に耳（あるのか？）を疑った。

『インフィニティ・システムを……使わないのですか？』

「ああ、使わない」

『ではグラヴィティ・シフトを……』

「それも使わない」

唯一残された有効な手段も否定するカイ。カイがこの アマテラスに初めて乗った時からの長い付き合いだが、今回ばかりはアリスの高性能電子頭脳をもつてしても、考えが読めない。

『そんな……このままでは負けてしまいます！』

「アリス、俺は勝ち負けにこだわっていない。今回の戦いは俺がこの時代で生きていけるのか試しているんだ。それを機体の性能に頼っていたら自分で自分の賭を台無しにしてしまう。……これは俺が自分に課した試験だ」

アリスはカイの瞳の奥に、強い決意の光を見た。

AIであるアリスには理解しがたい……が、カイの意志はステイ

ツクを通して伝わってくるような気がした。

『言い出したらきかないところ、昔と変わりませんね』

「……ああ、そうだな」

苦笑するカイ、アリスも微笑む。アマテラスのコクピットだけが、戦闘中だというのに柔らかな雰囲気包まれていた。

「……さて、と。本当にこのままじゃまずいな」

『相手は長距離攻撃型です。接近戦が妥当かと』

「俺もそう思っていたところだ。……いくぞ」

『はい』

カイはフットペダルに添えた足に力を込める。補助ブーストとメインブーストが青白い炎を吐き出し、アマテラスを加速させた。カイはブレードを展開し、ゼルエルに迫る。ゼルエルは慌てたふうもなくおもむろにバズーカをこちらに構え、撃つ。しかし比較的弾速の遅いバズーカ弾を避けるのはカイにとってさほど問題ではない。機体を左右にスライドさせバズーカ弾を紙一重で避ける。ゼルエルをブレードの射程内に捉え、光刃を振りかぶる。袈裟がけに振り下ろされたブレードはゼルエルの胸部を切り裂く。――はずだった。

バシィッ

しかしブレードはゼルエルの右腕から発生したエネルギーシ

ルドに阻まれた。

「くっ！」

カイは力任せにブレードを振り抜こうとするがシールドは厚く、ゼルエルのパワーとあいまってびくともしない。

その時、後方警戒アラートがコクピット内に響く。カイはほぼ反射と言っても過言ではない反応速度でゼルエルから離れ、機体を真上に跳躍させた。

刹那、後方から接近していたミカエルのレーザーブレードが、虚空を薙いだ。

間一髪。

「ちいつ！」

カイは苦々しげに舌打ちをした。遠距離では勝ち目はない。接近するとミカエルの援護。

ついている隙が無く、八方塞がりとはこの事だ。

「いいチームワークだな……！」

毒づくカイだが、そんな暇も彼らは与えてくれない。上空に逃げたアマテラスへ、ゼルエルはデュアルミサイルランチャー一斉射撃による追撃をかける。

地面が見えなくなる程のミサイル群。回避は不可能。

カイはカラサワをフルパワーでミサイル群に向け、連射。エネルギー弾がミサイルを迎撃するが、全てをカバーできるわけではない。爆風を突き破り、数発のミサイルがアマテラスに迫る。だが半分以下までに減ったミサイルを回避するのは容易だった。カイはブーストを噴かし、空中でいとも簡単にミサイルを回避した。

通り過ぎたミサイルは アマテラス のはるか上空で爆発、まるで
昼に打ち上げ花火でもしているかのようだ。

2機から離れた道路にカイに機体を着地させる。機体はすでに爆風
と衝撃でぼろぼろである。更には無理な操縦がたたってか、右脚部
の挙動に異常がでていた。おそらくシャフトが2、3本曲がってい
るのだろう。メインディスプレイの機体のダメージを知らせるパネ
ルには『脚部異常』の文字が点滅し、 アマテラス を模したダメ
ージパネルの右脚部が緑から赤に変わっていた。

もはや長時間の戦闘は不可能な状況だった。
だが幸いにも戦いは長引きそうにない。残り時間はあと1分。逃げ
回れば1分間ぐらいなら持ちこたえる事も可能だ。

(……………いや)

しかしカイはそうしようとは思わなかった。
彼自身がそれを良しとしなかった。

(……………最後の最後まで、攻めきる)

動かない アマテラス に業を煮やしてか、2機の白亜の機体はそ
れぞれの武器を構えてこちらに突貫してきた。

――勝負をつける気なのだろう。こちらものぞむところだ。

「おおおおおー!!」

アマテラス のブーストが唸りをあげ、機体をはじき出す。
蘇る過去の感覚。カイは戦場に吹く、死を運ぶ銀色の疾風となった。

――

B Dを去る銀色の機体を、3人は展望室から見つめていた。フラン、フェイ、ログーークロス・ナイツの面々である。

「……………よろしかったのですか？あれで……………」

フランの右隣でフェイが口を開く。口調からは不満が見受けられる。

「いいのです。約束は約束ですから」

フランは視線を動かさずに答えた。

フェイは頭に巻かれた包帯に手を添える。

「隊長の事は信じます。ただ、納得はできません」

フェイはあの子の試験の結果が気に入らないらしい。不満気な表情でフランを見つめた。

フランはフェイへと視線を移す。

「フェイ、私は満足のいく結果でしたよ。彼らは十分な資格者です。時間内に仕留められなかったのは我々の力が不足していたのだと、認めるしかないでしょう」

彼の口調と表情からは、不満は感じられない。

しばし無言で視線を交わす2人だったが、フェイがため息と共に視線を逸らした。

その様子を見ていたをログは苦笑しながら口を開く。

「フェイ、俺達の負けだ。おまえもまだまだ経験不足って事だよ」

「ログだってやられたじゃないですか」

「む……」

ログは首から吊り下げられた右腕を指摘され、言葉に詰まる。
フランは苦笑しながら、既に遠くへと去った銀色の機体に視線を戻す。

夕日を反射して真紅に輝くその機体は、つい先ほどまで死闘を繰り広げていたとは思えない程に美しく輝いていた。

――――

「……カイ君」

「ん？」

ゴン

「痛っ!？」

突然、レイナの鉄拳がカイの頭部に炸裂した。コクピット内でじんと痛む頭を押さえるカイ。

「い、いきなりなんだ!？」

「あれほど無茶はするなって言ったでしょ!機体もぼろぼろだし、怪我はするし!」

反論する言葉を失うカイ。

彼の右腕には包帯が巻かれていた。機体がふき飛ばされた衝撃で、コンソールにぶつけた時にできた傷だ。

あの後カイは1分間戦い続け、試験に合格した。シールドとシールドの間のわずかな隙間にカラサワを突き刺し、0距離射撃でゼルエルを撃破。ミカエルと剣を交わし、ブレードが互いの頭部を貫く寸前、時間切れのアラームが鳴り響いた。あと1秒でも遅かったら相討ちになっていただろう。

見事カイは試験をクリアしたのだ。

だがカイは勝ったとは思っていない。むしろ引き分けとでもいったところか。

「まったくもう、私がどれだけ心配したかわかってる？」

「……すまん」

素直に反省の色を示すカイ。レイナはそれが見れば十分だった。

「まあいいけど。一応は勝ったわけだし、結果オーライってとこね」

満足気な笑みを浮かべ、後ろのシートに腰を下ろすレイナ。カイは苦笑しながらアリスと視線を交わす。

アリスは珍しく笑顔で応えた。

これで晴れてカイはレイヴンとしての第一歩を踏み出した事になる。彼自身の賭がどうなったのかは、カイしか知らない。

暗くなり始めた街を眺めながら、カイは機体を休めるべく今晚の宿へと向かった。

——と、この話はこれで終わりではない。この後カイ達はぼろぼろになったアマテラスの修理に出かける。行き先はもちろんトライブアー・シティ。

そのトライヴアー・シティのとある喫茶店で、オーナーに鉄拳制裁をくらうカイとレイナの姿があったとか無かったとか。

レイナ談

「なんで私まで怒られなきゃなんないのよお!？」

第31話 初依頼

デジタル時計の電子アラームが柔らかな音で朝を告げる。

「ん……………」

ベッドの中からゆつと手が伸び、音の元を探す。が、なかなか見つける事ができずに、手はもぞもぞと空を切る。

ついに手の主は観念したらしく、ベッドの中から這い出した。ピンクのタンクトップにハーフパンツと、かなり悩ましげな姿をしているのは時計の持ち主、レイナである。

レイナは寝癖のついた頭を掻きながら、時計のスイッチを押す。アラームが止むと彼女は力一杯伸びをし、未練あり気にベッドを後にした。

顔を洗い歯を磨き寝癖を直し、一連の身仕度を終えたレイナは一階のガレージへと向かった。

ガレージには直ったばかりの アマテラス と ラブリーハートス ペシャル が整然と鎮座していた。しかし彼女の目的はそれではない。

この隠れ家の持ち主たるレイナが起きているというのに、ソファアールで寝息をたてる寝ぼすけ君を起こすためだ。

ソファアールにははやすやすと寝息をたてて眠る青年の姿。一向に起きる気配は無い。

「むー、起きろおー！」

ボディープレス。

「うわっ！！な、なんだ！？敵襲か！？」

青年は慌てて飛び起きようとするがシーツが絡まり、更にはレイナの押し付けもあって体を起こすことができずにもがく。

「なあーに寝ぼけてんのよ。人が珍しく早起きしたってのに気持ち良さそうに寝ちゃって」

だからといってわざわざ同居人を無理矢理起こす必要は無いのではないかー！などとは口が裂けてもつっこまないように。

ようやく意識が覚醒した黒髪の青年は、何が起こったのか把握するためにきよるきよると視線を動かす。

レイナは満足気な笑みを浮かべて、一言。

「おはよ、カイ君」

「お、おはよう……」

端からみるとかなり怪しい（羨ましい）状況で、カイは起床した。ちなみに今の時刻は普通の人間がそろそろランチをとる時間である。

—————

カイが作ったサンドイッチと冷蔵庫にあったレトルトのスパゲティを頬張りながら、レイナは愛用のノートパソコンでBDの登録ペー
ジをチェックしていた。

一足早めに朝食兼昼食を食べ終えたカイは着替えをしつつ、後ろからノートパソコンのディスプレイを覗き込んだ。ディスプレイには

『依頼情報』と表示されたページが映し出されていた。

レイヴンへの依頼はクライアントが直接レイヴン個人にするもの、クライアントが募集した依頼をレイヴンが選んで受けるものの2つがある。

前者はほとんど上位のレイヴンにしかない特権だ。報酬も破格なものが多い。

一方後者の方は中々下位のレイヴンへの依頼と考えてよい。名が知れていないレイヴン達は自分で依頼を探さなければならない。報酬もあまり高くない。

つまり依頼はそのレイヴンの地位の指標と言って過言ではないのだ。ちなみにレイヴンの地位「ランク」はBDの登録ページから閲覧する事ができ、随時更新中である。

めぼしい依頼が無かったらしく、レイナはため息をついてノートパソコンを閉じた。

「いい依頼が無かったのか？」

「そ。どれもこれも中小企業とか小さな街とかの依頼ばかり。こんなちまちま受けてたってキリがないわ」

現在レイナ達の経済状況は思わしくない。アマテラスとラブリー…以下略の修理に大金をつぎ込んだため、かなりの赤字をことうむっていた。喜んでいるのはグレン達くらいだろう。

その時、ノートパソコンから気の抜けた電子音が鳴った。

「……………え？」

この電子音が何を示しているのか、レイナは瞬時に理解した。ノー

トパソコンを開く手が小刻みに震える。

ディスプレイに表示されていたのは『電子メール一件有り』の文字。震える手を抑えつつ、レイナはそのアイコンをクリックした。

『破壊工作任務』

S BのA Cパーツ製造プラントを破壊して欲しい。ここ最近S Bの行動に不可解な点が多い。恐らく新兵器の開発の類だろう。君達にはS Bのパーツ製造プラントを破壊し、できることなら新兵器または新パーツの情報を奪取してほしい。報酬ははずむ。

依頼企業――M R

「……………いやつたあゝゝ！！」

ゴン

「いつ！？」

「たっ！？」

椅子が倒れるほど勢いよく立ち上がったレイナは、後ろにカイがいることを忘れ……………この有り様。

頭を押さえてうずくまるレイナと、顎を押さえて悶え苦しむカイ。理由を知らない人間が見たら、なんと滑稽でに見えるだろう。

「いたた……………。っと、カイ君！依頼よ依頼！しかも大物！」

痛みすら瞬時に忘れる都合のいい痛覚だ。

しかしそれもそのはず。企業が直接依頼をしてくるということは、言うなればレイナの腕を見込んでの事。レイナが上位レイヴンと認められたと言う証である。

「きゃっほー！私もついに上位レイヴンの仲間入りだわ！くうくう、最高！」

「……こっちは最悪だな」

カイはレイナのような都合のいい痛覚は、あいにく持ち合わせていない。痛む顎をさすりつつボヤクカイ。

「なんか言った？」

「な、何も……」

「あつそ。さあ〜って、そうと決まれば善は急げ！行くわよカイ君！」

そう言うときレイナはさっさと愛機、ラブリー：以下略 に向かって歩き始める。状況がいまいち良く理解できずに困惑するカイ。

「い、行くってどこへ……」

「そりゃ決まってるでしょ？」

カイの声に振り返ったレイナの目は、完全にすわっていた。

……嫌な予感。

「依頼遂行に行くのよ！今すぐ！」

.....
ああ、
やっぱし。

第32話 SAMURAI BRAID

ユーラシア大陸の中でも極東に位置する『レイズニグゥセン・シティ』。海岸線に面し、自然の豊かなこの都市は一般的に『セン・シティ』とも呼ばれ、主にアジア系の人種が多く生活している。そのため食べ物の内容や建造物の造りにおいても、アジア風のもが一般的。

中でも多いのが日本の文化である。都市のあちらこちらに日本風の寺院や日本風の料理店などが存在しており、何も考えずに街を歩いているとまるで今は無き日本の街中を歩いている錯覚に陥ってしまうほどだ。

そして忘れてはならないのがこの街の中央に位置するツインタワー、『SAMURAI BRAID』本社である。3大企業の中で最も早く設立し、ACパーツの品質が最も良いとされる企業。

しかしながらこのBDは兵器の開発においては3大企業の中で最下位であり、経済面で見てもやはり3大企業の中で最下位である。

BDの主な開発パーツはジェネレータやラジエータ、ブーストなど、ACの挙動に関する物がほとんどである。

レイヴンの間でこの企業は『昼行灯』などと酷い呼ばれ方をしている。

『レイズニグゥセン・シティ東側検問所』

「……ん？」

検問所でいつものように仕事をしていた彼の視界に、あるものが移

った。

彼の様子に気づき、相棒が話しかける。

「どうした？」

「あれ……なんだ？」

彼は都市とは逆の海岸を指差す。彼の指差す先には、『何か』が砂埃をあげて接近してきていた。砂埃が邪魔でその姿は確認できない。

「……？」

彼の相棒は首から下げてあつた双眼鏡を砂埃の中心へと向け、接眼レンズを覗き込む。

「あれは……AC？」

双眼鏡を通して彼の相棒が見た物は、銀色に光り輝くボディのAC。そのACがホバリングでこちらに接近してくるのだった。砂埃はブーストの噴射で巻き起こったもの。

「ACだって？」

「ああ、そいつが猛スピードでこっちに近づいてくる」

セン・シティでは都市内のACの搭乗は原則的に認められていない。この検問所で機体を預かり、パイロットだけが手続き後、都市内に入る事を許されている。

したがって、接近してくるACには注意を呼びかけるのがこの都市の決まりであり、彼らの仕事だ。

「とりあえず全周波数通信で呼びかけてみる」

「ああ、わかった」

相棒の言葉に従って、彼は検問所にある通信機へと歩みよる。そして周波数を合わせようと調整を始めたその時だった。

ゴオッ！！

突風が巻き起こった。

ビリビリと振動する検問所。

「な、なんだあ！？」

彼は慌てて検問所を飛び出した。外に出てまず目に入ったのはなぎ倒された木々、横転した車両、そしてかぶっていた帽子をふき飛ばされたまま呆然と立ち尽くす相棒の姿だった。

「おい！何があつたんだ！？おい！」

彼は相棒の元に駆け寄り、肩を揺する。が、相棒は呆けた表情のまま酸欠の魚のように口を開け閉めするだけだった。

しかし微かに相棒の口から言葉が漏れている。彼はそれを聞き取るうと耳を澄ました。

「……………信じられない……………一瞬で……………通過しやがった……………」

「なんだって……………？」

聞き取れたのはこれだけ。しかし彼には充分だった。彼は視線を相棒から街の方へと移す。そこには砂埃をあげ、疾走する銀色のＡＣの姿。

「そんなばかな……あの一瞬で検問を強行突破しただと……？」

あの時ＡＣと検問所の距離はゆうに１ｋｍはあったはずだ。それを目を離れたほんの一瞬で通過したというのか。

ありえない。

彼は腰にさげていた小型通信機を手にとると、声をはりあげた。

「こちら東検問所！未確認のＡＣが都市内に侵入！至急警備隊を展開されたし！繰り返し！こちら……」

彼に今できる事と言えば、都市の警備隊に警戒態勢を伝える事くらいである。

銀色のＡＣはまるで嘲笑うかの如く高々と跳躍し、都市の城壁を突破した。

――――

銀色のＡＣは建造物の屋上伝いに移動し、ターゲットを探索する。着地したビルのガラスが割れ、中にいたオフィスレディが驚いて上司に熱いお茶を頭から浴びせてしまおうが、仕事中の男性が一週間かけてようやく完成させた企画書がインプットされたパソコンを衝撃で床に落として壊してしまおうが、銀色のＡＣは全く無視（というか知りようがない）でビルからビルへと跳躍を続けた。

そして見つけた。今回のターゲットを。

銀色のＡＣは屋上から地面に着地し、ターゲットへと前進する。巧みに機体を操り、車両や人々を避けながら。

ターゲットが目と鼻の先まで近づいた時、建造物の合間から3機の足付きの戦車が姿を現した。

俗にMTと呼ばれる二足歩行型戦車である。箱をくつつけただけねような不格好な脚部、腕の代わりに三連装のガトリングガン、胴体と頭部も脚部と同じく箱をくつつけただけのような簡易なもの。3機は統一して赤褐色のカラリングで、胸にはSBのトレードマークである日本の甲冑を日本刀が貫いたエンブレムが描かれていた。もちろん3機の攻撃目標はこの銀色のAC。彼らは命令通り、ターゲットに向かってガトリングガンを乱射した。

しかし銀色のACは弾丸の嵐の中を最低限の回避のみで突破してくる。勢いは衰えない。

3機のMTのパイロット達が身の危険を察知し、おののいた時には既に遅かった。

真ん中のMTの懷に潜り込んだ銀色のACはレーザーブレードを起動、一瞬にしてその二門のガトリングガンを根元から切断。続けざまに右にいたMTに向かって右腕に装備したエネルギーランチャーをその脚部に撃ち込み、屈服させる。

残ったMTが慌ててガトリングガンをこちらに向ける。が、銀色は最初に沈黙させたMTの頭部を掴み、そのまま残ったMTへと投げ飛ばした。

投げ飛ばされたMTはガンという金属音をたてて残ったMTに激突。2機は折り重なるようにして地面に倒れ込んだ。

銀色のACは3機のMTが完全に沈黙したのを確認すると、再度機体を目標へと向ける。

ターゲットは、SBパーツ製造プラント。

頭部のカメラアイが怪しく光り、銀色のACは跳躍した。

—————

『SB本社　メインセキュリティゲート前』

本社のすぐ横にあるパーツ製造プラントから、爆発音と共に黒煙が立ち上る。爆風と衝撃はこのメインセキュリティゲートの検問まで届いたいた。

本社にある基地が次々とパーツ製造プラントに向かうMTが、このゲートから出ていく。

「全く、どこのどいつだよ？本社の真横でドンパチをおっぱじめたバカなレイヴンは」

このゲートの警備員は、苦々しげにつぶやいた。

警戒態勢がしかれたおかげでさっきから本社に逃げ込む車両が増え、比例して彼の仕事も増えていた。愚痴の一つでも出て当たり前である。

その時、1台の輸送車両がスکیل音をたててゲートに接近、警備員の前で停止した。

警備員はやれやれといったふうに、輸送車両の運転席へと近づく。

「えーっと、身分証と搬入許可証を……」

「馬鹿やろう！」

輸送車両の運転手は警備員が話しかけるやいなや、いきなり怒鳴り散らした。警備員は怒鳴られた理由がわからず、目が点になる。

「この輸送車両には試作段階の最重要ACパーツが積んである！飛び火でも食らったらどうするつもりだ！さっさとゲートを開ける！」

「し、しかし、身分証の登録がないと中には……」

すると運転手はさらに声をはり上げた。

「ああ！？もう許可はとつてあるんだよ！聞いてないのか！？お前それでも警備員か！？きちんと仕事しろ仕事！もしもの事があつてみる？全部お前の責任だからな！」

警備員はサーッと血の気が引いたような気がした。そう言われれば、たしか主任がそんな事を言つてたような気も……。

「し、失礼しました！只今ゲートを開けます！」

警備員は慌てて検問所にある操作盤を動かし、ゲートを開いた。輸送車両はスキル音をたて、本社へと入つて行つた。

輸送車両の中に乗つていた2人は警備員が遠ざかるのを確認すると、おもむろにかぶつていた帽子を脱いだ。もちろんこの2人の正体は読者のご察しの通りである。

「ふいふ、とりあえずは作戦第一段階クリアだね、カイ君？」

「ああ、意外とすんなり通れたな」

親指を立ててグッジョブとでもいった様子のレイナ。視線は動かさず、笑いだけで答えるカイ。

何故ここにカイ達がいるのか――実に簡単なトリックだ。

現在 アマテラス を操りパーツ製造プラントを襲撃しているのはアリスである。当然プラントを襲撃されたS Bは混乱し、注意と警備隊を アマテラス に集中するだろう。そして本社の守りが手薄になったところでその混乱に乗じて本社に潜入し、新パーツの情報を入手するというのが今回の作戦だ。

この作戦のためにS Bの輸送車両を襲撃、力づくで拝借した。ちなみに、この輸送車両のコンテナに積まれているのは ラブリーハートスペシャル だ。作戦完了後の逃げ足は確保する……どの時代でも共通の、基本中の基本である。

人差し指で帽子をくるくると玩ぶレイナ。

「それにしても意外だなあ。カイ君って結構役者なんだ」

ギクッ

「いや……それは……その……任務だ！俺の時代では敵の中に潜入する任務は当たり前で、これくらいできないとすぐにバレてしまうからな！」

「カイ君、何焦ってんの？」

「そ、そうか？多分緊張の糸が切れたんだろう！き、気にするな！」

「……？」

「……なんとか誤魔化しきった。

なんで誤魔化す必要があるかって？カイはこの手の話には背筋が凍るようなトラウマがあるのだ。

女装して敵の基地に潜り込み、敵の司令官を誘惑して……などとは口が裂けても言えないカイなのであった。

カイは本社ビルの傍らにあった格納庫に車両を停めた。作戦通り社員や警備隊はプラントの方に目がいついていて、目的不明の輸送車両が1台紛れ込んでも全く気にならない様子。

カイは辺りに気をくばりながら輸送車両を降りた。助手席側からもレイナが降り、カイにしたがう。周囲には誰もいない。いるべき警備員も今はプラントへとかり出されているらしい。

「……よし、行くぞ」

「アイアイサー、隊長」

レイナは敬礼ポーズをとり、適当な返事を返した。あからさまに楽しそうだ。

レイナの気の抜けるような返事に呆れながらも、カイは格納庫の裏口へと歩を進めた。

裏口から出るとすぐ目の前にそびえ立つS B 本ビル。時折付近を通るMTに見つからないよう、物陰から物陰へと移動するカイ。隠密行動に慣れていないレイナはカイに置いて行かれそうになったり、物陰から移動する途中でずっこけたり……。その度にカイは先がおもいやられると、ため息をつくのであった。

苦労の末ようやく本ビルにたどり着き、中に侵入できそうなルートを探す。するとカイ達が隠れている場所から数m離れた場所に、『関係者以外立ち入り禁止』と書かれたドアがあった。案外簡単に見つかるものだ。

関係者ではないが、ありがたく使わせてもらう事にしたカイはドアへと駆けた。

息一つ乱さず、音も無く、文字通り風のように。

そしてレイナを忘れて。

――

「……………何事ですか？」

「はい。おそらく他の企業の依頼を受けたレイヴンが、我々のパーツプラントへ攻撃を」

窓の外、眼下に広がる敷地内、パーツプラントから立ち上る黒煙。

「物好きもいたものです。こんな貧乏企業を襲ってなんの得があるって言うんですかね？」

「ご心配なさらず。我が企業の警備隊が例の新パーツを使用して鎮圧にあたっています」

「そうですか。心強いですね」

「……………社長、そろそろお時間です」

「ああ、もうそんな時間ですか。じゃあ、行きましょう」

「はい、社員」

—————

けして広いとは言えないプラント内をアリスは アマテラス を巧みに操り、縦横無尽に走り抜ける。 アマテラス が通り過ぎた後には破壊されたパーツ製造機と、戦力を削がれたMTが転がっていた。

このプラントは建物が六角形の形をしており、一辺から中心にかけて6つのエリアに分かれている。そしてその六角形の中心にはこのプラントの全てを管理する制御室がある。アリスはその6つのエリ

アを1つ1つ移動しながら潰して回った。

無駄弾と無駄なエネルギーは使わない、確實無比な破壊活動である。時折現れるMTには足下にカラサワを打ち込み、その戦力を奪う。並のレイヴンどころか、上位レイヴンを相手にしても互角に戦える戦闘機動。

さすがはカイをサポートしてきただけの事はあつて、ACの操縦程度は朝飯前だ。更にアリスはカイの戦闘データを記録・分析し、そこからはじき出される最良の戦闘パターンで戦闘を展開する。その動きは、まさにカイそのものだった。

『次のエリアで最後ですね』

5つ目のエリアを沈黙させたアリスは、淡々とした表情で呟いた。最後のエリアを破壊した後は外で適当に警備隊と戦闘していれば、本社に侵入したカイ達から注意を逸らし続ける事ができる。後は本社からの脱出に成功したカイ達と合流し、この街ともおさらばである。それで何事も無ければ今回の任務は終了だ。

「……そう、何も起こらなければ……」。

次のエリアのゲートに向かって アマテラス を移動させるアリス。ゲートはおそらくロックがかかっているだろうが、カラサワのフルパワー発射で破れる範囲内の厚さだ。

ゲートへ接近しながら カラサワ を構えるアリス。しかしアリスがカラサワ を撃つ前に、ゲートが勝手に開き始めた。

『?』

ゲートが開くとそこにはMTが4機、まるでアリスを待ち構えていたかのように横一直線で整列していた。しかも今までのMTとは明らかに形状が違う。

『……新手ですか』

細い四肢と寸胴なコア、3本の指で持った不思議な形状のバズーカ、頭部は無く代わりに胴体と一体化したカメラアイ。そのカメラアイが4機一斉に不気味な光を放つ。

だが新手が来ようが鬼が来ようが任務の変更はない。パーツプラントの破壊、敵戦力の剥奪。目の前に現れたMTも、その1つだ。

アリスは迷う事無く機体を加速、同時にブレードを起動。この距離ならば格闘の方が早いと判断したからだ。

4機を中心にいた2機のうち、左にいたMTにシールドで体当たりを食らわせる。

ふき飛ばされたMTはもんどりうって数10m離れた地面でようやく停止。アリスは続いて右にいたMTを逆袈裟切りから袈裟切りの連続攻撃にてその両腕を切断。とどめとばかりにフロントキックで蹴り飛ばし、背後にいた3機目のMTもろとも壁に叩きつける。ぶつかられた壁はゴオンという金属音と共に大きくへこみ、MTの形をくつきりと残した。そして、最後の1機。

アリスは機体を加速させ、4機目へと突貫する。

MTは左手に構えた不思議な形状のバズーカを アマテラス 向け、発射した。銃口からは光の球体――プラズマ弾が吐き出された。

つまりこのバズーカは実弾兵器ではなく、プラズマを発射する光学兵器だった。

しかしこのプラズマ、弾速が極端に遅く、大きさも銃口の割には通常のプラズマガンと大差がない。

『こんなもの！』

アリスはこのひ弱なプラズマを移動回避ではなく、レーザーブレードによる相殺回避を選んだ。それが現状において最も効果的な手

段だったから――。
しかしそれは間違いだった。

『!??』

アリスがそれをブレードで薙払った瞬間、プラズマが破裂。衝撃に機体が揺さぶられる。

アリスはすぐさま機体の状態をチェックした。しかし異常はどこにも見当たらない。ただの錯乱兵器だったのか――いや違う。異変は少し間をおいて現れた。

『これは……機体の…エネルギーが…』

アマテラス のエネルギーが、みるみるうちに減ってゆく。エネルギーメーターはわずか5秒足らずでレッドゾーンに入っていた。――まるで、エネルギーが何かに吸い取られているかのように。力を奪われ、次第に動けなくなる アマテラス 。その場に崩れ落ち、膝をついた状態が精一杯だ。

『……!??、そついう事ですか…!』

アリスは機体の装甲至る所に細かい粒が付着している事に気づいた。よく見るとそれは発信機のような形状をしていて、中心の緑色のランプが点滅している。

これが、 アマテラス のエネルギーを『食って』いる害虫の正体だ。おそらくあのプラズマの中に仕込まれていたのだろう。

今更後悔してももう遅い。エネルギーは今にも底尽きようとしている。

『……………カイさ……………逃げ……………』

エネルギーの最後の一滴が吸い取られた瞬間だった。

立ち膝すらできなくなった アマテラス はぐらりと傾き、そのまま地面へと倒れ込む。カメラアイからは既にその光すらも失われていた。

第6エリアの奥、第1エリアへとつながるゲートが開き、6機のMTが入ってきた。6機の背後にはACを牽引するための車両が従う。彼らの目的は1つ。『敵ACの捕獲、あるいは破壊』だ。

—————

『SB本社ビル15階 サブコンピューター室』

SBのほぼ全てのコンピューターを統治するメインコンピューター。パーツのデータから経理まで、あらゆるコンピューターをこの1機で制御している。そのためメインコンピューターのセキュリティシステムはかなり強固なもので、外部からはほぼ侵入は不可能。まさに鉄壁の要塞に守られた、最高のコンピューターと言えよう。しかし、外部からは蟻1匹通さない鉄壁のセキュリティシステムも、1つだけ弱点があった。

——ある虫に、他の虫とそっくりに擬態してその巢に入り込み、内側から食い荒らす種がいるという。

つまりメインコンピューターの庇護下にあるコンピューターから侵入すれば、鉄壁の要塞を打ち崩せるという事だ。

カイ達はSBのメインコンピューターに一番近い存在であるサブコンピューターから侵入し、メインコンピューターの庇護の下でデータを入手しようというのだ。勿論メインコンピューターに直接侵入できれば一番良いのだがそれがある部屋のセキュリティはかたく、

とてもではないが入れそうにない。

そこで比較的セキュリティの薄いサブコンピューター室を『借りた』のだ。『借りる』といっても、ドアの前にいた警備員を気絶させ、物音に気づいて出てきた職員達も気絶させて、いじめっ子が他の子供からなけば無理矢理おもちゃを『借りる』のと同じ原理だ。サブコンピューターのハッキングを開始したカイ達の傍らにはロープでぐるぐる巻きにされ、口をテープで塞がれた6人の哀れな職員達が転がっていた。

「あまり時間はないぞ。できるだけ急いでくれ」

「わかってるよ！ただもう少し……よっしゃ！メインコンピューターに侵入成功」

軽快にキーを打つレイナの横で、カイは扉の外に神経を集中させている。

警備員がいない事に気づかれれば、すぐに他の警備員が異変を確かめに来るだろう。それだけはなんとしても避けたい。そのためには5つから成るメインコンピューターのプロテクトを突破し、データベースをハッキング、データのダウンロードまでを長くても10分で終えなければならぬ。普通なら時間ギリギリでなんとかできるところだが……。

「第2、第3プロテクト突破！第4プロテクトハッキング中……やりい！第4、第5プロテクト一気に突破！」

「……どうやらいらぬ心配だったようだ。機械は苦手でもレイナの情報処理技術は他を圧倒している。」

そうこうしてるうちに、レイナはあっという間にメインコンピューターのデータベースに侵入し、新パーツの情報を探り始めた。

もはや神業である。

「えっと、パーツ開発データと……あつたあつた……うーん、
いっぱいあるわねえ……。まいいや！片っ端からダウンロードすれば
いいっしょ」

レイナは軽快にエンターキーを押し、あらかじめ入れておいたCD
- ROMにありとあらゆるパーツのデータを流し込む。これも神業
の1つということにしておこう。

データのダウンロードを終えたCD - ROMを取り出すと、レイナ
はカイに向かって満足気な笑みで親指を立てる。カイもそれに笑顔
で応える。

「ミッション・コンプリート、だね」

「ああ。あとはここを抜け出すだけだ」

カイとレイナは依頼の成功という達成感に浸りながら、軽快な足ど
りでサブコンピューター室の扉を開けた……。。

ジャキン！

「……………」

「……………あれ？」

そこには栄光の赤い布の道ではなく、ずらりとカイ達を取り囲む重
苦しい銃口があった。

「動くな、手を上げてゆっくり後ろを向くんだ」

銃口の1つが静かな警告を口にする。

カイはレイナに気を取られるあまり、部屋の外に集まる警備員達に気づく事ができなかった。

「……えっとさ、こーゆー時って日本じゃなんていうのかなあ……」

「……………不覚、だな」

また一つ、レイナは日本語に詳しくなったのであった。

第33話（前書き）

更新が長引いてしまい本当に申し訳ありませんでしたm(_____)m
書き溜めも底を尽き、さながら補給を絶たれた部隊のごとく苦しんで
いる状態です。

うゝん、こんな事では読者様に愛想をつかれてしまいますね(^ o

^ ;)

もっと頑張らねば！

第33話

「社長、どうやら襲撃してきたレイヴンの身柄を拘束したようです」

黒髪を左右でお団子に結ったスーツ姿の女性。四肢はすらりと長く、モデルも舌を巻いて逃げ出す程だ。顔つきは一目でわかるアジア系、それもかなり美人。

その女性が携帯式の端末を閉じながら、前を歩く『少年』に話しかけた。

「そうですか。まあ、あれを使っただのなら当然でしょうけど」

前の歩く少年はこちらも黒髪アジア系、無垢な顔つきに似合わないしつかりとした言語力、更には体型にも似合わない濃紺のスーツ。

「ええ、それはそうなのですが……。少し……いえ、かなり妙な事が……」

「妙な事？」

少年は歩みを止め、女性の方を振り返る。

「はい。パーツプラントで捕獲したACには、誰も搭乗していません。……」

少年の表情にわずかな困惑の色が浮かぶ。

「誰も乗っていなかった……？オートパイロットや遠隔操作ではないのですか？」

「はい。その線でも検証してみたのですが、プラント破壊時の攻撃の正確さ、対MT戦闘時の戦闘機動、どれをとってもオートパイロットや遠隔操作でこなせるものではないかと……。パイロットと思われるレイヴン2人はサブコンピューター室からメインコンピューターをハッキングし、逃亡しようとしたところを警備員が身柄を拘束しました。更に第1格納庫で未確認の輸送車両を発見、コンテナにはおそらく彼らのものと思われるACが搭載されていました」

女性が言葉を終わると、少年は顎に手を添えて思考を巡らせる。

（おそらく輸送車両のACはここからの逃亡に使う足。目的は我が社のパーツデータだな。パーツプラント襲撃はレイヴンから我々の目を逸らす図か……。気になるのはパーツプラントを襲撃したACだな。オートパイロットでも遠隔操作でもないとなると、レイヴンはどうやってそれ程までの戦闘をACにさせたんだ……？）

少年は持てる知識の中からACを単独で戦闘させられるシステムを探すが、どれもこれも動かすだけで戦闘までには至らない。拘束したレイヴンを尋問すれば情報を聞き出せるかとも思ったが、彼らレイヴンがそう簡単に口を割ると思えない。

謎は解明されぬままかーと、少年が考えを止めようとした時、一つの記憶が彼の思考回路から引っ張り出された。しかしそれはあまりにも突然で、信じがたい事。

（……まさかね）

はなっから疑ったまま、少年は女性に問う。

「そのACの色は？」

「報告によると……銀です」

「……………レイヴンの名前は、わかりますか？」

「はい、BDのデータベースにアクセスしたところ、カイ・アマノとレイナ・アイナスというレイヴンだという事が判明しました」

淡々と答えた女性の言葉に、少年は血の気が引くような感覚を覚えた。

「……まさか、そんなはずは……」

「ミンリン、今日の取引は中止です」

「は……？」

少年の言葉に女性は呆気にとられた表情をする。今日はとある中企業を買収するための大事な取引である。SBにとってこの中企業を取り入れる事は金銭や技術的にもかなりの利益になるのだ。しかし少年はそんな事お構いなしに、少し興奮した面持ちで続ける。

「そのレイヴン2人と会います。部屋の用意をしてください」

「は、はい！」

女性は慌てて携帯の端末から部下に連絡を始めた。

少年は来た道へと引き返す。

彼には使命があるのだ。銀のACのパイロットと会うという重大な

使命が。

――――

カイ達は通された部屋で立ちすくんでいた。てつきり牢獄に入れられるものだとばかり思っていたら、通されたのは10畳ほどの和室だった。部屋の中には囲炉裏があつて、お湯が入った茶釜がこぼこぼと音をたてている。

「……カイ君？」

呆けた表情のレイナが、気の抜けた声でカイに話しかける。

「私達、捕まつたんだよね？」

「……ああ、そうだ」

「じゃあなんで日本の『ワシツ』なんかに通されてるのかなあ？」

「……俺に聞くな、こつちが知りたいくらいだ」

再び沈黙。相変わらず呆けた表情のままだ。

カイはふらりと、靴を脱いで畳に上がった。靴下を通して足の裏に懐かしい感覚が広がる。

「あ、待つてよ！」

レイナも慌てて靴を脱ぎ、カイに続く。レイナにしてみれば畳の上を歩くなど初めての経験。畳独特の不思議な感触を感じながら、カイのもとへと歩み寄る。

カイは飾ってあった壺や掛け軸を眺めながらぼーっとしていた。この時代に日本をこんなにも近く感じるのはこの場所くらいなものだ。少しくらい懐かしさに身を委ねても罰は当たらないだろう。

レイナはカイの横顔を見つめながらそんな事を考えていた。

と、その時、襖を模した自動ドアが開く。その音で我にかえったカイはレイナをかばうように彼女の前に立ち、警戒する。

なんのつもりかは知らないが、こんな場所に通したのには訳があるのだろう。見かけはただの和室だが、実は情報を吐かせるための拷問部屋か。はたまたこちらを油断させて情報を聞き出すための心理作戦か。どちらにしろ厄介な事には変わりはない。

――訓練を受けた自分ならまだしも、レイナだけはなんとしても守らなければ……。

自分でもわからない衝動にかられ、カイは更に警戒を強めた……が、

「……へ？こ、子供お？」

カイの背後でレイナがすつとんきょうな声を上げた。ドアから入って来たのはどう見ても10歳前後の子供と、和服を着たスレンダーな女性だった。

強面の屈強な男性が入って来るのを想像し、覚悟していた2人はまともや呆然となる。本日2回目だ。

「ようこそ我がS Bへ。どうぞくつろいで……って、もうおくつろぎのようですね」

少年はニコニコしながら畳に上がり、そして女性は無表情のままそれに続く。そしておそらく彼らの定位置、掛け軸を背にした囲炉裏の前に立つ。

「どうぞ、とりあえずお座りください」

少年は自分達と囲炉裏を挟んだ向かい側に手を指し、自らが率先して座る。

カイ達は全く状況を把握できずにいた。牢獄ではなくただの和室に通され、やたらとしつかりした少年と和服の女性にもてなされている。彼らには悪いが、かなり異常な状況だ。少年は相変わらずニコニコと微笑んでいる。気のせいかもしれないが、彼からは悪意らしきものは全く感じれない。

もうこうなっては彼らの手のひらの上で踊るしかない。『毒を食わらば皿まで』…とでもいったところか。

カイは意を決し、少年の指す所へと腰を下ろした。いつ何があっても対応できる座り方……正座で。困惑していたレイナもカイにならって正座。少年と女性に真つ正面で向き合う形になった。

少年は満足気な笑みを浮かべながら口を開いた。

「では改めて、ようこそ我がS Bへ。僕はS Bの社長、トキサダ・ショウジです。そして彼女は僕の秘書のミンリン・アーシャです」

「……はい？」

レイナは耳を疑った。少年の口から出た有り得ない言葉。

「……この子が……S Bの社長？」

「まっさかあゝ！ボク、嘘はダメダメよ？お姉さん達の事からか
つて……」

ヒュッ！

レイナが言葉を言い切る前に、喉元に突きつけられる柄杓。

「言葉を慎みなさい。この方は正真正銘、S Bの社長です」

和服の女性――ミンリンが、お茶をたてるために手にしていた柄杓でレイナをたしなめる。

「は、はいっ!？」

たとえそれが殺傷能力0だとしても、こうなるとまるで刃物を向けられているような錯覚に陥る。

どうやら少年――トキサダの言う事は本当らしい。

トキサダは相変わらず笑顔のままだ。

「ミンリン、いいんです。最初は誰でもそう言います」

ミンリンは一瞬躊躇うような表情を見せたが、素直に柄杓をレイナの喉元から離す。安堵のため息を漏らすレイナ。

「あなたも、その物騒な物から手を離してください。危害を加えるつもりはありません。カイ・アマノ……さん？」

カイは懷に手を入れていた。その手のひらに握られているのは、拳銃。どこから持ち出したかはレイナすらわからなかった。

「……………」

驚いているレイナを横目に、カイはゆっくりと懷から手を引き抜く。もちろん拳銃は握られていない。

「さて、こちらの自己紹介は終わりました。次はあなた達の番ですよ」

「……名前を知っているくらいだ。もう調査済みなのだろう？」

そう、カイの予想通り2人の事は全て調査済みだった。つい最近B
Dに登録されたカイの事から、レイナの事まで、全て。

まるで最初から知っていたようなカイの読みも賞賛に値するが、そ
うカイに真っ向から向き合うトキサダも少年とは思えない堂々たる
態度である。

カイの言葉に少し驚いたようだったが、トキサダはそれでもなお笑
顔を崩さない。

「あ、わかつちやいました？さすがはあのクロス・ナイツと互角に
渡り合っただけの事はありますね。……でも、僕が知りたいのはそ
の事じゃありません」

ふと、トキサダの笑顔に曇りが混じる。

「なんの目的で我が社のデータを持ち出そうとしたのか、パーツプ
ラントを襲撃した目的は何か、そしてクライアントは誰か……話し
ていただけます？」

「……レイヴンがそう簡単に口を割ると想うか？」

いよいよカイの言葉に殺気がこもり始める。レイナにも、勿論トキ
サダとミンリンも肌で感じれる程の巨大な殺気。レイナの頬をいや
な汗がつたう。カイの事だ、何をしてくすかわかったものじゃない。
しかし目の前にいる少年はこれほどまでの殺気の中にいながら、全
く動じていない。

「……確かにその通りですね。ですが……これならいかがですか？」

トキサダはおもむろに背広の内ポケットから何かのリモコンを取り出すと、ついているスイッチを押した。するとカイ達から見て右側の壁が開き、大型のモニターが現れた。

そこに映し出されていたのは、10機以上のMTに取り囲まれたアマテラスとラブリーハートスペシャル。

「……しまった……」。

カイは表情を面に出さないよう、心の中で呟いた。自分達が時間内に合流地点に現れない時、アリスには撤退するよう言っていた。事実自分達は捕まり、合流地点に行く事はできない。となればアリスは命令通り安全な場所まで撤退しているとばかり思っていた。だが、甘かった。

実力は並のレイヴン以上であるアリスとアマテラスは捕獲され、ラブリーハートスペシャルは発見されてしまった。完全な計算不足である。

「あなた達の大切なACは見ての通り人質にとらせていただきました。返答次第によつては……」

トキサダの言葉に呼応したように、画面のMT達が一斉に手にした得物を2機のACに向ける。

「……なるほど、考えたな」

カイは皮肉気に事を吐き捨てる。それは相手と同時に自分へ向けられたものでもあった。普通のレイヴンならACを人質にとられようとそれ程動じる事は無い。しかしカイはアマテラスを失うわけにはいかない。それを知ってか知らずか、目の前に座る少年はカイ

の弱みを突いてきた。

悪意を感じられないなどとてもない話だ。

「話して……いただけますね？」

トキサダ、満面の笑み。完敗である。

カイはレイナへと視線を移す。するとレイナもこちらを見ていて、視線が交わる。

少し、険しい表情。だが、言いたい事は伝わった。

「……いいよ、話して。」

カイはトキサダへと視線を戻し、口を開く。

「わかった。話そう」

—————

全て、話した。

MRの依頼である事、依頼の内容、プラント襲撃は囿である事。

トキサダは何も言わずに聞いていたが、カイが話し終わるとため息混じりに口を開く。

「なるほどね……やっぱりMRですか。あそこはやたらとちょっかいを出してきて困っていました。依頼内容は我々の新パーツのデータ……ですか」

「そうだ。あいにく失敗に終わったがな。……もういいだろう？」

喉からこみ上げる苦々しい感覚を押し戻す。情報の漏洩など本来あ

つてはならない事だ。それを相手に話さなければならぬという事は、プライドを踏みにじられると同じ。

もういいだろうと、カイは心の中でもう一度呟く。

「いえ、もう一つだけ、知りたい事があります。……あの銀色のAC」

カイは全身に冷水を浴びせられたような気がした。

「あのACを我々が捕獲した時は無人でした。でも確かに武器を抜き、戦っていた。現在ACを無人で戦闘させるシステムはどこも開発に成功していない……。いったいどうやったのか……。話していただけです。」

「それを知ってどうする？」

カイの殺気が膨れ上がる。もし殺気を察知する機械が存在したら、間違いなくレッドゾーンを振り切っているだろう。

「……じゃあ逆に聞きましょう。それを我々が知ったとしたら……あなたはどうするのですか？」

「返答しだいによつては……」

レイナにはカイが言葉を終える瞬間、手がぶれて見えなくなったような気がした。と同時に、傍らで黙々とお茶をたてていたミンリンの腕もぶれて見えなくなった。

ジャン

トキサダの眉間に突きつけられる銃口。実行者はカイだ。同時に、カイのこめかみにも拳銃が突きつけられた。こちらの実行者はミンリン。

カイが立ち上がると同時に懷から銃を抜き、セーフティーを解除してトキサダの眉間に突きつけるまでわずか0・5秒足らず。そしてミンリンがカイに銃口を向けたのもほぼ同時。もはやどちらも化け物じみた反応速度である。

「……なるほど、返答によっては……撃つ、というわけですか」

「わかつているなら話が早い」

カイは脅すように撃鉄を引き起こす。ガチャリという嫌な音が響いた。

しかしトキサダは恐れる様子も無し、冷静に笑顔を崩す事無く言葉を紡ぐ。

「しかしいいんですか？ここで僕を撃つたらミンリンは間違いなくあなたを射殺します。そうなったらあなたの相棒……レイナさんとのAC……どうなっても知りませんよ」

トキサダはカイの圧倒的不利を主張した。彼の言う通り、この状況でカイに勝算は無い。

「……だが、

「どうなっても知らない……か。その言葉、そのままお前に返してやろう」

挑戦的に笑むカイ。この状況でなぜ、どこからその余裕が出てくるのか。トキサダは困惑し、笑顔が濁る。

「……どういう意味ですか？」

「こういう事だ」

ジャキン

「これで50:50よ」

ミンリンのこめかみに、銃口がそのひんやりとした先端をつきつけた。カイと同じく、レイナが挑戦的な笑みを浮かべながら。

カイは立ち上がて銃を抜く瞬間自らの体を壁にして2人に気づかれぬよう、もう片方の手で背中越しにレイナへもう1丁の銃を投げ渡していたのだ。

「さあどうする？これで立場は対等だ」

カイの殺気が一段と膨れ上がる。トリガーにかけられた指は、今にも引かれようとしていた。

重苦しい沈黙と張り詰めた緊張感が辺りを包む。

「……は、あはは、はははっ！」

突然、トキサダが楽しげに笑い始めた。今度はカイとレイナが困惑の表情を浮かべる。あまりのプレッシャーに気がふれたか——などと思ったが、平然としているミンリンをみてその考えは却下。

「ははっ さすがですね。少し試させていただきました」

試す——その単語に怪訝な表情のカイとレイナ。だがトキサダは

かまわず話を続ける。

「あのＡＣの秘密を知りたいと言ったのはただ単に僕が疑問に思っただけです。気にしないでください。それと、これを」

トキサダが差し出した手には見覚えのある１枚のＣＤ－ＲＯＭ。そう、カイ達がＳＢのデータを保存したものである。

「これをクライアントに渡せばあなた達の任務は成功なんですよ。我がパーツプラントはあなたのＡＣによって壊滅的なダメージを受けていますから、そちらは既に遂行済みです」

差し出されたＣＤ－ＲＯＭを受け取るカイ。拳銃を握るカイの手は驚きで下にさがられ、銃口はターゲットを見失っていた。

「……おまえは、一体……」

「勘違いしないでください。あなた達には利用価値がある。泳がせていた方が我々にとって利益になると考えただけです」

トキサダは笑顔でそう言うといつの間にか拳銃をしまったミンリンと共に部屋を出ようとする。

が、ドアの前まで来てトキサダは何かを思い出したように立ち止まり、振り返った。

「あ、そうそう！今警戒は解いてありますからいつでも逃げてください。お二人の愛機はあの訓練場にそのまま置いてありますからご心配なく。それと、あなた達はこのセン・シティではＶＩＰ扱いですから、いつでもいらしてください」

こちらが質問する隙を与えず必要事項だけを告げると、トキサダは部屋を後にした。ミンリンが礼をすると同時にドアが閉まり、カイとレイナは部屋に取り残される。

レイナは銃を構えた状態で固まり、口が半開きのまま呆然としていた。カイは思考能力0のまま、ただ渡された（元々こちらの物だが）CD-ROMを見つめるばかりだった。

――――――――――

執務室の椅子に座り、ノートパソコンのディスプレイを見つめるトキサダ。このノートパソコン、敷地内の監視カメラ全てと直結している。時と場所を選ばずSB本社敷地内を常に見る事ができる優れ物である。

そしてそのディスプレイには、SB本社の敷地内から出ていく2体のAC。

トキサダの傍らに立っていたミンリンが声をいつもより少し小さくして問う。

「……社長、では彼が……」

「ええ、十中八九間違いないでしょう。彼とあのACこそ我々ショウジ家が代々SBを守り続けた最大の目的……」

ミンリンに向けた目を再びディスプレイへと戻す。夕日を反射して真紅に輝く銀の機体。トキサダは見つめ、そして視線をそらし、咳く。

「カイ・アマノ…… アマテラス……」

傍らの秘書に聞かせようとしたわけではなくただ自然と口がその名

を紡いだ。

ディスプレイにはもう、2体のACは映っていない。

――――

夕日はその姿を地平線へと隠し、代わりに三日月が街を照らしていた。だが街の光はそれが必要としないほど、明るかった。

文明の光を遠くに眺めながら、カイとレイナは機体を操作する。とりあえずどこかの都市までたどり着き、今晚の宿を探さなければならぬ。さすがに徹夜で隠れ家に帰る体力は残っていなかった。

するとここまでほとんど言葉を発さなかったアリスが、おずおずと口を開いた。

『あの…申し訳ありませんでした。私が捕まってしまったばかりに、お二人に迷惑をかけてしまって……』

視線を合わそうとせずうつむき加減で話すアリスからは謝罪の色が深く感じ取れる。しかしカイはそんな彼女の姿に思わずクスクスと笑いが漏れた。

「気にするな。あれは俺の誤算であっておまえのミスじゃない」

あつさりと言つてのけるカイだが、普段から超がつくほど真面目なアリスは納得するはずもなく、

『し、しかし私がもう少し慎重にやっていたればあんな失態はなかったでしょうし……』

更に自分を追い込む。彼女の悪い方の癖だ。

「いいんだアリス。俺が言っただから、いいんだ」

何かを諭すかのように語るカイ。彼の言葉は独特の安心感を誘う。しかしアリスにはわかった。この言葉の本当の意味を、微かに香る悲しげな響きを。

アリスは八つと顔を上げ、カイを見つめる。視線は地平線の先を見つめ、表情は悲しげな笑みを浮かべていた。

「……はい」

アリスは短い返事後、それっきり口をつぐんだ。自分の利己的な反省が、これ以上彼の傷に触れぬように。

カイは考えていた。SBで出会った少年、トキサダ・ショウジ。彼は一体何が目的で自分達を逃がしたのか。

利用価値のためーと、トキサダは言った。だがそんな理由で企業機密をこつも易々と漏らすものだろうか。それとも、何かもっと他に目的があるのだろうか。

なんにせよこのSBという企業、もつと深い『何か』を隠し持っているようだ。カイのブラックリストに、新たにSBが追加された。

第34話 カイの特技（前書き）

遅ればせながらあけましておめでとうございますm（――）m
更新、滞ってました……。すいませんっ！これには海より深い事情
が……。――（T―T）

話すと長くなるのでまた次の機会に。え？いらないうて？失礼いたしました……。

さて、今年初のARMORED COREは……。戦闘、無しです。
すいませんっ！これにも海より……。――（以下略）。

たまにはほのぼのもいいかな。なんて（汗）

長くなりましたが、どうか今年もよろしく願いますm（――）
m

第34話 カイの特技

いつもと変わらぬ朝。依頼を終えた次の日はいつもこうだ。適当な時間にレイナが起きて来て、カイを起こす。そして（かなり）遅い朝食をとり、カイはACの整備、レイナはパソコンを開きよさげな依頼を物色する。

出会ってまだ長くない2人だが、そんな行動パターンがすでに当たり前だった。

が、今日は違った。正確には、カイの行動がいつもと違ったのだ。その行動はと言うと……。

「……ねえ、何してるの？」

洗顔と歯磨きを終えたレイナが、冷蔵庫の前でドアを開けたまま立ち尽くすカイに問う。答えは返ってこない。

「ねえってば」

この距離で聞こえないはずはない。だとしたら、あえて無視しているのだろうか。

そう思うと無性に腹立たしい。レイナは頬を膨らませ、声のトーンを上げてながらカイに歩み寄る。

「カイ君ったら！聞いているの！？」

カイの横に立ち、視線を辿る。視線の先は冷蔵庫の中身。

ミネラルウォーター3本、アルコール飲料5本、パン1斤、ハム1

個、レタス1個、レトルト食品10個、レトルト食品、レトルト食品、レトルト食品……。

「これで……何を作れと……？」

「え？そりゃあ、このレトルトスパゲティでもチンすれば……」

頬に人差し指を当て、考える素振りを見せる。

すると、レイナの言葉にカイがわなわなと震えだした。

「……力、カイ君？」

怪訝そうにカイの顔を覗き込む。と、その時……。

ガシッ

「きゃあ！？ちょ、ちよつとカイ君！？」

突然カイはレイナの襟元を掴み、ずるずると引きずりながら アマテラスへと歩き始めた。その間、全くの無言。

「な、何！？なんなのよお！！私なんか悪い事した！？」

じたばたと暴れながら問いたただすレイナ。しかしカイから答えは返ってこない。

「服！服伸びるって……きゃあ！？ちよつとおへそが！？ヤバいつて！見えちゃ見えちゃうー！！」

背後で何が起こっているかなど、今のカイにとっては全く興味は無い。レイナにその事を言ったら怒られるだろうが……。

「アリス！」

カイの鬼気迫る呼びかけに、アリスは慌てて機体をしゃがませた。カイはレイナを抱え アマテラス へよじ登り、そのままコクピットへと彼女を投げ込む。

ドサツと、鈍い音と共に中から『むぎゅ』という蛙を潰したような声が聞こえたが、聞こえないフリ。

そしてカイもコクピットに滑り込む。

10秒後には隠れ家のシャッターが開き、日も高くなった外界へと飛び出す アマテラス の姿があった。シャッターは自動で閉まり、隠れ家は地面へと潜る。 アマテラス はあつという間ひ地平線の彼方へと飛び去り、辺りには静寂が戻った。レイナの叫びも、全てを飲み込んで……。――

「一体なんなのよ……!?」

――

隠れ家からあまり離れていない、小規模な町。そこにカイ達の姿があった。 アマテラス はこの町に唯一のガレージに預けてある。つまり、安心して『ショッピング』を楽しめるというわけだ。

「ねえってばあ。こんなとこ来て何すんのあ？」

町中をスタスタと軽快に歩くカイの後を気だるそうに追うレイナ。右手は先ほど打った腰をいまだにさすっている。

「いいから黙ってついてこい」

振り返りもせずにはびやりといい放つかい。気を抜けば置いていかれそうである。

時折駆け足混じりにレイナは後に付いた。

5分ほど歩いたところで、2人は町の中心部へとたどり着く。そこは食料品や生鮮物を扱う、いわゆる市場だった。

この町は規模は小さいものの位置的な環境があり、海や山からの新鮮な幸が一度ここに集められ、各大都市へと出荷される。日本でいうなら『天下の台所』とでもいったところか。もちろん、出荷されるもの以外は全てこの市場で売られていて、大都市で買うより格安で新鮮な食品が手にはいるのだ。

「ここが目的地なの？」

「そうだ。楽しみだろう？」

先ほどとはうって変わって楽しそうに歩くカイ。レイナには訳がわからない。こんな生臭い所のどこが楽しいのか――。

まずここに来て驚くのがこの活気。むしろ熱気と言っても過言ではない。出店している店達は自分達の自慢の品を武器に声を張り上げ

客引きをする。近くによるとすぐさま呼び止められ、買取を要求される。

次にこの人の数。どこを見ても人、人、人……。人混みを嫌う人間ならば蕁麻疹が出る程。ただでさえカイは歩くのが速いため、少しでも目を離したりもたついたりしたら二度と会うことは出来ない。

これも市場の活気に拍車をかけているのだろう。

そしてトドメはこの『におい』。生鮮食料独特の生臭さというかなんというか……。特にキツいのが海鮮食料だ。魚特有のにおいが、慣れていないレイナの鼻をつく。レイナでなくとも、苦手な人間にとっては悪臭に他ならない。

一体カイは何のつもりで自分をここに連れて来たのかー！全く意図が読めず思考が右往左往していた時、カイが1つの店の前で突然立ち止まった。

「ふむ…なかなかいい魚じゃないか」

「おっ！その兄ちゃんいい目してるねえ！」

頭には捻りはちまき、タンクトップに腰に前掛けをした屈強な店主が豪快な笑顔と共にカイに歩み寄る。

「ん。死んでからまだそんなに経っていない…新鮮さは申し分ない。大きさも平均以上。脂の乗りも最高だな」

「そうだろう？ついさっきまでいけすで泳いでた一級品だ！どうだい？買うか？」

目を輝かせながら詰め寄る店主。なんだかグレンに似てる気がする。しかし、

「いや、まだまだだな」

カイは店主の攻めを一蹴した。

「ど、どうしてだい？ 兄ちゃんもいい魚だっって言ってたじゃないか」

「魚としては申し分ない。だが……値段だ。この大きさと新鮮さでこの値段は高すぎる。他は売れているのにこれだけ売れ残っているわけだ」

カイは魚を眺めながらサラリと言い放つ。

レイナは驚愕する。こんなに屈強な店主に面と向かって言い放つ言葉ではないだろうに、と。下手をして逆鱗に触れでもしたら、まな板に刺さっている刃渡り30cmの包丁が唸りをあげかねない。しかしレイナの心配をよそに、カイは淡々と店主に向かって言葉を叩きつける。

「ふむ、これならざっと……3割引きだな。それなら買う」

「お、おいおい、そりゃないぜ！？ それじゃ商売あがったりだ！ 最高でも2割！ それ以上はまけねえ」

「いや、まだいけるはずだ。2・8割」

「2・4割！」

「2・6割」

「2・5割！」

「買った！」

「売った！」

レイナは思う。一体なんだ、この人達は――と。

――

結局、カイはこの方法で回った店で買った物全てを格安の値段で手に入れた。魚介類、肉類、野菜類、気づけばカイもレイナも両手いっぱいのお食料品を手に入れていた。最近の仕事も軌道に乗り赤字も脱出できたため、この程度の出費は痛くもかゆくもないのだが……。

「カイくうくん。手が疲れたよう。足が痛いよう。財布の手持ちがすっからかんだよう」

どうやらそれ以前の問題のようだ。

両手いっぱいの荷物を地面すれすれに持ち、腰をくの字に曲げながら歩くレイナ。まだそんな歳ではないだろうに。

しかしカイはそんなレイナを振り返りもせずに、何やらぶつぶつと呟いている。

「……足りんな……もう少しこう……いや、だが……」

届かぬ叫びに更に肩を落としながら、とぼとぼとカイの後を追うレイナ。荷物が地面を軽くこすっているのは見ないことにしよう。その時、カイが突然立ち止まった。うつむいていたレイナはそれに対応する事ができずに……。

ボフッ

「うっぷ」

カイの背中に突っ込む。

「ちよつとお、いきなり立ち止まらないでよ、って……カイ君？」

視線を上げるとそこにはパズルのピースがはまった時のような表情で一点を見つめるカイの姿。視線の先にはくろやまの人ばかり。しかも何やら耳にキンキンくる大声で叫んでる人間がいる。

「さあさあ挑戦者はいないか！！彼に勝てたら最高級ロブスターを5匹プレゼントだあ！！ほんのちよつとの掛け金でこのチャンス！！勇気あるチャレンジャーはいないかあ！！」

どうやら何かのイベントらしい。掛け金を支払い課題に挑戦し、クリアできたら賞品の高級ロブスターがもらえる、とでもいったところか。

ふと、レイナの脳裏に嫌な予感がよぎる。恐る恐るカイの顔を覗き込むと……。

「……………これだ」

——ああ、やっぱし。

嫌な予感は、的中した。

—————

「さあさあ次の挑戦者は誰かな？このガーディアンをやぶり、最高級ロブスターを手に入れる幸運なチャレンジャーは！」

拡声器片手に声を張り上げる進行係。お世辞にも多いとは言えない髪の毛にやたらと丁寧に切りそろえられた髭（俗に言うチヨビヒゲ）。よれよれの燕尾服が、それが唯一の正装である事を物語っていた。彼の背後にある樽の中には、まだ生きている特大サイズのロブスターがぎっしり。時期的にも今が旬の、最高級品である

そしてもう1人、人混みの中心に陣取っている男性。

丸太程もあるうかという太い腕に、本気で固めたら鉄板も尻尾を巻いて逃げ出す胸板と腹筋。着ているＴシャツはいまにも破れそうである。髭が顔の5割を占め、くわえた葉巻からは絶えず不健康そうな煙をぷかぷかと漂わせている。そんな見るからにその道のプロの男性が、テーブルを前に腕組みをして仁王立ち。これでは課題が何であれ、挑戦者などいるはずもない……と、思うだろうがそうではない。世の中には命知らずもいたものだ。

「俺がやろう！」

人混みをかき分けて出てきたのは、こちらも見ると体育会系の男性。

「おおーっと！ここで勇敢なチャレンジャーが登場だ！」

進行係の言葉によりいつそう力が入る。

男性は掛け金を進行係に押し付けるように渡すと、着ていた上着を脱ぎ捨ててタンクトップ姿になる。そしてロブスターのガーディアンがテーブルに肘をついて掲げた手をこちらと同じようにテーブルに肘をつけ、がっしりと握った。

そう、最高級ロブスターを手に入れる課題とは、この守護者である男性にアームレスリングで勝つ事なのだ。これなら不可能ではないような気もするが……。

睨み合う2人。戦の準備は整ったようだ。

「レディ……」

進行係が手を高々と掲げ、振り下ろすと同時にゴング代わりとばかりに叫ぶ。

「……ゴオツ!!」

――勝負は、一瞬だった。

バアンと気持ちのよい音に混じり、ゴキッ、という背筋の寒くなる嫌な音。

勝ったのは、ロブスターの守護者。

「うわあああっ!!腕が、腕があっ!?!」

哀れ勇猛果敢なる挑戦者。明後日の方向を向いた腕をおさえたまま人混みを突き抜け、一目散にいずこかへと走り去って行った。まあ、腕がへし折れたまま向かう所と言ったら白衣の天使の下くらいだろうが。

「残……念っ! ましてこのガーディアンの前に勇者が1人散っていったあ! さあ次の命知らずはこのどいつだ!」

呑気な進行係ははやし立てるように声を張り上げる。しかし、さすがにあんなものを見せられた後、またこの無謀な挑戦に挑もうなど

と考える命知らず知らずは……。

「ふむ……用は腕相撲に勝てばいいんだな？」

いた。

人々が一斉に声の元を振り返る。

そこには黒髪の青年が1人、腕組みをして立っていた。特別体を鍛えているわけでもない、むしろ線の細い美形の青年。腕組みをしているからといって自信過剰なわけでもない。

ただそこで、事の成り行きを見守っていただけといった感じだ。

「おおーつとあ！？これは何の冗談だあ？賞品に目が眩んだのか青年！」

言葉に多少のからかいが感じ取れる進行係。周囲の人々はそれぞれの考えを胸に、青年を見つめる。

彼は何の気なしに掛け金を進行係に手渡し、まだ信じられないといった表情の守護者の前でテーブルに肘をつき、手を掲げる。

「小僧……怪我じゃ済まねえぞ？」

ようやく彼が本気だと悟った守護者は、脅しのこもった低い声で目の前にいる青年を威圧する。
しかし青年はというと……。

「早くしろ。腹を空かせた俺の相棒が向こうでゴネてる」

と、全くもって畏怖という感情はなさそうだ。

「おもしれえ。その細腕がどうなっても知らねえぞ？」

守護者はにやりと笑うと青年と同じくテーブルに肘をつけ、彼の手をがっしりと握る。握力は今まで以上だ。ギリギリと締め付けられる利き手に、青年の表情が歪む。

「……勝ったな。」

守護者はそう確信した。

「レディ……」

進行係の手が高々と掲げられる。

その時、守護者は青年の手に違和感を感じた。力が入っていない。普通ならばここで筋肉を硬直させるのが一般的。

ではこの脱力した手はなんだ。この青年は何を考えているのか。

「ゴオッ……」

まわりつく思考を振り払い、守護者は腕に力を込める。

誰もが、青年の敗北が確実だと思っていた。

「……」

進行係が合図を出したというのに、いつまでたっても2人の腕は最初の位置からぴくりとも動かない。

観衆は皆、守護者が力を入れていないのだと、青年をからかっているのだらうと、守護者に向かって冷やかな視線を送った。だが送った視線の先には脂汗を流し、顔を真っ赤にして力む守護者の姿。対称的に青年は涼しい表情。

守護者を含めた誰もが皆、思った。

「……一体、何が起きているのだと。」

「力だけでは」

青年が、口を開いた。

「力だけでは、何も守る事はできない」

そう言うとは彼は脱力した腕にほんの少し、力を込める。

勝負は一瞬――いや、ゆつくりと決まった。

まるで、針金でも曲げるかのように守護者の腕が倒れ始め、テーブルにその甲をついた。

信じられない光景。全てが自分の倍以上ある屈強な成人男性を、青年はいとも簡単にねじ伏せた。力ではない、『何か』によって。青年が手を離すと、守護者は赤黒くうつ血した腕をおさえ、息も絶え絶えに呟いた。

「小僧……お前は、一体………」

知りたかった。青年の正体を。

絶対の自信があった自分が、全く齒のたたない相手。闘技者として、それは本能に近かった。

守護者の声に気づいた青年は微笑みを浮かべながら、一言。

「……ただのレイヴンだ」

青年は樽の中のロブスターをひよいと2匹掴むと、傍らで憧れの眼差しを向けていた少年に向かって、

「残りはやるよ。俺には多すぎる」

といい残し、人混みの中へと消えていった。観衆も進行係も、そして守護者すらも、呆然と青年が見えなくなった方向を見つめていた。彼らが正気に戻ったのは1分後の事である。

――――

いつも食事をとっているテーブル。レイナはそれを、いつもより念をいれて拭いていた。というのも、隠れ家についた途端にカイがレイナに向かって『テーブルをチリ一つ無いように綺麗にしろ』と言い残し、買ってきた食材を持ってキッチンにこもってしまったからだ。致し方なくレイナはテーブルの上にあったノートパソコン、飲み物の空ビン、書類やメモを片付け、キッチンにこもる寸前にカイから渡された布巾でテーブルを掃除する。朝食昼食オール抜きのレイナにとってみれば、たったこれだけの作業でもかなりの重労働のように感じる。

「まったく……どーゆーつもりよ」

どーゆーつもりもなにも、食材を持ってキッチンにこもってする事といえは一つしかないのだが……。

もはや腹の虫も鳴く元気すらなく、ただ空腹感が募る。それでもレイナはテーブルの掃除を続けた。

そして、ようやく掃除が終わった。テーブルには塵一つ無く、どこから引っ張り出てきたのかクロスまで敷かれている。

「ふっふっふっ」　どーよ、レイナちゃんだって本気になればこれくらい」

腰に手を当て、満足気な表情で仁王立ち。事情を知らない人間が見たらさぞ滑稽に見えただろう。
と、その時――。

ぐう~~~~

レイナの腹の虫が、最後の力を振り絞って断末魔をあげた。

「あうう……」

蚊の鳴くような弱々しい声をあげ、へなへなとその場に座り込む。

「もう限界だよ。ホントに死んじゃうかも……」

テーブルを拭いていた時の元気はどこへやら。レイナはずりずりと這いずりながら、なんとかソファ―に体を預けた。

ACのように手軽にエネルギー補給ができたらどんなに楽だろうな
どと、思考すらネガティブに働き始める。ほっとけばいいよAC
用のエネルギーすら口にしかねない。事態は一刻を争っていた。
と、その時、

レイナの鼻をくすぐる香ばしい『料理』のにおい。どうやらそれは、
カイがこもったキッチンから漂ってくるようだ。

「あ……いいニオイ……」

ふらふらと立ち上がり、操り人形のような挙動でキッチンへと近づ
く。まるで生ける屍だ。^{ゾンビ} 某ゲームならば即撃ち殺されているだろう。
カイとの約束も忘れ、キッチンへと繋がる扉に手を掛けた――。

Bannon!

ゴンッ！

「痛っ！？」

ドアノブを回そうとした瞬間扉が勢いよく開き、レイナに直撃。レイナ側から見て引き戸だった事が彼女の運の尽きだったらしい。やはり生ける屍は生ける者の手によって墓場に送り返される運命なのだ。――冗談はさておき、扉を開けた張本人であるカイは何が起こったのかわからず、額を押さえてうずくまるレイナをきよとした表情で見つめている。

「……何してるんだ？」

――プチン

レイナの中で、何かの糸が――切れた。

「それはこっちのセリフよ！こっちは空腹で今にも死にそうだった時に――！」

勢いよく立ち上がり、常人なら逃げ出すような剣幕でカイに詰め寄る。

「大体、いきなりこんな弱い女の子の襟を掴んで引つ張り回す事がそもそも間違ってる！その上コクピットに投げ入れるは荷物持たせて歩かせるわ……ああもう！思い出したら腹立ってきた！」

まるでおもちゃを買ってもらえなかった子供のように地団太を踏んで憤慨するレイナ。文句が多少誇張されている点については無視して構わない。

しかしとうのカイはしれつとした表情でその様子を眺めている。

「いい！？カイ君！！今度から女の子はもっと優しく……って」

そこまで言いかけた所で、レイナの視線はカイの手にした物に釘付けになった。

それは、大皿に丸々一匹のロブスターを縦真つ二つに割り、バターとオリーブオイル、仕上げはバジルで香り付けされたシンプル且つ繊細な逸品。まだ焼きたてのそれは、憤慨するレイナを黙らせるには十分すぎる程の威力を持っていた。

「ん？これか？」

レイナの視線の変化に気付いたカイが、彼には珍しく少し誇らしげに解説する。

「これは俺が軍隊でまだ下っ端だった時に料理当番で作ったやつだ。バターとオリーブオイルを使うとどうしても油っこくなりがちだが、最初に網で炙ってから焼いて使う油の量を減らしてある。そして仕上げに隠し味のレモンを……」

と、最後の締めを口にしようとしたが、目の前には涎を滝のごとく滴らせる少女。

「……聞いてないだろ」

目線は料理に向けたままコクコクと頷くレイナ。

その目はまるで、餌を目の前にして鎖でつながれた狼のごとく。下手をしたら料理と一緒にカイの手すら食われかねなかった。

先程までの剣幕が嘘のように幸せそうな表情。秋の終わりの天気のようにコロコロと変わりやすい喜怒哀楽である。レイナの言葉に、カイは嬉しそうに微笑む。

「そうか、よかった」

こちらは珍しく感情を面に出すカイ。普段の彼とは相当な違いである。

しかしレイナは料理に夢中で、カイのそんな変化に気付く筈もなく。

ひたすら目の前の料理を食い尽くさんとするレイナ。そのレイナを時折ちらりと見ては、嬉しそうに自分も料理を口に運ぶカイ。なんとも対称的な2人だが、その光景は不思議としっくりくるものだった。

「ねえカイ君、この料理なんて言うの？」

「ん、それはだな……」

一段と嬉しそうな表情で料理の説明をするカイ。自分の料理が、彼女に喜んでもらえるのが嬉しかった。今まで自分の存在意義は、兵士としてしかなかったから。

カイは思う。自分の存在意義が兵士としてでなくなった時でも、彼女には必要とされていた、と。

不思議な感情、芽生えた事の無い感情。それが何なのか、今のカイにはわからない。だがいつか、この感情の意味を知った時、彼は理解するだろう。本当の『存在意義』を。

「うわっ！辛っ！？」

「ははっ、だろうな」

その晩、2人のささやかなディナーは夜遅くまで続いた。
そして続けばいいと、互いに思いながら。

第35話 外伝 クロス・ナイツ（前書き）

今回はクロス・ナイツを中心とした外伝的な話です。

とはいえ、この話では前置きといえますかなんといえますか……（汗）

本題は次回からになります。期待していただいた読者の皆様、本当に申し訳ありませんっ！（テ―テ）

第35話 外伝 クロス・ナイツ

『BD所属 クロヴィリアル・シティ特別警備部隊 クロス・ナイツ隊長』——これが、彼の持つ……いや、与えられた称号。

フラン・マグダーナ、年齢21歳。

彼は今、自らに与えられた個室にいた。クロス・ナイツ隊長だからといって別段豪華な部屋というわけでもない。

その他の2人と大して変わらない部屋で、彼は本を読んでいた。本の表紙はすり減っていて、名前を知ることにはできない。内容的には金貸しの老女を殺した青年が、精神と理性の狭間で苦しむ……といったところか。たしか、前大戦以前の書物だと聞いた記憶がある。1人掛けのソファに腰を下ろし、傍らのテーブルの上の温かいダージリンティーを飲む。訓練やデスクワーク、また、街で大きなトラブルが起きない限り、彼はこうして読書に勤しむ。もはや日課と言ってもよい。

次のページをめくった時、そこにはさんであつた紙が支えを失いひらひらと床に落ちた。

「おや？」

フランは本にしおりをはさんではたと閉じ、床に落ちた紙を拾った。

それは、写真だった。随分色褪せてはいたが、そこに写った人物を確認できないほどでもない。

そこには純白のACをバックに3人の成人男性と、1人の少年が写っていた。

成人男性は見た感じ全員が30代くらい、少年のほうは17歳くら

いであろうか。成人男性達は皆満面の笑みで各々が好き勝手なポーズをとり、中心にいる少年は不機嫌そうな表情でこちらを見つめていた。

「……懐かしい写真が出てきましたね」

フランはその写真を見つめ、思わず笑顔をもらす。

その時、来客を知らせるベルが鳴った。フランは写真をテーブルに置き、扉へと向かう。

扉の横に備え付けのインターホンのモニターには、黒い長髪をオールバックに結ったアジア系の少年がこれ以上無いというほど背筋をぴんと伸ばし、緊張した面持ちで起立していた。ちょうど先ほどの写真の少年と同じ歳くらいだ。

フランはまたクスツと笑みを漏らし、扉を開けて来客を出迎えた。

「隊長殿、この度の戦闘による被害報告書をお持ちしました」

「ありがとうございます。そんなに改まらなくてもいいですよ」

「いえ、隊長殿の前ですから」

と言って少年は更に背筋を伸ばす。やれやれと思いながらも、彼の態度には感心せずにはいられない。

フェイ・アウロン、年齢17歳、クロス・ナイツ3番機。ACの操縦技術を買われ、フラン自身がスカウトした。操縦技術もさる事ながら彼の生活態度は模範的の一言に限る。

同じくクロス・ナイツ2番機のログとは気さくに会話をしている。彼にとってログは兄貴分のようなものなのだろう。

「すぐに済みますから入りなさい。紅茶で良ければご馳走しますよ」

「いえ、私はここで……」

「いいからいいから」

フランは半ば強引にフェイを部屋へと招き入れた。

――――

ソファ―に座り報告書に目を通すフラン。

傍らでは同じく1人掛けソファ―に腰を下ろし、出された紅茶を前に完全硬直しているフェイ。彼にとってフランは雲の上の存在であり、緊張するのも仕方ない事である。それにしてもこの緊張の仕方にはいささか異常ではないかと思われる。カチンコチンに固まり、ただひたすら紅茶を凝視して動かない。置物だと言えば信じられてしまう。

「どうしたんですか？ せつかくの紅茶が冷めてしまいますよ？」

フェイの様子に気付いたフランが不思議そうに口を開く。フランの言葉に凍りついていたフェイが一気に解凍した。

「は、はい！ いただきます！」

そう言うとフェイはぎこちない拳動でティーカップに手を伸ばす。ふと、フランは思い出したように、

「あ、もしかすると少し熱いかも……」

と言つが時既に遅し。

「熱っ!?!」

紅茶を噴き出しかけるフェイ。ティーカップを落としそうになるが持ち前の反射神経でなんとか安定を保つ。が、代償は舌の火傷。

「あらら。ちよつと待っててください。今冷たい水を持ってきます」
そう言つとフランは書類を置き、キッチンへと向かう。

「ひ、ひえ! わたひらわるひのれふはら……」

口を押さえたまま慌てて立ち上がるフェイ。言葉のほとんどがは行になつてはいるが、自分が悪いのだと言いたいらしい。彼にとつてフランにそのような雑務をさせるのはもつてのほかなのだ。

そんな彼の心境を知つてか知らずか、フランはフェイの声に振り返り、

「言つたでしょう? そんなに改まらなくてもいいと。いいからそこに座つて待っていてください」

と笑顔で言い残し、また何か言いかけたフェイを制止するようにキッチンへと行つてしまった。

取り残されるフェイ。キッチンの扉が閉まつた瞬間、外気に触れさせるために赤くなつた舌を出し、ひーひーと息を吸う。結構熱かつたのだ。

とりあえず今はフランの言葉に甘える事にしたフェイは、言われた通り椅子に座り彼の帰りを待つ。舌は出したままだ。

ふと、フェイはテーブルの上に置きっぱなしになっている一枚の写

真を目にした。ずっとそこに存在していたというのに、極度の緊張のせいか全くもって気付かなかった。

フェイはなんの気なしにその写真へと手を伸ばしている自分に気が付き、慌てて手を引っ込めた。

（何考えてんだ僕は！？）

フランはフェイにとって雲の上の存在であり、もはや尊敬の一言では言い表せない程。そんな彼のプライベートを覗き見るような行為にフェイは自分自身を叱咤した。

しかし人間とは好奇心の塊でできた生き物。それが自分の尊敬する人物のものならなおさらだ。

フランがキッチンから戻って来る様子は無い。

（……………少しくらいなら……………）

誘惑に負け、フェイは写真を手にとった。

色褪せた写真。そこに写る3人の男性と1人の青年。

男性達には見覚えが無く誰なのかわからない。しかしフェイには中心の青年が一目で誰だかわかった。

「これって……………」

フェイは写真に穴が開くほど見つめた。

この青年はフェイがよく知る人物。人生の目標とし、絶大な信頼を置き、尊敬する人物。それは……………。

「ああそれ、私ですね」

「そうそう、フラン隊長……って、うわああ！？」

いつの間にかフランが背後に立っていた。
驚いて跳ね上がり、椅子ごと床に倒れるフェイ。大げさに見えるが、素である。

「た、たた、隊長！？いつの間に！？」

「君が写真を持った辺りから。真剣に見てるから邪魔しちゃ悪いかなって思ったから気配消してね」

……そういう問題だろうか。その前に邪魔したら悪いから気配を消すのもどうかと思う。それに誰にでもできる芸当では無いだろうに。しかしそんな事はフランは全くお構いなしのようだ。

フェイが飛び跳ねた時に手から落とした写真、フェイはそれを拾い上げる。

それを見たフェイの血の気が時間を短くして見た引き潮のVTRのごとく引いた。写真をこっそり見ている所をばっちり見られたのだ。言い逃れできる可能性はゼロどころかマイナスの領域に達している。とすれば、とるべき行動は1つだけ。

「も、申し訳ありません隊長殿！」

立ち上がり、90°。近く深々と頭を下げて、謝罪。これに限る。

許してもらおうなどとは思っていない。むしろ中途半端にあしらわれるよりだったら怒鳴られた方が良かった。目をぎゅつつむり、フランの次の言葉を待った。怒りか、もしくは呆れか。そのどちらもフェイにとってはかなりの大ダメージ。他の人間の言葉とフランの言葉とではフェイに与えるダメージの大きさが変わるのだ。しかし……。

「……何がですか？」

返ってきた言葉は、そのどちらにも当てはまらなかった。

「……へ？」

すっとんきょうな声をあげ、ほんの少し顔を上げてフランの表情をうかがう。

彼はきよとした表現でフェイを見ていた。まるで、謝られた意味がわからない、とでも言いたそうに。

「いや、あの……写真を勝手に見てしまって……」

語尾に近づくにつれどんどん声が小さくなってゆく。いたずらが見つかった子供が親に弁解するかのようだ。
数秒の沈黙。そして、

「……ぶつ、あははは！」

フランは、笑った。まるで滑稽なものをおかしがるように。
自分の行動の何が笑われたのかわからず、今度はフランがきよとんとする。

これでは自分がおかしな行動をしたようではないか。

「あ、あの……」

片手で腹を押さえ片手で笑いすぎで出た涙をぬぐうフランに、フェイは怪訝な表情でおずおずと口を開く。

「ああ、すみません。ついついおかしくて。別に写真を見たくらい

で私は怒りませんよ」

フランの口調からして、どうやら本当に怒ってはいない様子。ならばそれを信じ、『そうですか。早とちりでした』で済みそうだがフエイはそれを良しとしなかった。

「で、ですが……」

食い下がるフエイ。そんなに罰を受けたいのか、はたまたそういう趣味かと疑ってしまう。

するとフランは短くため息をつき、彼の肩に手を置いた。その顔に笑顔はなく、真剣そのもの。

「君は、少々勘違いをしていますね。私が君を無理に部屋に入れたのは、その写真を見せようと思ったからです」

「えっ」

と、フエイは驚いた表情を見せた。フランは再び屈託の無い笑顔を浮かべると手にした写真をテーブルに置き、自らも椅子に腰掛けた。そしてフエイも座るように促す。

フエイは困惑しながらもフランに従い、椅子に座った。ちょうど、向かい合うような形で。

「さて、何から話始めましょうか。……そうですね、ちょうどこの写真をとる2カ月くらい前ですか」

フランは紅茶のカップに手を伸ばし、少し冷めた紅茶をかたむけながら、静かに語り始めた。

第36話（前書き）

……もはや言い訳はしません。存分に物を投げて……あぁっ！？トマトは……！トマトだけは止めてっ！？

冗談はさておき、更新滞っていて本当にすみませんでしたm（――

――）m

いろいろと事情がありまして……（T――T）

読者の皆さん、本当に申し訳ありませんでした……！心からお詫びをさせていただきます！っm（――！；）m

第36話

時は4年前にさかのぼる。

BCA・201

世界は混沌の渦の中にあつた。

レイヴン達は各々が好き勝手に依頼を受け、好き勝手に行動する。一般人を巻き込んだ市街地戦や盗賊まがいの強奪など、もはやレイヴンのやりたい放題のねじ曲がつた世界。

そこに規則は存在しない。あるのは力と金だけがモノを言う、弱肉強食の世界。

人々は皆レイヴンを恐れ、忌み、嫌い、元は家族だった者すら『屍にたかる大鳥』と呼ぶ。そんな世界。

その混沌の中に光をさす者が現れた。

Blue Diamond、通称BD。その企業はレイヴンを依頼・金銭・技術の面でサポートし、その代わりにレイヴン内での規則を決めて彼らの暴走を未然に防ぐ。

言わば仲介役のようなものだ。

BDの出現により、傍若無人なふるまいを続けるレイヴン達は落ち着きを取り戻し、世界は再び（偽りではあるが）平穏になるかと思われた。誰もがそうなって欲しいと願った。

しかしそう願わない者達も多かった。それは誰でもない、レイヴンだった。

自分がレイヴンだと名乗るだけで人々は害を恐れ、言うことに従う。

それが規則など決められたら権力が落ちるのは必至。
ましてや彼らは規則を持たぬ傭兵。誰かの監視の元で仕事をするな
ど願い下げなのだ。

レイヴン達は誰一人としてBDに登録しようなどと思わず、結果と
して世界は何一つ変わらない、混沌のままだった。

白銀の機体を駆る、当時17歳の若き天才レイヴンもその1人だっ
た。

クロヴィリアル・シティ郊外。

森林に身を潜め、襲撃の機会を待つ者がいた。

偽装網を機体にかぶせて森林の緑と同化させようとする努力が見受
けられるが、悲しいかなその白銀の眩いボディを隠しきることはで
きない。

その機体のコクピット、カメラアイの倍率を最大にして都市を伺う
金髪の青年。整った顔立ちをしていて、美男子と呼ぶにふさわしい。
黙っていれば言い寄ってくる女性も少なくないだろう。

しかし今の彼にをしても女性は気味悪がるか、恐怖を覚えるだろう。
彼は今、凶悪な笑みをその顔に貼り付けていた。まるで獲物を狙う
狼が茂みの中で舌なめずりしているかのごとく。

「なあ、ホントにBDを襲撃すんのかあ？一文の得にもならねーん
だろ？」

彼の後ろに待機していた紫の軽逆関節型のACから通信が入る。

「だあまつてる。気にいらねーんだよ、あの企業」

青年は乱暴に言葉を投げつけると、紫のACのパイロットが何が言うのも無視して観察を続ける。

すると今度は青年からみて左後方の緑のタンク型の機体から通信が入る。

「気にいらねーならほっときゃいいじゃねーか。何でわざわざタダ働きまでして潰すんだ？」

その問いに青年はうんざりしたように口を開く。

「気にいらねーもんは片っ端から潰す。それが俺のモットーだ。それに、連中はそれなりに戦力を蓄えてるらしいじゃねえか。それを全部潰せば名が売れる」

「あ、ナルホド」

緑の機体のパイロットは納得したように相づちをうつ。

そんな彼らを青年は、少なからず侮蔑のこもった視線を向けていた。

青年の名はフラン・マグダーナ、17歳。後にBDのクロス・ナイツ1番機として恐れられる彼の若き日の姿である。

フランは17歳ながら天才的なACパイロットとしての才能を現し、仲間内ではそこそこの名の知れた存在だった。

接近戦を得意とする彼の機体は軽装甲・高機動型で、背部左装備には小型ガトリングガン、右装備はリーダー。メイン武器は右腕のRW製高出力長射程のレーザーブレード、左腕には申し訳程度の小型ハンドガンが装備されている。汎用性を捨てた完全接近戦用のACである。

戦闘時には切り裂いた敵のオイルが白銀の機体を汚し、返り血を浴びたように見える事から、仲間内では『切り裂きフラン』などと呼ばれていた。

後ろの2人は飲み屋で偶然出会った同年代のレイヴンで、緑の機体のパイロットはジャック、紫の方はリドルと言う。上の名前は知らない。ただなんとなく気が合うので行動を共にしている。ただ、それだけだった。

「なあ、いつまでこうしてるんだ？もう十分観察は済んだろくに」

リドルが業を煮やしたように沈黙を破った。

この2人もフランに負けず劣らず血の気が多い。

「ショーがねえな」

フランは呆れたように軽くチツ、と舌打ちをすると機体を立ち上げさせた。偽装網がその白銀のボディを滑り落ちる。

「行くぜ。ショータイムだ」

――――

「隊長お、どこぞの馬鹿がまーた襲撃してきたらしいぜ」

隊長と呼ばれた男はパイロットの待機室のソファアに深々と座り、煙草の煙をまもっていた。

「あつそ」

ふーっと、煙を天井に向けて吹きながら、男は興味無さげに答えた。

「それがよお、どーやら警備隊のMTだけじゃ抑えきれないみてーでな。そこでだ、俺達の出番ってワケ」

男はめんどくさそうに肩をすくめてみせる。

隊長と呼ばれた男はむっくりとソファーから立ち上がり、傍らの灰皿に煙草の火を押し付ける。

「ほお、多少骨のある奴らしいな。数は」

すると部屋の壁に腕を組んでもたれかかっていた、今まで一言も言葉を発する事の無かった男が口を開いた。

「爆発音と戦闘音から推測すると、ざっと見積もってACが2、3機だな」

「ほお、珍しい。シェパードが興味示してんぞ」

シェパードと呼ばれた男はフンと鼻を鳴らし、部屋を出ていく。

「さて、と。俺達も行くとするか」

「あいよ、隊長殿。クロス・ナイツ、出撃ってか」

――――

増援で現れた3機のMTを一瞬にして斬り伏せたフランはハッ！と短くせせら笑い、思う。歯ごたえ無さ過ぎ、つまらないーと。噂に聞いた話ではBDを襲撃したレイヴンは、誰もが無事では済ま

なかったとか。

皆何かに怯えたような口調で、『もうACには乗れない』と口にし、レイヴンを辞めていったという。その辞めていったレイヴン達がBDを襲った理由はともかく、フランにとって一番重要なのはBDの実力である。そうまで言われるのだから、強力なMTやACを山のように抱え込んでいるのだらうとフランは思っていた。

しかしこれでは雑魚もいい話だ。下手をしたらRWやMR、SBですらまともな戦力を持っている。

拍子抜けだ。

ふと、フランは連れの2人へと目を向ける。リドルとジャックは苦戦しているらしく、3機のMTに追っかけ回されていた。

「やれやれ」

噂は単なる噂に過ぎなかった落胆からか、フランはやる気無さげに機体を駆った。

リドルはトリガーを握り込んだ。機体が振動し、右腕のアサルトライフルから弾丸が迸る。しかし3機のMTの統制はなかなかのもので、先頭の隊長機が弾丸を回避すると後ろの2機も同じように回避運動をとる。そしてすぐさま体勢を立て直すと、一斉に攻撃を加えてくるのだ。

先ほど撃った弾丸も難なく回避される。見た目は旧式のずんぐりしたホバータイプのMT。しかしなかなかこれが手強い。

ジャックの方も同じらしく、敵のMTが発射したグレネードをシールドでガードするのに手一杯だ。

何が楽勝だ、だよ。全然楽じゃねーと、リドルは心の中で呟いていた。

とその時、敵のMTの背後に白銀の閃光が躍り出た。フランのAC

である。

フランはまず最後尾のMTに狙いを定めると、加速。起動したレーザーブレードをMTの腹部に根元まで一気に突き立てた。そしてその状態から横薙にブレードを振った。MTは腹部を裂かれ、オイルを周囲に撒き散らしながら倒れこんだ。

奇襲に気づいた残りの2機は白銀の機体めがけてグレネードランチャーを発射。しかしフランの機体は横方向へのスライドでそれを回避。勢いをそのまま手近なMTに突貫する。狙われたMTは慌てて両腕のガトリングガンを発射するが時すでに遅し、懷に飛び込んだ白銀の機体によって上半身と下半身が別れを告げた。

爆散こそしないものの千切れた動力パイプや可動部の循環オイルパイプから、茶褐色の液体が噴水のように噴き出す。

最後に残ったMTは半ばやけくそ気味にガトリングガンを白銀の機体めがけて乱射。しかしフランは建造物を上手く使い、弾丸を回避する。

自らが守るべき物を傷つけてしまった事に気づき、MTは慌てて射撃を止めた。――その一瞬の戸惑いが、明暗を分けた。

盾にしていた建造物の陰から躍り出る白銀の閃光。一瞬にして間合いを詰める。

突き出したブレードが、MTの頭部を貫いた。だが、フランは攻撃の手を休めようとはしない。

そのままハンドガンの銃口をMTの腹部に押し付け、ゼロ距離でトリガーを引く。

1 発。

2 発。

3 発。

4 発。

銃口から弾丸が飛び出る度に、MTはまるで生き物のようにピクピクと痙攣する。弾丸が貫いた穴からは、まるで血のようにオイルが噴き出していた。

カキン、カキンと、ハンドガンが弾切れを告げる。

フランはゆっくりとハンドガンを下げ、ブレードをMTの頭部から引き抜いた。計20発近くの弾丸を撃ち込まれたMTは、力無くずるずると崩れ落ちる。時折ピクピクと機体が痙攣する様は、まるで本当に生命が宿っているようだ。事実コクピットには命を持つ者が搭乗している。だがフランはあえてその命まで奪おうとはしなかった。

「……こんな連中を殺した所でなんの価値も無い。そう考えが変わっていたからだ。」

もつと手強い相手なら自らの命を賭けた死闘をしても良かったのに……。フランは再び深いため息をついた。

戦慄。

その二文字がリドルの思考を支配していた。

目の前に立つAC。その機体は全身に茶褐色の液体を浴び、白銀のボディを汚していた。それはもはや、わかっていてもオイルには見えない。

敵兵の返り血を全身に浴びた、西洋甲冑を身に纏った騎士。

『切り裂きフラン』……その異名は、まさに彼を象徴しているかのようだ。

「す……げえ……」

口をついて出る言葉は、畏怖と敬意の入り混じったこの一言だけだった。

敵に回さなくて良かった。そして、コイツにはまだまだ利用価値が……。そう、思考を巡らせていた。

その時だった。コクピットに新たな敵の接近を知らせるアラートが鳴り響く。

フランはのろのろとレーダーに視線を移す。

こちらに接近する機影が3、赤い点となってディスプレイに映し出されていた。

それは点は瞬く間にフランの機体を示す中心の青い点に近づく。

やれやれ、また敵の増援か。と、フランはやる気無さげに呟いた。

どうせ高機動型のカスタムMTかそこらだろうとたかをくくっていたのだ。

まだ敵の種類を熱量から判断するシステムが普及していなかった故に、フランや仲間の2人は接近する機影が何者であるのか知るよしもない。

「……………またか。懲りないねえ」

フランは呆れたような口調で呟くと、機体を正面から接近する光点へと向ける。左右から接近する敵にはリドルとジャックに任せるつもりだった。

まあ、いざとなったら俺が行けばいいーと、不敵な笑みを浮かべ、思う。

それは、自信。

それは、過信。

それが自らの傲りだったと気づくのに、そう時間はかからなかった。

第37話

『あー、聞こえるか？そのAC』

目の前に立つ純白のAC。通信は、確かにその機体からだった。
やる気無さ気な、ゆるゆるとした声。

『えーとその、なんだ……クロヴィリアル・シティ第18都市法に
おいて……何だっけ？』

『しっかりしてくれよ隊長殿。都市法に違反しているとみなし、身
柄を拘束させてもらう、だろ？』

『そうそう、それだ。てなワケで、お前等みんな逮捕だ』

なんと言う怠惰。まるで酒屋かどこかで仲間とふざけあっているよ
うな口調。

フ란の思考伝達にノイズが走る。気に食わない、と。

「なんだ…あんだ等」

『ほう、警備隊が手こずると聞いてどれ程のものかと思っていたが
……なんだ、子供か』

その言葉に、フ란の思考のノイズが更に大きくなる。

「あんだ等も他の連中みたいにやられにきたのか？」

フランはブレードを起動し、突然何の気なしに手近なビルを切り裂いた。ビルは斜めについた切り口に添ってずるりと滑り落ち、粉塵をあげて倒壊した。

威嚇にしてはやりすぎである。

「俺はもうここに用は無い。死にたくなかったら……」

『口上はいい。黙って従うか、それとも俺らに叩きのめされるか、選べ』

ついにフランの堪忍袋の尾が切れた。

ブーストフルスロットルではじかれたように前進。純白の機体に肉迫すると同時にブレードを起動し、真横に振り抜く。純白の機体はバックステップでそれを避けると、体勢を立て直して白銀の機体を睨みつける。

『それが答えか。おとなしく投降する気は無い……と？』

スピーカーからは相変わらずやる気無さ気な声が響く。しかし完全に頭にきているフランにその声は届かない。

「ああああああ！！」

フランは背部装備のガトリングガンにメインウェポンを変更し、ロツクサイトに純白の機体を捉えるのを待たずしてトリガーを引く。銃身が回転し、弾丸を撃ち出す。毎秒5発という高速発射で敵を追う。

しかし純白の機体は上下左右にブーストを噴かし、ひらりひらりと弾丸をかわす。まるで風に舞う落ち葉のように。

このまま回避に徹しているかと思うと、純白の機体は突然手のひらを返すように攻撃に転じる。針の穴を通すような繊細な機動で弾丸の雨をかくぐり、フ란の機体へと接近。左腕の高出力エネルギーライフルを2発、続けざまに放つ。フ란はガトリングガン掃射を中断し、左への回避行動をとる。

「ハッ！そんなもの……っ!？」

エネルギー弾が、フ란の機体の右腕をふき飛ばした。突然の出来事にフ란は驚愕する。

何故？確実に回避したはずなのに――フ란はコントロールを失いかけた機体を必死に制御しながら思考をめぐらせた。

とその時フ란の視界に奇妙なものが映る。それは、回避した方向とは反対側にあったビルである。ちょうど右腕と同じくらい高さの所がえぐられ、シュウシュウと白煙をあげている。そんな所に弾丸を放った覚えはないし、ましてやガトリングガンの弾丸でこのようにビルがえぐれる筈もない。

とすれば……いや、確実にこの銃痕は目の前で慥然としている純白の機体によるものだ。

『驚いたか？』

スピーカーから声が響く。

『一発目を回避した所で安心したお前の油断が招いた事だ。自業自得ってやつだ』

その言葉でフ란は気づく。発射されたエネルギー弾は、一発ではなかった。

――跳弾である。一発目のエネルギー弾にフ란の注意を逸らし、

二発目のエネルギー弾はわざと狙いを外してフランの回避方向とは別のビルへと放った。エネルギー弾はビルに命中、跳弾し、油断したフランの機体の腕を吹き飛ばした。

理屈を語れば簡単に聞こえる。だが実際に実行するとすれば、並外れた操縦技術と経験がある人間でなければ、ましてや実戦で使用するのは不可能な代物である。

目の前に立つ純白の機体は、それをいとも簡単にやってのけた。コイツはやばい。格が違うーと、フランの本能が警告を発している。今まで戦ってきた相手とは比べ物にならない程……強い。今すぐペダルを踏み、一目散に逃げ出したい衝動に駆られる。だが、悲しい程にフランのプライドは高かった。

「……つくそがあああああー！」

ブーストフルスロットル。弾かれたように加速する白銀の機体。向かうは悠然と立ちはだかる純白の機体。

しかし、フランにとって一番の得物である右腕のレーザーブレードを失った今、勝負は3分とかららずして結した。

—————

ズズンツ！と、地面に倒れ込む両手片足を失った白銀の巨人。銃口から一筋の煙をあげる得物を、ゆっくりと下げる純白の巨人。

白銀の巨人の中枢——コクピットで、フランは震えていた。負けた。完全に——。

自信は粉々に碎かれ、プライドはいとも簡単に踏みにじられた。

「……くそっ……」

知らず知らずのうちに、そう呟いていた。

朦朧とする意識の中、わかるのは額をつたう生暖かい液体の感触と機能を停止した愛機のコクピットの暗い感覚。闇だ。

――ふと、その闇に一筋の光が差す。

眩しい……。

フランは重い瞼をゆつくりと開く。

光の背に、自分に手を差し伸べる人影。

ジャックか、リドルだろうか？

覚えているのは、そこまで。フランの意識は、深い無意識の深淵へと沈んでいった。

――――――――――

次にフランの意識が覚醒したのは床の上だった。ひんやりと頬を冷やすコンクリートの感触。

そして鼻を刺す刺激臭。フランがこのにおいが煙草の煙だと理解するのに10秒の時間を要した。それだけ脳が回転していないのだろう。

フランは体を動かさず目だけで辺りを見回した。コンクリート剥き出しの冷たい壁に四方を囲まれた、圧迫感のある狭い部屋。どうやら拘置所か何からしい。

少し広い範囲を見渡そうと、フランは頭を持ち上げた。

と、その時……。

「よお、ようやくお目覚めか」

突然背後からかけられたその声に、フランは慌てて飛び起き、戦闘体勢をとる。

声のした先には部屋に備え付けの粗末なベッド。そしてそのベッドに腰掛ける、一人の男。彼は煙をフーツと吐き、傍らの灰皿に煙草

を押し付ける。どうやら長い時間ここでフランの目が覚めるのを待っていたらしい。灰皿の吸い殻は今にも溢れ出しそうだ。

「そう身構えなさんな。とって食いやしねえ」

フランははつとする。彼の声に聞き覚えがあったからだ。

「アンタ…あの白いＡＣのパイロットか？」

「…ご名答」

男は少し楽しそうに言うと、ゆっくり立ち上がった。思わず身構えるフラン。しかしそんな事は意に介した風もなく、男はずかずかとフラン歩み寄る。

「不法侵入、公務執行妨害、それによる器物損壊、ＢＤ所有ＭＴへの危害、その他違反多数。ざっと見積もって禁固１５年つてとこだ。何か質問は？」

男はフランが犯した罪状を言葉短く淡々と述べる。フランは無言のまま彼を睨みつけた。

「ふ…否定はしない、か。まあ、あの程度の腕でここを攻める度胸だけは認めてやろう」

その言葉にフランは強烈な不快感を覚えた。あの程度の腕―と、男はフランに言った。それは自分を見下しているに他ならない。フランは血が滲むほど強く唇を噛み締めた。悔しいが彼の言うことは真実だ。自分は最強だ、どんな敵にも負ける事はないと、そう信じて疑わなかった。

しかし現実はどうだ。自分はこの男に手も足も出ずに負け、プライドも自信もすべてがただの傲りであったという事実を突きつけられたのだ。

「……………連れの2人は？」

今にも溢れて来そうな涙をこらえ、フランは男に問いた。

自分がこうして捕まっているのだから、おそらくあいつ等も捕まっているのだろうと、そう思った。酷い扱いを受けていないかと、心配だったのだ。

しかし男が言い放った言葉は、フランに更なる現実を突きつける事になる。

「…ああ、あいつ等か。あの2人はおまえがやられたと知るやいなや、一目散に逃げていったぞ？まあ、スポンサーを失ったら任務を遂行する義理もないだろうしな」

——耳を疑った。信じられなかった。

あの2人は、自分を置いて逃げた。

フランは表面では煩わし気にしていたが、心のどこかで2人を信じていた。——仲間だと。

スポンサーという言葉が重くのしかかる。ジャックとリドルにとって自分はただの金ヅル、まさにスポンサーでしかなかったのだ。

へなへなとその場に膝をつくフラン。耐えていた涙が、瞳からとめどなく溢れてきた。

「……………ちくしょう……………ちくしょう……………」

もう、フランには何も残っていなかった。プライドも、自信も、仲間も。

無気力という名の虚無がフランを覆った。何も残っていないのなら、ここで何もせずに15年過ごすのも苦ではない。もし今すぐ外に出れた所で、できる事など何もない。――全て失ってしまったのだから。

「……………悔しいか？、坊主」

フランの様子を見ていた男は、おもむろに口を開いた。フランははっとして顔を上げた。

「――そうだ、こいつが……………こいつがいなければ……………」

フランは突然立ち上がり、男に向けて拳を振るった。

強く握りしめた拳は真っ直ぐに男の顔面を捉えていた。が、

「おっと」

ヒョイっと、男は首をほんのわずか捻っただけで、難なくフランの右ストレートを回避した。拳は虚しく空を切り、勢い余ったフランはそのままつんのめって男の背後にあったベッドに突っ込む。ベッドを支えていた脚は折れ、フランと共に地面にキスをする羽目になった。

フランは飛び起きるとすぐさま2発目の右ストレートを繰り出す。が、これも男が半歩下がったために空振り。3発目の左フックは難なく受け止められてしまう。振りほどこうとするが男の力は見た目以上に強く、逆にこちらの拳が握りつぶされてしまうのではないかと錯覚してしまう程だ。

痛みに顔を歪めつつも、その双眼は男を睨みつけたまま微動だにしない。

この時点でフラン自身は気づいていないだろうが、彼にはまだ残っている物があつた。それは、持ち前の『負けん気』である。

男もフランの瞳を睨みつけ、沈黙。フランは拳を突き出したまま、

男はその拳を握りしめたまま、しばし膠着状態が続いた。

「……………悔しいか、坊主」

先に口を開いたのは男の方だった。口にしたのは、先ほどと同じ言葉。

フランは男の力が緩んだ一瞬の隙について手を振りほどく。

「……………ああ」

うつむき、少し躊躇いながらも、自分の今の気持ちを正直に口にする。情けないとは思ったが、こうする他に言葉や行動が思いつかなかった。

男は少し間を置き、不意に口を開いた。

「……………俺達の仲間になれ」

「……完全に、予想外。一瞬、フランは男が放った言葉の意味を理解できなかった。」

耳から入った男の言葉は電気信号になり、脳は理解する。『俺達の仲間になれ』「……確かにそう言った。しかし脳では理解できても、フランの理性と感情は全くの解析不能を指しており、男の言葉は意味不明な単語の羅列としか認識されなかった。」

「……………は?」

フランの口からは気の抜けた疑問系しか出てこない。

男はフランが言葉の意味を理解出来ていないことに気づき、やれやれとでも言った風に溜め息をつく、もう一度同じ言葉を奏でた。

「俺達の仲間になれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3458a/>

ARMORED CORE ~ Angel Requiem ~

2010年11月11日07時48分発行